23rd

RYLA

SEMINAR

「人間の尊厳」

（命の尊厳）

Rotary Youth Leadership Awards Seminar

第23回　ＲＹＬＡセミナー報告

2001. 3. 22～3. 25

神戸ＹＭＣＡ余島野外活動センター

目　　次

ＲＹＬＡセミナーとは……1
プログラムのねらいと内容……1
セミナースケジュール……1

1日目

開講式
　ガバナーあいさつ
　　第2670地区ガバナー　太田　英章……2
　　第2680地区ガバナー　中嶋　邦明……4
　ディーンあいさつ
　　第2680地区ＲＹＬＡ委員長 ディーン代理　赤穂　哲……6
　オリエンテーション
　　「ロータリーがＲＹＬＡに期待するもの」
　　―用語の解説をふくめて―
　　ＲＹＬＡ顧問 パストガバナー　深川　純一……8

オープニングパーティー
　キャビンタイム
　ロータリアンの夕べ

2日目

講義「生と死：いのちについて考える」

関西学院大学社会学部専任講師　藤井　美和氏……11

レクリエーション タイム

キャンプファイアー

3日目

講義「人間には今なにが必要か」

元神戸大学教授
㈶兵庫県長寿社会研究機構理事長　野尻　武敏氏……40

バズセッション

フォーラム

アドバイザー　深川　純一……70

4日目

講義「いのちの共有」

元ＲＩ理事
頌栄保育学園理事長・院長　今井　鎮雄氏……110

閉講式

あいさつ

第2670地区ガバナー　太田　英章……135

第2680地区パストガバナー　森　滋郎……135

参加者感想文……137

参加者名簿……167

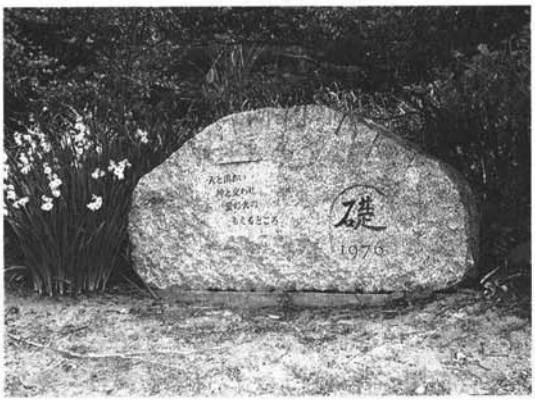
第23回ＲＹＬＡセミナー運営委員会……171

ＲＹＬＡセミナーとは

ロータリー青少年指導者育成プログラム（Rotary Youth Leadership Awards…ＲＹＬＡ）は、若い人々のためのプログラムであり、国際ロータリーが1971年に公式に採用したプログラムです。

ロータリーが青少年を尊重し、かつ、青少年に関心を抱いていることを一層明らかにし、選考した青少年指導者およびその素質ある人に実地訓練を体験させ、責任ある、効果的な自発性に富む指導方法を身に付けるように激励、援助することを主な目的としています。

プログラムのねらいと内容



ＲＹＬＡセミナープログラムのねらいは、受講生に五つの特色を味わってもらうことにあります。

1）高いレベルの講義と討論
2）グループタイム（親睦の熟成）
3）自由と規律
4）余島の自然
5）カウンセラーシステム

恵まれた自然に囲まれたなかで『人間の尊厳」（命の尊厳）』のテーマを、講義・キャビンタイム・思索の時間・バズセッション・フォーラムなどを通して徹底的に学び、語り合い、考えていただきたいと思います。

セミナースケジュール

3月22日					開講式 オリエンテーション 〈15:00〉	オープニングパーティー	キャビンタイム
3月23日	朝食 〈7:30〉	**藤井　美和**氏 〈9:30〉	昼食	レクリエーション ヨット テニス・ソフトボール アーチェリー他		夕食	キャンプファイヤー 親睦の夕べ キャビンタイム
3月24日	朝食 〈7:30〉	**野尻　武敏**氏 〈9:30〉	昼食	思索の時間	バズセッション	夕食	フォーラム キャビンタイム
3月25日	朝食 〈7:30〉	**今井　鎮雄**氏 〈9:30〉	閉講式〈11:30〉 昼食 離島				

8　9　10　11　12　1　2　3　4　5　6　7　8　9　10　11　12

ガバナーあいさつ

国際ロータリー第2670地区
ガバナー　太田　英章

初めまして、第2670地区のガバナーの太田と申します。

皆さん、小豆島、余島のＹＭＣＡのキャンプ場にようこそいらっしゃいました。

今年も春風と共に恒例のＲＹＬＡセミナーがＲＩ第2680地区、兵庫県そしてＲＩ第2670地区、四国４県との共催によりまして今から始まろうとしております。

ＲＹＬＡとはご承知のようにRotary Youth Leadership Awardsの頭文字をとったもので、若い人達のリーダーシップの原則、意欲あるリーダーシップの論理、効果的なリーダーシップとコミュニケーションの能力の開発。問題の解決と対立の調整、ロータリーとは何であるかを知り、地域社会に対して何をするかを学ぶそして皆さんが自信と自尊心を確立し、世界に通用する国際人となる等々、沢山のトレーニングを行うものであります。

現在の国際ロータリーの会長はメキシコ出身のフランク・デブリンさんです。デブリンさんはラテン的な明るい性格で非常に積極的な方であります。積極的というのを英語でアクティブと言いますが、デブリンさんは超積極的、グローアクティブという言葉が好きなのです。グローアクティブ、メチャクチャに積極的という意味でございます。

デブリンさんは20ものタスクフォース、即ち実践部隊を作りまして、世界中のロータリアンを激励しておられるのであります。勿論20ものタスクフォースをまんべんなく、全てやることは難しいので、私は地区ガバナーと致しまして、その中から重点的に二つの目標を実践することにしております。

一つはＷＣＳというWorld Community Service世界社会奉仕であります。世界中の病気や貧困で苦しんでいる人達に愛の手を差し伸べることであります。

もう一つは人類の未来を背負っていくあなた方、若い人々を正しい方向に導く為に、新世代奉仕に力を入れることであります。本日のＲＹＬＡもその一貫と致しまして私達が最も重要視しているセミナーでございます。

ＲＹＬＡの大きな特色はみんなで合宿をして、同じ釜の飯を食べて楽しく過ごす。これは人間が知り合って仲良くする最善の方法であると私は思います。随分昔のことになりますが、昔の旧制高等学校は全寮制でありました。二十歳前後の若者が全人格をぶつけあって、裸の付き合いをして、切磋琢磨し、一生付き合う親友を作ったものであります。今日から４日間のＲＹＬＡセミナーでも最初はみなさん初めて会う人達はちょっとぎごちなくて、堅い雰囲気かもしれませんが、２日たち３日たっていくうちにすっかりうちとけて、ここにいる人達みんな親友になるでしょう。そして４日目には参加して本当によかったと

みんなと別れがたい気持ちになるでありましょう。

デブリン会長は意識を喚起し、進んで行動をとおっしゃっておられます。意識と行動或いは意欲と実践、この二つが表裏一体となってぐるぐる回っている。それが今年の国際ロータリーのテーマであります。行動するにはその裏付けとして、哲学がなければいけないということです。ロータリアンの中にも時々理屈ばかり言わないで、なんでも実践だ実践だと勇ましい人もおりますが、私が20年来教わっております恩師、小堀憲助先生は、そのようなやみくもな行動は単なる筋肉の収縮運動にすぎないとおっしゃっております。ソニーの社外取締役であります中谷巌教授も、現在の日本経済の迷走を憂いて、日本は正に頭脳なき鶏になってしまったのではないかと嘆いておられます。頭脳なきというのは、政治家や経営者が真のリーダーシップを失っている、混迷の日本という意味であります。私達は首を切られてつっ走っている鶏になってはいけません。

ＲＹＬＡはみなさんが社会の指導者になるために人生哲学としてのロータリーを学び、リーダーシップを身につけるセミナーであります。リーダーシップとは何か、それは一言で言いまして、世のため、人のために己を犠牲にしてもかえりみない、志の高さということではないでしょうか。これは西洋の騎士道の精神であり、日本の武士道の魂であり、しいてはロータリー精神そのものに通じるものであると私は思います。

今回のセミナーが皆様にとって、大変有意義なものとなりますよう念願し、お世話いただきました兵庫、四国両地区のロータリアン、特に小豆島クラブの皆様に感謝申し上げご挨拶と致します。

ガバナーあいさつ

国際ロータリー第2680地区
ガバナー　中嶋　邦明

皆さんこんにちわ。今、ご紹介いただきました2680地区ガバナーの中嶋邦明です。ガバナーと申しますのは、沢山ございますロータリークラブの群れの中のお世話係と申しますか、用務員さんと親方と思ってください。今お話をされた太田さんと同じ服を着ております。日本では35人の人達がこんな格好をして、この一年だけ、ガバナーを勤めさせていただいております。

ＲＹＬＡを受講されるために、皆さんようこそおいで下さいました。心より歓迎致します。皆さん方は地域社会において大変指導力がある、あるいはまた将来そのようになられるということで、プロミシング、ヤングパーソンということでクラブから推薦をされた素晴らしい方々ばかりであります。ロータリーも皆さんに大いに期待しております。この３泊４日を楽しんでいただいて、あまり堅苦しくならないで、自然な形で勉強していただけたらいいなと思います。

今日は本当に良いお天気ですね。穏やかで和やかで、こういう所に参りますと元々自然の構成員である人間は、年齢に関係なく、心がワクワクして、童心に返ったような気持ちになる、こういう素晴らしい環境の中で皆さん方はこれからご勉強をなさいます。「命の尊厳」ひいては「人間の尊厳」というテーマの下に素晴らしい先生方からお話が聞けます。どうぞご勉強してください。そしてまたバズセッションがあったり、キャビンタイムがあったり、あるいはリクリエーションがある。これらは皆さん方い一人お一人が主役なんです。ディスカッションでもどんどん手をあげておっしゃってください。人間はしゃべるとだんだん発送が固まってきます。要するに話し合っている間に、お互いにだんだんいいものが引き出される。いい時間を持ってほしいなと思います。

その他に私はここで皆さんに考えていただきたいことは、私達は人生の中で沢山の本を読んだり、多くの人と出会っていっぱい話を聞きます。そしてどんどん忘れていきます。でもたった一言でも、たった一行でもその言葉と出会う、その人と出会う。しゃべっている人はさりげなく、あるいはまた書いている人はさりげなく書いているのだけれども、聞いた側、読んだ側は何か身が震えるような何かを感じるものがあります。そして長い人生の中で、苦しい時にその言葉を思い出す。また選択をすることに悩んだ時にその言葉を思い出す。あるいは有頂天になっている時に自分を抑え、コントロールする。そんな言葉の一言でも皆さんがこの４日間の中で出会うことが出来たら、このセミナーは成功だと思います。

若い方々に大いに期待しております。ロータリーの中に皆さんと同じような若い人達の

ためにローターアクトという組織があります。その目標を要約しますと

第１には自分の足で立つ。自分で衣食住を得るような力をつけることです。

第２番目には夫となり、妻、母となって家庭を持った時、家庭の中で真の幸せとは何だろうか。心の豊かな幸せ。貧乏は恥ずかしいことではありません。量では計れないもの、形では見えない他人の価値を認めることが大事だと思います。

第３番目には、これからそれぞれ専門職、あるいは企業、実業でやっていかれる時、道徳的に高い基準にいつも従いながら判断の基準、行動の基準とする。そういう人間になっていただきたいと思います。

第４番目には私達はたった１人ではございません。社会の構成員であるみんなが見えない糸でつながっております。これは地球でのすべての人と人の間でもそうです。そしてみんなのおかげで今日があります。だとするならば、みんなが良くなるように、自分だけが孤立して良くなるのではなく、そういうことを心掛ける、そういう人間になってほしいと思います。

21世紀は皆さん方がこの世の中を背負っていくのです。我々老人はいずれ消えていきます。皆さん方はまた次へ伝える、それがこの世の営みだと思います。このＲＹＬＡでいろんなことを勉強出来ると思います。しかし皆さんがそのつもりにならないと、自分から積極的にならない限りは、受け入れることは出来ません。しっかり勉強してください。

人間は発生的には体を動かすことによって、まず手を動かすことによって知恵をつけて来ました。知恵から体がついたものではありません。そういう意味ではまず体験をなさってください。太田ガバナーは少し違った角度からお話をされました。しかし結論は一緒だと思います。どうぞよいＲＹＬＡを過ごしてください。

ディーンあいさつ

国際ロータリー第2680地区
ＲＹＬＡ委員長
ディーン代理　赤穂　哲

私は兵庫県の地区のＲＹＬＡ委員長です。この23回ＲＹＬＡを１年前から計画致しました。昨年丁度この時期に22回が終わって、それから１年かけてＲＹＬＡ委員会で会議を何回もし、ここまでこぎつけました。ですから今日私は非常にうれしいです。やっと実施できるということで喜んでおります。

我々の余島ＲＹＬＡは１回から22回まで続いているということで非常に歴史があります。我々が何回も会議をして来たのは先ず第23回をどういうテーマでするか、それを話し合いました、その中で、去年17歳の犯罪が多発致しました。これはいったい何故こんな事件が多発するのか、日本は少しおかしいのではないかと我々ＲＹＬＡ委員も感じ、これを第23回のテーマにしよう。勿論結論は出ておりません。深川パストガバナーのご指導で、人間の尊厳、命の尊厳というテーマを決めました。

そのことについて、明日は藤井先生、明後日は野尻先生、最終日は今井先生にお話していただいて、皆さんも考えていただく、そして考えるだけではなくて、キャビンに帰ってまたフォーラムを通じてそのことを徹底的な討論していただきます。

今、中嶋ガバナーもおっしゃいましたが、ＲＹＬＡに来たら黙っていたら損です。普段の自分を少し超えるくらいしゃべってください。討論してください。友達と話し合ってください。そうすることでまた新たな発見があるでしょう。ぜひ自分の方から積極的に話をしてみてください。

この余島ＲＹＬＡには５つの大きな特徴があります。それは日本全国でＲＹＬＡがされておりますし、世界中でも実施されております。しかしこのＲＹＬＡは５つの特徴を持っていることによって他のＲＹＬＡとは違うと思います。

その１つは高レベルの講義と討論。これは大学生以上の方を対象とした受講生の方に対して講義を聞いていただく。そして討論していただく。そういうことを第１の特徴にしております。

第２番目はキャビンタイムです。講義の終わった後、自分のキャビンに帰ってすぐ寝てしまうのではなくて、カウンセラーを囲んで今日あった講義のこと、それ以外の例えば自分の悩んでいることとか、恋愛論などについてどんどん話してみてください。親睦を熟成してください。

第３番目は自由と規律。このＲＹＬＡは20歳以上の人ばかりを来てもらっています。20歳以上なら何歳でもいいわけです。私がカウンセラーをしました時も40代の方もいらっしゃいました。50代の方もいらっしゃいました。自分の責任でもってこの３泊４日を過ごしていただく。煙草も吸えますし、お酒も飲めます。しかし煙草とお酒は自己責任です。他

人に迷惑をかけないように、特に煙草は必ず指定された場所で吸ってください。

第４番目、これは余島の自然です。皆さんも波止場に着かれた時に感じたと思いますが、渡船で余島に渡ってここに入りますと、小豆島から孤立されてこの島で過ごすわけです。この余島は今井先生が約50年前に発見されてキャンプ場として開発してこられた場所です、このきれいな海ときれいな空気をまず満喫していただいたらと思います。

５番目の特徴はカウンセラーシステムです。このカウンセラーシステムは１人のロータリアンとロータリアン夫人がペアを組んでいただいて１つの班を担当していただきます。カウンセラーを中心に３泊４日生活していただきます。その方達が皆さんのここの島での親代わりということになります。あくまでも受講生の皆様がＲＹＬＡセミナーに主役ですから我々は皆さんがこのセミナーを有意義に受けていただくためにサポートさせていただくという立場です。これがディーンとして皆様に申し上げたい挨拶です。よろしくお願い致します。

「ロータリーがＲＹＬＡに期待するもの」

――用語の解説をふくめて――

国際ロータリー第2680地区
ＲＹＬＡ顧問
パストガバナー　深川　純一

ＲＹＬＡにつきましては赤穂委員長のほうからお話をいただきましたので、私は若干の補足にとどめたいと思います。用語の解説につきましては先程来ロータリー的な専門用語がいろいろ飛びだして皆さん方まごつかれたと思います。最初に太田ガバナーがＲＩという言葉を使われました。これはロータリーインターナショナルの頭文字をとってＲＩといっております。世界中にロータリアンがおりますが、そのロータリアンをある程度の人数でグルーピングをし、それをロータリークラブといっております。そして世界中のロータリークラブの集まった連合体を国際ロータリーと申します。これがロータリーインターナショナル、ＲＩであります。そのへんのところをご理解していただきたいと思います。

今、赤穂委員長がディーンという言葉を使われました。これは他のＲＹＬＡでは恐らくディーンという言葉は使っていないと思います。これは今井先生の発案でこのＲＹＬＡで使われだしたものです。辞書によればディーンというのは大学の学部長にあたるもので、教務の最高責任者という意味であります。このＲＹＬＡの中でも教務関係、講義やディスカッション等全ての最高責任者であります。在無関係、いろんな計画をたてたりするのはＲＹＬＡ委員長がこれに当たります。そういうようにご理解ください。

ＲＹＬＡ、ＲＹＬＡといっておりますが、先程太田ガバナーが英語で解説をなさいました。日本語では青少年指導者養成計画と訳します。青少年の指導者を養成していく計画のことをＲＹＬＡといっております。そしてここではセミナーが主体になりますからＲＹＬＡセミナーといっておりますが、ＲＹＬＡというのは青少年の指導者を養成する計画であるとご理解いただけたらと思います。

ＲＹＬＡというのは古い歴史がございまして、一番古いのは1959年にオーストラリアのクインズランド州の創立100周年を記念して一つのイベントをもったのであります。その時にイギリス王女と同年代の青年男女を集めてオーストラリアのブリスベンのロータリークラブが社会教育プログラムを持ったのがそもそもの始まりであります。その時は今日のようなＲＹＬＡとはまったく違ったものであったと思います。

やがて1974年にあって、ワシントン州のタコマでＲＹＬＡが開かれました。それが発端となり、全世界に広がったものであります。1974年から３、４年たった後、今井先生の発送でこのＲＹＬＡが始まりました。22年間にわたって、毎年毎年、春になると

ＲＹＬＡにみんなが集まって来て、心を開くのであります。そんなわけでこのＲＹＬＡは世のため、人のための心を作るところとご理解ください。奉仕の心を作るとご理解いただいても結構です。

具体的にはどういうことかといいますと、皆さんここに入られる時に食堂の正面に一つの石碑があったと思います。それには「人と出会い、神と交わり、愛の火の燃えるところ」という文字が刻まれています。これは今井先生の言葉でありますが、このＲＹＬＡは正にその言葉に集約されるだろうと思います。

「人と出会い」皆さん方は今日出会いました。出会いを尊重していただきたいと思います。「神と交わり」というのはいろいろ心を磨きながら哲学的な思考をすること。そしてやがて皆さん方の心に「愛の火がともるところ」というのが余島のＲＹＬＡであると今井先生がおっしゃったのであります。正にロータリーは人を育てるところであります。

具体的に卑近な例をあげておきますと、煙草の吸い殻を拾うということはロータリアンとしては避けて通る事は出来ないことです。しかしロータリーはそこにロータリーの本願はない、ロータリーの目指すところは、煙草の吸い殻を捨てない人を育てるところにロータリーの本願がある。この点をとらえて、ロータリーは人を育てるといっております。

このＲＹＬＡというのもロータリーのプログラムの一つでありますが、主なる目的は人を育てるということが問題であります。あくまでも倫理的な人間を作っていく、心を育てる、これがＲＹＬＡであります。従ってこのＲＹＬＡでは技術的なことはもう皆さん方はリーダーとして習得されたということを前提にしております。その上で皆さん方に更に高い境地に到達していただこうというのでこのＲＹＬＡが計画されています。

そういう意味で心を作る、その心は何の心かというと、世のため、人のために役立っていく心、そういうものを作る所だとご理解をいただきたいと思います。

先程委員長がこのＲＹＬＡの特徴の一つとしてハイレベルな講義をあげておられましたが、何のためにハイレベルな講義をするのかといいますと、技術的には完成された皆さん方を、更にハイレベルに導くためには高いレベルの講義が必要だろうということであります。

それとの関連で、本来のオリジナルなＲＹＬＡというのは14歳から18歳までの受講者で構成されるのでありますが、このＲＹＬＡは20歳以上、上は無制限というかたちをとっております。それはハイレベルな講義を消化していただくためには20歳未満では消化しにくいだろう。したがって最低限度を20歳において、それ以上の方を目標に、ＲＹＬＡで研鑽に励んでいただうということが前提になっております。

カウンセラーシステムについては委員長が話された通りでありますが、このカウンセラーシステムというのはこのＲＹＬＡの期間だけで済むのではなく、ＲＹＬＡで皆さん方が仲良くなって、やがて地域に戻った後同窓会をするような時にはカウンセラーも出ていただきます。一生の付き合いと

して後々までの皆さん方の面倒をみてくださる、そういう役目がこのカウンセラーであります。今日から始まるＲＹＬＡではカウンセラーを中心に本当に心を開きあって仲良くしていただき、よいグループを作り上げていただければと思うのであります。

最後に一つ申し上げておきたいことはこのＲＹＬＡで一番大事なことは皆さん方一人前のリーダーでありますから、自分自身で自分を規律してください。自律ということが一番大事なことであります。ロータリアンというものは自分を規律することに極めて厳しいのであります。

例えばロータリーの例会は毎週行われますが、その例会に遅れることをロータリアンは恥ずかしいことだと考えております。みんなで決めたルールを守ることに非常に厳しいのがロータリアンだと覚えておいていただきたいと思います。

このＲＹＬＡは基本的には自由であります。皆さん方自身が自分で規律していただければと思います。みんなで何かをしようという時に期間は絶対に守ってください。時間というものは万人の共有物であります。皆さん一人一人のものではないのであります。一人が時間に遅れるとみんなに迷惑がかかります。そのことだけを申し上げておきたいと思います。

それ以外のことは皆さん方に任せます。ルールを守るということだけは心していただきたいと思います。

これからの４日間を厳しく律しながら、楽しくＲＹＬＡを満喫していただきたいと思います。

カウンセラーミーティング

「生と死：いのちについて考える」

関西学院大学社会学部
専任講師
藤井　美和氏

〈藤井　美和氏〉
1959年神戸市生まれ。愛媛大学卒業後（刑法専攻）新聞社勤務。1988年急性多発性根神経炎6月の闘病。2年半のリハビリを経験。1990年、ソーシャルワークを学ぶために関西学院大学社会学部に学士編入学。大学院修士課程終了後、フルブライト留学生としてアメリカ・セントルイスの Washington University（博士課程）に入学。1999年 Ph. D.（博士号）取得。
現在、関西学院大学社会学部専任講師。「死生学」と社会福祉の科目を担当。
専門は、死生観、ＱＯＬ (Quality of Life)、死にゆく人のケア。

おはようございます。先にちょっとお断りしておきたいのですが、昨日、今井先生が私を紹介してくださり、今も、赤穂さんからお話してくださいましたけれども、私、病気の後遺症で、全身の筋力が、だいたい普通の人の半分ぐらいしかないんですね。本来なら、立って講義をするところを、勝手ながら坐ってお話させていただきたいと思います。

さて、今日は、みなさん、第１回目の講義ということで、ドキドキ、ワクワクというふうな気持ちではないかと思いますが、私も、十何年か前にこちらでキャンプをした者として、こうしてこのキャンプ場でお話させていただくということ、非常にうれしく思っています。

私は、今回の人間の尊厳、命の尊厳ということについて、直接それはこういうものですとか、こういうふうに考えればいいんですということは言いませんけれども、人間の尊厳とか、命の尊厳を考えていくときに、どういうふうなところを拠り所として、こういうことを考えていったらいいのかという、その考える、スタート地点として、何か皆さんが感じて帰られたら非常にうれしいと思っています。

人間の尊厳とか、命の尊厳というと、非常に漠然とした感じの言葉だと思うんですね。人間の尊厳とは何ですかとか、命の尊厳とは何ですか、誰々さん、どう思いますかというふうに、今、私がここでお尋ねしたとしても、それはこういうことですとか、それはこういうことで説明できますというふうには、なかなか答えにくいと思い

ます。そういうふうな、非常に漠然とはしていますが、いろんな意味では深い概念ではないかというふうに思っています。

しかし、私たちは、その漠然とした感覚としては分かっているけれども説明しにくい、このことについて、それは重要であるということは分かっていると思うんですね。人間の尊厳というのは重要であるとか、私たちが意識しなければならないことだということは、きっと、皆さん分かってらっしゃると思うんです。しかし、そうすると、日常生活の中で、私たちは常に人間の尊厳とか命について考えているかと言うとそうでもない。私たちにはやらないといけないことがいっぱいありますよね、勉強もそうですし、仕事もそうですし、いろんなことに追われてるわけです。言ってみれば現代人は時間に追われて生活してますから、命とは何かとか、命の大切さはどういうことかということを、時間をとって考えてみるということは、あまりないのではないかというふうに思うわけです。つまりどういうことかと言うと、命の尊厳とか人間の尊厳は大切だということは分かっている。しかし、それが何なのかということは、あまりよく考えていない。ところが、この世の中を見てみると、まあ少年犯罪もそうですし、震災でたくさんの命が失われたということもあります。自殺の問題とか、いろいろな命について考えさせられる状況に向かわないといけない、向かわざるを得ない状況に私たちがある。それが、私たちの現代と命の関係ではないかというふうに思うわけです。

死を含めて生きることを考える

私は、現在、関西学院大学の社会学部で死生学というものを教えています。それはどういうことかと言うと、生と死について考えるということなんですね。しかし、それは何のためにしているかと言うと、非常に哲学的に、生きることはどういうことかとか、人間が死ぬということはどういうことかということを深く考えるというよりは、命について考えるきっかけを学生さん方に持っていただくということをしているわけです。

私たち、生と死について考えるというと、おぎゃあと生まれてから「ご臨終です」と言われて死ぬまでの間のことのように思いますけれども、確かに、それはある意味では正しいんですね。人間は生まれてきたときに、「おめでとうございます。何時何分、元気な男の子です」「元気な女の子ですよ」ていうふうなことから始まって、やっぱり亡くなるときも、「何時何分、ご臨終です」ということですよね。時間で生まれてきて時間で死んでゆくということは、確かに、この世の中で起こっているわけです。

しかし、私たちはそれだけの存在かというと、そうではないわけです。生まれてから死ぬまでもそうですし、もしかしたら、その命というものは、もっと前からあるかもしれないし、死んだ後も続くものかもしれない。ただ、私たちはこの世の中に生まれてきて、生きている間にいろんなことを経験して、いろんな悲しみや喜びを味わっていくわけなんですが、その中で、じゃあ私たちが生きてることとか、死んでくこと

を考えましょうといったときに、ただその瞬間瞬間を考えるかというと、そうではないということですね。

例えば、皆さんどういうふうな死に方をするかとか、自分がどういうふうに人生を終わっていくかということを考えたときに、ほんとに息が出来なくなって、最後死んでいくという、そういう瞬間を考えられるよりは、むしろ、死を考えるときというのは、その死ぬ過程を考えられると思うんですね。どういうふに生きて、どういうふうに最期を迎えるかという、その過程を考えていかれると思うわけですね。ということは、死というものは、単に、ある一瞬のもの、そのとき、あっ死にました、ここで命がなくなった、人生が終わったということだけではなくて、その、死ぬまでどのように生きるかということなわけです。ですから、死を考えるということは、いわば、生の一部、生きていくことの一部であって、生を考えることの中に死が入っていると考えるほうが、より私たちの生き方を深くするのではないかというふうに思います。

死生学というのは、そういう意味で、死ぬと生きると二つの言葉が入っているんですね。英語では、sanatorogy というふうにいいまして、死学、死ぬ学問というふうに辞書に載っている場合もあります。しかし、むしろ、死を考えるというよりは、死を含めて生きることを考える。それが、実は、命について考えることであったり、私たちの生き方を問われるものであったり、あるいは、今、現代の中で起こっているさまざまな命に関わる問題を自分なりに答えを出していくときに必要なものになってきたりするのではないかというふうに思っています。

ですから、今日は、私は、「生と死、命について考える」というタイトルにさせていただきました。これは、私たちの人間の尊厳とか、命の尊厳というふうなことを考えていくときに、まず、私たちが、死を含めて生きるということを考えることにおいて、命がどういうふうに価値があるのかとか、命に対して、私たちは、どんな考え方を持っておかなければならないのかということ、それを少し考えていく、そういったきっかけになればと思いまして、このタイトルを付けさせていただきました。

じゃあ、具体的に、どういうふうにして、人間の尊厳とか命の尊厳というものを考えていけばいいかということなんですけれども、その前に、私自身が、人の死とか、死を含めて生きるということに関心を持つように経緯について、少しお話させていただきたいと思います。

突然襲ってきた多発性神経炎

これは何度もご紹介いただきましたけれども、実は、私は、13年前、1988年の5月に非常に重い病気になりました。その病気は、どういうふうに始まったかと言いますと、まず、5月の10日ぐらいに、左手が痺れだしてきたんですね。それから、だんだん力が入らなくなってきました。なんかおかしいなと思ってたんですね。その次の日、右の後頭部のかなり首に近いところなんですけれども、そこがガンガンガンガン痛くなってきたんです。

当時、私は、ある新聞社で編集記者とし

て働いてたんですけれども、同僚の友だちに、左手が痺れる、頭が痛いと訴えたわけです。そうすると、会社の同じプロジェクトの人たちからは、「美和さんは、それは低血圧だから、手が痺れたり頭が痛くなったりするんや」と言われたわけですね。それにしては、今までこんなこと全然なかったのになあと思いながら、次の日仕事に行ったわけです。それで、次の日は、今度は右手が痺れてきたんですね。ペンが持ちにくくなってきたわけです。そうすると、これ、私自身の仕事は、書くのが仕事ですから、ペンが持てなくなるというのは非常に支障をきたすことになるわけです。

その日もなんとか仕事を終わって、その次の日になりました。次の日は、5月13日の金曜日だったんですけれども、この日は忘れもしません。当時私は、ある女性のための媒体のプロジェクトにいました。新しい新聞を発行するということで、だいたい毎日、12時とか1時ぐらいまで会社に残ってたわけですね。そのときは副編集長という、編集に関しては責任のあるポジションにありましたので、だいたい最後まで残っていたわけですが、最後の一人になって鍵を閉めようと思ったときに、金属性の音がカチャンとしたんですね。そのとき、その鍵が落ちたということを、私はその音を聞いて初めて分かったわけです。つまり、そのときには、もう左手には鍵を握る握力もなかったですし、感覚もなかったんですね。

鍵が落ちたということを、音を聞いて初めて分かる。そのぐらい左手には力がなくなってました。そのとき、これは何か大変なことかもしれないと思いました。それと同時に、もしかしたら、もう、この会社には二度と来れないんじゃないかという予感がしたんですね。それで、もう一回ヨロヨロとデスクまで帰りまして、今まで書いていた原稿を、これは何月何日出稿してくださいとか、この写真はこの原稿に付けてくださいとか、メモを逐一作りました。それから、何月何日には取材のアポがあるから、誰それさん行ってくださいということも、逐一書いたんですね。

今から思ったら、書くと言ってもぐにゃぐにゃの字で、しかも筆圧がないですから、ものすごく薄いんですね。それをその後、皆さんが、同僚の人が読んでくれたわけですけれども、今から思ったら、よくまあ、あれを読んでくれたなと思うぐらいの字でした。それで、あすは病院に寄って行くので遅れて出勤しますという手紙を付けて、その日は会社を出たんですが、実際に、その日が、私が編集記者として仕事をした最後の日になりました。

私の病気は、急性多発性根神経炎という病気なんですね。これは、血液中の血小板じゃなくて、血漿タンパクと部分があるんですが、それが、急に悪玉になって、自分の神経を壊していくという病気なんです。ですからいってみたら、私の体の中で起こるわけですね。いろいろ原因は調べてはいるんですが、現代医学では、あまりはっきりしていない、原因がよく分からないというふうにいわれています。

最初、風邪から始まるんじゃないかということもいわれたり、なんか心臓に菌が入るんじゃないかということがいわれたりしているようですけれども、決定的にこれが

原因というふうな原因は見つかっていないようです。ですから、こういう病気になる人も非常に珍しくて、数万人に１人とか10万人に１人とかいうふうにいわれています。

私は、その日、帰るまでが、まず大変だったんです。私は阪急電車で通ってたんですね。しかし、阪急の終電のほうが早いですから、ヨロヨロと会社を出てＪＲの券売機のところまで行きました。切符を買おうと思って、財布をカバンから出そうと思ったら、それがなかなか出ないんですね、力がなくって。このへんで財布を、券売機の前に置いて、小銭のホックを開けようと思っても開かない。それで、ヒジでガンと開けて、なんとか100円玉、コインをつまんで入れたんです。行先のボタンを押そうと思ったら、手がぐにゃっとなるんです。まっすぐボタンを押すだけの力がなくて、タッチはできるんですけども、そこからボタンが下がらない。それで、ヒジでガンとそのボタンを押して、切符を取ろうと思ったら、また切符も取れない。何とか取って、改札のところに通して帰ったんですね。今から思ったら、よく帰れたなと思いましたし、なんで、あのとき、タクシーで帰らなかったのかな、なんて思うんですけれども、そのときは必死でした。

ただ、幸いなことに、先ほどお話しましたように、手から麻痺がずうっときたんです。ですから、足のほうが手よりは強いんです。それでまあ、家までなんとかたどり着けた。しかし、家に帰って、歯磨きしようと思ったら、チューブが押せないんですね。しょうがないわと思って、歯ブラシでシュシュシュとだけでもしとこうと思って、歯ブラシをなんとか持って口に入れようと思ったら、ここにも入らないんですね。手の力の弱いのもあるんですけれども、ここが麻痺して入らない。せめてうがいだけでもと思って、うがいしようと思って、なんとかコップを手で持って、水を口に含もうとしたら、そうするとバアーッと水が出てきたんですね。このへん全然動いてない。タオルを絞ろうと思っても絞れない。あれよあれよという間にどんどん麻痺が進んでいきました。

極限で考えた人生の意味

その日、これはいけないというんで、救急病院に行ったんですね。その病院は、その後私が入院することになる病院なんですけれども。そこに行きましたら、そこにいらしゃった先生が、あなた、それはストレスやと、こうおっしゃったんです。栄養の点滴をしてやるから、ビタミン剤かな、それで帰りなさいと言われたんですね。私、なんか、それを聞いて、悲しくなって、ボロボロ涙が出たんですけれども、点滴だけしてもらって、また、タクシーで家に帰りました。

その次の日、もう起きられなくなったんですね。身体がもう、起き上がらないということで、救急病棟に入院したわけです。幸か不幸か、この病気は、身体は麻痺していくんですけれども、意識ははっきりしています。ですから、周りで何が起こっているかとか、人がどんなことをしゃべっているかというのは、こちらは全部分かるわけですね。ところが、私は、救急病棟に入院したときは、瞬きもできない、指の１本も

動かないし、首も右左にもいかない、完全な麻痺状態になっていました。ですから、お医者さんが、家族を呼んで、今晩は、もう大変かもしれませんということで、呼ばれたときに、ドクターが家族に病気のことを説明してたり、看護婦さんが、周りで話してたりすることは全部分かるわけです。私自身、分かるのですが、反応ができないんですね。しゃべれないし、息もできなくなってきていましたし、指の１本も動かないですから、合図すらできないというような状態でした。

周りにいる人は泣いたりするのですが、ドクターは、いや、この人は、この病気は、分かっているから、なんでも話してくださいと言われて、ああそうなのかという感じでみんなが私に話しかけてはくれました。それで、今晩は危ないと言われたときに、どんどんどんどん息はできなくなってくる、身体はどんどん麻痺してくる。そして、その麻痺が、心臓も肺も筋肉ですから、そういうところにくると非常に危ないということだったんですが、とにかく今晩は、どんなことでもするから頑張りなさいというふうに、ドクターには言われました。そのとき、初めて私は、当時28歳だったのですが、初めて自分の死というものに直面したわけです。

これで自分の人生終わるかもしれないということを思ったときに、一番最初に出て来たのは何だったかというと、あれほど好きでやっていた仕事のことではなくて、家族のことでした。私は、大学で法律を勉強したのですが、その後、どうしても、マスコミに行きたいという気持ちがありまして、そういうところで仕事をしてたわけです。それで、自分は、こんなに充実した人生を送っているし、自分はこんなに楽しいやりがいのある仕事が与えられてるし、もう、いつ死んでも、自分の人生は満足だというぐらいに思っていたわけですね。

ところが、死に直面して、思ったことというのは、仕事のことではなくって、家族のことでした。どういうことを思ったかと言いますと、私は、この28年の人生の中で、何か人のためにしたことがあっただろうかということを思ったわけですね、まず。私は好きなことを一生懸命やってきたけれども、それは、自己実現と言うか、自分のわがままだけじゃなかったのかというふうな気がしてきたわけです。

そんな、人のためなんて、そんな傲慢なおこがましいことよりも、もっと何よりも、家族という、私を育ててくれた家族に対して、私は、いったい何をしてきただろうかというふうに思ったんですね。そのときに、初めて、死にたくないと思いました。ほんとに死にたくないと思ったんです。死ぬのが怖いというのとは、ちょっと違って、このまま死んだら、自分の人生に意味がなかったんじゃないかというふうに思ったわけです。

その当時の生活といえば、会社から夜の12時とか１時に帰って来て、ちょこっとごはんを食べて、シャワーを浴びて、お風呂に入って寝るという、家はホテルのような生活だったわけですね。しかし、私自身は楽しかったんですね。ですから、いつ死んでもいいわというぐらいの気持ちだったわけですけれども、死に直面して思ったのは、

そんなことはどうでもよかった。むしろ、私は何か自分の人生が、何か人の役に立ったとか、非常に傲慢なんですけれどもね、しかし、何か家族のためにしたかということを問われたことです。

そこで、私は、今まで自分が思っていた自分と、本当の自分は違うということを知ったわけなんですね。今までは、自分は一生懸命やっていれば、自分の人生、後悔ないと思っていたのですが、実は、そう思っていた自分がほんとの自分ではなかったということを知ったわけです。

私は小さいときから、クリスチャンホームに育ちまして、幼児洗礼を受けて、中学3年のときに、信仰告白をしました。ですから、人間の人生というのは、与えられたものを一生懸命やっていれば、神様が天国にいらっしゃいと言ってくださったときは、いつでもホイホイと行けると思ってたんですけれども、実は、そう思って一生懸命やってきたことが、自分の人生にとっては、自分自身を肯定できるものではなかったということに気がついたわけです。

それは、ほんとに意外なことでした。皆さんも、多分、自分はこういう人間だとか、自分の夢はこういう夢があって、これを実現すれば、きっと自分の人生は豊かだろうとか、いろんなことを考えていらっしゃると思うんですね。しかし、ほんとのほんとの極限状況になったときに、自分の人生の意味が問われたときに、自分の人生はこれでよかったんだろうかと考えさせられたときに、よくなかったという答えが出るほど悲しいことはないと思うんです。私はほんとに悲しかったんですね。自分は一生懸命やってきたのに、自分の人生が、ああ、よかった、いい人生だったと言えないことが、すごくつらかったです。そういう意味で、自分のほんとに大切なものが何だったのかということを、正面切って問われた経験でした。

本当に大切なものは何か

それと、もう一つ、私が、死に直面して思ったことというのは、世の中で、目に見える社会的地位とか、お金とか、名声とか、財産とかありますね、そういったものは、死んで行くときには何の役にも立たないということが分かったんですね。

私は、大学の死生学の授業で、学生さんに、大切なものをいくつか書いていっていただいて、死の疑似体験という、その一人ひとりの人が死んでいくという過程を経験していただいているんです。そのときに、だんだん病気が悪くなって、死んでいく、その過程で、その書いてもらった大切なものを順々に破っていってもらうんですね。それは、どんなものを最初書いてもらうかというと、大切な目に見えるもの、大切なアクティビティ、活動ですね。仕事が入っててても家事でもいいんです、趣味でもなんでもいいんですけれども。それと、大切な人、それから大切な目に見えないもの、これを三つずつ、ですから、合計12個の大切なものを書いてもらって、それを、死んでいく過程で破ってもらうというふうなことをしてるんです。

それで、最後に残るものは、ほとんどが、どの学生さんも、大切な人か、大切な目に見えないものが残るんですね。私も、死に

直面したときに思ったことは、ほんとに大切なものというのは、世の中で評価される名声だったり、財産だったり、どれだけみんなに知られているかとか、そういったことではなくって、もっともっと、目に見えない自分の魂の豊かさとか、自分がどれだけ豊かに生きたか、聖書では天に宝を積むとかいうんですけれども、そういったことではないかというふうに思ったわけです。

私は、そういったものに、例えば、財産とか名誉とか地位とか社会的地位に価値を置いていたとは、自分では思っていませんでした。しかし、今の世の中で生きていくためには、そういったものなくして生きていくというのは、非常に難しい。でもそういうことを分かって、生きていくのと、それにとらわれて生きていくのとでは、またちょっと意味が違ってくるのではないか。

私たちは、時間に追われていますし、それから、ものとか社会的な評価とか、人からの評判というものに追われて生きていってしまってるというのがあると思うんですね。しかし、ほんとに、自分が死ぬときに、天国に持って行けるものは何なのかということを考えてみたときに、そういったものは、何の役にも立たないということを知ったわけです。

私は、死に直面して、二つの大切なことを教えてもらったんです。一つは今言った、ほんとに私にとって大切なものが何なのかということと、自分の思っていた自分と、ほんとの自分というものは、同じではないということです。私の場合は、自分が思っていた自分と、ほんとの自分というのが違ったということ、これは、けっこう自分ではショックだったんです。

私は、その晩、意識ははっきりしてますから、もう、一生懸命祈りました。神様、もう1回命が与えられましたら、今度は何か、死ぬときに自己満足でもいいから、何か役に立ったというか、自分の人生が豊かであったと思えるような、そういう生き方がしたいですというふうに、泣きながら祈りました。その晩に、不思議と麻痺が止まりまして、私は生きることができたわけです。翌日、その太陽の光が入って来たのを見たときに、ああ、私は死なずにすんだ、生きていられたと思って、涙がボロボロ出てきたのを覚えています。

「あなたは生きてて○印」

ところが、生きてはいられたんですけれども、次の日の朝、私の主治医の先生がベッドサイドにやってきまして、その先生、なんでもストレートに言う方だったのですが、「藤井さん、もう死にませんよ。死にませんけれども、一生、寝た切りか、良くて、1年後に車椅子に乗れるというぐらいのつもりでいてください。」そういう話だったわけです。そこで、私は、生きててよかったという気持ちが、ヘェッ、このままでずっといるのは、いったい自分に意味があるんだろうか。生きてて嬉しかったというはずの気持ちが、今度は生きてて辛くなっちゃったんです。一生寝たきりか、1年後の車椅子、一生車椅子の生活かということを言われたときに、自分はこれからどうやって生きていったらいいんだろうというふうに考えました。

私の病気には、決定的な治療法というの

が、まだ今もないというふうにいわれています。ですから、とにかく、その血漿タンパクの部分がおかしくなって、自分の神経を殺してしまうわけですから、とにかく、その血漿を交換するということで、血のある部分を、5回、全身の血漿を交換したり、あと、ステロイドっていうホルモンですけれども、それを直接身体に入れていくというふうなことだけでした。

しかし、その効果というのも、あまりなかったわけですね。私は、しばらくは、ずっとベッドに寝たまま身体も動かせない、指の1本も動かないし、まあ、失明しないように、湿った、目の上に看護婦さんがいつも乗せてくだすってたんですけど、瞬きもできないというふうな状態が続きました。動くことができないし、すべてのことを人にしてもらわないといけない生活、それでも自分が生きているということを受けいれるというのは非常に難しいことだったんですね。

昼間はなんとか頑張っていましたが、夜になったら涙が出てきて出てきて止まらない、でもその涙も拭けないんですよ、手が動かないですから。鼻が詰まるから、首を横にしたいのですが、これも横にできないんですね、一人では。だから、毎晩、涙でぐちゃぐちゃ、鼻は詰まったままというふうな生活がずっと続きました。

それでも、私が、自分は生きてていいんだと思えるようになったのは何かというと、私の周りの人たちから「あなたは、そのままで生きてもOKよ」という、そういうサインをいっぱいもらったからなんですね。確かに、そういう状態で生きてるっていうのはシンドイことですけれども、「でも、あなたは生きてて○印」というか、メッセージをたくさん受けました。

それは、なんといっても、家族が一番だったです。ニコニコとして、ごくごく私を普通の、病気ではあるけれども、普通の家族の一員として。あんなに私は家族を放ったらかしにして生きてきたわけですけれども。ちっとも変わらない、そういう接し方をしてくれたというのが大きかったですし、あとは、いろんな方々との出会いが、病院の中でもありました。直接、「あなたはそういうふうになってしまったけど、価値のある人間よ」ということは、口では言いません。けれども、そのいろんな仕種とか態度ですね、私は、その人たちに尊厳ある人間として見てもらっているということが、大きな支えになったわけです。

その入院生活の中で、いくつか、すごく私が印象に残っている出会いがあるのです。一人は、私の、その厳しい宣告をしてくださったドクターなんですが、その先生は、足に障害を持っておられる方だったんですね。その先生は、私の病気は先ほど言いましたように、特にこれっていう決め手になるような治療法がないわけですから、病室に来てもすることがないんですね、何にも。そういうときって、医療者の人ていうのは、なかなか病室に入りにくかったり、どっちかというと、顔だけのぞかせて、すぐ去って行くという方が多いんですけれども、その先生は、朝と夕方必ず来てくださったんですね。何もすることがないんですけれども、椅子をベッドサイドに持って来て、私が寝てるときには、手を握ってくだ

さって、いろいろ話をして帰られる。

それから、忘れられない看護婦さんもいたんです。その看護婦さんは、私の、どこの病院でもそうだと思うのですが、お昼のご飯が終わった後に血圧を計るんですね。ご飯の後しばらくしてだったから、2時ぐらいだったかもしれません。そのときに来られて、私の血圧をシュシュシュシュと計られて、その後どこにも行かれないんですね。普通、その仕事が終わったらさっさと帰るんですけれども、その方は、どこにも行かないで、私の枕元のところに立ってらっしゃるんですね。私は全然動かないですから、その方の顔は見えないんですけれども、視界の範囲に、看護婦さんがここにいるというのは分かったんです。それで、その看護婦さん、ずうっと黙ってらっしゃるので、どうされたのかなと思ったら、泣いてらっしゃるんですね。ポロポロッと泣いて「藤井さん、シンドイね。辛いけど、神様の力は弱いところに完全に現れるからね」ていうふうに言ってくださいました。私も、そのとき初めて、その看護婦さんがクリスチャンだということを知ったんです。そのときに、二人でボロボロ泣いたわけです。そういった、看護婦さんが何かをしてくれたということじゃないんですけれども、その方が私にかけてくださった、その言葉というのが非常に嬉しくて、魂が揺さぶられるというふうな、そういうような経験をしました。

手鏡で見たサンフラワー号

それから、もう一人、忘れられない方がいるのです。その方は、悪性リウマチという病気で入院されてきた方で、足の先のほうに血が流れにくくなっているので、足の指というか、足の先のほうですね、切断するために入院されてきた方でした。10代のときから車椅子に乗っていらっしゃって、そのとき、もう55歳ぐらいだったと思うんですけれども、ほんとにニコニコニコニコとした方だったんですが、自分では、病院のベッドから車椅子に移ることも危険なんですね。ステロイドの治療をずっとしてましたから、骨がボロボロになっていまして、一人でベッドから車椅子にポンと移ったり、車椅子からベッドにポンと移ったりすることって、なかなか難しい。

病院は、ポートアイランドにあります神戸中央市民病院。ちょうど、神戸港が見える病室でした。神戸港には、毎朝、サンフラワー号という太陽のマークの付いた船が入って来るんですね。それも、ほんとに何ということもない景色なんですけれども、私たち病人にとっては、そういう普通の日常生活が窓から見えるというのが、とても魅力的なことでした。ですから、だいたいの患者さんは、ベッドを起こしてもらったり、車椅子に乗ったりして、その、朝、サンフラワー号がすうっと入って行くという、それだけなんですけれども、皆さん楽しみにして、見に窓際まで行かれるんですね。私は、全然動きませんから、そのサンフラワー号が来るというのは知ってましたけれども、ずうっと天井を見て寝てたわけです。

ある日ですね、そのサンフラワー号が通る時間ぐらいになってきたときに、その、先ほどの悪性リウマチの女性の方が、一人で、私のちょうど向い側のベッドだったん

です。私は、顔は起こせませんけれども、分かるんですね、動いてらっしゃるというのが、自分でベッドから車椅子に一人で移ろうとされてるわけですね。これは大変だと思ったんですけれども、なんとか無事に移られたようでした。それで、そこから車椅子をキコキコキコと回しながら、私のベッドサイドに来てくださったんですね。その人の膝の上には手鏡が乗っていて、その手鏡を私の顔のところにかざして「藤井さん、見える。あれがサンフラワー号よ」と言って、見せてくれました。それは、ほんとに私が、何日かぶりに見た外の景色だったんです。今でも、鏡の中に映ったサンフラワー号というものをはっきり覚えてるんですね。

そういった、看護婦さんにしても、患者さん同士にしても、私が動かない、まったく、他の人と同じことができない、そういう人間であっても、仕事としてではなくて、人間として私に対してくれるというところが「生きてていいんだ」という気持ちに、だんだんとつながっていったんじゃないかというふうに思っています。

非常に大切なものを得た

私は、6ヵ月入院生活を送りまして、その後2年半リハビリをして、この程度までよくなってきたわけです。でも、先ほど言いましたように、今、内臓にもいろいろ問題はありますし、筋力は半分ぐらいしかありませんから、なかなか日常生活は、大変と言えば大変。だけど、まあ、それを何とかコントロールできているといえるとは思うんです。

私が日常生活を過ごすうえでもそうですし、入院生活を通してもそうでした。感じたことはどういったことかと言うと、病気の人というのは、病気が苦しいんじゃないということですね。痛かったり、苦しかったりというのは、もちろんあるわけです。しかし、その病気が苦しいよりも、もっと深い苦しみ、例えば、なんのために自分はこんな病気にならないといけなかったんだとか、こんなふうになってしまって、自分の人生には意味があるのかとか、自分は価値ある人間だろうかとか、そういったことのほうが苦しいということを知りました。

それは、私自身も非常に考えさせられたことですけれども、私の入院中には、隣りのベッドに寝てらした方が自殺未遂をされたんですね。自分で点滴とか全部引き抜いて、窓から飛び降りようとされたわけです。私は、全然動かないですから、まあ大変と思ってたんですけど、病院は、窓が斜めに開くようになっていて、絶対に身体が全部出ない角度しか開かないんですね。ですから、それは未遂に終わったわけで、看護婦さんが飛んで来て、その人を、ダメダメと押さえて、ベッドに返して、その方、その後、別の部屋にすぐ行ってしまわれましたけれども。まあ、そういうこともありましたし、まったく身寄りがなくって、非常に若い方だったですけれども、白血病で一人で亡くなっていった方もいらっしゃいました。

そういったことを経験して、確かに、病気で体力的なものも失いましたし、いろんな意味で、仕事もなくしたといえばなくしたというふうにいえるかもしれませんが、

私が死に直面したことによって非常に大切なものを得たと思うんですね。しかも、その後、こうやって生きていることができたということで、自分の生き方がどうあるべきかということも考えるきっかけが与えられたという意味では、病気になって良かったんではないかなというふうに思っています。

関学大に編入して

長い長い話になりましたけれども、それがきっかけで私は、何か、病気で苦しんでいる人、非常に重い障害を持った人、生きる意味を問われている人たちに、何か自分が関わることができないかということを考えだしたわけです。

そこで、ご紹介していただきましたように、関西学院大学の社会福祉に3年生から、もう一回勉強しようと思って、編入したというのが、私のバックグラウンドなんです。ですから、生きるとか死ぬということを、ほんとに自分が死ぬときに直面して、生きる意味は何だったのかとか、自分にとって大切なものは何だったのかと、ほんとに死の直前に知っても遅いんですよね、それで死んでしまうわけですから。ですから、私たちは、若いときから、やっぱり、人間が生きるということはどういうことなのか、自分の命は何のために使うのか、自分の命と同じように人の命の重さも尊いものなのだということを意識することが大切なんではないかというふうに思っています。

これは、ちょっと、おまけの話なんですが、私は一卵性の双生児なんですね。ですから、私とだいだい同じような形をしたのが、もう一人いるんですけれども、ちょうど、妹も、神戸の薬大を出まして、製薬会社の研究員をしていたんですが、そこでもいろんなことを考えさせられて、関学の神学部に編入しまして、大学院を出てから、関西学院教会というところで伝道師をしていた1年目、4月に就任した5月に私が病気になったんですね。それから、妹も、病床伝道ということを非常に考えるようになりまして、今は、淀川キリスト教病院のホスピス病棟でチャプレン（牧師）をしています。そういった意味で、私は法律、妹は薬学で、全然違う方向のことをしてたんですけれども、20年ぐらい経ってみたら、結局なんかよく似たようなことをしてるというのも不思議なことだなあというふうに思っています。

これが、まあ、私の死生学というか、死について考えるきっかけとなったことなんです。先ほども言いましたように、私は、皆さんに、やっぱり若いうちに、命の重さとか生き方というものについて、やはり、考えていただきたいと思ってるんですね。先ほど言いましたように、人間の尊厳とか、命の尊厳とか、命の尊さというふうなことを、その概念とか、なんとなく大切なものとして話すのではなくて、自分はこう思う、命についてこう思うということが言えるようになってほしいというふうに思っています。

死と生についての自己覚知

それでは、そのためには、どうしたらいいかということなんです。それを、今日は、考えるきっかけに持って帰っていただける

ものがあればと思ってるわけです。私が、今、考えているのは、すぐできることとして二つあると思うんですね。一つは、自分自身が死についてどういった感覚を持っているか。死ぬことについて、自分はどういうふうに思っているかということを自己覚知するということが一つ。もう一つは、自分は人生をどういうふうに生きようと思っているかということを自己覚知することが必要だということと、この二つが重要なことではないかというふうに思うわけです。これについては、後で皆さんに、いろいろやっていただきたいことがあるんですけれども、その前に、一つ命についての話を、ちょっと続けたいと思います。

私が大学でやっている死生学というのは、非常に深い哲学をやるというのではなくて、先ほど言いましたように、命について考えるきっかけを持っていただいて、自分自身が、さまざまな、今、社会で起こっている問題、いじめとか自殺とか安楽死とか、いろんな問題がありますね。そういったことについて、何らかの考え方をしっかり持っていただきたい、その導入のようなものとしてしているわけです。

具体的に、じゃあ、私たちは、どういうふうなことを知っておく必要があるかというと、まず先ほども言いました、自分自身の死生観ですね、自分がどんな死生観を持っているのか、人間の一生をどういうふうに理解しているのか。もちろん死生観というのは文化によっても違いますし、時代によっても違うと思うんですね。そういった、さまざまないろんな考え方を知った上で、じゃあ自分はどういった死生観とか価値観を持っているのかということを、ひとつ、明らかにしていくということが大切なことではないかと思います。

それから、他に、死に行く人の心理とかですね、死んで行くときにどんなことが起こるのかということを知っておくということも必要なことではないか、これもまた、死生学の講義なんかでは、していることです。キブラー・ロスという人が、死に行く過程というものを5段階に分けて説明しているんですね。これ、話すと長くなりますので、今日はしませんが「死ぬ瞬間」という本が出ていますので、もし、そういうことに関心のある方は、読んでいただきたいというふうに思います。自分の死に、どういうふうに人間は反応していくのか、それを知ることで、逆に、私たちは死んで行く人とか、重い病気の人に、どういうふうに対していったらいいかというのが分かると思うんですね。

それから、また、社会が、死をどのように取り扱っているか。私たちは、死ということについて、命について考えることは大切だけれども、死ということについて、社会の中で、おおらかに話をするというのは、まだ、なかなかできない。それは、いったい、なぜなのかということについても知っておく必要があると思います。時間があれば、これも後でお話したいと思うんです。

それから、他に、命を考えていくときに必要なこととしては、喪失体験、失うということですね。それと、喪失に対して出てくる悲しみ。悲嘆、これは grief ていいますけれども。こういったことについて、人と、大切な人と別れたときに、どういうふ

うな反応が起こるかとか、そういった人たちに、どういうふうに対していったらいいのかということも、やっぱり、私たちが命を考えるときに必要なことではないかと思います。

それから、quality of life、いろいろ言葉が出てきますけれども。quality of life ていうのは、quantity（量）ではなくて quality、つまり、人生の長さではなくて質ですね。それを、quality of life というふうに、頭文字だけ取って、ＱＯＬていうふうに言います。命の質というふうに、私自身は訳しているんです。生活の質というふうにおっしゃる方もいらっしゃいますし、人生の質という方もいらっしゃいますけれども、私は命の質というふうにとらえています。

これは、例えば、ガンの末期の患者さんがですね、あと、何か月も生きられないということが分かっていて、そこで、化学療法とかをしたり、最新の医療技術を用いて、１分１秒長く生きるほうを選ぶのか、あるいは、もう自分の命が長くないということが分かっているのであれば、そういうふうな治療はしないで、むしろ、家族と一緒に時を過ごす。そういう意味では、１分１秒という観点から見ると、命の長さは短いかもしれないですね、１週間ぐらい短いかもしれないし、３日ぐらい短いかも、それは、短いでしょう。しかし、管に繋がれて、何もできないで長生きするよりは、たとえ、３日ぐらい１週間ぐらい短くても、その間、家族と一緒に生活したい、そういった生き方をする。命の長さではなくて、いかに豊かに生きるかということ、それが、quality of life という概念なんです。そういったことについても、やっぱり、知っておかなければならないと思います。

そういう意味では、今、先ほどちょっと言いました terminal care とか、hospice care と呼ばれてるものがありますけれども、それは、どちらかというと、命の長さではなくて、命を質を豊かにするための care です。病気を治すという治療ではなくて、治療のことを英語で cure といいますけれども、病気を治す cure ではなくて、care。治らなくても、その人を care するという考え方ですね。それが、quality of life ということと結びついてくるわけです。これについては、後で、短いビデオを見ていただきたいと思います。

それから、他に「死の準備教育」と今上智大学のデーケン先生なんかがいわれてますけれども、死について、小さいときから死について考えるということをしていこうという運動です。death education といいますけれども、死の準備教育、死について語るということを、小さいときからしていく。

つまり、人間の人生というのは必ず終わりがあるえわけですよね。終わりがあるから生きることにも意味があるし、生きることに重みが出てくるわけです。そういったこと小さいときから知っておく。今、私が大学でしているのも、death education の一環だと思うんです。若いうちから、人間が生きることについて考えるという環境を作っていきましょうという、ま、そういうふうな、命の重さを教えるという教育ですね、それも大切だと思います。

それから、先ほど言いました、もうちょっと広い範囲で見ると、生命倫理の問題で

すね。今は、クローンというのがありますね、クローン人間とか、出産前検診というのがあるんですね。例えば、出産前に、赤ちゃんがお腹の中にできたときに、検査をして、その子に重い障害があったら堕胎してしまう、障害がなければ産むというふうな、そういう命の選択が、今はもう、科学が進んでますから、そういうことができるようになってきています。

そういったことに対して、皆さんがどういうふうに感じるかということですね。あるいは、オランダでは認められてますけれども、安楽死の問題をどういうふうに考えるかとか、植物状態で人工呼吸器を着けた人の、その人工呼吸器を止めていいのかどうか。死ぬ権利を認めるのかどうかとか。さまざまな、臓器移植もありますね、脳死の問題。そういった、この命について考えるとき、そのこと、一つ一つの知識を得るということは、もちろん必要なことなんですけれども、しかし、こういった問題に対して、自分はこう思う、と言えるようになるには何が必要かということなんですね。

いろんな知識は必要でしょう、脳死とはどういうものかということを知っておくことも必要でしょう。例えば、安楽死の方法を知っておくことも必要だと思います。それから人工授精の技術について知っておくことも必要だと思います。そういった知識は、ある程度必要だと思うのですが、しかし、いいのか悪いのか、自分にとって、それを善とするか悪とするかっていう考え方、そういった価値判断、善悪を伴う判断のことを価値判断といいますけれども、そういった価値判断をしていくときに、私たちの場合、何があれば、それができるのかということなんですね。

それを考えていくために、先ほど言った、皆さんが、まず、死というものをどういうふうにとらえているか、あるいは、生きる、人生、生きるということをどういうふうに感じているかということ、それによって、そこを知っておくことによって、自分自身の死生観とか人生観とか価値観というものを自己覚知しておかなければ、今言ったような一連の問題には答えられないということなんです。

うわべの意識でものを言うのではなくて、自分はこういう立場に立ってて、こういう価値観を持ってるから、こういうことについてはこんな判断を下しますということが、やっぱり、これから言えないといけないと思うんですね。でなければ、私たちは科学にほんろうされて、時間に追われて、物事にとらわれた生き方をしてしまうことになりはしないかということなんです。

死の不安度のスケール

で、そこで、ちょっと話は長くなりましたが、早速、皆さんに、二つのことをしていただきたいと思います。お手元の、先に配っていただいてますＡ４の縦の紙がありますね。そこに、以下の質問について、自分に当てはまれば○、当てはまらなければ×を、それぞれの番号の横に書き込んでください。

数というところ、（何個）というのがありますけれども、それは空けておいてください。

だいたい終わりましたね、それでは、今

からちょっと点数を付けていっていただきたいと思います。どういうふうにするかと言いますと、まず、私が、１番で○を付けた人１点と言うと、１番で、もし、ご自分が○を付けていたら、１点入れてほしいんですね。もし、×を付けていたら、そこには点数が入らないということです。ここでこれを付けていたら１点というふうに、正の字でも書きながら、点数が入ったところに、１点ずつ入れていっていただきたいと思います。じゃあ、いきますね。

１番で○を付けた方、１点。２番で×を付けた方、１点。３番で×を付けた方、１点。４番で○を付けた方、１点。５番で×を付けた方、１点。６番で×を付けた方、１点。７番で×を付けた方、１点。８番で○を付けた方、１点。９番で○を付けた方、１点。10番で○を付けた方、１点。11番で○を付けた方、１点。12番で○を付けた方、１点。13番で○を付けた方、１点。14番で○を付けた方、１点。15番で×を付けた方、１点。

その合計の点数が、一番下にあります、ＤＡＳポイント、何個というところに書いていただけますか。一番多い人で15点ですね。

これは何だったかといいますと、このＤＡＳというのは、Death anxiety scale。ここのＤとＡとＳをとって、ＤＡＳというふうにいうんですが、死の不安度のスケールだというふうに考えてもらったらいいかと思います。

０から４だった人、どのぐらいいますか。周りも見てくださいね、どんな人が挙げているか。

これはですね、アメリカで開発されたもので、私が訳してるので、日本語が拙いかもしれませんが、死に対して、どのぐらい不安が高いかというのを計る尺度なんですね。

ここでいわれているのは、かなり一般的な人より死の不安度が高い傾向にあるということなんですね。０から４という人は、かなり低いというふうにいわれています。しかし、これは、近い過去に非常につらいことがあったりとか、誰か友だちが病気になったとか、親が病気だったりとか、親戚が亡くなったりとか、そういうことによっても左右されるので、必ずしも、自分は何点だから高いとか、何点だから低いというふうにはいえないと思うんですね。

ただ、まあ、傾向として、自分にはそういう傾向があるぐらいにとっておいてほしいんです。あまり真剣に深く考えられると、ちょっと困っちゃうんですけれども、また、逆に、非常に死についていろんなことを考えている人は高いということも言われているんですね。何も考えずに、ほうほうとしている人は低いという場合もあるので、あんまり、これ、いいとか悪いとか全然ないんです。ただ、そういう傾向があるというふうに思っていただいたらいいかと思います。

皆さんが、死に対して、周りと比べて分かったと思うんですけども、いろんな死に対する不安とか、恐怖とか怖れみたいなのがあると思うんですけど、人によって、それぞれ違うんです。今、三つのグループで分けて聞きましたけども、１点ずつ聞いていったら、また、それぞれ違うと思うんです。

私のライフサイクル

もう一つ。今度はですね、今は死についてしましたが、今度は、皆さんが生きていくことについて、どんなふうな感じを持っているかというのをやってみたいと思います。横長の紙を出してください。私のライフサイクルというふうに書いてありますね。これは、このワークは、私のオリジナルではありません。しかし使い方は、私は、オリジナルに使ってるんです。

まず、横一本線、一番左端に出生と書いてあって、0歳と書いてありますね。この紙の上で、皆さんの人生を、ちょっと振り返っていただきたい。一番右端には死亡と書いてあります。これ、皆さんの人生なんですね、生まれてから死ぬまで。いちおう、サークルにするのがいいのか、線にするのがいいのか、いろんな考え方がありますが、いちおう、線分上に自分の人生があるという見方をしていただきまして、まず、自分の人生を、こうありたいとか、こうあるだろうなというふうなものを書いていただきたいんです。

一番最初にしていただくのは、まず、死亡の年齢を決めるということです。皆さんが何歳で死ぬかというのを、やりにくいですね。これをやったからといって、そのとおり死ぬわけではないですから。ただ、自分が有限であるということです。100歳はありますけれども、200歳も、300歳も生きるわけじゃないですよね。いつか、何かで死ぬ、その、最後死ぬということがあるということを意識することが、まず最初だと思うんですね。そういう意味で、その死亡のところに年齢を書いてください。

その下に、必ず、死亡の年齢の下に、何で亡くなるかを書いてほしいんですね。例えば、ガンだったり、交通事故だったり、安楽死だったり、それから自然死もあります、老衰もありますし、高血圧、心臓発作、何でもいいんです。自分がこうありたいとか、こうあるだろう。例えば、80歳でガンだったらガン、自然死でもいいです、交通事故でもいいです。自分がこうありたいと思う年齢と病気を書いてください。

では、次に、この一番最後の年齢が決まりましたから、今の自分がどのへんにいるかというのを見ていただきたいんですね。80歳で私が死ぬとしたら、私、今41歳ですから、だいたい真ん中ぐらいに。30とか20でしたらこのへんでしょうね。60歳で亡くなる人だったら、もっとこっち側寄りになると思うんですけれども。自分の位置を決めてください。

だいたい、こう、ちょっと目分量で計算しながら、自分がどのへんにいるのか、というのを書いてみてください。書けましたか。そうしましたら、まず、生まれてから今までに起こったことの中で、自分にとって意味のある事柄、自分が覚えていることでもいいですけど、自分にとってなんか意味がある、自分の人生に関わるイベントというのを書いていってください。

一番下に例がありますけれども、出生は、もうすでにありますけれども、例えば、3歳のときに弟が生まれたとか、5歳のときにお母さんが入院したとか、小学校に入ったとか、大学受験、浪人したとかですね、自分にとって意味がある、あるいは、よく

覚えている出来事というのを、まず歳を先に書いてほしいんですね、こういうふうに。このへんに、28のときに病気がありますから、歳を書いて、出来事を書く。年齢を書いて出来事、年齢を書いて出来事というふうにしてほしいんです。

その中に一つ約束事があるんですけれども、例えば、誰かの死、おばあちゃんが死んだとか、おじいちゃんが死んだとか、お父さんが亡くなった、まあ、そういうことがあれば、死に関わる事柄については、まず、ここに自分の年齢を書きますね、それから出来事ですね、誰々の死という出来事がきますね。で、この人の年齢も書いてほしいんです。そして、その人が何で亡くなった書いてほしいんですね。例えば、20のときに、祖母は86歳でガンだったんですけどね、私の祖母は。

自分にとって重要でないことは書かなくていいですが、自分にとって、ああ、こういうことがあった、重要である、あるいは、非常によく覚えているという事柄については書いていってください。これは長く生きていらっしゃる方ほど、たくさん、今までは出来事が多いと思うんですね。こうして、思い出しながらやってみてください。

今までかなりいろいろあると思うんですけど、若い方は、もうかなり終わってらっしゃいますので、次にいきます。まだ書いてる人は、続けてください。若い方は、今からのほうが時間がかかります。今、終わってる方は、現在から死に至るまでの間に、起こるであろう、起こったらいいなと思う、起こるであろう事柄について書いてください。たぶん、皆さん、まだ、結婚されてる方、少ないと思いますが……。あるいは、自分の死ぬ間に、ご両親を看取るということが出てくると思いますね。

結婚するのであれば、先に、もしかすると、配偶者、男の方にとっては妻、女の方にとっては夫を見送ることも入ってくるかもしれないですね。これから先に起こるであろう事柄、自分が病気をするだろうということを入れていただいてもかまわないですし、どういうふうな仕事に就くかということも入ってくると思います。あるいは転職するとか、留学するとか、いろいろあると思うんですね。これから先、死ぬまで起こる事柄というのを書いてください。必ず、そのときに、人の死に関わるものがイベントとして出てきた場合は、その人が何歳で、どういうふうなことで亡くなるかということを、必ず、書いてください。

できましたでしょうか。今の表の左端と右端を見ていただくと、上にプラス、下にマイナスというふうに書いてありますね。これは何かというと、皆さんのそのときの気持ちなんですね。0より上は、嬉しいとか楽しいとか満足感があるとか、エキサイトしてるとか、そういうポジティブな、非常に、自分の人生の上で高揚している感情ですね。

0から下というのは、悲しいとか、辛いとか、やりきれないとか、悔しいとか、落ちこんでいるとか、そういったネガティブ、これをネガティブといっていいのかどうか、いちおう、そういったネガティブな感情、マイナスの感情というふうにしています。

それで、今から皆さんに、この表で、もう一つやっていただきたいことは、そのイ

ベントのときに、自分がどんな気持ちだったか、思い出してほしいんですね。それと、これから将来、起こるであろう事柄については、たぶん自分はこういう気持ちになるんじゃないかということを考えてみてほしいんです。例えば、ここだと、私はすごく落ち込んだというので、このぐらい、このへんに落ち込んだというふうに点を付けて、また、病気になったときに、ものすごく苦しかった、こういうふうに付けたとしますね。なんか嬉しいこともあるし、非常に良かった思うこともある、いろんな出来事、出来事のところに自分の気持ちを、ちょっと点で打っていって、それを、こう繋げていってほしいんです、こういうふうに、自分の人生がどうなのかというふうに。

必ず、生まれるときも、この線のどこかから初めてください。途中から現れるんじゃなくて、必ず、どこかから。死ぬときも、必ず、この線のどこかで終わってください、こう終わるのか、どこか分かりませんけども、必ず、始めから終わりまでを一つの曲線で結ぶということをしてみてください。

曲線というのは、気持ちの、感情の動きですね。それは、高揚していたときなのか、すごく悲しかったり辛かったり、落ち込んでいたりする気持ちだったのかということ、すでに経験したことについては、思い出してください、経験していないことについては、こうじゃないかなということを考えてみてください。それを、その点を曲線で結ぶということをしてみてください。少し悲しかったりというふうな、そういったことを考えながら点を付けていっていただきたいと思います。

卒業したときとは、自分の最後の学校を出たときと考えてもらったらいいです。年齢、性別、職業の横に、ＤＡＳポイントというのがありますが、そこに、先ほどの、死の不安度のときの点数ですね、あれを書き込んでください、最初の紙を見ながら、一番下の括弧のところに入れた数字を、今の紙の右上のところに入れてください。

それはなぜですかとか、理由を求めるような質問がありますけれども、必ず、それは自分の言葉で書いてください、何でも思ったことで結構ですので、それを書いてください。

自分の死生観の現われ

今、このワークをやっていただいて、どんな意味があったのかとか、あんまり楽しくなかったとか、嫌だったという方もいらっしゃるかもしれませんけれども。実は、これには、いくつかの意味があるんですね。そのことについて、ちょっとお話したいんです。

まず、最初に、命の尊厳とか、人間が死ぬこととか、生きることをいうのを考えていくときに、私たち自身が、死についてどういうふうな感覚を持っているかとか、生きることとか人生について、どう考えているかということ、それについて、はっきりとしたものを持っていなければ、命に関わる問題とか、家族が病気になったときとか、人との関わりのときに、どのように自分が自分の意見を言えばいいのかはっきり出てこないと思うんですね。

そういう意味で、今、二つのことをしていただいたわけですが、今のライフサイク

ルの意味ですけれども、特にこれは、自分自身の死生観、価値観というものを表わしているわけです。私が、最初に言いましたように、あなたにとって、人間の尊厳というのは何ですかとか、人間観と死生観というのはどういうものですかと聞いても、非常に答えにくいんですね、こういったことについて、こうです、ああです、というふうに答えるのは、なかなか、しにくい。しかし、今、書いていただいたものを見ると、そういった、皆さん方の死生観とか価値観というのが出ているわけなんです。

どういうことかというと、まず、最初に死亡年齢を設定していただきましたね。それは、自分が人生をどうとらえているか、例えば、よくいわれる言葉では、太く短く生きるとか、充実していれば短くていいとか、細く長く生きるとか、太く長く生きる方もいらっしゃるかもしれませんけれども。そういった自分の人生、死というものの終わりを知る、そのときに、知っているんだけれども、そのとき、どのぐらい自分が人生に自分自身が関わっていくかという、そういった自分の死生観が現れているといえると思います。

また、何で死にますかという死亡の原因ですね。これも、例えば、自分は、苦しみを伴わずに自然に死にたいと思っている、それは一つの死生観なんですね。そういうふうに死にたいですけれども、やっぱり、現実は病気じゃないかと思われる方もいると思います。そういった、人の死、自分の死を選べるとしたら、どういったことを選ぶかということも、自分自身が、死に対して、あるいは、病気を持つことに対して、命を終わることに対して、どんな考え方を持っているかいうのが現れていると思うんですね。

ですから、先ほども言いましたように、病気の人もいれば、安楽死と書いた方もいらっしゃる、自然死の方もいらっしゃるだろうし、交通事故の人もいるかもしれません。そういった、例えば、死に至る病気の痛さとか辛さが嫌だから、幸せなときに事故で死にたいとか、ほんとに幸せなときにポックリ死にたいと考えていらっしゃる方もいるかもしれないですね。それも、皆さんのひとつの死生観の現れだといえると思います。

それから、生まれてきたときに、どこにラインがあったかということですね。それも、自分自身がこの世に命を与えられたということに対して、自分がどう思っているかということが現れているわけです。同じように、死ぬときに、そのラインが上にあるのか下にあるのか、真ん中なのか、ゼロなのかということも、やはり、皆さんが、自分の人生をどう評価しているかとか、命について、どう考えているかというのが現れているということです。

それから、また、質問のとこにまいりましたけれど、一番ラインが上がっているところと下がっているところはどんなときですか、というのがありましたが、人間というのは、自分が大切にしているものを得られたときとか、目標にしているものを得られたとき、思い通りになったときというのは、喜びが高いわけですね。つまり、自分が価値を置いているものを手に入れたり、実現したときは、非常に高い。逆に、自分

が価値を置いているものをなくしたときとか、自分が価値を置いているものに、目標に失敗したときというのは下がってくる。

だから、一番悲しいときとか、一番嬉しいときというのは、ひっくり返してみると、自分の価値観と非常に深い関わりがあるということなんですね。皆さんはどういったものに価値を置いているのか、それと、自分自身の生まれてきたこと、死んでいくことについて、どんなことを考えているのかというのが、今やっていただいたワークの中に、いくつか現れてきてると思うんです。だから、自分自身の死生観とか人間観を自己覚知するというのは、なかなか難しいことですけれども、少しは、この作業を通して、きっかけを持っていただけたのではないかというふうに思います。

苦しまないで死にたい

ここには、ＲＹＬＡで集まって来られた方のものが、あるわけですが、それでは、他のグループですね、いろんなグループがあるんですが、その方たちがどういうふうに、その表を作っていったかということを紹介したいと思います。

まず、全体的なところから見ていきますが。これは、今書いていただいたＡ４の紙の上のほうにあったことをまとめたんです。結婚とか、子どもの数というのは時代を、結構反映したものになってると思います。

まず、このグループを紹介しておきます。短大は、大阪の短期大学の平均年齢20.2歳の方々95人の回答の平均です。それから次、大学女子と書いてあるのは、関西学院大学で死生学を２年前にとっていた女子学生149人、平均年齢が20.4歳の方々。大学男子も関学の死生学をとっていた男性、20.8歳平均年齢の方73人です。その横の看護学校は枚方の看護学校にいる方、平均年齢が20.0歳の方々42人の平均。ナースは兵庫県の看護協会の研修に来られた方々で、平均年齢が35.3歳、経験年数の平均が13年という方々45人の方のデータです。最後のシルバーは、神戸のしあわせの村のシルバーカレッジで、私がお話したときに協力してくださった、平均年齢68.7歳のグループの40人の方の平均です。

これを見ていただきますと、だいたい分かりますように、結婚の年齢というのは、学生さんは、だいたいこのぐらいの歳で結婚したいという希望になっているわけですけれども、だいたい26、７。看護学校の学生さんは25歳ということです。ナースの方々は、平均年齢が35.3歳ですから、もうすでに結婚されている現実の年齢というのが入ってきます。

シルバーカレッジに来られてた方々も現実の年齢が、ほとんど入ってきてるわけです。子どもの数なんかも、見てみますと、やはり、今の方、若い方のほうが非常に少ないんですね。平均の子どもの数というのは２人以下だったりしますけれども。シルバーの高齢者のグループは、2.38ということで、実際に２人以上持ってらっしゃるう方が多い。まあ、５人とか７人という方もいらっしゃいました。

次、ちょっと死の問題のほうを見ていくわけです。配偶者の死ですね、女子のグループでは配偶者の死と自分の死を比べると、そんなに差がないわけです。回答をい

ろいろ見てみますと、別々に死ぬのは寂しいから、一緒に事故で死ぬとかですね、1日遅れて、私が涙で見送った後、1日遅れで死ぬとか、結構そういうのが多いんですね。そういう意味で、実際は、男性よりも女性のほうが平均年齢は長いはずなんですけれども、結構近いですね、このあたりもそうですし、この看護学校の方もそうです。で、ナースの方、配偶者に看取ってもらいたいという人が、けっこういたんですね、これも、人の死に関わってるからかどうか分かりませんけれども、そういう方が多かったです。

しかし、この高齢者のグループになりますと、男性は、配偶者の死が79.5歳、つまり自分の奥さんのほうが自分よりも長生きするということですね。この高齢者のグループも、自分よりも配偶者のほうが早く亡くなるということです。これはかなり差がありますけれども、この中はどういうふうな内容だったかといいますと、今まで、いろいろ大変だったので、老後は楽しく暮らしたいということで、ご主人、早く死んでしまうようになったようですね、(笑い)いいのかどうか分かりませんけれども、これ、けっこう、こんなに差があって、びっくりしたんです。極端に、そういう方が4人5人いらっしゃったので、こういう結果になってるんです。そういう極端に早くご主人を亡くしたいという人を除けば、こんなに差は出てないと思うんです。まあ、平均というのは、そういうところが怖いとこです、平均とるとこういうことになっていたわけで。

次に、自分の死の原因なんですけれども、それを見ていただくと、短大と大学女子と看護学校の方とナースの方で圧倒的に多いのは、老衰とか自然死、苦しみなく死にたい。この中には病気だけど苦しみがないというのもありました。死に至る苦しみというものを、あまり味わいたくないということを思っている方が多いんですね。

しかし、男子の学生、男の子ですけども、この方たちは、どちらかというと、楽に死にたいけれども、実際自分は企業戦士としてバリバリ働くので、早く死ぬというふうに書いている人が多いんですね。また、非常に現実的で、うちの家系はガンの家系だから、僕もガンになるとか、うちの家系は高血圧だから脳溢血で死ぬとか、そういうことを、わりと現実的に書いてらっしゃる方が、男性は多かったということです。

この高齢者のグループ、このシルバーのところを見ていただきますと、病気が85.2パーセントで、自然死とか老衰で死ぬだろうとか、死にたいと思っている人は、4.8パーセントなんですね。これを、この中、男性と女性と分けると、男性だけに限っていうと、95.0パーセントの方が、自分は病気で死ぬというふうにライフサイクルで設定されていました。

これは、後でもわかりますが、この平均年齢68.7歳の方々は、すでに、何回か病気をされてるんですね。したがって、その死というものが、遠く、自分の理想というふうなものよりは、もっと近くて現実的なものというふうにとらえられているということだと思います。

その意味では、私たちが死を考える考え方と、人生の締めくくりに入っているよう

な時期、だいたい高齢期といわれる時に考えている死に対する考え方とはちょっと違っていることが分かると思うのですね。

皆さん、死について、今は、そう考えていますが、その紙を持って帰っていただいて、50歳、60歳、70歳になったときに、見ていただいたとき、自分は、そういうふうに死ぬということを望んでいるかどうか、また、現実としては無理じゃないかと思うような考えが出てくるんじゃないか、そういった変化が出てくると思うんですね。

あと、事故っていうのが、看護学校の学生さんなんかは、たくさんありましたけれども、これは先ほど言いましたように、苦しみがないということ、突然、とにかく死にたいという方が多かったんですね。で、病気であってもポックリ病みたいなのがいいというふうに書いている方が多かったです。これが、まあ特徴的なところでした。皆さんは、どんなふうに考えられたか、ちょっとご自分のと比べていただいたいと思います。

グループにより違う死生観

次に、全部はできませんので、必要なところだけみていきたいと思います。生まれた時と、死ぬ時のラインがどこにあったかということなんです。このグループは、先ほどのグループとまったく一緒です。生まれた時のラインが短大生の女子の方ですね、それから大学生の女子、大学生の男子は4分の3近く、あるいは、それ以上が、ゼロから始まっているんですね。一番最初のそのラインと、プラス・マイナスの線がクロスするところから始まっている。

その理由はどういうことですかって聞くと、スタート地点だから、始まりだから、それから、非常に多かったのは、思い出せないからとか、意識がないからゼロだったというふうに書いている人が非常に多いんですね。

あと、プラスの人というのは、20パーセント以下ですね、大学女子の方はちょっと多いですけれども。ところが、このグループを見てほしいんですが、看護学校の学生さんと、実際に平均経験年数が13年の看護婦さん、この人たちは、生まれてきた時が、看護学校の学生さんは約半分、ナースの方は60パーセントの方が、プラスから始まってますね。むしろ、ゼロというのは少ないです、看護学校の学生さんなんか、17.1パーセント。これ、答えてらっしゃない方がいるので、パーセンテージが、ちょっと100パーセントにはならないですけれども。

それで、その理由として、どんなものを挙げているかというと、まず、両親が喜んだとか、両親から、「あなたが生まれたときが、一番幸せだ」と聞いていたから、私は、生まれてきたとき、きっと喜んで生まれてきただろうというふうな考え方ですね。それから、命の誕生ほど神秘で人を喜ばせるものはないとか、誕生したこと自体に、今、感謝しているから、また、生まれる前から魂はあるから、喜んで生まれてきたということですね。そういった考え方がたくさん現れていました。非常に積極的な、命の誕生に対するとらえ方ですね。

ここで見ていただきたいのは、高齢者のグループもですね、けっこうポジティブに生まれてる人が多いんです。先ほど、死生

観というのは、時代とか文化によっても違ってくるという話を、ちらっとしましたけれども、このときに、ポジティブと書いてある方の多くの人はですね、長男だったからとかですね、隣りの人にかわいがってもらったからとか。あとは、愛に満ちた家庭に育った。動物ではなくて人間に生まれたからというのもありました。で、あと、ここゼロが51.8パーセントでしたけれども、これは、やはり、覚えていないというのが多かったですね。

一方、死ぬときというのを見てみると、これは、もう、すべてのグループで、死ぬときはプラスの方向で亡くなってる方が多いです。どのグループも一番多いのは、ポジティブですね、真ん中より上のところで死んでいるということなんです。

そこで、さっきの男子の学生は、自分は病気で死ぬだろうという子が、けっこう、多かったですね。ところが、このときに、ポジティブで死ぬという人が非常に多い、半分以上。で、シルバーの方も、病気で死ぬというのが、男性の場合だけ見ると、95.0パーセント、男女合わせても87パーセントかなんかありましたけれども、それでも、死ぬときは喜んで死にたい、幸せに死にたいと思ってらっしゃるということなんですね。自分は、自然死とか、そういうふうな死というのは難しいかもしれないけれども、しかし、死ぬときは、喜んで幸せに死にたいちうふうに考えているということです。

ですから、生まれてきたときのとらえ方と、死ぬときのとらえ方というのは、また、違うわけですね。逆に言うと、このへんは、意識のあるところですから、そこで皆さんがどういうふうに死に方を考えるか、つまり、死を含めて、どういうふうに生きるかということを考えるときに、やはり、豊かに生きたい、豊かに死んでいきたいということが現れているのではないかというふうに思います。代表的なところを言いますと、天寿を全うするから、みんなに守られて死にたいとか、魂は生きているからとか、天国に帰れるからとか、悔いなく死にたい。肉体の苦しみから解放されて楽になれるからというのもありました。

ゼロについて言えば、やはり同じで、無から無、生まれた時はゼロだったから帰るときもゼロであるというふうな考え方、あるいは、人生にはプラスとマイナスがあって、いいこともあって悪いこともあるから、最終的にはゼロだろうというふうな考え方、このネガティブなところですね、こういう下のところで終わる人の考え方というのは、この世の中と別れることが非常に辛い、楽しく死ねるはずがないとか、すべてが終わってしまうから、人生が終わってしまう辛さを感じるからというふうなものがありました。これも、皆さんが、それぞれ持っている考え方ですから、何がいいとか悪いというのはないんですね。

しかし、今、分かっていただいたのは、命に対する考え方の中でで、看護学校の学生とか看護婦さんの考え方がプラスである。生まれてきたこと自体が、非常に神秘的で喜ばしいことだというふうなとらえ方は、そういうふうに考える人が、そういう援助職というか看護婦さんになるのか、あるいは逆に、そういうふうな、この看護学校学生さんは、すでに実習をしていますから、そ

ういった経験を持っている人たちだから、こういうふうに考えるのか、それはどちらの方向なのかは分かりませんけれども、やはりそういった死生観というのは、グループによって、また、少しずつ違ってるということが分かっていただけると思います。

一番つらい身近な人の死

それから最後に、一番幸せな時と一番辛い時というのを見てみたいと思うのです。一番幸せな時というのは、いろいろありましたが、先ほど、命に対する考え方ですね、そういう、積極的にとらえるかどうかというのが、ここでも分かると思います。

短大の学生さん、大学女子ですね、それから、短大の学生さんは出産と結婚はそんなに変わらないですけど、大学の女子の方、男子の方なんかは、結構結婚の時に、自分は人生で最高に幸せであるというふうなことを考えてらっしゃる方が多かったです。まあ、大学生、初めて、ボーイフレンドができたとかガールフレンドができたという時期だかもしれませんが、看護学校のほうなんかは出産ですね。それからナースの方も出産。で、高齢者のグループの方は、子どもだけではなくて、孫の誕生というのが、非常に自分の人生を豊かにしてくれたということで、ここには孫も入ってますけど、まあ、出産というところに入れてありますが、38.9パーセントの方が非常に幸せだったというふうにいっています。

で、高齢者のグループの方、非常に率直に、いろいろ授業が終わった後も話をしてくださって、「ワシなんか、結婚なんかちっとも良くなかった」とか言う方も（笑い）「高齢者のグループは、絶対、結婚は低いはずや」と、こう言う方もいらっしゃったんですけど、平均とってみて、やっぱり低かったんですね。

もう一つはですね、先ほど言いました、人間というものは自分が重要だと思っているもの、価値を持っているものを手に入れた時、やっぱり幸せだし、自分が大切に思っているものとか、目標としているものを失った時に、やはり、落ち込んだり、悲しくなったりするわけですね。

ここで、シルバーのグループの方、これ、戦後の中を生きてきた方ですね。非常に仕事に対して価値観を持ってということが言えると思います。この、仕事に関することで一番幸せだった、人生の中で仕事に関するところが一番幸せだった。具体的にどういうことかというと、課長になった時、課長になって組合長の首きり反対を押し切ったとかですね。就職をして教師になった時とか、仕事が充実している時が一番幸福なところが高かったとかですね。栄転したとき、部長時代とか、自宅を店舗として仕事を始めた時、社長になった時、仕事が成功してマイホームを手に入れた時というのがあるんですね。そういうことを、この55.6パーセントの方々は書いているということです。

非常に、もののない時代に生きてこられて、一生懸命仕事をされた方の価値観というのが、やはり、財産を作っていく、あるいは、会社で成功していくというところに非常に大きな価値観を置いていらっしゃったんだということが分かると思います。

また、短大生とか大学生はまだ仕事をし

ていませんが、看護婦さんとしてやってらっしゃる方の中で、1割の方は、仕事が一番幸せであると。それは、子どもを産んで仕事を辞める時がある人は、辞める時が一番落ち込んでいるんですね。で、復帰したときが一番高いという人もいたんですけれども。そのナースの帯帽式が一番嬉しかったとかですね、婦長になって頑張っている時に幸せを感じるというふうな方もいらっしゃいました。

次に、一番辛い時です。これは、どのグループも家族の死なんですね。この、配偶者の死と家族の死を、ちょっと分けていなかったところもあるので、一緒になっているところもありますけれども、どの方にとっても、どのグループにとっても、一番辛い時は誰かの死であるというのが一番多いわけです。自分の死とか配偶者の死でいうと、だいたい7割から8割、ナースのグループでは8割の人たちが、一番辛かった時は、配偶者なり家族の、自分の身近な人の死であるということが分かります。これを、親戚の死とか、友だちの死とかも入れて見てみますと、だいたいどのグループも6割から8割が死に関する出来事で、一番自分は辛いというふうに表現されているわけです。

しかし、さっき言いましたように、死に関しての出来事が一番辛いにもかかわらず、私たち、現代の中では、死について、おおらかに語るというか、遠慮なく話すことが、なかなかできない世の中になってきている。その中で、話さないで済んでしまうから、命について考えなくて済んでしまっている部分もあるんですね。

けれども、脳死の問題とか、クローン人間の問題とか、生命倫理の問題なんか、そういう難しいところまでいかなくっても、例えば、自分の家族がガンになった時、どういうふうに言うかとかですね、自分の身近な人の命をどういうふうに支えるかとかいったときに、必ず、自分自身の持っている死生観というのが問われてくるわけです。

きっと、それは、どの仕事にあってもそうだと思うんですね。私たちは、いろんな人と出会います。皆さん方は、地域のリーダーというふうになっていく方々ですけれども、いろんな方のいろんな人生に出会っていくと思うんですね。そのときに、今は、自分のライフサイクルとして紙を書いてもらいましたけれども、それが、例えば、人のものとして、自分の目の前にあった場合ですね、それを、軽く扱うことができるかということを考えてほしいんです。

自分のもんだから一生懸命書きましたけれども、それが、全く知らない人の人生というふうにして、皆さんの前に来た時に、自分のものと同じぐらい、その人の人生を尊重することができるかということを考えていただきたいんですね。いろんな場でいろんな方に出会いますけれども、その人の生き方を、その人のものとして認めることから始めないと命の重さというものを概念的に簡単に話すということはできないというふうに思います。

最後の生を生きるホスピス

最後に、一人の方の生き方というか、最後の死の選択ですね、ホスピスで死を選ば

れた方のビデオを見ていただきたいと思います。これは、大阪にある淀川キリスト教病院、日本で2番目にホスピス病棟ができたところなんですけれども。人間の死というのは、いろんな死に方があると思います。先ほど言いましたように、1分1秒長く生きる生き方もあれば、家族と仲良く最期の時を迎える方もいらっしゃいます。そういった死の選び方というのは、実は、生をどう閉じるか、どういうふうに生きるかということを決める最終的なものだと思うんですね。

このビデオは、淀川キリスト教病院にフジテレビが、十何年も前に取材したビデオで、データとして非常に古いので、例えば、淀川キリスト教病院は、西日本で唯一つのホスピスですとありますけれども、今、兵庫県でも五つホスピスがあるんですね。皆さんの中でも、ホスピスは、消極的に死を迎える所というふうに考えてらっしゃる方がいるかもしれませんけれども、実は、むしろ積極的に、生を閉じる、最後の生を生きるという、そういう意味でホスピスというのがあるのだということを、ちょっとだけ覚えといていただきたいと思って、ビデオを見ていただきます。

（ビデオ）

命の尊厳を知る

ホスピスというプログラムですね、その中がどういうふうなことかいうのはご存じなかった方もいらっしゃると思いますけれども、やはり、先ほど、ライフサイクルを書いていただきました、一人ひとり、自分自身の人生を相手の人生を重ねることができるか、つまり、医者だから、看護婦だからとか、この中には特養で働いていらっしゃる方もありますが、いろんな自分の立場で、先生だから、だとか、社長だからという以前に、人間として、その人の前にどういうふうに立つことができるかというのが、一番、その人の人生に関わる上では大切なことではないかというふうに、私は思っています。

これから、いろんな方と、地域でも出会うでしょうし、社会の中で、皆さん、いろんな活躍をされていくと思いますが、その時に、命の尊厳とか、人間の尊厳ということが、ただその、言葉の上だけのことじゃなくって、自分自身がその人に人生にどう関わるか、あるいは自分自身が自分の命とか、人の命について、どういった価値観を持っているかということを一回、自己覚知してですね、自分自身の人生観、死生観というものを作っていただきたい。

それには、今から、皆さん、先の人生があるわけですから、いろんな方と出会って、話もしていただきたいですし、本も読んでいただきたい。そういう、いろんな、自分たちが得ようという意欲がなければ、誰もこういった問題を積極的に教えてはくれないと思うんですね。人生の中で豊かな経験をしている先輩方たちと、ロータリアンの方たちと話す機会もいっぱいあるそうですし、バズセッションというのもあると聞いてますけれども、そういった中で、自分自身が、どういった価値観とか死生観を持っているかといことを、ぜひ、この3日間の間、何か感じとって、帰っていただければ、それが、自分自身にとって何が大切

なのか、どんな価値観を持っているか、これでいいのかという問いかけから始まると思うのです。

何々が正しいとか、こういうふうな時には、こういうふうに接しないといけないということではなくって、自分自身の中に、何かしら、はっきりとしたものがあれば、亡くなっていく人に対してもそうですし、高齢の方にも、障害者の方にも、そうでなくってごく普通の人たちとの出会い、人との出会いにおいても、その人を尊重するということ、命を大切にするということが自然と出てくるのではないかというふうに思います。今日は、これで失礼させていただきます。ありがとうございました。(拍手)

「人間には今なにが必要か」

神戸大学名誉教授
野尻　武敏氏

〈野尻　武敏氏〉
1947年神戸経済大学（現神戸大学）卒、84年神戸大学経済学部長、88年同大学名誉教授、現在財団法人兵庫県ヒューマンケア研究機構理事長、コープこうべ理事長、コープこうべ協同学苑学苑長

1．危ない日本

（1）転機に立つ日本（第三の維新）

わが国はこのところなんとも暗いことです。バブル崩壊いらい戦後最長・最大の景気後退で、1980年代までのあの好調の時代とは、すっかり様変わりしてしまいました。

しかし問題は、表面の流れが変わったというだけじゃぁありません。戦後の高度成長を支えてきた戦後体制が崩れ去っているのです。今日、日本は、明治維新と第二次大戦後の米軍による日本改造に次ぐ、いわば第三の維新を迫られているのです。

戦後体制と高度経済成長

戦後わが国は７年間も実質的に米軍の占領下にあり、その占領が解かれるのは1952年のことです。そして日本が自らの体制を整えて、自らの足で歩み始めるのは1955年ごろからです。戦後体制がよく55年体制といわれるのも、そこからきます。その体制は、概括すれば、こうなるでしょう。

まず、敗戦でわが国は海外領土の全てを失い、残った国土も一面の焼け野原でした。だが残った重要な資産が一つあったんです。世界でも屈指の教育水準とその上に立った高度の技術水準でした。そこで産業ではとりわけ世界の先端産業の導入が図られてくることになります。

しかし、先立つものは金です。その金の工面をしてやらねばなりません。出番は金融・財政となります。そして大体1953年ごろまでに両者の戦後体制が整えられてきます。金融関連で10銀行、その他の金融機関の整備が進められたわけです。財政では、産業の振興などに、政府が金を使う仕組みを何て言いますか？経済を勉強した人なら、どなたでもご存じのはずなんです。財政投融資です。財政的に動かせるお金で、投資とか融資をします。この組織をしっか

り固めたのも28年です。

こうして、金融と財政のシステムを固めた上において、これから日本やっていくぞっていって、新しい出発のための、総合経済計画を立てました。最初の本格的な計画を立てたのは、民主党の鳩山さんのお父さんでしたね。その鳩山内閣のときに初めて発表されたんです。「経済自立５ヵ年計画」がそれです。５年間でもって、日本の国が、アメリカなんかの援助によらずして、独り立ちでやっていけるようにしようというものでした。当時日本が念願しとったのは自立ということです。この計画を打ち出したのは昭和30年のことです。1955年ですね。このころが、日本の戦後のやり方が、だいたい決まってくる時期です。戦争が終わってもう10年経っております。復興もだいだい終わって、これからこういうふうにしてやっていくぞっていうやり方が決まってくる時期です。

ところで、これをどう動かすかというと結局政治でしょ。その政治はどうであったかというと、それまで日本はちょうど今と似ていて保・革ともにいろんな政党があったんです。ですが、昭和30年（1955年）の10月に、共産党を除いた他の革新諸派が一つになったんです。こうして日本社会党が生まれました。これに対抗して保守系も、各派が一つにまとまりました。こうして出来上がったのが自由民主党、つまり自民党です。そして衆院では、自民党が社会党のだいたい２倍ぐらいの議席を持ちました。二つの大きい政党ができたわけですね。しかし自民党が圧倒的に強い。そのため、政治ではこの時期から、自民党が支配する体制が出来てきたわけですね。1993年に至るまで、これは続いたんです。93年というのは細川さんが自民党から分かれて自分の内閣を作った年ですね、あそこからガタガタになってくるんです。しかし自民支配は、55年からですから、40年近く続いたわけですね。

もちろん自民党一党支配の下でも、いろんなガタガタがあったことも間違いありません。特に大きかったのは、当時大学生が非常に荒れました安保闘争でしたね。第１次安保、第２次安保というのは非常に大きな闘争でした。揺れました。けれども全体として見ると、自由民主党という１党がずっと支配していたんですから、政治は比較的安定しておったといえるでしょう。

もう一つ、この背景には国際関係があったわけです。最も重要なのは、日本とアメリカの関係です。日本とアメリカは、非常に緊密な状況にありました。戦争ではね、わが国はアメリカと戦闘をやったんです。負けましたけどな。

戦後は、戦前の日本のやったことはすべて侵略だったといわれますが、あのとき、私も戦争に行った一人です。皆さんの年代よりもちょっと若い時期でしょうが、私は海軍少尉だったです。そちらにいらっしゃる今井先生は海軍中尉でしたから、僕の上官でございますけどね。そのときに、私たちを導いていた旗印というのは、アジア人のアジア、アジアの解放ということでした。実際には日本が支配しようとしとったんじゃないかといわれますけれど、私らは真実そう信じておりました。この戦争に命を捨てて、アジア人のアジアをつくってい

くんだというふうに、少なくとも私は思っておった。私の友人も多くはそうです。

戦争が終わって、アメリカは、初めは日本を弱くするつもりでおりました。でもこのやり方は、すぐ変わったんですよね。1年半も経たないうちに。日本を、むしろ友達にして強くしようという方向に変わっていきますね。もう、21年の暮れ、戦争が終わって1年数か月すると、この線ははっきりしてきます。22年に入ると、もう占領政策は完全に変わってくるんです。

なぜそうなるのかというと、お隣りの中国の事情が一変してきたからです。アメリカは、蔣介石を助けてきたんですね、国民党を助けて日本と戦争をやらしたわけですね。日本がいくら戦闘に勝ったって、結局は力尽きてしまったのは、背後からアメリカの物資がどんどんどんどん入っていたからです。そして中国は大きい土地ですからね、勝ちっこないですよ。似たような二の舞いはベトナムでこんどはアメリカがやった。戦争には勝つんだけども、なんぼやったって支配出来ない。背景には、あのときは、中国とソ連があったわけでしょ。そうしてドロ沼のようになっていったわけですね。

ところでアメリカが期待しておった国民党、蔣介石は、すぐ戦争が終わると、すぐ毛沢東にやられたんでしょ。共産党にやられてしまって今の台湾に逃げてしまったわけです。日中戦争が終わって4年しますと、現在の中国、中華人民共和国というのが出来上がってきます。この動きが見えてきたもんですから、アメリカは慌てたんです。共産圏に対抗するのはアメリカの使命でしたから日本を弱くしとったら、ますます共産圏に加勢することになるでしょ。だから早く日本を再強化して、共産圏に対する防波堤にしようというのが、アメリカの考え方になってきます。占領政策が180度転換してしまうんですね。

そこからずうっと日米関係は蜜月状態になったわけです。以上が、日本の戦後体制の概略です。このもとで日本はものすごく発展したわけです。

戦争が終わったころに、現在の日本を予想出来た人は、だれ一人おりませんでした。日本人にはもちろん外国人にもいませんでした。だから、これは奇跡と言われた。このお陰で皆さんの生活は、ものすごく良くなったんだね。その中で皆さんは生まれ育ったのだから、あんまり感じられないんでしょうけれども。

昭和30年代ね、つまり戦後体制が始動してくる時期に、よく三種の神器ということがいわれました。三種の神器といえば、皇室の宝物ですね。鏡と、勾玉と剣と。普通の人には高嶺の花、といったくらいの意味です。じゃあ当時、三種の神器といわれたのは、何だったんでしょう。電気掃除機、電気洗濯機、電気冷蔵庫、この三つです。当時、結婚するカップルの憧れの的だったわけです。今、そんなものない家庭ないわな。そのうちに、三種の神器は、当たり前のことになってきました。そして昭和40年代になりますと、3Cということがいわれました。カラーテレビ、クーラー、カーですね。この三つは、40年代には、まだ日本人の家庭には、一般的ではなかったわけですよ。ところが今では、テレビやクーラー

はもちろん、自動車だって、2台3台持ってるところは珍しくないでしょう。農村部で8人家族で7台というところもある。という中に皆さんは生きていますから、ピンとこないと思いますけどね。

だが、昭和30年ごろからの日本の経済発展は、どんなもんだったかということは、すぐ分かりますね。いま日本が持ってる対外債権は、アメリカよりずっと多いんですよ。アメリカは貿易は赤字つづきですからね。日本はその意味じゃぁ、実力からいうとものすごいことになってるんですね。これだけ発展したんです。しかし、最近は調子が悪い。経済の流れが悪いんです。そしていつまでたってもよくならない。というのは、好調の経済を支えてきた戦後体制が崩れてきたからです。

戦後体制の崩壊

なぜ崩れたのでしょう。まず共産圏がなくなったでしょ。1980年代の末には、共産圏は音をたてて崩れたんです。1991年にはソ連という国そのものがなくなりました。お隣りの中国は、まだ共産主義を掲げておりますが、あれは旗印だけです。実際の経済とか生活の仕組みというのは、今では日本以上に資本主義的ですよね。だから米国も、共産圏に対抗してこれを監視し防衛をするという必要はなくなりました。アメリカにとって日本の位置がすっかり変わってきたわけです。

特に、クリントンの時期に、これがひどくなりました。かつて1980年代の中頃、ジャパン・バッシングという言葉があったのはご存じですね、日本叩きということですよね。ところが、80年代も終わりの頃になりますと、ジャパン・パッシングと言われるようになりました。バッシングじゃないですよ。日本は飛び越して中国と直接交渉するというふうにアメリカは変わってきました。最近はジャパン・ナッシングという言葉もある。日米関係は、すっかり変わったんですね。

これは考えなきゃイカンことです。そして緊密な日米関係の上に立っておった自民党支配も崩れ去りました。これは1993年以降だということは、先ほど言ったでしょ。

さらに、これが決定的となりますが、金融・財政システムが崩れ去ります。これはバブルの崩壊がキッカケでしたが、1997年以降、非常にはっきりしてくるんです。金融機関がつぶれてものすごいコゲツキが明るみに出てるわけでしょ。返ってこない、不良債券というのは、そのことです。だいたい70兆ぐらいあったといわれるんです。今、まだ20兆ぐらい残ってるんです。早くそれをなくしろとアメリカからさかんに圧力がかかっておりますけれども、動きがとれないんです。財政もすっかり崩れ去ったんです。不況だから金を使えと、みんな言います。新聞も書き立てる。使うことは出来ますけど、使えば借金が増えるだけです。

この3月現在、どのくらいの借金があるんかというと、660兆円。政府も赤字ですが、政府だけじゃない、都道府県の大部分が赤字ですね。特に大阪府はひどいです。大阪府は破産しますよ、このままにしとると。こういうのを全部合計するつまり公の借金を合計すると660兆円。日本のＧＤＰ

（国内総生産）、つまり１年間に日本国内で出来たものの全部の合計、これが今日、約500兆円弱です。つまり１年間汗水たらして日本人が作り上げたものの総額よりも、160兆円もオーバーした借金があうるということです。これ、一人当たりに直してごらんなさい、500万円ぐらいでしょ。皆さん、一人ひとり500万の借金もってるんですよ。そんなこと考えてないでしょ。４人家族だったら２千万の借金ですよ。それだけ借金を抱えてるんですね。しかし、みんな知らん顔をしている。自分のもんじゃないから。でも公のもんというのは国民のものですよね。それだけの借金をもってる。これは、もう破綻です。いいですか、崩れてしまったんです。つまり、戦後の日本の仕組みを支えてきたものは、みな、崩れたんです。

しかし、まだ技術に希望があったんですけれども、1990年代を通して、いわゆるＩＴ革命といわれる、世界の先端の技術革新、この革命で遅れをとってしまいました。アメリカはこれを先どりまして、日本はまた水を開けられました。水を開けられただけじゃないですよ。ＩＴ革命に関しては、日本は東アジアの中でも下のほうですよ。シンガポール、それから最近はインドがものすごいですよね。そういうところにまで落ち込んだんです。これは、日本の戦後の体制が崩れ去ったということでしょう。

（２）大丈夫か維新の担い手

皆さん、相当しっかりしないと、あすの日本は大変ですよ。新しい仕組みを作り上げない限り、あすの日本はないです。私はだから第三の維新ということを、だいぶ前から言っております。第一の維新は、いうまでもなく明治維新ですね。第二の維新というのは、日本人自身がやったんじゃない、アメリカの占領軍がやったんですがね、第二次大戦後の日本の大改造です。その大改造された日本の仕組みの上に乗っかって、これまで発展してきたんですが、今それが行き詰まってしまったんですから、第三の維新です。

豊かななかの貧しさ

こういう維新の場合には、何が決定的になるのかというと結局は人間です。皆さんの問題になるんです。第三の維新の担い手というのは皆さんです。第一の維新、第二の維新の場合も、いずれも非常に貧しかったんですね、無から立ち上がったものです。今は比較にならぬほど豊かです。１人当たりの金融資産にすれば、日本はトップです。アメリカはね、確かに総計では日本よりも高いけれどもアメリカは格差がものすごいひどいですから、貧乏人は徹底的な貧乏人です。平均して日本人のような、いい生活やってんのは、まずないです、世界にね。それだけ豊かになった。

しかし、人間はボロになったんじゃないですか、はっきり言いますけど。ダメになったんじゃないかと思う。私はいつも、最近この本を引き合いに出しますが、皆さん、一度読んでみてください。「逝きし世の面影」という、数年前に出たものです。渡辺京二という人が書かれたものです。この人は英文学者だそうで、著というよりも翻訳なんですよね。

どういう翻訳かというと、明治の初年、日本にやって来た外国人、主として欧米人が日本人とか日本人の生活に関して書いた手紙、あるいは論文、あるいは本を抄訳したものです。これを見ますとね、ほとんど例外なく、日本人は貧しいけれども、これだけ優れた人間は見たことないと書いております。これだけ誠実で、これだけ勤勉で、これだけきれい好きでね。農村の農民の耕作の状態、これほど美的に耕作する国民はないちゅうんですよ。田んぼも棚田なんかも、実にきれいでしょう。畑でもきれいに作りますわ。こういうものを誉めちぎってるですよ。

それだけじゃないです。これだけ平和そうな、これだけ豊かな顔をしてる人を見たことがないと書いとるんですね。家に入ってみれば、確かに貧しいんです。しかし必要なものは足りとる。それ以上のものをほしがろうとしないというんですね。そして実に誠実な生き方をしている。実に豊かな生き方をしていると、ほとんど例外なくそう書いてあります。皆さんのおじいさん・おばあさんか、そのもう一つ上の先祖の生活です。日本人がどんなに立派だったか分かります。もう、そういう時代は死んでしまったんだということを、この人は書名にしたんだね。「逝きし世の面影」となってるのは、そういう意味です。

しかし、我々はそういうことをもっと学ぶべきです。皆さんが、たぶん小学校以来習った日本の歴史というのは、暗い歴史でしょう。江戸時代といったら、いつも搾取されていて、あちこちで一揆が起こって、打ち首になって、というような話ばっかり聞いとったんじゃないですか。そんなこともあったでしょうけれども、それは一部ですよね。当時の外国人が、どういう印象を日本人に対して持ったかというのは、この本を見るのが一番いい。これを教科書にすべきだと僕は思う。

それに比べると、現在の日本人、とりわけ日本の若者を誉める外国人は皆無といってよろしいです。ボロクソに言います、倫理的にですよ。去年でしたかな、私の親しいドイツ人の夫婦、以前日本に住んでおったことがある人が、十数年ぶりに日本に来て、日本人が変わってしまったんじゃないですかと言うんですよ。一つだけ言いますと、なんで、あんな地べたに座るんですと。立て膝でね、男も女もタバコをスパスパふかして、とりわけ、女性の場合は、ヨーロッパでは売春婦以外は絶対にやらないことだと。私も去年の春まで、まだ大学の教壇に立っておりましたが、とりわけ女子の学生に文句言っとったんです。でも、ああそうですかとやめる学生はまずありません。たいてい開き直るんです。「なんで悪いんですか。よそで、売春婦がやろうと結構じゃないですか」ちゅう話やな。外国人は率直に言いますが、いま勇気を持って言える日本の大人がどれだけいるでしょうか。日本人はボロになってきている気がしますね。むろん、戦後、伸びてきた点もいくつもありますが。第一次の維新のときは、先のように外国人のほめたたえた、そういう日本人がたくさんおったんでしょうね。第二の維新は、われわれが担ったんですが、もう、だいぶダメです。明治の人間と比べるとね。それでも、まあそういう人に育て

られたから、そういうモラルはあったわね。今は、残っていたモラルもなくなってきてるんじゃないですか。若い人だけやないですよ。そういう若者たちを育ててきた親、われわれの世代が問題ですよ。ほんとに大丈夫かと思う。

少子化と人口減少

事実、現実を見ると大変ですよね。日本の将来に関して、まず心配なのは、子どもを産まなくなったことです。皆さんは、これから結婚され、子どもを育てていく世代になってくるんでしょうが、なぜ産まなくなったか。いろいろ理由がありますが、決定的な理由は、みんなソロバンずくになったことによるんだと思います。子どもを産んで、どれだけ得があるんかということですね。経済的、損得で考えれば、子どもを育てるほど引き合わんものはないです。

ＤＩＮＫＳということがよく言われます。これは、もう皆さん、よくご存知でしょう。double income, no kidsということです。つまり結婚はするが、二人で稼いで子供はもたない、というわけです。二人で稼いで子供を育てなければ、それだけ豊かな生活を享受できる。毎日あちこちで、うまいものを食って、ときどき外国旅行をして、それでいいじゃないかと、こういうことになるんです。そういう考え方、つまり、まったく個人主義的な。それが少子化の決定的な背景だと思います。

しかし、子どもを産み、育てるということは、たんにソロバンづくの問題でしょうか。それを遥かに越えたものがあるはずです。そりゃ、子どもの面倒をみて、報われることもあるし報われないこともある。give and takeの関係、これだけ考えれば親子関係、おかしなことになっちゃうんですね。そこに支配するのはgive and takeの関係じゃないはずです。本来give and giveの人間関係なんです。それを全部、ソロバンづくで計算すれば子育てほど引き合わない仕事はなくなる。少子化は自然なことです。いくら、今止めようと思っても難しいね。

現在、一人の女性がですね、平均何人子どもを持つかというと、1.34、平成11年です。昭和の初めは4.75でした。子どもは二人で産むんだから、これが２以下になったら人口は減りますよね。だが、生まれた子どもは皆大きくなるわけじゃないから、今の日本で人口が減らないで横ばいでいくためには2. 07が必要です。これはもう70年代の終わりから割っておって、今世界でも子どもの人口比の最も少ない国のグループに入ってしまいました。

まだ人口は減っていませんよ。なぜ減ってないのか、これはわれわれみたいな年寄りがいつまでも死ななくなったからです。だから、若い人の中にひどいこというのがいる。お国のためだ、死んでくれなんて。（笑い）。まあ、片っ方で長生きしてる、片っ方で子ども産まない、それでいて人口は減らない、こんな状態がいつまでも続くわけがありません。2007年までです。もう決まっています。2008年から急激に日本の人口は減り始めます。このままいけば21世紀が終わる頃は、日本の人口は半分を大きく割り込むんです。受験勉強も少なくなって良くなるんじゃないかなっていう人もい

る。そんな簡単なものじゃない。いくら少なくなったってね、みんないい学校を狙えば、受験勉強は少しも楽になるわけはないんです。あるいは、交通はゆったりしてきて、生活はいいんじゃないかというんです。確かに電車の乗客なんかのラッシュアワーの状況は緩和されるかもしれません。しかし料金は上がるよ、間違いなくね。利用者が少なくなるんだから。

等々考えれば、人口が減ることによって、得になるということは、少なくとも社会的にはないです。500年しますとこのままでいくと、日本の人口は千分の一になります。13万です。これでは国が成り立ちません。おそらく200年ぐらいすると、日本の国は消えていくんじゃない、このままでは。京都付近に大きな碑が建つよ。昔、ここに日本という国があったという。(笑い)。いいですか。ところが最近ね、いくらそういう話をしても、そんなもん俺知ったことか、それまでに俺は死んどるという人も多いです。しかし、大変なことになることは、すぐお分かりですね。

いや心配ない、外国人を入れればいいという人もいます。入って来るでしょうね、今のままだったら。実は政府の長期計画なんてのは、相当外国人を入れることを前提にして、近頃ものを考えますよ。お隣の中国なんてものすごい人間ですからね。中国の政治がもし混乱してね、難民が出るようになるとどうなるか。日本に1億ぐらい中国人が来るじゃないかという人もいます。今の日本人の数ぐらい。あり得るわな。まあ、それでもいいじゃないかといえばそれまでですけど、日本文化というものが消えてゆくことになるでしょう。先祖たちが守ってきた日本文化をわれわれは守り、さらに豊かなものにしていくという使命があるんじゃないかと思いますけどね。しかし、期待が出来ないんです。

荒れる若者たちとその背景

さらに加えてね、そういうふうに量的な面から、日本がつぶる前に、道徳的につぶれるんじゃないですか、今の状況ですと。若者の荒れ方、確かに犯罪件数は最近横ばいになってるんです。しかし、内容を見てください、簡単に人を殺すわね。動機を聞いたら、殺してみたくなったから殺したとか、ムシャクシャしたからとか。なんともやりきれないことです。なんで人殺しちゃ悪いんですかという子どもも、今、増えてるね。それに対して、親が答えられるかというと、答えられないんじゃないですか。

考えられないようなことをするのは、この頃、子どもだけじゃない、親がそうでしょう。自分の子どもに保険かけといてね、愛人と遊ぶために、子どもを殺すとか、むちゃくちゃですよね。あるいはね、自分の飼ってるペットを子どもがいじめるんだといって、二人の子どもを熱湯につけたという、これ父親ですよ。むちゃくちゃです、こりゃ。そういう状況が、今、広がっているんじゃないですかな。先に申しました、日本人はボロになったんじゃないかと。大変なことだと思います。今日この集まりで、命ということを中心に、ご勉強なさろうというのも、多分そういう状況に対して、これじゃイカンという気持ちから出たものだと思います。

実際、子どもの兇悪犯が増えてきましたけれども、一般的に非行といわれるものの統計を見ると次のような曲線を画いとるんですよ。最初は、昭和26年にピークを迎えております、件数でね。それから、昭和39年。それから下がるんですが、次に第３次ピークといわれ始めるのは昭和53年頃ですが、それが下がらずに上がって行ってやがて横ばいになるんです。昭和の終わりですね、ちょうどあのバブルの時期、このときはちょっと下がったですね。しかし、すぐまた上がってきておるんですね。それで、今また横ばい、こういうカーブをとっております。

これらは何を意味するか。最初のピークは、多分日本の敗戦ということが大きいでしょう。昭和20年、日本は戦争に破れ、町の中には、たくさん家を失い親を失った子どもがあふれておりました。そういう状況が背景だった。そして非行曲線は下がるんですが、39年またピークを迎える。なぜか。日本の経済発展が背景、つまり農村から都会へこの時期に人間がものすごく移動してるわけですね。昭和30年前後、農村には人々の45％が住んでおった。それが、10パーセントを割り込むようになるんです。都市化が急激に進んだわけです。そして、子どもの生活環境が激変する、これが背景だったといわれる。

だとしますとね、ピークといわれながら下がらずになおも上昇し、そしてやがて横ばいになる、53年以降のこのカーブは、何を意味するか。一時的な原因とは考えられない。一過性のものではない。戦後の日本の社会のあり方そのもの、あるいは戦後の日本人の生活の考え方そのものが背景になったと考えなきゃならんと思われますね。先ほど挙げた、子どもが減るとか道徳的に退廃しているとかね、こういうのは日本だけではないですね。いわゆる先進国に共通して出てる現象でもあるんです。しかし、日本は特にひどいようです。しかし、これを探っていくとね、戦後の日本が、大幅に採り入れたものの考え方等にも起因する。これは近代的なものの考え方ですね。近代文明というものの持ってる明るい面と暗い面が両方ありますけれどね、これが今、この吹き出しよる、こういうふうに考えるべきだろうと思いますね。

２．危ない人間

（１）近代文明の明暗

それで、近代文明の持ってる明暗というのを、ちょっと詰めてみようかと思います。レジメにはたくさんいろんなことを書いてありますが、その中から、いくつかの点をピックアップしてみようと思います。

戦前のこと、東北に第二高等学校というのがありました。現在の東北大学やね。そこの哲学の先生に、カール・レビットというドイツ人がいました。この人は、戦争が始まって帰るときに、こういう言葉を残して去っていったんだそうです。日本の悲劇は西欧が近代化の持つ問題点を自覚し始めたその時に近代化を始めたことにある、と。

つまり、日本の明治維新というのは1868年でしょう、その頃、西ヨーロッパでは、すでに近代化の持ってる非常に危険な面に気付き始めていました。有名な思想家とし

ては、キェルケゴールだとか、ドストエフスキーだとか、ニーチェなんていう人は、そういう西洋の近代化の持ってる非常に悲劇的な面というものを、もうかぎつけていました。問題だということを意識していた。その頃に日本人は近代化を始めた、そこに日本の悲劇があるというふうに言って、日本を去ったそうです。

しかし、そのことは、第二次大戦後の日本によく当てはまる気がします。つまり、この場合に近代をどう捉えるかですけれども、だいたい西ヨーロッパで、18世紀末以来の200年ぐらいを念頭に置いていただければいいかと思う。第二次大戦後の日本は、半世紀で、ヨーロッパの啓蒙期いらいの200年間を突っ走った。だから、いい点も非常に出たんですけれども、問題点も非常に深刻になってきた。こういうふうに考えられます。まあ、将来皆さん、この点ももっと立ち入って研究していただけるといいと思いますね。

形而上世界の後退と物質的発展

ヨーロッパで非常に問題となってきた一、二の点を申し上げますと、まず近代というのは、科学と科学を裏付けにした技術がものすごく進歩した時代です。人間の歴史の中でね。それと結んで、経済発展がものすごく進んだ時期ですね。

ヨーロッパの人口は、19世紀の100年間を通して3倍になってるんです。日本もだいたい似てるでしょう。明治維新以降130年ですけれども、4倍になっております。しかも、生活の内容は昔と比較にならぬほど豊かになったんです。それは、人間を養う物質がどんなに増えてきたかということを示しています。

しかも生活に必要なものを手にするために働く労働時間は半分に減ってるわけですね。ヨーロッパの一番先端を行った国はイギリスでしたけども、あのイギリスは19世紀の中頃でも、労働時間は普通14時間でした。16時間働くことも、少しも珍しくありませんでした。8時間休むわけですね、人間はね。ところが、19世紀の終わりになると、8時間労働というのが制度化されるのですね、半分に減るわけ。つまり半分しか働かなくて、昔の3倍以上の人間が、昔とは比較になるぬほど豊かな生活を送ることができるようになったのです。どんなに経済が発展したか分かりますね。日本だって同じことがいえますね。

けれどもですね、目に見えない世界が、だんだん無くなっていった時代でもあります。形而上的な世界と書いておきましたが、目に見えない世界から人間がだんだん離れていく過程でもあったんです。科学というものは、目に見えるものを対象にするんでしょ、そして実験という形で、目に見える形で検証されると科学的真理だということになるんですね。経済はもちろん目に見える世界です。物と金の世界ですわ。こういう点では非常に発達してるんですけど、目に見えない世界が後ろに退いてしまいました。

進歩か没落か

イギリスのドーソンという歴史家ですがね、こういうふうに言った。西欧の先端の精神は、18世紀にキリストから離れ、19世

紀には神そのものから離れてしまったというんですね。このことの意味をちょっと考えてみましょうか。

18世紀までの、ヨーロッパの思想家、理論家ちゅうのはね、科学者でも神というものを十分信じておるんです。例えばニュートンが万有引力の法則を発見し、これを発表するのは17世紀の末ですけども、彼は序文の中でね、神の御わざの素晴らしさを証明するんだと言ってるんですね。神が造った、創造した、その天体の秩序の素晴らしさを証明するんだ、と。

しかし、18世紀の進歩的な知識人は、聖書に書いてることをほとんど否定するんですな。キリストがちょっと触ったら病人が良くなったとか、あるいは死んどった人が立ち上がって歩きだしたとか、聖書に書いてるんです。こんなことを信じるのは、無知な人間だけだ、というわけです。キリストから離れたというのは、そういう意味なんですね。

しかし、まだ神は認めていました。神の存在の証明はわりあいしやすいんです。神はいないという証明はないんですよね。ないということを言ってるだけですよね。18世紀の、ルッソーとかアダム・スミスとか、あの啓蒙期の知識人は、キリスト教からは離れておるけれども、神を認める人は非常に多いんですね。神の存在を想定しないと、自然の秩序は説明が出来ないと考えられたからです。

その説明によく使われたのが時計の例です。ここに時計があります。一定のメカニズムをもってコチコチコチコチ動いていますね。これが偶然出来たというのは証明になりますか。こういうふうに立派なメカニズムをもって動くものがあるとすれば、これを作った時計師がおると考えたほうが、ずっと合理的でしょ。偶然に出来たなんて、まったく非合理ね。宇宙を見てください、人間の体を見てください。時計どころじゃないですよ。ものすごく精密なメカニズムがあるでしょ。これは17世紀末のことですが、天体の素晴らしい秩序がニュートンによって力学的に証明され、あい前後して人体の精巧な秩序、血液循環路もハーヴェイによって発見されました。実に素晴らしい自然の秩序です。時計どころじゃない。このような秩序があり、メカニズムがあるとするとね、これが偶然出来たなどいうのは、証明をやめたということですよな。これを与えた何かがある、何かの原因がなくちゃならん、こう考えるほうが、ずっと合理的でしょ。

最近、これによく似たある議論を私は見ました。兵庫県の淡路島に断食道場というのがありますが、これは断食だけやるんじゃない。近代医学と結び付けて、断食のいいところを採り入れようとしているものですが、あそこを指導なさってる先生に笹田先生という方がいらっしゃいます。この先生は、生かす医学ではなく「生かされてる医学」ということを盛んに言われてるんですね。

人体は70何兆かの細胞からなっているが、初めは１つの細胞からなんですね。その１つが増殖して、ある細胞は心臓の働きをする、ある細胞は頭の働きをする、ある細胞は手の働きをする、みんな違った機能をやっていくんです。なぜそういうふうに

なっていくんだろうというのが、今日のヒトゲノムの主題ですよね。初めに全ての情報が組み込まれておるからのようですね。だが、どのようにしてそうなるかは説明出来るが、しかし、なぜそうなるのかは説明出来ない。つまり、それをあらしめているものを想定しないと説明がつかないんです。笹田先生は、そうした原因を想定し、これをYü（ユー）と呼んでいらっしゃいます。これはあの啓蒙期の思想家たちの神の証明に似てはいないでしょうか。

これはさらにアリストテレスの議論にも通じます。アリストテレスは「万学の祖」ともいわれるアテナイの大学者、あのアレキサンダーを育てた人でもあります。その第一原因の議論も同様のものでした。

我々が目に見ているもの、この家でも、あの山でも、不変のものは何一つありません。全て変化してるわけです。我々もいつか死んでいって、土に返っていくんでしょ。変化しておる。ところで、変化しているものにはね、それを変化させてる何かの原因がなくちゃならんでしょ。

いまAというものがあるとしよう。これが絶えず変化しとるんであれば、それを動かしてるA′という何かがなくちゃならんですね。ところがこれも変化するものだとすれば、さらにそれを動かしているA″というものがなくちゃならんということになるでしょ。こうしていくと無限に遡っていくことになります。これでは証明が出来ないんです。なぜ、これが動いてるかというためには、最後には、動かずして動かすもの、つまり不動の動者を想定しなければならなくなる。これがアリストテレスの第一原因です。

つまり、あらゆる存在の第一の原因がなかったら、自分は動かずして動かすものがなかったらね、動きということは説明つかないんですね。これを動かすものが動かされて、それを動かすものも動かされて、ちゅうことをやってごらん、無限にいくとやね、最後にどこかで、動かずして動かすものというものを想定しないと、説明がつかない、これを第一原因と言っとるんですね。これを神と呼ぼうと、笹田先生のようにユーと呼ぼうと、これは呼び名の問題です。何かそういう根源の原因というものを想定しないと説明つかないんですよ。

少なくとも皆さんは、ここまでは考えてもらいたい。自分は生まれて死んでいくんです。それを産んだ親も、生まれて死んでいったんです。それを産んだ親も、生まれて死んでいった、ずうっと遡ってごらん。どっかに生まれずして産むのを想定しないとね、説明がつかない。だから、こういう意味の神というのはね、啓蒙期の知識人もほとんどがこれは認めていました。

これは認めないと非合理だから、認めるほうがずっと合理的だからね。こういうのを理神論といったんですね。18世紀に支配的であったのはこの理神論です。理神論と日本語では訳されておりますが、deismです。これは有神論ですが、伝統的なキリスト教信仰からは離れています。人間の理性で考えられる限りにおいて神を認めているんですね。あの有名な哲学者のカントは、だから、これを「理性の限界内における宗教」だといっておるです。

ところがですな、このことの持ってる意

味は分かりますか。自分の頭で理解出来るものは認める、そうでないものは認めないということはですね、自分を神にしていることです。神を人間が裁いてることになります。自分の頭が一番基準になってるんだからね。その結末は、どこに行くか。人間が神を裁いているんですから、やがて人間は神を否定するまでにもなっていきます。こうして、19世紀は無神論の時代になるわけです。19世紀の先端の思想家は無神論です。有名な話を一つしましょう。これはね、命の大切さに非常に関係があるから、よう聞いてください。

19世紀の初めです。フォイエルバッハという哲学者がいました。これはボンの大学の教授で、後にはマルクスにも非常に大きな思想的な影響を与える人ですね。彼は、「キリスト教の本質」という本を書き、キリスト教を否定しました。キリスト教には天地創造の教えがありますね。それによれば、神は次々に万物を創りますが、最後に自分の姿に似せて人間を創ったことになってるんですね。だから、人間は、人間である限り神の姿を宿してるんです。これがキリスト教の教えです。

ギリシャには、そういう教えはありません。奴隷は生まれながら奴隷だと、アリストテレスですら、そう言ってるんですよ。そして奴隷は生きた道具だと言ってる。どんな人間でも、人間が人間である限り、尊厳性を持ってるという思想は、キリスト教以外には、ヨーロッパの思想ではないです。それの一番、基になったのは、神が自分の姿に似せて人間を造ったという、この教説です。だから、人間は、どんな人間でも人間である限り、神の性質を宿してるんです。絶対の価値につながってるわけです。

自分の子どもだからといっても、親もどうすることも出来ないそうした価値を、子どもは持ってる。先生が、自分の生徒だといったって、どうすることも出来ない、むしろ、手を合わせなきゃならん価値を、その生徒は持ってる、という思想ですよね、これは。人間の尊厳に関わる思想です。これをキリスト教は教えてきたんです。

ところが、フォイエルバッハは、その「キリスト教の本質」で、キリスト教の教えは逆だというんです。本当は人間が自分の姿に似せて神を創ったんだという。人間が人間を理想化して神の像を創り出し、それに手を合わせているんだと、フォイエルバッハはいったんですよね。いいですか。神を完全に殺してしまったんです。無神論になります。ニーチェの表現をかりると、19世紀にはこうして「神は死んだ」んです。

神が死んだ。人間が殺したんです。こうなってくる。つまり、目に見えない世界が、ずうっと背景に退いて行ってしまった。物質的世界が全てを覆い、そして非常に発展したわけね。これは進歩というか、あるいは退歩というか問題です。一般的にいうと、18世紀末から19世紀にかけて科学技術の進歩とともに物質生産力が飛躍的に上昇してきました。そしてそうした中で、皆さんのご承知の進化論や社会進化論、あるいは歴史の必然発展法則の理念が生まれ、広がってきました。マルクス主義なんかも、完全にそうです。歴史というものは、好むと好まざるとに関わらず、必ず発展してい

くものだという思想が当時を支配してきます。

いいですか。これは進歩というものが全面に出てる思想でしょ。19世紀は進歩信仰といいましょうか、進歩に対する信仰ですわ、これが支配しておった時代です。神は死にました。亡くなりました。教会はカラッポになった。しかし、世の中は科学技術が進歩し、物質生産力が上昇しておってね、そこから人間は理想の国に行く、天国の状況に進んでいくんだという、信仰が生まれてきたんですね。だからこれを、神なき時代の「代用宗教」という人もおりますね。

神なくとも必然的に進歩し発展していくというんですから、これはまったく楽観的な思想です。19世紀は明るかったんです。ところがですね、20世紀はどうでしょう。この進歩信仰は、20世紀の思想家からは消えていきます。むしろ、典型的になるのは没落論なんですね。こういうふうにいっていいです。例えばシュペングラーです。この人は、ドイツの学者でありジャーナリストでもあり、教師でもあった人ですけれども、「西洋の没落」という有名な本を書きました。20世紀の初めに出た本です。あるいは、皆さんご承知のイギリスの有名な歴史家トインビーを思い起こして下さい。彼も、19世紀、20世紀というのは、決して進歩の時代ではない、西洋については没落の時代だと思っています。シュペングラーでも、トインビーでも、西洋の文化の最盛期は中世だというんです。西欧文化を特徴づけるキリスト教が、あらゆる生活を律しておった、その精神というのが一番高揚したのは中世だったというんですね。

それから後は、その精神が後退して行く。先ほどいった、目に見えない世界が、だんだん、背景に退くんだから。物質的、技術的には非常に発展するけども、西洋の文化の黄昏の時期だと見る見方ね、これはトインビーも同じですよ。ある文化は、その精神が最も高揚する時期に最盛期と言うんであれば、19世紀、20世紀はもう没落期だと、こう見る見方ね、こういうものが支配してきました。没落論です。暗いです。

20世紀の哲学として有名なのは実存哲学です。実存哲学には、いろんな派がありますが、共通してるものは不安の意識です。ゾルゲといいますが、この不安をどのようにして越えていくかというのが主題となっています。科学の進歩、経済の発展は、20世紀にはさらに加速したんです、ますます進んでおるんですが、人間の心は暗くなってきたんですね。暗澹としてきたわけですね。人間は危ないんじゃないかということを、20世紀に入る頃には、優れた思想家たちは、もうはっきりとわかってきていたんです。そして今ではこの危惧は、広く人々の間にも広がってきていますよね。

最近の日本も似てはいないでしょうか。1980年代、飽食の時代などといわれた、日本はね。物的には充ちたりてきました。しかし、あの頃から、日本人は不安を感じ始めたはずです。これでいいのかというね。「真の豊かさとは」なんていうことが盛んにいわれるようになったのも、そういうことを示していたんじゃないでしょうか。

（2）人間の危機

そして、こうした不安や危惧は、最近い

ろんなところで現実となってきはじめた。その点を、以下、二、三見てみましょう。

人間の尊厳のゆらぎ

まずね、人間の尊厳とか人権ということについてです。

わが国では、第２次大戦の後になって人間の尊厳とか人権とかいうことが盛んに言われるようになってきました。ちょうど、西洋の200年前の市民革命のときと同じように。これも理由があるんです。あの市民革命の時期に、アメリカは独立したので、アメリカの憲法にはあの当時の思想が反映してるわけです。その憲法をモデルにして、日本の憲法をアメリカの占領軍が書いたんです。ありゃ日本人が作った憲法じゃないですよ。思想的には200年前の思想、これが支配してる。だから人権ばっかりですよね。義務とか責任がほとんどいわれないでしょう、権利ばかりです。

考えてみてください。人間に、生まれながらの権利があるんなら、生まれながらの義務があるはずです。その義務の面はほとんどまったくいわれないというのはおかしいんですが、これは、18世紀という革命の時代をね、考えれば分かることです。革命ですから、義務じゃなくて権利の要求が前面に出た。それを戦後の日本は受け継いでるわけです。

しかしですよ、いいですか。人権とか人間の尊厳を支えておったのは、ヨーロッパではキリスト教でした。神が自分の姿に似せて人間を造ったと教えられた。どんな人でも神の姿を宿しているものだという、絶対の価値を宿してるもの、というふうに教えられたんです。

その神を捨ててしまったんでしょう、19世紀の初めには。フォイエルバッハを例に挙げました。神が人間を造ったじゃない、人間が神を造ったんじゃないかと。人間が神になっていったんです。ということは、人間の尊厳や人権を主張しながら、同時にその根拠を切り崩したということになる。だから、人権とか尊厳とかいいながら、実際は、空文化し、大変なことになるわけです。

戦後の日本もそうでしょう。人権という名の下に、人権無視のような行動は、なんぼでもあるんです。20世紀、これほど大量に人間が殺戮された時代はありません。２回の世界大戦があり、これで数千万の人間が命を失った。ソ連の革命では、約３千万ぐらいの人間が虐殺されたといわれます。お隣の中国でも大変だったようです。ものすごい大量虐殺の時代になりました、20世紀というのは。あれだけ人権と言いながらね。しかし、根拠を失ったんですから、口で言うだけの話になっちゃうんです。

２、３年前ですがね、兵庫県の人権協会が30周年記念のシンポジウムをやり、コーディネーターを務めたことがあります。パネリストは５人ほど、学者が半分ぐらいでした。そのシンポジウムを始める前の打ち合わせのときに、私はちょっと聞いてみたんです。「いったい、人間になぜ人権があるんでしょう」とね。そしたら、座がシィーンとと白らけちゃってね。そのうちに、憲法学者の一人がポッツリこう言いました。「そりゃ憲法に書かれてるからですよ」。(笑い)。憲法学者がその程度ですよ。

ほんとに。だいたい法実証主義の立場に立つとそうなるんですね。法規定が出来て、初めて成否の別が出来るんだという立場ですから。

しかし、どうも腑に落ちませんわな。それで、僕はすぐ言ったんです。それでは憲法に書かれる前、戦前の日本人には人権などなかったんですかと。そうしたら、「そうですなあ」と言って、それで終わっちゃった。(笑い)。その程度ですよ。皆さん。真剣に考えてもらいたいんです。人権ちゅうのは、多分、人間を超える何かの力というのを想定しない限りね、説明つかないはずです。人間を造った、人間が造られた、何か目に見えない世界というものを、考えない限りは、人権も人間の尊厳も口だけの話になってくる。これは真剣に考えてもらいたいんです。これは、命の大切さというのと密接に関係しているわけです。

科学技術進歩の悲劇

科学技術というのは必ず進歩しますが、倫理とか道徳には進歩ちゅうのはあまりないでしょ。親父さんが非常に立派だったから、子どもも立派である、こんなことないですよ。しかし、科学というのは、一定のところまでいきますと、それに積み上げていきますからね、必ず進歩するわけです。その進歩は加速度的になりました。だいたい科学進歩が非常に目立ってくるのは18世紀、19世紀からですけれども、初めは徐々ですが、やがて急速に伸びるようになる、加速度的に。

そこで、もう一つ言っとかなイカンのは科学は科学のために科学をするんだという学者が、ほとんどすべてだということです。科学を何か人間の幸福のためにやるんだなんていう考え方を持ったらイカンという考え方ですね。科学は科学真理の追及だという、純粋科学理論。自然科学だけやないですよ、社会科学でもそうですよ。私は経済学なんですけどね、現在の経済理論というのは、人間の幸福はどんなものであって、そのために経済は何である、そんなことは全然やりません。そんなものは倫理学の問題であって、経済学は経済学そのこと自体のためにやるんだという純粋経済学というのが、今の理論ですね。

科学方法論に関連して、非常に重要なことがある。社会科学論に関して有名な学者にマックス・ウェーバーという人がいました。19世紀の末から20世紀の20年代までに活躍した、この方面では今でも中心的な理論を提供している人です。ドイツの学者です。この人が一番主張したのは、価値判断抜きの学問をやるべきだという議論です。価値判断排除とか価値自由とかいわれる主張です。科学はいいとか悪いとかいうことは全然別だというわけです。科学は、どうあるかということを解明するだけ、いかにあるべきかといった領域には入りえない、というのです。純粋社会科学理論ですね。こうなって近代諸科学がそれぞれがものすごく進歩したことも事実なんですが、大変な問題が起こってくるわけやね。最も悲劇的なことを一つ二つだけ申し上げましょう。

近代科学は17世紀ぐらいから形成されてくるんですが、20世紀は物理学が中心でした。それも純粋物理学です。もっぱら物理

的真理の追及でした。これがもたらした結果は、どういうものがあったか。核兵器です。原爆、核兵器ちゅうのは、こっから生まれたものですよ。原子力発電なんかもあったが、あれも非常に危険な要素を持ってますね。しかし、最も悲劇的なものは、文字通り大量殺戮の兵器を開発してしまったということでしょ。

21世紀は生物学の時代だと言われております。特に今非常に華々しく出て来ているのは、生命工学、バイオテクノロジーの分野です。これは、医療や医薬に革命をもたらすようですが、しかし非常に危険な要素を持っております。最近問題になるクローン人間、人間が人間を造ることが出来始めますね。もし、これが進んできたらどうなります。掛替えのない命なんてありますか。人間をなんぼでも造れるんだから。掛替えはなんぼでもあります。人間の尊厳だとかね、人間の人権なんていうようなことは、もう吹っ飛んでしまいます。だから、進んだ国はクローン人間の研究を進めることは、禁止してるのが普通なんです、今は。けれども、やろうという人がなんぼでもいるようです。その動きも始まっているでしょう。そりゃあ、あんな連中は、核の場合も同じことだったですね。後からアインシュタインにしてもみんな非常に心を痛めたといわれますけど、ことが起こった後の話やないの。そういうことが起こってくる危険が非常にあるです。事実、クローン人間には要求も多いんだそうですね。自分の愛する恋人が死んだ、まったく同じ恋人を造ってくださいと、こうくるわけやな。自分の最愛の子どもが死んだ、まったく同じ子どもを造ってもらいたい、という要求もある。だからクローン人間も多分出来るようになるでしょう。そうなったときは、人間の自殺だと僕は思うんです。少なくとも、人間の命の尊さなんて吹っ飛んでしまいますよね。だから、科学が発達した極において、人間が人間を外から殺すのは核戦力、内から殺していくのはクローン人間だと思うんですよね。こういう危険も孕んどるということです。その意味でも世の中は暗くなったんです。科学の進歩に発展に、ただ希望を託するような、そんなことの出来た楽天的な時代はとおの昔に終わってるわけです。

個の主張と人間の喪失

もう一つ、今度は社会の編成に目を向けてみましょう。市民革命以降は個人が、非常に前面に出てきました。戦後の日本も同じことです。戦後の日本、今でも思い出しますが、戦争が終わった後に、親孝行なんていいますと、前近代的、封建的とかいって、ボロクソにけなされた。あるいは、あの戦争が終わるまでは、日本には各地に自治的なコミュニティがあり、町内会の制度もありました。ところが共同体というものはすべて崩されていった。家族共同体、地域共同体、国民共同体、みなそうです。そこでもっぱら、個人の権利ばっかり主張されるようになったんです。共同体があると、義務とか責任が問題になります。家だとか、地域だとか、あるいは国とかいうことが問題になれば、義務や責任が問題になるんですが、それを切り崩していったから、個人の権利ばっかり言われるようにな

ってきた。これを、唯権利主義と、私は言ってきました。

その結果、どういうことになるかというと、すぐその保障を行政に要求するようになる。つまり、ただ権利ばっかりの主張ね、そうなると、すぐその保障をということになりますね。そして要求が通らないとなると、みんな組織を作って、鉢巻きをしめて、わっしょいわっしょいやるんですな。そして、どの政党も、みんな票がほしいから、そういう要求を抑えることの出来る政党はほとんどないです。けしかける政党はいっぱいおる。こうして、やがて、すべてを保障する国がいい国であるような考え方が支配してくる。福祉国家の理念です。揺り籠から墓場まで、皆さんも教科書でなんども聞いたんじゃないか。これは全面保障ですよ。

しかし、これはおかしいんじゃないですか。個人を大切にするんであったら、個人は自分で自分の生活を立っていくというのが原則でなくちゃならんはずなんですよね。自立というのが原則でなくちゃならんはずです。全面的に保障しろということは、それを放棄することでしょ。人間が、人間に一番大切な自律性、これを放棄するということを意味します。人間がなくなってくるこっちゃないですか。

他方、全面保障を進めていくと、行政の仕事がものすごう増えざるをえません。行政の異常肥大です。この進行は、結局は財政破綻に陥ります。出すのは出さない、保障だけはやれっというのでしたら、今の日本がそれですが、財政的に破綻するほかはない。今日の日本の財政破綻というのは、根本的には、戦後民主主義のあり方と非常に関係があるんですよね。

また、個人主義が支配してくると、自由というのはどういうことになるでしょう。自由は拘束のない状態と考えられるようになる。自由はほとんど解放と同じことになっちゃうんです。拘束からの解放です。

初めはね、政治権力からの解放でした。これが自由主義の主張でした。そして立憲的な民主性に移ってきまして、かってのような専制政治というのはなくなってきた。だが、こうして自由競争の社会になると、今度は勢力的な支配従属関係が生じてくる。自由競争の社会は強いもの勝ちの社会だから、力のあるものが力のないものを抑えるわな。金を持ってるとか、社会的な地位があるとか、そういう社会的な勢力によって、人を抑えるということが起こってくる。いわゆる階級的な支配従属です。

そこで、この階級的な、勢力的な支配従属からの解放が主張されてくる。社会主義の主張がそれです。

ここまではいいでしょう。しかし個人主義的な自由の主張がさらに進んでいくと、どうなるでしょう。倫理、道徳からの解放にまでいきます。倫理とか道徳も拘束だからです、拘束なんですよ。だから、そうした拘束からの解放、そこにまでいきます。

今、日本は、ここまできてしまったといってもいいんじゃないですか。キレるというのは、このことですよ。倫理的拘束から解放されることです。これはどういうことかというと、人間が人間でなくなるということではないでしょうか。人間の中にある動物的な衝動、それがそのまま外に出ると

いうことでしょ。最近の兇悪犯なんて、皆、そうでしょう。倫理の領域というのは、まったくなくなったとは言いませんが、非常に弱くなったね。人間の動物化です。

次に、もう一つ言っときましょう。どんな個人主義者でもね、どうしても社会なしには生きられません。しかし、その社会関係はどうなっていくでしょう。個人が中心になりますと、これだけやったからこれだけくれという関係になるのです。give and takeの関係です。これは非常に合理的なんですよね。合理的ではあるが、この世界というのは、本来、商売の世界です。これだけやったから、これだけ出せというのは契約の関係、もっと言うと市場の関係。この関係が人間の生活のあらゆる面を支配してくるようになる。これを「市場社会化」という。これは、ポランニーという人が作った言葉です。market society、市場社会です。最近の日本もこの傾向が顕著ですよ。家も家庭も市場のようになってくる。

一つ例を挙げましょうか。この数年、日本で非常に力を持って、法制化まで行われてきているこういう動きがあるのです。家庭の主婦の家事労働とか育児労働を、unpaid workと捉える考え方です。確かに、家事をやったり、子どもを育てたりするのは、賃金が貰えませんわね。こういうことを強調している主張の基礎にあるものは何か。give and takeの関係を、家庭の中にも持ち込もうという考え方です。事実、政府もこの線でいろんな法制化も進めてますよ。あれは、将来を誤ると私は思ってるんです。だから、僕は、そういうことを言う人と議論する場合はいつも、二つのものを区別すべきだと言います。voluntary unpaid workと、unvoluntary unpaid workです。unvoluntaryというのは、非自発的ですから、いやだいやだ、言ってるのに働かして、そして賃金を払わんような、これは搾取といいます。絶対に悪いです。しかし、voluntary unpaid work、自分から進んでやる無償の労働というのは、美しい行為と違いますか。もともと、親の子どもに対する、とりわけ、母親の子どもに対する無償の愛というのは、何も報酬を当てにするもんじゃない。先ほど言った、give and takeではなくてね、give and giveの関係です。どんなに裏切られても、どうしても、子どもは子どもとしてかわいいんですよ。これは人間で最も美しい世界であるはずです。give and takeの関係は、合理的であっさりはしていますが、冷たい関係です。温もりは何もありません。

日本では昔から、人でなしという言葉を使うでしょ。あの人は人でなしだという場合には、どういうことをいうか。頭が悪いということをいうか、そうじゃない。仕事が出来ないということをいうか、そうじゃない。むしろ逆の場合が多い。仕事もよく出来る、頭もいい、たった一つ欠けているとき、あいつはよく出来るけど人でなしだと、こういう。何が欠けとるか。思いやりです。思いやりがなければ人間でないというんですね。人間に最も大切なものは思いやりにあることを、日本人は昔から知っていたんですね。日本だけじゃありません。表現は違っていても、中国でも西欧でも同じことです。

だからこそ、いつどこでも、思いやりに

触れるとき、人は人間的な温もりを感じ、人間的な感動を覚えるものですよね。戦後の日本というのは、どっちかというと、人でなしの社会、人間の失われた社会を作ってきた、こういうふうにも言えるのではないでしょうか。日本だけやないですよ。ヨーロッパでも近代はこういう傾向が非常に強かったんですね。戦後の日本は、特にこれがひどかったと、こういうふうに言っていいと思います。

自然の征服と自然の反逆

もう一つ申しておきましょう。科学技術の進歩、それに基づく経済発展がものすごく進むことによって、人間は自然に手を加えて、自分の生活に都合のいいものをふんだんに作ってきた。そしてこれを自然の征服といってきたです。しかし、これは最近、限界にまで来てると思うんです。自然の征服という場合に、二つの場合がある。一つは、外なる自然です。海であり山でありね、我々が通常自然と言ってるのは、そういう自然です。しかし、内なる自然もある。我々の心の中にある。昔から良心とかいわれてきたのは、内なる自然です。悪いということやって気持ちのいい人おりますか。つまり、これは人間の本性の中に、組み込まれている自然だと思いますよね。何が善いか何が悪いかということは、しばしば時代により時により人によって違いますけど、善いと思うことをやったときには気持ちが良く、悪いと思うことを避けなかったときには気持ちが悪いものですよね。こういうものは、人間の内なる自然といっていいと思う。

こうした自然の征服がね、科学とともに極限にまで進んできたように、私には思えます。私は、今日われわれは歴史上4度目の革命的な技術革新の時代に入っていると思っていますが、現在の高度技術革新と今までの技術革新とは、すっかり違うところがたくさんあります。あの18世紀末のイギリスの産業革命でも、100年後のドイツの産業革命でもそうですが、これまでは、だいたい人が手足でやっとった働きを機械化することによって、ものの生産量と生産性が飛躍的に上昇するというのが共通したパターンでした。ところが、今日の技術革新の特徴は、手足の働きもあるけど、それよりも人間の知能や感覚の働きを機械化するところにあります。コンピューターなんてのは計算能力にかかわりますよね。センサーちゅうのは感覚の機械化でしょ。知能、感覚まで、これを人工化する。その結果、どういうことが起こるかというと、一部の自動化じゃなく全面自動化に入ります。この一番典型的なのはロボットですけども。計算し考え感じそれによって、自ら動いていく機械が、次々に開発される。体内に入って手術までするロボットもできるようです。これは今までになかったことです。

もう一つ重要なことはね、私は自然の人工化と言ってるんですが、今まで自然にしかなかったもの、あるいは自然にはなかったものを人間が作るようにもなってきました。例えば、体外受精です。体内でしか受精し着床しそして子どもが生まれるということはなかったんですが、今は体外で受精さしておいて子どもを産ませることが人間についてもやられています。今日の牧畜で

は、羊や牛や馬を増やすのはほとんどが人工授精によるようになっています。今日ではごく一般的ですよ。産業化もされてきているわけですよね。

あるいは、自然にはなかったものを人間が作る一番いい例はレーザー光線です。電灯も人間が作ったものだけど、光そのものは自然光ですよ。自然の光の特性の一つは、周囲に拡散する性格にあります。しかし、レーザー光線というのは、周囲に拡散する性格を持たないです。一つの方向だけしか進まない。だから、周囲は明るくならないね。そのかわり、その特性が通信技術に広く利用されてきておることは、ご承知の通りです。あるいは、お医者さんの使うレーザーメスです。メスとはいわれるが、刃物で切るんではない、電気で焼き切るわけね。これは自然になかったものを人間が作ってる例ですが、例を挙げていけば、バイオの分野など、まだまだ沢山あります。

内なる自然も、最近重要になってきました。何かというと人間の人工化が始まったことです。人間の人工化というのは、先ほど触れたように、クローン技術のようなものが人間に応用されてくることです。人間によって人間が生み出されてくることになります。これは大変なことだね。いよいよ、万物を創造した神に、人間がとって代わるということになる。

しかしながら、これに対する、自然そのものからの反発が起こってきたですね。外界自然では、これはもう動きのとれないほどに厳しいものになっています。資源・環境問題の深刻化です。人間は何を造るんでも、無から造ることは出来ません。外界自然に何か資源を求めざるを得ません。あるいは、ものを造ればマイナスの財も必ず造ります。炭酸ガスを増やすとかフロンを増やすとね。これはもう限界にきてるんです。

3．求められる人間の回復

この前、ある有名な生物学者と話していましたら、真剣に、こうおっしゃるね。「21世紀を人間は迎えることが出来ました。けれどもね、これから10年の間に、人類の生活のやり方、生活様式、考え方が変わらなければ、22世紀は無理じゃないかと思います。人間のみが進化の法則からはずれたんです」とね。非常に悲劇的です。だから、自然の中にですね、人間が帰って行かざるを得なくなった、再びね。経済に関しても、よく「エコノミーからエコロジーへ」ということが言われるようになりました。最近の動きですよね。かつて「自然の服従」を謳ってきた人間が、今や再び自然の中に帰って行かざるを得なくなったわけです。

他方、内なる自然に関連して、人間の人工化が進むと、どういうことが生じてくるでしょうか。何のために生きてるのか、何のために死があるのかという、意味という世界が失われてしまうと思うんです。これは人間が失われることだと思うんですね。我々の生活に一番重要なことは、意味なんですよね。生きてる意味です。今日一日生きることの意味が重要です。それがなくなってしまったら、人間の生活はただ生きてるだけだということになるでしょう。たんなる生物です。人間にとって決定的に重要なこの意味の世界が失われてくる、その危

険があるということです。

こういう状況の中で、なんとかして、人間を回復しないと人間は死滅するんじゃないか。内的にも外的にも死滅していくんじゃないかという危機に、我々は立っとるといっていいんです。深刻な問題ですね。いったい科学や技術の進歩は何だったのか、と疑われるほどに。

（1）いくつかの動き

では、どうしなければならないか、いくつかの動きがすでに始まっています。

総合化の動き

一つは諸研究の総合化の動きです。「学際的」な研究がもう随分と前から進められ、全体的な物の見方つまり「ホロニック」な考え方も広く試みられるようになってきました。つまり、科学は科学だけのためにやればいいんだという考えが、だんだん近頃揺らついてきました。そして最近、倫理の名が付くものが非常に多くなりましたよ。医療倫理、企業倫理、経済倫理、環境倫理いう風にね、倫理ということが、こうして最近非常に問題になってきたこと、これは、いろんな諸研究や人間諸活動を、バラバラにではなく、人間全体の角度から見直さなきゃならんという考え方が広がってきたことを示しています。人間を取り戻していく、そういう運動の一つだといっていいと思うんですね、これが一つ。

共同体の回復要求

第2番目は、結論だけ申し上げますけれども、共同体の回復の要求です。例えば、ＮＰＯのような、利害損得を超えた世界なんていうのは give and take と違うでしょ。心と心で結び付いていこうとする、そういう志向が非常に強いですよね。新しい共同体形成の動きと見てよいでしょう。

同時に、地域のコミュニティが非常に大切になってきました。なぜか、財政が行き詰まったことが一つの理由ですね。何もかも行政に要求するだけでは、環境の問題にしても、高齢者介護の問題にしても、もうやれっこありません。だから、自分らでお互いに助け合っていくほかに道がないんじゃないかという方向に、だんだん動き始めたんですね。

そういうところから、新しい用語ですけれども、communitarianism という動きが最近広がって、こういう理論も出始めました。特に有名なのは、エチオニーというアメリカの学者ですけれども、あの個人主義の国のアメリカで、こういう研究や運動が始まったということは、個人主義的な近代社会がどんなに行きづまってきているのかということを示すものだといってもいいと思いますね。

特にこれは子どもの問題と関係して広がっているんです。子どもがアメリカでも荒れているです。日本でむちゃくちゃな人殺しがある、それ以上にひどい人殺しがアメリカであるでしょ。特に、銃をみんな持っておりますから、大規模ですよね。こういうものに、何とか対応しようというのが直接の契機のようですね。communitarianism。家庭をもう一度回復しよう、地域の教育力を回復しよう、家族共同体や地域共同体が子どもを健全に育てていく、そういう思想が根底にあるのです。

自然への回帰

もう一つは自然です。先ほど申しました自然への回帰の動きです。経済の発展、生産力の拡大が進めば進むほど、自然の破壊も進む。なんとかこれに歯止めをかけにゃいかんのになかなか歩調が一致しません。遅れて今工業化している国々は世界の環境をダメにしたのは先進国じゃないか、我々が今工業化やろうとすると、ブレーキかけるとは何事やという。先進国は先進国で、産業勢力に押されて、生産拡大を抑える自然保全にはなかなか積極的にならない。だが、そうした中で自然の破壊はますます進む。すでに中国はひどいですよ。中国の農耕地の３分の１は酸性化しているといわれる。毎年増えてるんだそうですね。中国は煙突が低くて、しかも石炭をものすごく炊いて、中国の石炭は硫黄分が非常に多いですから、経済が高速に成長すればするほど、酸性化も急ピッチに進むんだそうです。そしてこれが砂漠化を進めるんです。もう現在、北京の70kmまでに砂漠が迫ってるそうですね。首都の遷都さえいう人がおるようですよ。途上国というのはむちゃくちゃに、今、自然を荒らしておるですね。今まで先進国が荒らしたことは事実でなんだけど、だからといってね、どんどん途上国が荒らしてもいいちゅうことにはならんじゃないかと思うんです。地球全体、そして人類の運命にかかわることですから。運命だが、国の利害が錯綜して難しいんです。

では、どのようにすれば人類は持続的に発展できるのか。sustainable development というのは、ご承知のように、1970年代の初めから、世界の課題になっているんですが、まだその道は確立されていません。しかし、いろんな努力は始まってる。今、社会全体としても、個々の企業や家庭でも、努力目標とされてることが三つあるんですね。一つは、reduce、節減です。資源を出来るだけ使わないようにする。次は、reuse、再利用です。ビンでも、あんなにいろんな変形ビンとか、いろんな色のものが作られているが、昔は、酒といったら一升瓶だったんだから。あれなら何回でも使えるでしょ。そういう方法をもう一度考え直そうというのが reuse です。それから、recycle、つまり再資源化です。もう一回資源にして使うことです。これらの三つが今、個々にも社会全体としても取り組むべき課題とされてきておるものです。多分こうした地道な方向でしか、解決の道は開けてこないでしょう。

内なる自然に関連しましてもね、最近日本でも、例えば生き甲斐の要求の形で新しい動きが生じてきています。何が生き甲斐か。労働時間は減ってくる、週休２日ですが、やがて週休３日になるでしょう。さらに、長生きをするようになりましたから、定年後、長いもう一つの人生があるんです。平均年齢は、もう２、３年伸びますから。定年を迎えても、毎日が日曜日の日々が25年も30年も続くことになります。ただ、ぼけぇっと生きてるだけでは退屈どころか苦痛にもなってくるでしょうね。だから、どのようにして、張りのある日々を生きるかということが、現実に要求されてきたんです。

生き甲斐ということは、生活に意味を見出していくということですね。そして意味付けを追及していくと、目に見えない世界も考えざるを得なくなります。形而上的世界に対する関心が最近だんだん広がってきたのも、自然のことだと思うんですね。

（2）震災の教えたこと－近代文明の脆弱さ

こういう状況の中で、我々は阪神大震災を迎えました。あの大震災は、いろんなことを教えてくれましたけども、一口でいうと、近代文明あるいは近代文明の上に立った近代都市生活というものが、どんなに危ないものか、どんなに脆弱なものかということを、はっきりさせたといってもいいと思います。

自然の重み、いのちの重み
－物質主義をこえて

まず自然の威力というものに目を開かざるを得なかったでしょ。命というものに目を向けざるを得なかったですよ。そして、人間に何が大切なのかということをね、教えてくれました。震災で家を失い、倒れた家の前に立って、こういうふうにおっしゃった方が少なからずいました。「地震で何もかも失いました。しかし、人間に一番大切なものを手に入れました」とね。それは、形ある家は見るも無惨に崩れた、しかし共に被災した隣の人と廃虚の前に立って互いに手を取り肩を組んで慰め合い励まし合ったことをいってるんです。そのとき、心の通じ合うのを感じたんですね。寒い朝でしたが、そこにだけは温もりがあったわけですよ。これこそ人間に大切なものだということを、実感したのです。見えない心の世界です。しかし、どんなにそれが大切であるかということを、あの震災は教えてくれたはずですね。非常に重要な点です。

コミュニティの大切さ
－個人主義をこえて

この心の通い合うものがあるとき、そうした社会関係は社会学的には community といいますね。community というのは com という言葉と unity という言葉の合成です。com というのはラテン語の cum、英語の with あるいは、together　with ということ。unity というのはラテンご語 unus、英語の one ということですね。共に一つということです。何か心の一致がある、何か心の通い合いがある関係を community というんですね。人が集まってできる地域社会のことをよく community といいますけれども、これは、厳格に言うと間違いですよね。この前の震災は、そうした心の通い合いのある community が、どんなにね、大切かということを、よく教えてくれた。

あの直後に私の関係してる研究所で実態調査をやったんです。あの震災では高齢者がたくさん亡くなったんですよね。被災地域の高齢化率は当時16パーセント、ところが震災そのもので、すぐ亡くなった方の41パーセントは高齢者でした。高齢者がどんなにたくさん犠牲になったかお分かりですね。その理由を調べることも、調査項目の一つでした。そして最も重要な原因の一つとして明らかになったことがありました。都心部、神戸の町の中での聞き取り調査のときには、こんな答えが多かったんです。「そう言われましてもね、どこにどういう

年寄りがおるか全然知りませんでした。ですから、助けに行こうにも行きようがなかったんですよ」。これが、年寄りが多く亡くなった大きな原因の少なくとも一つでした。ところが、同じことを震源地の北淡町で聞きましたら、答えはこうでした。「この辺ではね、どの部屋にどういう年寄りが何時頃から寝とるかも知ってます」と。あそこで一番活躍したのは消防団でした。消防団というのは地域のコミュニティの voluntary な組織です。都心部には消防団はありません。つまり、コミュニティのしっかりしたところほど震災には強かったんですね。あの震災は、コミュニティの持ってる福祉機能や危機管理機能を非常に明らかにしました。個人だけで孤立してしているような社会は、災害にはまったく弱いんですね。これは、震災がよく教えてくれたことです。

ボランティア活動の役割
－市場社会をこえて

もう一つ、震災の教えたことがあります。ボランティアの大切さとその可能性です。ボランティア活動があのときはものすごかったでしょ。あの震災の年を日本のボランティア元年と言いますけれども。むろんボランティアは以前からありましたが、それが急増してくるのは、震災が一つの大きな契機でした。皆さんの中にもいらっしゃると思いますが、ボランティア活動を熱心になさっている方は、たいていこうおっしゃるんです。「他人のためにしてるんじゃない。自分のためですよ」とよくおっしゃるね。確かに、他人のためにしてるんだけど、その、他人のためにすることによって充実感が出てくる、生活に張りが出てくるんです。生き甲斐が出てくるんですね。こういう考え方、感じ方がだんだん広がってきています。市場的な give and take をこえた人間関係が広がってきているということです。この点でも、あの震災は大きな経験だった、人間に大切なものを教えてくれましたね。

4．人間に欠かせないもの

最後に、じゃ、人間には何が大切なのか、人間に欠かせないものは何か、それを考えてみましょう。

いのちの重みの自覚

結論的にいって、なによりもまず命の重さの自覚ですよ。一人ひとりの命の大切さというものを自覚するということが重要だと思うんです。前に、人間の尊厳や人権の思想は、ヨーロッパでは、キリスト教から出てきたと言いました。だから、長い間ね、私は、もう日本ではこういうことは、口だけのことで終わるんかと思っておりました。

しかし、最近ね、勇気を取り戻したものがあるんです。何かといったら、貝原益軒という人の「養生訓」という本があります。ある必要があって、最近それを読んだんです。そして驚いたんですな、一番初めに出てくる言葉はこういうことです。人の命は、「天地四海よりも重し」。いいですか。あの、300年昔ですよ。江戸時代の、武士道とは死ぬこととみつけたりなどといわれたあの時期に、人の命とは天下四海よりも

重しと書いてあるんです。ホオーと思ったね。これはどういうことをいってるのかと言うと、自分の命でも私すべきものではないと書いてあるんですね。立派なもんだと思いますね。それは、自分の両親から与えられたんです。両親は、さらにその両親から与えられたものでしょ。これを辿って行くと自分の過去にね、どのくらいの関係がある、そのどこが欠けても今の自分はないわけね。重々無尽といいます。次々といろんなものが重なりあって今の自分があるんですね。あだやおろそかに考えたらイカンというんですな。

だから、その命のある限り、命を生き抜かなくちゃならんというのが彼の主張です。そこから養生という哲学が出てくるわけやね。生を養うという哲学が出てくるわけですが、大変なものだと思いますね。「ああ、日本にもあった」と思った次第なんです。だから、キリスト教によらずとも、日本でもあり得ることだと思うし、これは普遍的なものと考えていいと思う。それぞれが考えなきゃいかんでしょうね。命の重さをまず自覚するというとこが第一です。

人間の本性規範

次に、人間は人間として生活し、人間として生きていかなきゃなりません。それには欠かしてはならないものが、少なくとも三つある。本性規範と書いておるのはそのことです。本性的な生まれながらの規範なんです。

第一番目は自律性です。自分で自分を律することが出来なかったら人間ではありません。ここに飢えたネコがおり、魚を取って逃げたとします。人はコラッと叱りますがそれで終わりね。ところが飢えた若者がいて好きなだけ食って料金も払わんで逃げたとする。コラッと叱られますよ。しかしそれで終わらないです、人間の場合には。なぜそんなことやったと責任を問われます。その背後にはね、人間というものは、自ら判断して、悪かったら痩せ我慢をしなきゃならんですな。自らを抑えて飛びつくことをやめにゃならん。それが出来るのが人間というものです。

本来、自由というのは自律ということなんですね。自分で自分を律するということが自由ということです。これは必ず責任を伴うんですね。だから責任を負うことが出来なかったら人間でないです。そういう人間が近頃増えてる。自律性のない人間というのは、人間の顔をしているが、これは野獣にすぎない。

第二番目は、社会性です。人間は人の間と書いてある。いい言葉ね、人は人の間において初めて人になるんです。社会なしに生きられる人間はないですよね。最近共生とかいうことが盛んにいわれるようになりましたが、その社会が成り立つためには、少なくとも三つの要素が必要です。

第一は協力です。力を合わせるということがなかったら、社会は成り立ちません。だからどういう人間でも、あるいはどういう小集団でも、どういう家庭でも、何かの役割をそれぞれが分担するときに、初めて社会が成り立つんですよね。みんな同じことをやれば、社会が成り立つようなことはありませんよ、協力というものが必要です。

第二は、秩序ということが必要です。秩序がなかったら社会は成り立ちません。ここには相互とともに上下の関係が必ず出てきます。上下の関係なんて、古くさいという考え方は、それこそ古くさい200年前の思想です。秩序は絶対に必要です。

第三は、先ほどいった思いやりです。秩序があれば社会は成り立ちますが、これだけでは冷たい社会です。人間的なぬくもりのある、人間的な安らぎのある社会が出来るためには、思いやりが不可欠ですね。

第三番目に、目に見えない世界というのを考えたり、目に見えない世界に襟を正したりすることの出来るのは人間だけです。人間以外の動物にも知覚はあります。知覚というのは目に見えるものに反応していくわけね。目に見えない世界に思いを巡らし、それに手を合わせることが出来るのは人間だけです。人間の超越性と言います。これは目に見えない世界に手を合わせる、目に見えない世界を考えることが出来る、そういうことをいおうとしておるものです。これがなかったら人間でないです。また、これがなかったら道徳倫理は成り立ちません。

これも、日本では、今、大変崩れてる。青少年のある意識調査によると今の中高校生ね、法律、規則を守ったら損をするというのが約80パーセントです。これじゃあ社会は成り立ちませんよ。もちろん、自分に都合のいい法律もあれば、悪い法律規則もありますよ、しかし、ある限りは、それを守るというのが人間の社会です。むろん改正しなければならないこともありますが、改正には改正の手続きが必要ですよね。

しかし、これはね、今、子どもだけやないですよ。一番けしからんと思うのは、駅に行ってごらんなさいよ、駐輪禁止とか駐車禁止しているところに、ずらーと並んでるでしょ。とがめられなかったら、何やってもいいじゃないかという、やらなきゃ損じゃないかとい考え方が広がっています。これでは道徳は成り立たないですよ。道徳、倫理ちゅうのは、見られようと見られていまいとね、善いことは善い、悪いことは悪いんです。そして自らの判断にしたがって自らを律することが出来なかったらダメね。仏教でこういう言葉があります。「諸悪莫作、衆善奉行」。「しょあくまくさ、しょぜんぶぎょう」と読みます。悪いことはやったらイカン、善いことは行い奉れということです。悪いことは悪い、善いことは善い。人が見ていようと見まいと。これが倫理、道徳の基礎です。ヨーロッパでもまったく同じやね。

キリスト教倫理の一番基礎をなしてるのは、「善は為すべし悪は避くべし」ということですね。これがなかったら、あらゆる倫理、道徳は崩れてしまいますね。しかし、崩すような状況が、今、日本にあるんじゃないですか。だから、重要なことは、こういうものを身につけていく、そういうふうに人間を育てていくというのが、非常に重要になってくると思うんですね。つまり、子供のときからの躾です。

躾と誇り

じゃ、何をどのように躾ていくか。その方向は、もはや明らかでしょう。

まず、自分のことは自分でやる、自分で

責任を取るということを子どものころから躾ていくということが絶対に必要となるわね。

これを躾るには自分の寝床は自分で始末することを子供のときから習慣づけるといったこともいいでしょう。それができるようになれば、ほかのこともできるようになるはずです。躾はあれもやれ、これもやれでは、ダメです。一つのことを徹底的に躾けることです。

次に、社会性を身につけさせねばならない。このためには、まず協力です。そしてこれを躾るには、家で子どもに一定の役割分担を必ずさせるということが大切ね。これは親がやったほうが簡単ですけど、子どもにやらすのが教育です。社会性を躾るその二は、秩序です。これを躾るのに最もいいものは挨拶です。ちゃんと挨拶をするということやね。これが出来るようになれば、規律は出来るようになりますね。

そして、社会性にかかわるその三は、思いやりです。これを身につけさせるのに一番重要なことはですね、共同の体験ですね。一番いいのは、できるだけ家族みんなで食事をとることです。夕飯は家族みんなでやる、そのときにいろんなことを話し合う。そのことによって、一つの心になっていくね。そういうことが重要です。

最後に、目にみえないものに襟を正す心を養うことです。そのために昔からやってきたことは、食事をする前に手を合わして「いただきます」と目に見えないものに対して感謝することでした。こういうことを子どものときから躾ることが重要になってくる。

人は生まれながらに善である、社会がこれを悪くするのだ、というのは、200年前のルソーの思想ですね。つまり外に障害がなければ、人はひとりでにスクスクと育つものだ、という考え方です。性善説的な思想です。残念ながら戦後の日本ではこれが多いですよね。一人で育つものです、悪くなるのは周囲が悪いんだという考え方なんです。今の人間学は全然違います。人間は人間として陶冶しなきゃ人間にならないというのが今の人間学です。人間は生涯をかけて自己を形成していく存在だというのが今日の思想です。だから躾というのが決定的に重要になるんですね。

そして、人が絶えず自らを形成していこうとするならば、いつも夢と誇りを持つことが必要です。夢には大きな夢もあるでしょ。しかし、人を怒らせるようなことは絶対やらんぞと、自分に言い聞かせるような夢もあるでしょう。なんらかの夢を持つということは、人間が向上する場合に不可欠です。同時に、自らに対する誇りです。まず、かけがえのない命という自覚が出るなら、そこから誇りも出て来るはずです。同時に、なんらかの長所は誰でも持ってるはずですよね。そういうものに対する誇りを持つことです。誇りをもつように育てあげることです。

最後にこの誇りに関連して、一つのことを申し上げて、終わりにしましょう。戦後、西ドイツも日本と同じように「奇跡的」な復興・発展を遂げましたが、戦後20年間、ドイツをずうっと一貫して指導した有名な政治家がいました。エアハルトという人です。初めは経済大臣、後には首相もやった

んですが、この人が好んで使った言葉があります。これをお伝えして終わりたいと思う。いい言葉です。ドイツ語で言うと非常に響きがいいから、ちょっと聞いとって。

Geld verloren、nichts verloren

Mut verloren、vieles verloren

Ehre verloren、alles verloren

Geld というのはお金ですね。verloren というのはなくなってしまう。nichts verloren 何にもなくならない。つまり、ものがなくっても心配はいらんということです。Mut というのはやる気です、やる気がなくなると vieles verloren 多くのものがなくなるんですね。Ehre というのは誇りという意味です。誇りがなくなったら、alles verloren、alles というのは英語の all ですから、すべてなくなるということになります。

あの戦後の、ドイツも廃虚の中から立ち上がるんでしょ。そのときに盛んにこれを言ったんですね。「金、ものがなくなっても心配ない。やる気がなくなったら大変だ。誇りがなくなったら、すべてが終わり」ということですよね。

実際、イキイキと生きていくには、夢と誇りを持ち続けることが必要です。絶えず人間が自分を造り上げていく場合に、欠かせないものと言っていいと思うんです。そして、エアハルトの先の言葉にもうかがえるように、自分自身への誇りは、自分の家や自分の国、あるいは自分の国の文化、それらへの誇りとも結ぶものです。

終わりに、皆さんのお手元に、兵庫県青少年憲章というのがまいってます。これは去年、今井先生が会長をなさった憲章制定の県民会議で出来たものです。その草案の起草委員会のまとめ役をしたのが、私です。よくお読みいただくと、今日、私の話したことがご理解いただけると思います。

ひょうご青少年憲章　（平成12年３月15日制定）

いま、私たちは暮らしや社会のあり方が大きく移り変わる転換の時代にありますが、先の阪神・淡路大震災は、人と社会に何が必要なのかを改めて教えてくれました。

私たちは、これまでの自分の生き方を省みて人間生活の基本に立ち返り、自らを尊ぶと同時に、家庭や地域や国、そしてかけがえのない地球に生きる人間として、ひょうごの明日を担う青少年とともに、自信と夢と勇気をもって21世紀を築いていくことを誓い、この憲章を定めます。

1　自分を大切にし、自らを律し、行いに責任をもって生きていこう
2　ふれあいを深め、正義感をもち、社会を担う一人として生きていこう
3　人の痛みや喜びを感じあえる心をもって生きていこう
4　多様な人々の存在を受け入れ、ともに支えあって生きていこう
5　自然を愛し、生命を尊び、みえない世界にも襟を正して生きていこう
6　先人に学び、明日に夢をえがき、勇気をもって未来を拓いていこう

カウンセラーミーティング

スタッフ一同

アドバイザー　深川　純一

深川　それではただ今からフォーラムを始めます。フォーラムというのは、皆さん方が自由な意見を出し合うところでありまして、決議をするところではありません。皆さん方の考え方を存分にお話しください。そして、お互いの意見をお互いが聞きながら、それに学び合うというのがフォーラムであります。

それぞれ皆さん方は、今日の議論を地域に持って帰っていただいて、皆さん方自身の研鑽の糧にしていただくというものでありますから、あまり堅苦しくならずに、思ったことをお答えいただければと思います。

今日は、きのう藤井先生から「生と死、命について考える」というテーマで講義していただきました。死に直面して生き抜いてこられた貴重な体験からいろんなことを教えられたわけでありますが、二つ結論的なことを先生がおっしゃっておられました。自分の死についてどう考えているか、これが第一。第二は自分の人生をどのように生きようと考えているのか。この二つが大事だということをおっしゃっておられました。それから、生命の倫理について、安楽死の問題だとか、堕胎の問題、その他人間の尊厳について、いろんなことを教わることができたわけであります。

それから、野尻先生は今朝から「人間には何が大切か」というテーマで、縦横無尽に解き起こしされたわけであります。近代文明の歴史から解き起こして、人間性の回復、それから人間に欠かせないものがある、それはいったい何か、これも人間の尊厳について、その本質を説かれたものであります。

そこで、今から、その後を受けまして、今度は皆さん方から、きのう、きょうの先生方のご意見にこだわることなく、皆さん方自身の考えを存分にお聞かせいただきたいと思うわけであります。まず、フォーラムの順序といたしまして、各班から、きょうバズセッションでおまとめになった結論を披瀝してください。全部の意見が出揃った後で、この皆さん方全体の意見をコーディネートしていくという形でフォーラムを持ちたいと思います。まずC班ですね。

バズセッション報告

C　班

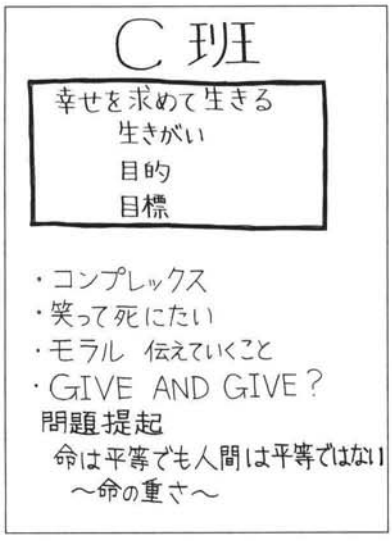
ちょっと、一番初めなんで緊張しているんですが。今回、生きること死ぬこと、そして共に生きる世界とテーマを与えられて、私たちは、まず生きるってどういうことだろうって考えました。そして生きることは幸せを求めて生きることという意見が出て、そして、それらの下の意見に広がっていく中で、やっぱり根本は幸せを求めて生きていくことにつながるなって考えました。

一つずつ、詳しく説明していきたいと思

います。

――具体的な話になるのですが、私、看護学生をやっていまして、地震のときに左足の太ももの下から切断した患者さんを受け持ったときに思ったんです。その患者さんは、歩きたいという、すごい意志が強い方で、やっぱりリハビリ重ねていって、日々少しずつなんですけど、歩けていくことに本人もすごい喜びを感じていたし、横で見ている私も、すごい喜びを感じました。だから、幸せを求めてっていうことに関して、やっぱり目標を持って生きられるというのが、幸せを求めて生きるということにつながるんじゃないかと、そのときすごく思いました。

――私は、人間は動物や植物と同じように自然のまま生きるのが理想なんですが、その中で、目標とか生き甲斐を持って生活することで、より生きてることを実感できて、それが幸せにつながると思いました。その幸せというのは、私にとっては、普通の生活の中で、家族の中で、手伝いをしたり、その役割を持つということで自分の責任を



持てるということが満足感につながって、それが、そのように身近なところに探せばたくさんあるのが幸せだと思っています。

――僕は、自分の体験を話したいと思うんですが、ボランティアのきっかけになったときの話をします。僕は、知り合いの人に勧められまして、老人ホームの慰問に行きました。その慰問というのは納涼まつりのお手伝いで、阿波踊りの踊り子をしたんですけれども、それまで、ぜんぜん練習とか、したことなくて、2、3日の間で練習して老人ホームで盆踊りしました。すごい下手くそだったんですけど、その老人ホームの人たちがすごい喜んでくれまして、なんやこんなささいなことで、こんなに喜んでくれる人がたくさんいるんやったら、もっともっとしていこうと思いました。そういうふうな感じで、生き甲斐の支えになれたら、なれるんやなと感じました。

――僕は、小さい幸せですけど、自分の好きな人の笑顔とかを、毎日見れたら、それだけで毎日が幸せで、それを毎日の目標として生きてるみたいな感じですけど。

――僕は、幸せってなにかあるかなって考えたんですけど、身近に考えて、この余島で幸せを感じたことがありました。僕は釣りが好きなんで、釣りをやったんですね。

で、昨日はまったく釣れなかったんですよ。で、むっちゃ口惜しくて、今日の朝6時に起きて、釣りに行ったんですけど、見事に釣れてとっても目的を達成できたので幸せを感じました。(笑い)

――この、生きること死ぬこと、そして共に生きる世界、三つのテーマの中で、生きることというのが、やっぱり私たちがこれから生きていくにあたって、どういうふうに生きたいか考えたときに、やっぱり、みんなの共通した意見が、幸せになりたい、幸せになるためにはどうしたらいいかということで、そのためには、充実した毎日を送る、その充実した毎日を送るために生き甲斐、目的、目標を持つということを思いました。毎日それぞれ生きていく中で、楽しいこととか、悲しいこととかいろいろあると思うんですけれども、今日、偶然、嬉しかったとか、いいことがあったとかいうんじゃなくて、毎日充実していれば、嫌なこととか悲しいことも、大きい幸せに変わっていくんじゃないかというふうに思います。

――幸せの話が、今、出たんですけど、じゃあ、その幸せを求めて生きていく中ででも、やっぱり嫌なこととか、辛いこととか絶対あると思うし、それから誰にでもコンプレックスというものがあると思うんですよ。で、私は自分のことがすごい嫌いやし、じゃあ、どうしたらいいんやろと、みんなの前で話したときに、そうじゃなくて、嫌なところ、自分の嫌なところとか、コンプレックスとかっていうのも、自分の中で受け入る、そういうことが大事なんじゃないかって。嫌やから、嫌やからと言うんじゃなくて、嫌なところもひっくるめて、全部自分は自分って受け入れることが大事だっていう意見をみんなに出してもらって、ああそうだなあと思いました。その中で、周りの人に、なんかちょっと、ここいいやん、とかって、褒められたり認められたときに、それを素直に、ああ嬉しいなって思うことがすごい大事だよって。で、その嬉しいなをいっぱいいっぱい積み重ねていったら、幸せを求めて生きる、その幸せに、また、つながっていくんじゃないかなあっていう話になりました。

――死についてなんですけど、笑って死にたいという意見が出たんですよ。笑って死ぬということは、死ぬ前に自分の人生をもう一回振り返ってみたときに、先ほども言いましたが、幸せを求めて生きた、自分が生き甲斐を持って生きれたっていう満足感などで、自分が満足したら笑って死ねると思います。

――モラルを伝えていくって書いてあるんですけども、犯罪を犯す人は倫理観がないと思うんです。で、少年犯罪にしても、大人でも人の命を奪うっていう罪を犯しています。倫理にがんじがらめになると自分に

とって苦しいことなんですが、最低限人を傷つけない、人の命を奪うということは、絶対に悪いことだから、そのことを次の世代に伝えなければいけない、それが共に生きる世界につながると思いました。

――give and give にクエスチョンマークがついているんですけども、今日の講義で野尻先生が、市場主義経済とか、市場主義社会の弊害を指摘されて、その中で、それを超えるために、give and give っていう精神を持って、ボランティア活動をしていくのはいいというふうにおっしゃってたんですけども、決してボランティア活動というものが、give and give の精神ではないんじゃないかというふうに思うんですね。ほんまに自分に何も得るものがないのに続けられるっていうのは、ほんとよっぽどの人でないとできない。キリストとか釈迦とかぐらいじゃないとっていうぐらいに思うんですけど、やっぱり、そのボランティアをすることによって、感謝の言葉っていうものをかけてもらって、自分に満足感を得るだとか、何か達成することによって、達成感とかを得るっていう、そういう部分がボランティア活動にしろ、あると思うんです。

野尻先生も別に市場主義社会を否定されてたわけではなく市場主義社会がなくなるわけではないんで、やっぱり市場主義社会の give and take っていう精神が、もうちょっと高い次元で、精神的にものを得るとかっていう次元で話されてもいいんじゃないかなと、そういう価値観もあっていんじゃないかということで、下の問題提起に入るとも思うんです。ちょっとご意見いただければと思います。

――最後に、問題提起として、皆さんにも考えていただきたい内容なんですけれども、私たちは、命の重みということについて考えました。まず、その命の重みというのは平等なのかっていうことを考えました。その中で、命の重みは平等であるって思いたいんだけど、死んでいく年齢で、その周囲の悲しみ方とかいうのが違うんじゃないかっていう意見がありました。例えば、赤ちゃんの死と百歳の方が亡くなるのとでは、一般的に感じ方が違うと思います。

それがなぜかって考えたときに、出た意見としては、その生きていくことというか歳を重ねることは可能性を捨てていくことでもあって、その残っている可能性の重さで、その死の惜しみ方が違うのではないかという意見がありました。また一方で、人間は社会の中で生きるものだから、平等って、命の重みが平等って考えるのは難しいという意見も見ました。例えば、大統領と、その命を守るＳＰは、社会的な命の重みは違うっていう意見もありました。難しいテーマではあるんですけれども、私たちの班の中でも、また考えていきたいと思いますので、皆さんも考えてみてはいかがでしょうか。

――今回、班で話し合ったことで、みんな、自分の体験や経験に基づいて、すごく内容の濃い話し合いができたと思っています。今まで、漠然と自分の中で思っていたことが、自分で話したり、人の話を聞いたりすることで、より具体的になったと思います。これを今回の話し合いをいいきっかけにして、これからも考えを深めていきたいし、考え続けていきたいと思います。ありがと

うございました。(拍手)

深川　ありがとうございました。今、意見を発表していただきましたが議論するんじゃなくその意見で分からないところとか、今、発表したいただいた意見の中で、この点がちょっと説明してもらわないと分からないとか、そういうことがあったら、おっしゃってください。もう一度分かり易く説明をしていただきますから。なければ、私から一つ、ちょっと確認しておきたいんです。give and give の問題でありますが、それをもうちょっと詳しく説明していただけますか、私、ちょっと理解ができなかったもので。

――はい。持論っていいますか、思っていることとして、野尻先生が、ボランティア活動というのは、give and give の精神であるとおっしゃっていたんですけれども、ボランティア活動は、必ず take なんじゃないかと。その take っていう部分が、けっして物質的なものではなくて、精神的な充足であったりとか、達成感であったりとか、やすらぎであったりとか、そういうものが、give and give ではなくて、give and take ではないかと、その市場主義経済っていうものがなくなるものではないし、そういう社会で生きていく上で考えるものとしては、give and give であるよりも、give and take で考えて、そういう高い次元での give and take ということを考えるほうが、これからの社会というものにも合ってるのではないかなというようなことで話させていただいたんですけども。

深川　ありがとうございました。非常にロータリー的なお考えだと思うんですが、この give and take の take、それから、何を得るかというところを、物質的なものではなくて、精神的な何かを得るということも含まれるというご意見ですね。ほかにご質問がなければ、これでC班の意見の発表を終わります。次はA班の方、意見の発表をお願いします。

A　班

A班は、最初にみんなで二つのグループに分かれまして討論しました。その後、班で集まりまして、それでみんなで二派に分かれて、話した内容を一つにまとめました。なかなか、みんな活発な意見ばかりで、結局まとめることができなかったんですけど、まあ、僕らなりにまとめたんで聞いてください。

A班は最初に今回のＲＹＬＡセミナーの目的というものを話しました。あすになりますと、皆さん、各地に散らばって、いつものように仕事をしたり、学生は学校へ行ったりとかで散らばっていくわけですけれども、フォーラムやバズセッションも含めて今回のセミナーで得ましたいろんなことを生かしながら、一人ひとりが高いレベルを持って、また周囲の人にもよい影響を与えるよう、これから頑張っていきたいと思います。そういうふうな目的をみんなで理解しながら、バズセッションのほうをしました。

昨日と今日と、藤井先生と野尻先生の話

を聞きまして、生と死、命の大切さということを学びました。それらで得られたことを考えて、生きること死ぬこと、共にいきる世界ということについて討論しました。僕らのグループでは、医療の仕事に携わっているという人が何人かおりましたんで、ケアをする立場に立った人からの意見が出たんですけれども、命の大切さ、生きること死ぬこととということで、普段、死に関わる仕事をしている方の側からしましたら、毎日、たくさんの死に直面する。そういうときに、やっぱり、仕事だからとい割り切った気持ちでするのも大切なんですけれども、人間として、人として命の大切さというものを頭の中で考えながら、これから頑張っていきたいという意見が出ました。

それから、人間の共存ということで、人はたくさんの人と集まりまして共存しますけれども、それ以外に、今回の自然いっぱいの中で体験したことなんですけども、木であるとか、小さな昆虫であるとか、動物であるとか、鳥とか、そういうふうな生物とも密接に関わっている。人は人だけではないんだ。無責任なゴミの投げ捨てとか、環境汚染とか、そういうふうなのも人間は自然の中で共存しているんだという考え方を一人ひとりが持つことによって、もっと、より良い共存ができるんではないんかという意見が出ました。

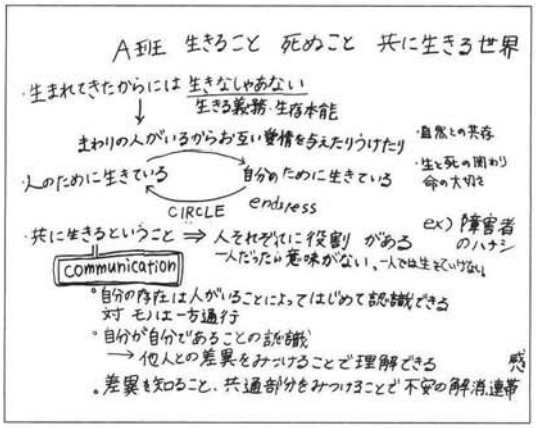
それから藤井先生の話の中で、講演の中で、ライフサイクルを書くっていうことが出たんですが、普段、それまであまり気にしていなかったことですけれども、実際自分のライフサイクル、自分が何歳で死ぬのか、というような、あと、自分の両親が何歳で死ぬのか書けって言われたときに、普段、そういうふうな、まったく気にも止めてないようなこと、例えば、自分の両親が何歳で亡くなるのかっていうことを改めて考えることによりまして、じゃあ、例えば、父が何歳で亡くなるということを考えたときに、ああ、今何歳やから、80で亡くなるとしたら、今、60歳だから、そう考えてみたら、残り20年しかないなと、その残された20年の中で、自分が両親に何か、何をできるかというようなことで、改めて、そういう死から逆算することで、改めて人とのつながりというものを学ことができました。

それから、アンケートで○×を付けまして、自分は死に対して、そんなに恐れてはいないだろうって思ってたんですが、実際○×を付けてみて、思ったよりも得点が高かった、それで改めて自分は死に対して、恐れていたんだなということを知ったという意見も出ました。

それから、死に直面したときのことを思い出したという意見もありました。これは、僕の意見なんですけども、半年ぐらい前に死に直面することがありました。そのときには、その人が死に対する、その人の立場に立った考え方というのができなかったんですが、やっぱり、藤井先生の講演を聞い

てみると、なんか、もし自分が１年前に、１年前のＲＹＬＡセミナーに参加していたとしたら、もう少しなにかその人にしてあげれたんじゃないかって思いました。人間として、どう生きたらよいかということを改めて再確認しました。

――もう一方のグループで話し合っていたことを、今から発表させていただいます。



私たちは、Ａ班のもう一つのグループでは、今、私たちは実際に生きているということで、生きているということについて、まず、考えてみました。そこで出てきた意見で、生まれてきたからには、生きなしゃあないと。で、生きなしゃあないというのは、だったら、死を選ぶことも、実は自分の意志で死を選ぶことも選択できるし、もちろん、今のまま生きていることもできる。

じゃあ、なんで生きていくのかということで、皆で話し合ったんですけど、やっぱり、自分というよりは、周りに人がいるからとか、大切な家族がいるから、周りの友人がいるからというふうに、周りに依存していることがすごく大きいんじゃないかなというような意見がでました。で、具体的に言うと、例えば、なぜ子どもを産むのかという話になったときに、男性は、やっぱり自分の血を、自分の何かを子どもに受け継いでほしいという意見も出たし、女の子では、私、お母さんやお父さんにもらった愛情を、自分の子どもに今度伝えたいという、そういうふうに、親から子へ引き継がれてという、そういう家族の話も出ました。

そういったお互いに愛情を与えたり受けたりっていうのは、自分のために生きていることと、人のために生きていること、そういうことにまとめられるんじゃないかなというふうに、ここに書いてみたんですけれども。この人のために生きていることと自分のために生きているっていうことが、ずうっとうまくサークル状になっていて、これはエンドレス、終わりがない、いつまでも続く、そういうふうに、一応、そこでの話はまとまったんですね。

で、そこで、生きるっていうけど、独りじゃ生きられない、共に生きることを考えてみましょう。共に生きるということは、どういうことかなっていうふうに考えたときに、まず、人それぞれに何か生きていて役割があるっていう話になったんですね。例えば、障害者の人の話、ある障害者の人の話が出た

んですけれども、その人がおっしゃるのは、自分が障害を持っていて、それでそういった自分を世間にさらすことで、例えば自分の足が悪い、そんな自分を見て、何か他の人が、僕は健康なんだから、もっと頑張れるんじゃないかとか、そういうふうな、これが一概にいいといえるか分からないんですけれども、そういった、それぞれ人が持っている、その人それぞれが持っている役割というのが、共に生きるということにつながるんじゃないかなという意見が出ました。そしてまた、独りだったら意味がない、独りでは生きていけないっていうような意見も出ました。

そこで、重要なことは何かということの、結論は出なかったんですけれど、とりあえずの当面の結論として、コミュニケーションの重要性というのを話し合いました。なぜコミュニケーションが重要なのかということについて、まず自分の存在は、人がいることによって初めて認識できる。どういことでしょうか、ちょっと考えてみてください。

真っ暗闇の部屋に何も見えません、何も聞こえません、何も匂いません、そんな部屋に自分がいるとします。重力もありません、地に足が着きません、浮いてます。じゃあ、自分の存在というのはどういう部分で、どうやって自分の存在を自分で確認することができますかね。できませんよね。そこに自分がいることっていうのを絶対に分からないですよね。でも、そこに、もし光が見えた、光が見えたとしたら、ああ、あの光が見えてる自分がいるということが分かるし、そこの海の音が聞こえてきたら、あっ、波の音が聞こえる、自分がわかる、ああなんかおいしそうな匂いがしてきたっていうことで、その匂い感じてる自分がいるっていうふうに、何かものがあることによって、自分の周りに何か存在することによって、人間というのは、初めて自分の存在を確認することができるんですね。

ただ、今言ったのはものなんです。ものだから、自分が確認できるだけの一方通行なんですね。じゃあ、そうすればいいかというと、ここに人がいればいいんですね、私が話しかけて、それに返ってくる、そういう対話っていうのが自分の存在というのが認識できて、相手の存在っていうのも認識できる、そういう第一歩だと思うんです。で、その対話の中で、自分が相手と共通部分、そして自分が相手と違う部分っていうのを認識することによって、自分が独りではないという安心感、そして、この人も自分と同じ人間であるっていう連帯感が生まれる、そういうところが重要じゃないかなっていう話をしました。

今日のお話にもあったんですけれども、人間っていう字は人のあいだって書くんですね、独りでは絶対に存在できません、絶対生きていけません、そして、みんなで生きていくことしかできません。そういう意味でコミュニケーションというものの重要性っていうのは必要不可欠なんじゃないかという、とりあえず、当面のところの結論に達しました。

――僕たちは、結局、最終的にはコミュニケーションが大事だという結論に達したわけですけども、人間が、他の動物よりも勝っている点、それは、やっぱり喜怒哀楽を

出せるとこなんですね。顔で表現が出せる、会話で自分の意見が言える、そういふうな、やっぱり、与えられたいろんな手段を使うことによって、コミュニケーションを取りながら頑張っていきたいと。現在、少年犯罪だとか、幼児虐待だとか、医療ミスとか、そのようないろんな犯罪が起きてますけれども、そういったこともコミュニケーションすることで解決できるんじゃないんかと。それがやっぱり、私たち、これから頑張っていく世代に与えられた課題じゃないんかなと感じました。

人は独りじゃないんだから、やっぱり、コミュニケーションすること、だから人間なんだという、僕たちは、それから、人生を楽しんで、意味のある生き方をしていこうという結論に達しました。以上です。(拍手)

深川　はい、今の発表の中で、この点だけは、ちょっと確認しておきたいというのがあったら、おっしゃってください。はい、どうぞ。

――さっきの女の方に聞きたいんですけど、生まれてきたからには生きなしゃあないということで、生きるために自分で生きることを選んだり、死ぬことを選ぶっておっしゃられたんですけど、やっぱり生きるためだったら、自分で自殺の権利があるとか、安楽死をすることを認めるということで、そういうことおっしゃったんでしょうか。

――そうですね、安楽死とか具体的にそういう話はしなかったので、私の意見になってしまうんですけれども、私は、実は、ここで生きなしゃあないという言い方は、すごい、実はひっかかったんですね。この世に偶然、すごい小っちゃな確率で産まれてきたからには、私は生きなしゃあないじゃなくて、何かのために、何か分からないけど、その何かのために生きなければいけないというふうに、すごく感じていますので、その安楽死の問題というのは、ケースバイケースだと思うんですけれども、私は、そうですね、反対とも賛成とも言えないんですけれども、ちょっと抵抗があります。

深川　ありがとうございました。他に何かございますか。この際、確認しておきたいことがあったら、おっしゃってください。はい、どうぞ。

――最後のほうでは、自分の存在とか、人がいるから自分も認めて、自分も人も共に生きているというような、コミュニケーションということを言われていて、共にというふうなことを言われてたのに、その人は周りの人に依存をして生きているというふうなことを言われてたと思うんですよ、最後に。

深川　あ、これね。だから、そういう意見もあるし、また、そうでない意見もある。A班の意見としてこれいってるわけじゃないんで、A班の中にも、いろんな意見があるのを発表してもらってますから、どちらが、あなたにとってはいいのかということは、また、全体フォーラムのときにおっしゃってください、はい。他にありますか。意見自体が分かりにくいというところを、正すだけですから。はい、どうぞ。

――人がいることによって、初めて認識できると言われてましたけど、他に光があったり、何でしたっけ、何かがなかったりって言ってた、その何がなかったら認識でき

ないかというのを、もう一回お聞かせいただいたら……

――私が、そのときに言ったのは、音、波の音だとか、あと匂いとか、すなわち、五感で感じる、人の温もりもそうだと思います。五感で感じるものすべてなので、自分の心臓の鼓動の音も、もちろん音ということでいいと思うんですけれども、どうでしょうか。

深川　はい、そういう意味でおっしゃったわけです。他にありますか。意味が分からないことを正してるだけですよ。今井先生、何か……。障害者の話と書いてあるのは、どういうことですかというご質問です。

――彼の体験談なので、彼に、ヘルプで。

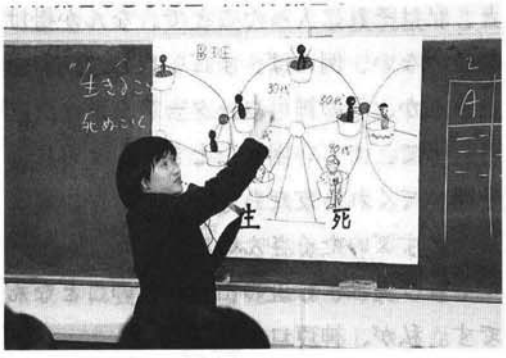
――これ、僕が中学校のときの話なんですけど。障害者の方を講師に招いて授業をするというのがあったんですよ。それで、障害者の方が「私は障害者で、それを何にも恥じてない」と、自分をさらけ出すことで、そのために神様が、こういう身体くれたんや」と、そういう話なんですけど。誰しも障害を持っていて、それに意味がある。神様が与えてくれたもんやと、そういうことをおっしゃられていたのを僕は話したんですよ。

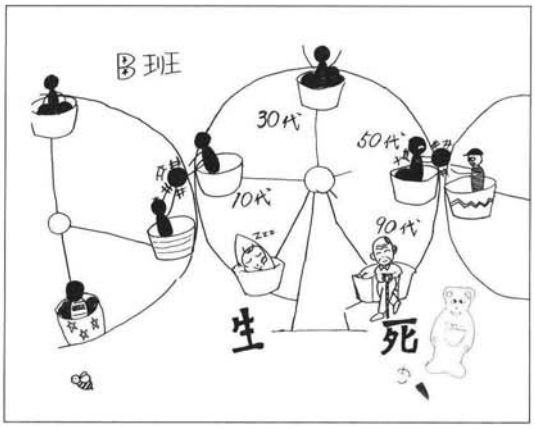
深川　他にありますか。発表について分かりにくいことです。なければこれで終わりますが。特にないようですね。じゃあ、これで終わります。ありがとうございました。（拍手）次はＢ班です。

Ｂ　班

これからＢ班の発表をしたいと思います。僕たちＢ班は、このテーマについて話し合ったんですが、このテーマは、ちょっと漠然としていて、僕らはよく分からないと思ったんで、生きることと死ぬこと、共に生きることというのは、どういうことなんだろうなということから、僕らは、まず話し合いました。

――僕の意見なんですけど、生きること死ぬこと、共に生きることですか、別々に考えてみたんですけど、死ぬことというのは、死んでから存在が忘れられることだと思うんです。極論なんですけど、たとえ、生きていても、自分の存在が忘れられれば、死んでいるんじゃないかなっていう考えなんですけど。で、生きることについては、これも極論なんですけど、僕の考えなんですけど、死ぬときに、どれだけの人が泣いてくれるかを作ることが生きることだと思うんですよ。それは死んで人の中に生きているということなんですけど、そういっちゃうと、生きることというのは、死ぬためにあるんじゃないかということになっちゃうんですけど、そのあいだに、生きることの





共存というのがあると思うんですよ。それを説明してもらいます。

――共に生きるということの、たった一例にしかならないと思うんですけど。私の今までの、そういうことに対する経験を、具体的に一つだけ言いたいんです。

私、今、神戸ローターアクトクラブっていうクラブに入っているんですけど、それで、結論というか、そういうことからいくと、私はそれに入ったことで、なんか掛け替えのない、例えば、すごい自分が悩んだときとか、その神戸ローターアクトクラブの行事で、すごい困ったときに、すぐに話を聞いてくれる友だち、メンバーが、私には今、すごいたくさんいます。

それは実は、C班の田辺さんのことなんです。私が、神戸ローターアクトクラブに入った最初の理由というのは、ほんとに強制的にクラブで行けと言われて行って、辞めることができなくて、2年目は自分で楽しいから続けようと続けてたんですけど。それで、田辺さんが後で入ってきて、その活動の中で、私が実行委員長という立場というか役割をすることになったときに、私は、田辺さんに、入ったばっかりで悪いけど、副実行委員長やってくれるかなってお願いして、その大会中に、かなり迷惑かけたかなと思って、すごい走り回ってくれてたんで。

大会終わって、次の日に、やっぱり直接は言いづらいんで、メールで、昨日はほんとにありがとうって入れて、こっちから頼んだのにフォローがぜんぜんできなくてごめんね、みたいなこと入れたら、すぐにメール返してくれて、美穂が、奈美ちゃんがいるから、副実行委員長できたと思うし、そんなお互い様やしって言ってくれたのが、すごい嬉しくって。こういう人が一人でもいるって自分に分かったから、これから頑張っていこうと思ったし、今も私は、会長という立場で、すごい悩んで、やっぱり美穂に相談すると、お互い様やし、私は聞いてあげることしかできんかもしれんけど、聞くことならいくらでもするからって、涙、出そうなんですけど。

――落ち着かせるために、気になっている図の紹介をいたします。（笑い）この間をお借りして。（拍手）これは、私の原案をみんなですごい支えてくれて、絵ごころのある、こちらにおられる女の方々、男の方々に作成していただきました。

とにかく、私たち、

二十歳を超えた数名で、生きること死ぬこと、そして共に生きること、これを考えるのは本当に難しいんですよ。もう、ロータリアンの方だったら、何十年のご経験もあるから、ご経験を元にした説得力のあることが言えるでしょうが、私たちは、ぼんやりしたイメージというのしかないから、言葉じゃなく、こうやった図で示しました。説明していきます。

私たちはですね、生まれるときに、観覧車に乗るんですよ。生まれます、乗ります、赤ちゃん、寝てます。このへん10代っていうか、若いときに、ずうっとこうやってグルグル回っていくんですね。観覧車が上っていくんですよ。これは一人のサイクルですね、ライフサイクル。お隣りにも、他の人が生きてて、生まれて死んじゃうって、ときどき、お隣りの観覧車と近づくんですよね。そしたら、お隣りの人が、なんかくれるんですよ。こうやって、もらうものが、いろんな観覧車と近づいて、増えていって、自分の乗ってるゴンドラに、たまっていくんですよ。

それ、プワプワしてて、温かいって感じが感じるんですね、言葉じゃないけど、なんか感じるんですよ。で、今度はこのへん、40代、50代って今のロータリアンの方々、隣りの観覧車と会ったとき、もらうんじゃなくて、なんかプワプワしたものを、こう、なんか渡すときもあれば、向こうが感じ取って、プワッて取って行っちゃう。なんか、移るんですよね、丸っこいのが。こっちの人、取ってるというか、受け取ってるんですよ。で、90代、100歳、120でもいいんですけど、降りるんですよ。これは死んじゃったということで。

で、これは、まあ100歳ぐらいのライフサイクルで、例えば、3歳で亡くなっちゃった人とか、あれも私たちが解決できなかったテーマで、悲しいって感じる、ほんと、1歳、0歳とか1歳で死んじゃう人と、100歳の重みっていう、それはどうなのかというのは、私たちも残したテーマです。

で、このプワンプワンしたのは、じゃあ何なんそれはって。多分お一人の方が、どなたも、ご体験から何らか感じ取ると思うんですけど。一つ言えるのは、気持ち。例えば、親がここにいて、ちょっと年とって、親が子どもを思いやる気持ち、心配する気持ち、あるいは、子どもが親から感じ取った気持ち、あるいは、こういった、近くに、血のつながりはないけど、接した人からもらった気持ち。ほんとに簡単な言葉で、気持ちっていうのは、ひとつ、表現法だなって、それぞれの方がいろんな表現法でこれを感じ取ってくれると思うんですが。

だから、草だったら虫に食べられ草は死んじゃうんですよ。でも、そのお陰で虫は生きてますよね。虫は鳥に食べられ死んでしまってもそのお陰で鳥は生きてる。鳥はキツネに食べられて死んじゃう、でもキツネは生きてる。キツネは死んじゃったときに土に返る。でも、そのお陰で草は栄養をもらって生えることができる。こうやって、いろんな生と死がからみあってますよね。人の場合、おじいちゃんを送って、赤ちゃんが育ったっていうのはありえないんで、気持ちを受け取ってることで生きていける。

だから、一つだけ、あと最後に言いたいのが、この観覧車は、気持ちをもらわなく

ても、たぶん、自動的に一周することはできる。誰とも、接することなく、一周回って、降りて、ハイ、サヨナラってこともありえるけど、私たちは、ほんとに、もう一周も回るし、いろんなところで観覧車同士からみあってて、例えば、あんな感じに歯車みたいになってて、からみあうんですよね。ときには、観覧車、壊れたときに、隣りの歯車のお陰で、押してもらえるときもあれば、こっち、壊れかけたら別の観覧車が、なんか道具持ってて直してくれたとか、なんかそんな感じで、私たちは、そういう観覧車に乗って一周する人もいるっていうのが、私たちの感じたものです。

――すいません、先ほどは。私は、そういう人が一人いるだけで、精神的に楽やし、いざとなったら、話聞いてくれる人が一人は、いるって分かっているから、ちょっと頑張ろうとか思える。私、ちょっと1月末に足を怪我したときに、そのときも助けてくれたのは、アクトの別のメンバーです。家の部屋が5階で、しかも階段しかなくって、すごい困ってて、「帰れへん、どうしよう」て、言ってたら、友だちが、その車もってる友だちに電話してくれて、すごい遠いとこから私の家まで送ってくれて、おぶって上がってくれて。

3日間ぐらい、寝返りうつだけで、すごい痛くって、やっぱり一人暮らしで親は遠くにいるから、すぐに来てくれないときに、そこで助けてくれたのも、アクトにいる。また、別の人は、「病院行きたかったら、ちゃんと連絡しろよ」みたいなことを言ってくれて、「うん、行きたい」って言ったら階段をやっぱりおぶって降りてくれたりとか。

私は、アクト、その2年目を続けるって決心して、すごい今は良かったと思ってる。例えば、ここにいる皆さんもそうだと思うんですけど、RYLAに来たから、今、こうやって、みんな会ってるし、いろんなことをしてると思うんですけど。だから、私は、これから先、自分が、まあ私にとっての美穂みたいに、誰かから「あの人がいるから頑張っていこう」と思ってもらえる人になるようにしたいなと思ったことがありました。

深川　ありがとうございました。今、B班が発表しましたが、何か分かりにくい点があったら、確認しておいてください、みなさん。ありませんか。

――その観覧車の絵で、ちょっと確認をさせていただきたいんですけども。いちおうそちらの絵では、10代あたりの方が、絵だったら、たぶん、90代とか80代の人から、ものを受け取ってるということで、ちょっと、そちらの説明のときでは、年取った方は、もう与えるだけみたいな、そういうふうに説明されてたと思うんですけども。逆に、10代とかの人から、お年寄りとかに渡すっていうこともある意味で、これは描かれているのかなと……。

――今、おっしゃったのは、年上の人から年下の人に渡すことがあるけど、年下の人から年上の人にもあるっていうご意見だったですね。見てくださいよ、これ、渡してるかもしれないじゃないですか、こっちに。(笑い)(拍手)

深川　よろしいですか。今の質問については、よろしいね。他にありますか。なけれ

ばこれで終わります。ありがとうございました。（拍手）最後に、D班です。

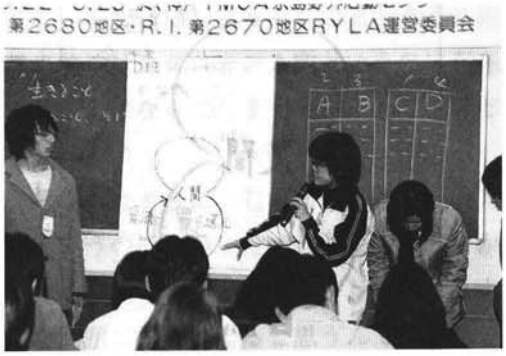
D　班

そしたらD班、発表さしていただきます。生きること死ぬこと、そして共に生きる世界、話し合ったんですが、まず、一番意見が出やすかった生きることから、僕のほうから発表さしていただきます。

生きることとは、って考えたときに、じゃあ、生きてるって実感できる瞬間て、どんなときだろうかというふうに思ったんですね。そしたら、やっぱり、人との関わり、人と関わってることで自分を確認できる瞬間ちがうかな、というのが多かったです。広い意味で生かされているっていうふうに、つながるんじゃないかなって思うんですけども。

例えば、昨日のカウンシルファイヤーのときにも、みんな、けっこう寒かったと思うんですけども、そういうのを忘れて、じっと火を見てます。そして、風の音とか、波の音とか聞きながら、まあ、自分は自然の中に囲まれているんだなとか思いながら、自分を確認する。そして、今井先生の、人との関わりを大事にしなさいというようなお話をお伺いしてですね、その後、隣りの方と手をつないだりする、人の温もりに触れることによって、新たにまた、自分って生きてるんだなって思う、そういうような自己確認ですよね、一瞬一瞬を、日々いろいろあると思うんですね。

結論なんですが、いわゆる、日々の人とのふれあい、それから、たくさんのことを経験することによって、自分というものは



っていうのを、その日確認していく、その積み重ね、これ「自己確認の旅」っていうふうに私は思うんですけども。それが、生きていくことじゃないかなというふうに思います。

――じゃあ、私から、次は、死ぬことについて説明していきたいと思うんです。死ぬことというと、生きることに比べてネガティブに考えがちで、なかなか難しいテーマかなって思うんですよ。そこで私たちは、今回、自殺という、少々他の死とは違う特異な死について考えていこうか。じゃあ、とりわけ、なぜ人々は、人は自殺するのかって考えたときに、やはり、そこに孤独であったり、この世の中に絶望があって、もう死んだほうが楽っていうふうな考えで、自分で命を断つのではないか。

だから、生きるの逆ですよね。生きるというのは、自分がいて人がいて、人の反応とか、何かを返してくれるということで、生きるということを実感していく、その中で、生きる喜びとかも感じるんだろうと思うんですけれども、じゃあ、それができな

いとき、何か自分が言っても返してくれないとき、「私って生きる価値があるの」「ええ、ほんとのここにいていいの」とかって、いろいろ考えると思うんですね。その結果、「死んだほうがましだ」って思うことが自殺。

じゃあ、その自殺を止めるためには、どういうことが大切かということで、共に生きることというのが出てくると思うんですね。そこで、D班としては、生きる死ぬことよりも、共に生きるっていうことに重点を置いて話し合ってきたんで、それについて、これから発表したいと思います。

――まず、一番上に書いてある動植物なんですけど、動植物って、生活する上で必要不可欠なものだと思うんですよ。いろいろ、お肉とかお野菜とか、他にも海とか木とか空気とかも、きれいにしてくれたりとか、あと、動物なんかも死んだ死骸とかが、石油とか石炭とか、資源にもなってるし、そういうのを一方的に、いろいろ取ったりとかもしてるじゃないですか。

それで、なんか、いろいろ、音とか自然の香りとかから、人ってやすらぎとかも得たりとかすると思うんですよ。いろんなものを自然から与えてもらってるっていうような話が出ました。

――でも、よく考えてみたら、私たちの生活で、けっこう自然からもらうばっかりで、一方的になってるんじゃないかっていうふうな意見が出たんですね。で、自分たちから自然に返しているものって何だろうと考えたときに、一例なんですけど、排気ガスとかゴミなんじゃないかって、自然を破壊するものが多いんじゃないかという意見が出たんですね。

私たちは、自分たちの生活を豊かにする、より良くしようと思って、追及してきたために、ほんとはそういう意志があったんだけど、結果的には自然を壊してしまったというふうになってしまってるんじゃないか、というふうな意見が出たんですね。で、今になって、そのはね返りというか、そういうふうに人間がしてきたために、酸性雨であったり、温暖化っていうふうな、私たちに自然のほうから警告というか、「僕たちは、こんなにも傷ついてるんだよ」というふうな、反応が返ってきてるじゃないかって。

で、この絵なんですけど、人間は自然のものを使うんだけれども、また、自然に戻してあげる。人間が今使っているプラスチックとかそういうものの中には、自然に返らないものっていうのもあると思うんですよ。で、そういうものはリサイクルをして、何回でもそれを、また自分たちのものとして使っていこうという意見が出て、また、自然の中で動物が絶滅するんだったら、絶滅しないように保護をしていこうだとか、

環境を保護していこうというふうに、どんどんどんどん回して、自然なんかを壊すのをやめていこうというふうな意見が出ました。

――次は、動植物としての人間について発表させていただきます。人というのは自然の構成員として地球上に生存しています。しかし、日常自然から恩恵を受けているのにもかかわらず、自然の一部である私たち人間が、自然を壊すというのは、あまりにも自分勝手な行動ではないかと思います。そういうことから考えていくと、人というのは、自然から逸脱した存在ではないのだろうかという意見も出ました。いつも人は、自分ぐらい大丈夫と思ってゴミを捨ててみたり、環境に対して気を遣わないこともあると思うんですけど、そうやって、自然を破壊し続けるのではなくて、本当の共存共生というのは、今のとこ実現できてないと思うんですね。

さっきも発表したように、自然からはもらうもののほうが多い、返すものはほとんどないということで、自然の構成員としての人の役割というのを、もう一度考えて、それを実行に移していかなければならないのだはないかと考えました。

――クローン人間と人が共に生きるということについてなんですけど。まず、クローン人間が科学技術の上で可能かどうかというか、おそらくできると僕は思うんです。なぜかというと、やっぱり需要があるかぎり供給はあるし、どんな法律や倫理があっても、やっぱりそういう研究対象として、そそられる研究者も多いし、法の目をかいくぐって作ってしまう人もいると思うし、将来的には、クローン人間というのは存在することになってしまうと思うんですけども。

そうしたときに、じゃまず、クローン人間というのは、いったい人間なのかどうかを認めるかどうかというのが、やっぱり大きな問題になってくると思うんです。クローン人間というのは、やっぱり肉体のコピーであって、そのもとのクローンのもとになった人の精神のコピーというのはできないと思うんですよ。そう考えると、クローン人間というのは、肉体は同じ人が二つあるとしても、精神がぜんぜん別のものになるんだから、クローン人間ができたとしても、その人は、またぜんぜん別の人格を持った別の人間になるはずですよね。

だから、例えば、最愛の妻を失って、その妻のまったく同じ人を作りたいとか、自分の身体が、例えば、胃がガンになってしまったので、ガンになった胃を取り替えたいがために、クローン人間を作って、クローン人間の、その臓器を使って自分を治すというような需要があると思うんです。そういうのっていうのは、クローン人間は別の人格なんだから、別の人格を持った人間

の人権とかなんかそういうのを無視して、ただ自分のためにクローン人間を利用するっていうのは、そりゃ、まったくナンセンスというか、人を人として見てないというか、生命を生命として扱っていないという、なんか、そういうことになってしまうと思うので、なかなか難しいとは思うんです。

――ロボットについてなんですけど。今、アイボとかペットロボットっていうのが、増えてきてると思うんですけど、これから、どんどんそういうロボットと一緒に生活するということが増えるんじゃないかと思うんですね。

で、そういうアイボとかそういうのを可愛がっている人にとっては、たとえ、ロボットであっても、それは生きていると思う人がいるんじゃないかなというのがあって、ロボットの命の定義ってどういうものになるんだろうという話が出たりしたんですね。

それで、これから、どんどん技術とか進歩していったら、一家に一台ロボットがいて、朝起きたら、ごはんを作ってくれていたり、もしかしたら、起きるときでさえ起こしてくれたり、もう、洗濯もしてくれたり、掃除もしてくれたりっていう、そういうロボットが家庭の中に入ってくるようになるんじゃないかなっていう話が出たんですけど。

それって、人間が何もする必要がないから、ロボットの指示によって人間が動いて、なんか、人間がロボットに支配されるようになってしまうんではないかなとか。人間にできてロボットにできないことって何だろう、けっこうそういうのって少ないかもって、もしかしたら、ないかもとか、そういう話になって。でも、子どもを産むことができないんじゃないかっていったら、それは、また自分で、ヒーガシャン、ヒーガシャンっていって、自分で子どもじゃないなりに、作ったりもできるかもって、そういうふうな話にもなって。

じゃあ、ロボットには、人間ができないような危険な仕事とかもできるだろう。そしたら、危険なものを持たせることもできるだろう、銃とかなにとかそういうのを持たせることもできるだろう。でも、もし、その危険なものを持ったロボットが暴走してしまったら、ちゃんとマニュアル通りに働いてたらいいけど、そのマニュアルからはずれて故障したりして暴走してしまったら、もう、大変なこと危険なことになってしまうのではないかとか、そういう話が出たり、もし、ロボットに自我が芽生えたらどうなるかなっていって、支配されるどころか、もう、人間の後、地球を支配するのはロボットかもしれないとか、そういう話も出て、ロボットは、きっと、これから共に生きていくことになるとは思うんですけど、危険なことも伴うと思うんですね。進歩は止められないけど、うまく付き合わないと危険なことも起こりうるんじゃないかなっていう話になりました。

――続いて、ゴミと共に生きるということなんですけど。私たちが生活していく上で、ゴミというのは、どうしても出てしまうものだと思います。特に、今後の技術の開発とか発展に伴って、ますます廃棄物が増えていくことは確実だと思います。それらの廃棄物を、これからどういうふうに処理して、どういうふうにゴミと共に生きていく

のかということを考えたときに、今日、野尻先生がおっしゃっていたこともありますが、ゴミを減らしていくのは、もちろん、出すゴミを減らすのももちろんなんですが、それらをリサイクルしたりリユースしたりして、そういう再利用とか、限られた資源を有効に使うということを、もっと本気で考えていかないといけないと思います。

特に、プラスチックとか放射性物質とか、そういった人間が作り出したもので、自然に返っていかないようなものは、必ず、人間が責任を持って処理していかなければならないと思います。

さらに今、宇宙開発のほうも進歩が進んでいて、宇宙ゴミも増えています。出たゴミをどこに捨てるのかっていったら、宇宙とか、地球とか、かけがえのない自然の中にゴミを捨てていくような生活を、今、私たちは実際にしているっていうは大きな問題だと思います。ですから、このかけがえのない地球とか自然を、今より、より美しく保って、より美しくして、それらを未来の子どもたちに残していくこと、ゴミ処理問題について、もっと深く考えていくことっていうのは、人間の義務ではないかと思います。

――じゃあ、今までの3班と、ちょっと違った感じで話を進めてきておりまして、現実的に、私たちがこれから生きていく21世紀、30年後であったり50年後だったり、私たちが生きていく中で、実際に、何を共に生きているんだろうということを想定して、いろいろな話をしてました。で、これは逆に、何を共に生きてくかというのは、私たちの生活に何が大切なことであるかっていう意味でもあるのかなというふうにとらえているんですが。最後に、人の話をさせていただきたいと思います。

今日、野尻先生のお話で、神は人間を神の形に作られて、それゆえに、どんな人間でも尊いものであるという、大変、人間性の回復というところで、重みのあるお言葉をいただきまして、そうだねなんて話はしてたんですけれども。

じゃあ、実際、今の世の中を見てみて、例えば、いじめの問題であったり、殺人の問題であったり、そういうことで、人と違うということを認めない、排他的な形で人を追いやってしまうという現実があったり、あとは、世界のどこかで、宗教が違うから、民族が違うからということで、相手を目の前に存在している人間と認める前に、それじゃなくて、民族が違うとか宗教が違うから、この人は殺さなきゃいけない存在、そのかけがえのない存在として、あなたがいることよりも、もっとなにか他の理由で人を殺さなきゃいけないという悲しい現実がある、ということを話し合いました。そして、私たちが一緒に生きるということは、どういうことをしたらいいんだろうという話をしていたときに出てきたことは、やはり、一人ひとりの存在が、かけがえのない存在で、大変尊いものであるという認識を忘れてはいけないねということになりました。

そして、その自分と違う他人というのを、どうやって私たちが認めていくかということが、とても重要な課題になるかと思うんですけれども、一つには、相手の立場に立ってものごとをとらえてみること。二つ目

には、自分も大切にしてほしいぶん、相手の価値観も、相手の存在も大切に思うという心がけ、そして三つ目に、一人ひとりが違って、違う面を持ち合わせてるからこそ、この世の中は楽しいんだということを、声を大にして、もっと言っていいのではないか。すなわち、人間のそれぞれの多様性を認めて、それをお互いが尊ぶということが、これから、もっともっと、私たちは認識をして、自分たちも生きていきたいし、次の世代にも受け継いでいきたいことだねというふうに話し合いをしました。

――D班からは、生きること死ぬこと、共に生きるというテーマに、いろいろな意見が出てきました。人が誕生して2千年、地球が誕生してからが46億年ぐらいあるんですけれども、この微々たる2千年の期間で、人間を取り巻く環境は大きく変化したと思います。で、人間は、それらを基に考え方を変えてきたような気がするんですけれども、人間が接する対象に影響を与えてきた私たちは何が必要かと考えました。

――最後に締めということになるんですが、一番単純というか、一番結論的なこととして、人間関係、それから自然も考えていかないということで、こういう話題がきたのですが、ちょっと質問になるんですが、10秒間考えていただけますか。人間関係自然関係という中で、人間関係をよくするために、人間には何が必要か、10秒間考えていただけますか。

はい、これは、答えを聞いたらみんな違うと思うんですよ。だから、その分多様性ということも出てくると思うんですが、今、考えられた答えの中に共有することが絶対あると思うんです。それは、関係をよくするのは、思いやりというのを抜きにはできないですよね。いや、そんなん当たり前やないかと思うかもしれないですけど、自分がやられたら相手にするのはダメだと、自分がやってほしいことを相手にするべきだという考え方ね、こんな当たり前のようなことを、その社会秩序の大原則を、最近の人は、みな、ちょっと、あんまり意識してないんじゃないかと思うんです。

というのは、例えば、人を殺しちゃなんでいけないのか、と、こんな質問を思いやりから考えたら、殺されたら嫌やから殺したらダメっていう、即断即答ですよね。0.1秒で答えれますよね。でも、考えますよね、今の人間は。それは情報社会になって、どんどん情報、置き換えかねないものが頭の中を駆けめぐるわけですから、こんな一番基本となる大原則がどっか行ってしまったと、ね。分かっているんだけど、それが表にすぐには出てこないっていうのが問題ではないかと思うんです。だから、必ず、必要なものとして、この社会秩序の大原則、思いやりの心をもう一度見つめ直してみるべきではないかと思うんですね。以上でD班の発表を終わらしていただきます。(拍手)

深川　ありがとうございました。今のD班の発表で分かりにくい点があったら、ご質問ください。はい、どうぞ。

――こちらに、二つループしてる絵図があると思うんですけれども、下のほうは分かるとして、上側のほうの説明を、ちょっとしていただけ、もう少し整理していただければと思うんですけれども。

――下は分かるって言いはったんですけど、

自然からもらって、自然からもらったものを人間も返さないといけないということなんですけど、上のほうは、人間側が作ったものを、自然には返せないかもしれないけど、また、リサイクルをして、また再び人間が使おう。それをゴミとして処理をするんじゃなくて、もう一度何回も使おうっていう意味の、自然に戻せないものなんですね。だから、ここに自然がないんです。だから、ペットボトルであったりとかは、捨ててしまったら、それはゴミとなりますよね。でも、そうじゃなくて、それを、また再び人間が使えるものに戻そうという意味の上の循環型なんですけども。

深川　分かりましたか。今のでよろしいですか、はい。他にありますか。ございませんか。なければこれで終わります。ありがとうございました。(拍手)

フォーラム

深川　それではフォーラムを始めたいと思います。今、皆さん方からいろんな意見を頂戴いたしました。これを適当にコーディネートしなきゃならないんでありますが、どこから問題を取り出していくかは、おまかせいただきたいと思います。

で、D班から出ておりましたね、クローン人間の問題、これはいずれできるだろうというご意見でございました。クローン人間というのは、これはいったい人間と認めるのかどうか、D班からは、確か、これは肉体のコピーにすぎないんで、精神はないんじゃないかという意見が出てましたが、これについて皆さん方がどのようにお考えでしょうか、ご意見があったらおっしゃってください。

例えば、自分の細胞がですね、他人の卵子の中に埋め込まれる。そして他人の胎内でこれを分裂成長して、やがて自分とまったく同じ遺伝子を持った人間が誕生していく、それ、もう一歩のところまできているんでありますがね、そういう形で生まれてきた人間について、人間の個性とか自我とか、そういうものを変えずにおかないだろうし、こういうものに対して、このＲＹＬＡのテーマである、人間の尊厳というものは、どのように考えていくのかという問題ですが、ご意見ございますか。ありませんか。今の問題、難しそうなんでやめときます。(笑い) 答えが出てきませんから。

それではどうしましょう。こんな問題がございましたね、わずか１歳で死んでしまう赤ちゃんの命、それから100歳で死ぬ人の命、これ、100歳のほうが重みがあるという意見がございましたが、これについては、どうですか、どのようにお考えになりますか、はい。

――重みの話でさしてもらったんですけども、今、100歳のほうが重いというふうなのではなくて、赤ん坊、１歳なりで亡くなった人のほうが、それからの将来、可能性というものを考えたときに、赤ん坊のほうが重いと思われるということで話をさしていただきました。

深川　分かりました。今の趣旨ですが、どうですか、この問題、どのようにお考えに

なりますか。1歳で亡くなった人のほうが余命が長い、もし生きておったら、ずうっと長いこと生きられるんだ。100歳で死んだ人は、もうほとんど残ってないから、そこで死んだ命はたいしたことないんだということだろうと思うんでありますが、どうですか。(笑い) 命の尊厳の問題です。

——すごい極端なおっしゃり方をされたんですけど。私の、ひいおばあちゃんとひいじいちゃん、すごい長生きをして、102、97ぐらいで亡くなったんですね、そのときのお葬式のときに、やっぱり、悲しいんですけど、みんな、「じいさんも、よう頑張った」みたいな、なんていうたらいいのか分からないんですけどね、若くして亡くなって、みんなが悲しみにくれているじゃなくて、「よう頑張ったな、じいさんの人生、良かったな」みたいなのが、すごくあったので、そういうのもあるんじゃないかって。やっぱり、若くして亡くなった、例えば、ほんとに赤ちゃんが亡くなったときには、それだけ、みんな、ちょっと悔やまれる、というのがあるんじゃないかなという意見を出したんですけれども。

深川　そういう意味ですね、分かりました。ですから、よく、90歳とか100歳で亡くなられたら、おめでたいといって、赤飯炊いたりします。で、そういう意味、はい、分かりました。はい。他にご意見ございますか。はい、どうぞ。

——個人的な意見ではっきり言ったら、どっちをとるかっていうのは、まだ、ぜんぜん自分の中で結論が出てないんですよね。やっぱ、小さい子どもやったら、未来の可能性とか持ってるっていうのもあるし、逆に、100歳のオジンやったら、ご老人の方やったら、それまでの経験、いろんな経験を積み重ねてきた人生経験というのが、すごくあると思うんですね。もうそれも生かせないという、ぎりぎりで死んじゃうとかいう、もう何もしゃべれないとか、そういうんではない限り、やっぱ、それまでの経験というのも、すごく、重視したいなというのは個人的にあるんですよね。だから、はっきり言ったら、どちらとも言えないというのが、私の中での一つの意見です。

深川　命としては、同じく重みは変わらないという意味ですね、はい。今、二つに意見が分かれております。他に意見、ございますか、はい、どうぞ。

——聞いてて思ったんですけども。なんちゅうか、1歳でお亡くなりになったら悲しいです、すごく悲しいんですけども、それが重いことに、すごく、結び付いちゃってるきらいがあったので、ちょっと思ったんですけども、100歳でお亡くなりになり、大往生だといわれても、その場合は、ああ、よかったなあっていう、よう頑張った良かったという気持ちがあると思うんですよ。

で、その気持ちと、その、あいつ、早よ亡くなったっていうのは、一見、確かに、あいつ早よ亡くして可哀想やなって悔やまれる気持ちも大きいと思うんですけど、少し嬉しい気持ちというのと、悲しい気持ちというのは、そこの死ぬときにおいて、けっこう、相反で同じぐらいの割合じゃないかなと思うんです。結論から言うと、結局、どっちも同じって言いたいんですけども。

何でかという話なんですけど。悲しいだけが、そんな命が重い原因にはならないん

じゃないかなと思いまして、それで、さっき、うちの班で発表した分で、死んだあとに、死ぬけど、その人の気持ちが残る、次の人に。で、ずっと生き続けていくんだっていう話も意見であったんですよ。そういう意味で、1歳の方が亡くなった場合にみんなが残るものと、100歳の方が亡くなった場合でも、皆さんの心に残るっていうのは同じもんだと僕は思います。

深川　ありがとうございました。はい、どうぞ。

――死なんですけども、死は比べるもんじゃないと思います。それは、十人十色、いろいろ考え方があると思って、とりあえず、私の意見は、比べるもんじゃないと、どこに価値とか、というよりも、死という問題を考えたときに、生きるということを考える前提として死があったり。ともかくも、人前で、あの死はおかしい、あの、例えば、自殺した人の死を、なんか、けなすようなことは言うべきじゃないと思うんです。というのが、人、それぞれ十人十色って……。

深川　結論を簡単におっしゃってください。要するに人の命にね、1歳の人の命と、命に重みがあるかどうかだけおっしゃっていただいたらいいです。

――命の重みはあると思うんですけど、人の死という言葉の中に、精神的な死と物理的な死というのがあると思うんです。で、そのへんを、どうとらえていくってというのが、今回、こっちへテーマへ投げかけられたんですけども、そういうのも、ちょっと気にしてるやつがおったというのを覚えといてほしいと思います。以上です。

深川　ありがとうございました。他にご意見ございますか。はい、どうぞ。

――その命の重さというのは、うちの班でも、みんなに聞いたんです。さっき、命は基本的に比べるもんじゃないという意見も、そのときに出たんです。私が出したたとえは、1本のレールを電車が走っていて、それが途中で2車線に分かれるんですね。いつも通っているほうの車線を走ろうとしたら、おばあさんがうば車を引いてゆっくり渡ってるのが見えたんですね。今すぐブレーキを踏んでも、おばあちゃんが助かる確率はほとんどゼロに等しい。急いで反対側の車線にハンドルを切ったら、こんどは、おばあちゃんとほぼ同じ位置に子どもが4人、線路の周りの石を積み上げて遊んでたんですね。で、あなたがもし、その電車の運転士だったら、どちらに行きますかって。で、たいていの人は、おばあちゃんのほうって言ったんですね。それは、今、命の重さというのに関わってくるのかなって思うんです。

じゃあ、今度は、よく昔から出されるたとえだと思うんですけど、自分が旦那として妻と子ども、どっちかが死んでしまうっていう、そういう立場に立ったときに、あなたは妻を助けますか子どもを助けますかっていう質問もしたんですね。そのときに、子どもを助けるという人と、妻を助けるという人が分かれたんです。妻を助けたら、また子どもを作ることはできる。でも、妻を失ったら、子どもは手元に残るけど、妻は二度と返ってこない。

そのときに、うちの班の一人の方が、妻を助けるか子どもを助けるか、そのときにならないと分からないけど、もし、妻を助

けたら、子どももできて普通の家族が構成されるかもしれないけれども、妻と自分の間で「なんで、あのとき、子どもを助けなかったの」っていう、そういうギクシャクした関係が生まれるじゃないかなっていう話を聞いたんですね。

で、そのときに、うちの班でみんなで考えたの、観覧車にも関係あると思うんですけど、基本的に、命っていうのは、お年寄りが亡くなっても、子どもがたとえ生まれてほんの一瞬の間に亡くなったとしても、重さは同じだ。でも、残された人が考えたときに、あの子はそのプワプワしたものっていうのを、これからずっと生きていったら、すっごい大勢の人に会って、すっごいいっぱいもらって、それをまた、いろんな人に分け与えられたかもしれない。なのに、それをする間がなく亡くなってしまった。で、お年寄りは、今までいろんなものをもらって、で、もちろん、いろんな人にいろんなものを分け与えてきた。そう考えたときに、命の重さっていうもので比べるんじゃなくて、その人が、今まで生きてきた充実感というのを、やっぱりみんな求めてると思うんですよ。それを、その子が早く亡くなってしまったために、得られなかったっていうのが、周りの人が辛いって感じることであって、たとえ、命の重さが重いとか軽いとか、そういうことじゃなくって、みんなが求めてるものを求められなかったっていうことに対する悲しみなんじゃないかなっていうふうに、今、聞いてて思ったんです。

深川　結論的には、命に重さ（重さはないと思います）軽さはないということですね。個人の受け取る悲しみの度合いは違うかもしれないという意味ですね。人によって違うという意味じゃないんですか。ま、人が死んで喜ぶ人はいないだろうと思いますが。

――はい、どう言ったらいいんでしょうね。とらえ方の違い……。そのときに、悲しいって感じる原因は何かなって思ったときに、命の重さに対することじゃなくって、そういう経験を十分にさしてやれなかったなっていう、そういう思いを感じるんじゃないかなって。

深川　私、ちょっと、先ほど聞き漏らしたんですが、おばあちゃんが、線路で汽車で引かれかかって、片っ方で４人の子どもがおるとおっしゃってました、あの関係、結局どうなったんですか。（笑い）

――基本的に、どう思いますかというふうに、簡単にしかアンケートを取ってなかったんですけど、どちらが正しいとか、悪いとか、そういうのじゃなくって、みんなの意見が知りたくって聞いたんですね。で、たいていの人は、やっぱり子どもが将来があるんだからっていうふうにとって、人数的には子どもが、

深川　はい、分かりました。ありがとうございました。皆さん、だいたいご意見お分かりになったと思いますが、他に、ございますか。はい、どうぞ。

――うちの班は、医療に関わる人が多くて、僕も、今、医大のほうで勉強してて、けっこう、亡くなった方とか見るんですけど、例えば、急患で１歳の赤ちゃんと、老人の方が交通事故で急患で運ばれて来ますよね、助かる確率が、例えば、同じぐらいでどっちか一人しか助けられないとかってときに

が当然出てきますね。そういう場面で、例えば、命の重さはないっていうのは、僕も確かにそう思うんですよ。なんか、ほんとに、神様は人の上に人はないだろうし、人の下に人を作ってないというのは、ほんと、それはもうごもっともなんですけど、実際現役の医者の人とか、看護婦の方や、福祉に関わってる方っていうのは、やっぱり、その命の選択をしなきゃいけない場面に出くすことがあると思うんですよ。

そういうときに、そういうジレンマというか、二人とも助けることができなかったら、どっちかを選ばなきゃいけないということが、出てきちゃうと思うんですよ。そういう場面で、苦しむと思うんで、なんかもう、僕も悩むんかなとか思ったり。

深川　ありがとうございました。今、おっしゃってるのは、どちらを助けるべきかという問題であって、これ、昔、ギリシャの哲学者で、カルネアデスという人がいて、ひとつの問題を出すんです。大海原でね、船が難破しましてね、二人の人間と一枚の板切れが放り出される。その板切れはね、二人がつかむと沈むんです。しかし、一人だけがつかまるんであれば、それは浮いて助かるわけですね。そのときに、自分を犠牲にして、その他人に板切れを与えて、自分が海に沈むのが正しいのか、あるいは、他人を押し退けて自分がその板切れにつかまって助かるのが正しいのか、どっちだっていう問題を出したんです。

で、それに対してね、カルネアデスはですね、確かに、この自分の命を犠牲にして、そして、人を助けるのは、それは正しいかもしれない。しかし、それは愚かなことだと言った。そういう例が一つありますね。それなんかとパラレルに考えていただければ、一つの解答が出るかもしれない。

（録音不調のため女性の発言が聴取不能）

深川　議論は、他になければ、次の議論に移りますが。今、人間の命の大切さということの議論が出ておりますけれども、じゃあ、例えば、医学がどんどんどんどん進歩していきます。そのときに、その医学の進歩の陰に、何千万、何億というモルモットや実験動物の命が犠牲にされていきますね。それをいったい、どう考えるのか、人間の幸せのためであればね、モルモットや実験動物の命なんて犠牲にしてもいいと考えるのか。

これも一つの考え方だと思う。しかし、やっぱり、実験動物にしてもモルモットにしても、神様から与えられた命を持ってる以上ですね、その命を奪うっていうのは、やっぱり、罪じゃないのか。もし、それが罪だとすればですね、その罪は、いったい、どこで誰が償うかという問題が出てまいりますね。このへんのところ、皆さん、どうお考えですか。

これは人間以外の命。先ほどから共生とか、共存とかいう言葉が出てきております。人間だけが幸せであればいいのかっていう問題です。先ほど、ゴミとの共生ということも出てきましたね。そのときに、こういう実験動物とかモルモット、動物の命、それから植物だって、命持ってます。で、そういうものとの人間の命との関係をどう考えるのか。はい、どうぞ。

――それを言っていたら、たぶん、お肉とかも、きっと食べれないだと思うし、医療

とかいう問題だけじゃない。だから、植物にも命があるといい初めたら、きっと僕らも生きてないだろうし、その植物を食べてる動物も生きてない。だから、共倒れだと思うから、それは、食物連鎖のほうでなってると思うんです。

で、医療のほうなんですけど、医療のほうは、たぶん、それも、はたから見たら悪いことなのかもしれないけど、ただ、人間の医療の発展とか、自分らが、困っとう人を見たときに、どう対応していくかということで、多少の犠牲がついてくるんだと思うんです。

ただ、その人たちが、それをないがしろにしてるんじゃなくて、そのことに感謝していることも、きっと、変わらないだろうし、ムダ死にさしているわけじゃないと思うんです。以上です。

深川　ありがとうございます。ほかに何かございますか。今の問題について。はい、どうぞ。

――基本的に、先ほどの彼が言った意見に近いようなものがあると思うんですけれども。肉や魚をわれわれは食べてますよね。ということは、牛とか家畜ですよね、その、魚の命を奪ってるわけですよね。今回この余島に来て、私たちBグループの何人かで釣りに行ったんですけども、命の尊厳といってる中で、釣りをやって、その魚の命を取ってわけですよね。ま、それは、やっぱり、人間が生きる上できちんと食べさしていただくので、それはもうありがたいことだと思うんですけど、そういったものと同じように、医学の発展のために、モルモットとか実験動物が使われると思うんですけれども、やっぱり、そういうもの、そういう動物の命のお陰で、今日の人間の命が成り立ってるんだというのを忘れないようにしなきゃいけないと思うし、それと、極力、そういう方向になってるらしいという話は聞くんですけども、できるだけ、モルモットを使わない代替の実験ができるような工夫というのは、怠るべきではないと思います。

深川　ありがとうございました。他にございますか。医学部の出身の方、いらっしゃいますか、あなた、そうね。例えば、モルモットなんかを殺さざるを得ない、で、結局、お医者さんが、そういうモルモットの命のために供養をなさってるということを聞いたんですが、そういうこと。あったら教えてください。

――大学のほうで、動物を使った実験の授業があって、イヌとかサルとかを実際解剖する授業もあるし、あと、病院のほうで亡くなられた方たちで、うちの大学では白菊会っていうんですけど、献体を、死んだあとに医療の発展のために、解剖の実習用に使ってくださいっていう会があって、亡くなると献体をしてくださったりするんですよ、そういうのに対して、例えば、動物の犠牲とかに対しては、やっぱ、必要最低限というのは、言葉悪いんですけど、仕方がないと思うんですよ。

なんでかと言うと、やっぱり人が困って死にかけてる人を助ける手段が何かって考えるのは、ごく自然の考えで、それを達成するために、動物やいろんなものに犠牲になってもらうというのは、必要最低限は必要だと思うんですよ。ただ、間違えちゃい

けないのは、その犠牲になってくれたものたちに対する感謝の気持ちっていうのを忘れちゃいけないと思うんです。

大学のほうでも、1年に1回なんですけど、慰霊碑が立っていて、動物とご献体いただいた方のご遺体に対して、感謝の気持ちを含めて慰霊祭というのを行ってるんです。

深川　ありがとうございました。この問題は、結局は宗教の域に入っていきますが、これはこの程度にしておきます。

観覧車の例が出てましたね。B班ですか。あれで、観覧車でぐるっと一回回って、はい、さようならっていうことになっておったんでありますが、この命っていうのは、どうなんですかね、人間が生まれてから死んだときに命が終わるとお考えですか。

――私たちの考えを、まず先に言いますね。死ぬことっていうのは、イコール生きることじゃないかなっていうふうに考えたんですね。その、死ぬことっていうのは、物理的な死、精神的な死があると思うんですよ。それで、その、物理的に人がご臨終ですって言われたときに、物理的な死が訪れますよね。そこから、人の中で、また、残された人の中で生き続けているんじゃないかな。精神的な死っていうのは、自分のことを、この人とこういうことがあったな、この人がこういうことを言ってたな、そういうような思い出ですよね、そういう、亡くなった方が残してくれたものというのを、ここにいるみんなが忘れちゃったときが、精神的な死じゃないかなって考えたんですね。

だから、このサークルは、いちおう、生から死、物理的に言う生から死を一サイクルとして考えて、で、このサークルは、その間に共に生きるということを、どうも、言葉で言い表すのは難しいから、図で表しましょうということで、その、私たちが考えた、死ぬことイコール生きることなんじゃないかなというのは、その発表の冒頭で話したんですけど、はい。

深川　ありがとうございます。そうしたら、精神的な死っていうのは、死んだ人の死じゃなくて、その周りの人が、その人のことを忘れたときに精神的な死があるって、そういうふうに理解していいんですか。（はい）分かりました。それじゃあ、その、生っていうのはね、命っていうのは、いつから始まるんでしょう。生まれたときに命ができるんですか。

――私、豊岡というところに、妻一人と子ども一人、置いてきました。ちょっと、今日も地震があったので心配なんですが、子どもの命、やはり、生まれたときからだと思います。

深川　生まれたときから命が始まる。他にこの点について、いや、そうじゃないだろうという意見があったら、お伺いしたいんです。はい、どうぞ。

――私は、おなかの中に宿ったときから、子どもの命はあると思う。

深川　ああ、おなかの中に宿ったときから命が始まった、こういう考え方も出てきました。他にご意見ございますか。

――言い方が悪かったんですけれども、生まれたときっていうのは、おなかの中に宿ったとき。

深川　意見が一つになりました。（笑い）

そのほかに意見ありますか、命っていうのは、おなかに宿ったときから命が始まりますか。そうじゃないっていう意見があったら、おっしゃってください。

――失礼します。少し仏教的な思想になってしまうんでどうかと思うんですけども。今の自分の命っていうのは、何百年、何千年前からの魂が生きてて、たまたま、今の自分の仮の宿りとして、この肉体に宿っているだけで、私の命が尽きたとしても、魂だけは、また輪廻転生という、次また生まれかわるために生き続けていくという考えを持っています。

深川　ありがとうございました。ちょっと変わった意見が出てまいりましたが私の意見を申し上げておきます。

命っていうのはね、私の考え方はちょっと違うんです。私の命っていうのは、私の父親が亡くなった後で、私が生まれたわけではありません。私が生まれてるっていうのは、私の父の精子がですね、母の卵子とくっ着いて、そして一個の細胞ができます。それから私が生まれてくる。ということは、父の命と私の命は、それでつながってるわけでしょ。そして、両親の命は、じいさんばあさんの体内に、親父とお袋の命が宿って、それがまた生まれてきてる。このように、ずうっと遡っていきますとね、命っていうのは、一回も断ちきれたことなくですね、連綿と続いていく。

私の先祖は、両親で、その前はじいちゃんばあちゃん、その前は、どんどんどんどん遡っていったら、結局はおサルさんの世界だ、あるいは、魚の世界で、最後は、海草の世界で、遡って、結局はどこへ行くのかといったら、何か分からない。生命というものの根源があって、そっから連綿として、ずっと続いてきいておる。だから、私の命ってのは、それから、また、私の子孫につながっていきますから、命そのものは、一回も断ち切れたことじゃないな。しかし、生とか死というのは、人間の肉体が死んだり生きたりするけど、人間の命は連綿と続いておる、そういう理解をしております。これは、いや、そうじゃないという意見があったら、また、教えてください。

だから故に、先ほど出てましたですね、C班で命は平等でも人間は平等ではない、命の重さということを言ってました。命の重さって、なぜ命が重いのかっていう、連綿と続いてきた、そういう命であるから、一回たりとも断ち切れたことない命だからこそ尊いのであって、命の尊厳というものであるし、そして、命の重さというものがあると思いますね。そのへんのとこだけ心に留めておいていただけたらと思います。

他に、この大統領の命とＳＰの命とは、ちょっと違うっていう意見があったんですが、これはどうですか。C班ですね。それについて他の班から、いやそうじゃないぞっていう意見があったら教えてください。はい、どうぞ。

――基本的にというか、命というのは、大統領であろうがＳＰであろうが同じだと思います。ただ、その命を懸けるところが違うだけっじゃないかな。大統領は大統領で、また、命と自分の命を懸けなければならないときが、また来るだろうし、ＳＰはＳＰで、大統領が危なくなったときに、そこに命を懸ける、ただ、命を懸ける差だけで、

命の重さ自体に何の変わりはないような気がします。

深川　役割の問題だということですね。ＳＰと大統領と、そういう意味ですね。他に何かございますか。特になければテーマを変えます。安平先生、なんかありませんか、問いかけがあったら出してください。

そしたら、臓器移植の問題、皆さんご存じだと思うんですが、今日、お医者さんの方もおられるけれども、臓器を提供した人は死んでしまうんですね。だけども臓器だけ生き残ってる、そういう死っていうものが出てきた。こういう死に方っていうのは、かってなかったと思う。臓器を提供した人は死んでしまうんだけれども、提供された臓器は、他人の体内で生き残ってるっていうことでしょ。これについて、どのように考えるのか。臓器を貰った側の命の尊厳とか、それから、臓器を与えて死んだ人の、その人間の尊厳、命の尊厳。そういう死に方が、いったい、いいのかどうかっていう問題が一つあるだろうと思うんですが、いかがですか。はい、どうぞ。

――私の個人的な意見なんですけど、もし、私が脳死の状態であったら、何も、話も分からない、しゃべれないし、動けないし、寝れないしとい感じだったら、私は臓器を提供してもいいと思ってるんです。死んでしまっても、もしその、提供を受けた人の中で生きられるんだったら、その部分が生きているんだったら、それも、また、いいんじゃないかなと私は思ってます。

深川　ありがとうございました。他に意見ございますか。はい、どうぞ。

――臓器移植についてなんですけど、私も、臓器の提供カードみたいなのを私は貰ったんですけど、自分が脳死の立場やったら、私も、さっき言った彼女と同じように提供はしてもいいと思ってます。なぜかと言うと、確かに、自分が臓器を提供することによって、例えば、その提供する部所とか、できるものとかの数とかになると思うんですけど、ま、自分一人の臓器で、何人もの人の命が助かるなら、それは、あげたいと思うし、まあ、これは結果とつながるんですけど、臓器は、そのあげた人の中で確かに生きてる。けど、やっぱり、自分の周りにいる人の中で、自分が、さっきもうちの班が言ってたんですけど、精神的に心のどっかで生きているのなら同じことだから、臓器を提供してなくても、したとしても、周りの人の中で自分が、そうやって思ってもらえてるっていうのなら、それはいいと思うんで、私は、提供してもいいと思います。

深川　ありがとうございます。他にございますか。臓器移植の問題、はい、どうぞ。

――私は、大学生のときのサークルの顧問の方だったんですけれども、45歳でとてもアクティブな方で、沖ノ島マラソンに出るって、マラソンの練習中に突然倒れられて、そのまま植物人間になられて、１週間後ぐらいに臓器移植されるということで、亡くなられました。

その方、いつも、大変私たちのクラブを可愛がってもらってたので、みんな、信じられなかったんですけれども、最後にその方が、その方の命を次の方にあげられて、その人の愛を与えてらっしゃったんだなということで、まあその方らしい人生の終わ

り方だったんだねっていう、なんとなく納得できたような、納得できなかったようなということがありました。

で、私自身も、誰かの役に立てるんだったらという思う反面、実際、自分の家族とか、私の周りの人が、実際脳死の段階になってドナーカードを持っていて、どうされますかって言われたときに、その人の死を、やっぱりどこかで認めなきゃいけない。その、本人は、それで喜ぶと思うんだけれども、私の気持ちは、どこでどういうふうに、決断をするのかなという、そういったことで、実際ドナーとなられた方の家族の方の苦悩であったりとかというのを、ときどきテレビで聞いたりなんかして、ほんとに、人の命に対する価値観とかいうのは、すごく複雑っていうか、いろいろ考えてしまうなっていうふうに思います。

深川　ありがとうございました。おそらく、今のご意見は納得できるような納得できないようなとおっしゃいました。それが人間の本性かもしれません。要するに、臓器移植の問題は、ひとつ間違えますと、臓器というものから個性とか自我とかを奪ってしまって、要するに交換のきくモノにしてしまうという、そういう考え方に発展するおそれもあるわけです。私の臓器であろうが、誰の臓器であろうが、とにかく、臓器は臓器なんだという考え方につらなっていくだろうと思うんであります。そういうありようというものを、やっぱり、人間は変えていくんじゃないかなという問題が、ひとつ出てくるだろうと思いますね。しかし、この問題については、大変、いろんな問題があるだろうと思いますから、もし、他の考えがある方があったら、おっしゃってください。

それじゃあ、若干問題を変えます。これはアメリカの例です。これは医学部の方はご存じかもしれませんが、脊髄移植の問題があります。脊髄移植でですね、できるだけ小さい子どもの脊髄がいいというのですね、子どもはぜんぜんほしくないんだけれども、脊髄移植用の子どもを妊娠するという問題が発生しております。こういう問題については、どうお考えですか。人権問題もからんでると思うんですが。ご意見があったら、おっしゃってください。どんな意見でも結構です。医学部の方、何かありませんか。はい、どうぞ。

――医学部ではないので申し訳ないんですけども、観覧車のチームでして。私が最初に提案した原案では、生まれた状態では空っぽで、親からたくさんのこういうものをもらうんだと言ってたんですね。でも、さっき出ました、生まれたことで親に与えられるものがある、それが、まず一つ覚えてもらいたいんで。今、おっしゃった、脊髄を提供するために生まれてきた子、その子は、普通だったら空っぽだったかもしれない子が大半なのに、その子はすでにあげるものを抱えて生まれてきた子っていうので、役割ありましたよね、それでまた、そのＳＰの人か大統領か、それぞれ役割として、生き甲斐、懸けるもの、自分が命を懸けるものというか、もう、その子どもは、それを持って生まれてきた子だなというのが、私の第一印象です。

深川　ありがとうございます。他にありますか、ご意見。

——僕も医学部じゃないですけども、そのへん、いろいろ聞いたことがあったんで、ちょっと述べさしていただきたいと思うんですけども。

確か、骨髄移植っていうのは、兄弟ほど型が一致する確率が高いんですよね、だから妊娠させて、子どもを作ったとしても、ひょっとしたら型が違うかもしれない。だから、ひょっとしたら子どもを産んだとしても、言葉は悪いようですが、使いものにならないかもしれない。まあ、そういったときに、その母親というか、家族が、その子に対して、どれだけ愛情を注げるかという、そこが、その大きなポイントになってくると思うんですね。

で、そういう、骨髄移植がしたいからっていうんで、子どもを作っちゃうっていうのは、あまり勧められる話じゃないと思います。ただし、どうしても、子どもを生かしたいという親のことを考えると、やむをえないんだとかいいますよね、だから、別に、その骨髄移植をしたから、移植で骨髄をもらったからといって、その子が死ぬわけじゃないんで、どれだけ愛情が注げるか、そこに尽きてくるんじゃないかなという気がします。

深川　なるほど、なるほど。愛情の問題ですね、一言で言えば、結局。どうぞ。

——愛情の問題ということで、お話したいんです。この場合、やはり、その子どもを望むときの理由というものが、骨髄である前提で話があったと思うんで、その子どもに対する愛情というものをかけてあげられる可能性というのが、すごく普通の場合より低い。仮に、型が合わない子が生まれてきて、その生まれる子が、親とかも、骨髄移植の対象となるのかなと思うんですけど、兄弟のためだけじゃなくて。例えばそうなると、もし、型が違って生まれてきたことによって、母親には、なんか残るだろうし、子どももそれを感じるだろうし、例えば、物心ついたときに、僕は生まれてきたけども、お兄ちゃん助けるために生まれてきたのに助けられなかったとか、何か感じる。僕としては、そういう可能性がかなり、リスクとして、子どもの人生に対するリスクっていうのが、すごく高いように思うんで、そういうふうなことを考えると、反対側の立場を取りたいなと思います。

深川　ありがとうございます。

——どれだけ愛情を持ってという話が、そりゃまとめればそうなんですけれども、私も積極的には肯定はしてません。だから、やりなさいとは言えないんですけども、親の思いとか、その子の現状とか、そのあと赤ちゃんのことですね、そのトータルのことを考えたときに、赤ちゃんを殺すというわけでもないんで、積極的には肯定はできないけれども、やむを得ないなという、そのギリギリのところだとは思います。

深川　ありがとうございます。他にね、こういう脊髄移植なんてのは人権上許されないとかね、納得できないというようなご意見はございますか。今、やむを得ないというような意見が出てるんです。

——私たちの班でクローン人間の話が出たときに、ちょうど、この話から始まったんです。私の個人的な考え方としましては、野尻先生もおっしゃってたんですけれども、純粋医学であるかということと、あと、医

学の倫理観ていう、あと生命倫理っていうのがすごい関わってくるかと思うんです。例えば、やはり、何かをリプレイスするための何かがほしくて、子どもを作るっていうのが、やっぱり、倫理的には、なかなか私たちは認めにくいと思うんですよ。

で、じゃあ、クローンがビジネスベースになって、需要があるから供給があるということで、そしたら、例えばそのクローン人間ができるようになって、じゃあ、それ、17歳の子のクローン人間を作って、その骨髄性の病気やったら、小ちゃいときのものを使えば大丈夫ということで、それが許されるかどうかというのも、臓器売買とかも、いろんな、お金で人間の命を計っていいのかというのにも、すごい関わってくるかなというふうに思うんですが。

そこで、やっぱり、これは、すごく難しい問題で何とも言えないんですが、先端技術としての医療科学を、どこまで私たちが、目的とその手段として、私たちの幸福のために使うということは前提なんですけども、やはり、それを目的、純粋医学としての目的だけの追及になってしまったら怖いなというのと、いろんな分野の倫理観というのと、照らし合わせて、まあ、日本なんかは、比較的そういう、医療ビジネスに対して、比較的、まだ規制が強くて、まだ考える余地があるということでなってるので、もっともっと考えていったらいいのではないかなというふうに、私は思います。

深川　ありがとうございました。難しい問題だと思いますが、結論は初め申し上げましたように、出す必要はございません。いろんな、できるだけいろんな意見を出していただいて、皆さん方が取るものは取り、捨てるものは捨てていただいたらいいんでありますが。他に、何かございましたら。はい、どうぞ。

――最初に聞きたいんですけど、脊髄移植は死なないんですかね、初め、僕、死ぬんかなと思って、考えてたんですけど、取られて生きるんだったら、まあエエかなという気も思ったんですが、初め思っのたが、小ちゃい子がそのために生まれるということでとらえて、それはどうかという話なんですけども、子どもの意志が、やっぱり、ちょっと気になって。小っちゃい出てきた子の意志をまったく無視してるってのは、自分は、ちょっと辛いなと思うんですよ。なぜかと言うと、自分がもしその子やったら嫌ですから。結局、その誰々さんを生かすために生まれたんやでと言われたら、そうとうショックやと思うんですよ。そのために生まれたと言われると、何のために生きるかとか。それが、いきなり、あんたはその人を生かすために生まれてきたと言われたら、じゃあ、今から生きる意味ないやん、みたいな感じで、すごいショックやなと思うんですよ。だから、答え、ちょっと出ないんですけど、自分としては、もし、自分がそいつだったら嫌です。

深川　倫理的には認めたくないということですよね。はい、分かりました。他に何かあったか。はい、どうぞ。

――授業のグループ学習で調べたときの意見ですけど。さっきの臓器移植にしても、他人様の臓器をいただいてくるわけだし、他人様っていうか、身内の方のをもらうというのは間違ってると、僕は思うんですよ。

例えば、脳死にしても、脳死をした人本人だけじゃなくて、さっきも言われたと思うんですけど、死の受容を、周りの家族の方が死の受容をはたしてできるのかっていうのがあって。ただ、その、脳死の人がいて、そこから臓器持ってくわけですよね。それをまず耐えられるかというので、特にアメリカっていうのは銃社会だから、けっこう脳死者が出て、臓器移植が頻繁に行われてるんですけど、そういうときに、けっこう、家族の方が、死の受容ができなくて、けっこう、カウンセラーの方に相談されるケースも多いとか。そういうのを見てると、やっぱり、僕は反対なんです。

あとは、クローン人間というのは、ほんとにクローン人間の身体、ボンて作っちゃうんですけど、そうじゃなくて、赤ちゃんとかの細胞っていうのは、あらゆる臓器になれるんです、耳とか鼻とか心臓とかに、あらゆる臓器になり得る細胞っていうのが身体の中に残ってて、おとなになっても、それを使って、臓器の一部だけを作るということも、実際問題、行われてて可能なんですよ。例えば、ネズミの背中に、耳の細胞を移植すると、ネズミの背中に人間の耳ができるんですよ、こうやって。実際そういうのがあるんですよ。

そういうのも、確かに倫理的には問題があると思うんですけど、僕の個人的な意見だと、脳死の人の臓器を使ったり、さっきの脊髄の話をするぐらいになったら、もっと人工臓器なり、クローン人間を作るっていうのは問題があるんですけど、臓器をモノとして見るのが間違えてるという意見があると、僕もちょっと何とも言えないんですけど、そういう、臓器移植をするぐらいだったら、もっと、人工臓器なり、一部の臓器だけを自分の細胞から自分の臓器を作るっていうのはどうだか知らないけど、そういうふうにしたほうがいいんじゃないかなと思ってます。

深川　ありがとうございました。それじゃあ、人工授精の問題でね、その、試験管の中で人工授精をして、それを他人のおなかの中で産んでもらって、そして、それを我が子にすると、そういう例がありますが、しかし、これ、産んだ女性も、初めは自分のお金のために、産み落とすわけですけれども、あとで、親子の情愛が移ってきて、悲惨な法廷闘争に発展していくというような例もあるわけでありますが、こういう場合に、赤の他人の子どもを産むっていう、そういう、昔、かってこういう出産の仕方があったかというと、はなはだ疑問にも思いますし、それから、赤の他人の胎内で育って生まれ出てくる、こういう誕生の仕方もなかったわけでありますね。

こういうものについて、皆さん方、どのようにお考えでしょうか、ご意見があったら、おっしゃってください。ああ、そんな考え方もあったかなという、俺は反対だと思われたら、それでもよろしゅうございますし。意見があったら、おっしゃってください。まったく赤の他人の子どもを産むわけでありますね。それを自分の子どもとして育てる。で、これを人間の尊厳の問題として考えたときに、そういう誕生の仕方、そういう出産の仕方がいいのかどうかという問題ですが。ロータリアンの方、もしあったらしゃべってください。

――ちょっと、質問とは違う点からなんですけれども。以前、私は親といろんな事情で暮らせない子どもたちを、保護者代わりに面倒をみる児童養護施設で半年ほど職員として働く機会に恵まれました。

そのときに感じたことが、親になるということは、ほんとにすごいことなんだなと思うのと同時に、こんなにかわいい子どもたちを間近に見れない親がかわいそうと思う反面、ほんとに子どもたちがかわいそうだなというのもあったんですが。ほんとに自分の子どものように可愛いくてしょうがないという楽しい日々でした。

で、人工授精とかって考えたときに、ちょっと漠然とした考えなんですけれども、どうして、そこまでして、自分の遺伝子を持った子どもがほしいのかなっていうのが一つあります。

で、例えば、愛情をかけて、子どもが好きであれば、愛情をもっと注いであげてもいい子どもたちがたくさんいるわけで、養子縁組をして育てるということもありうるし、例えば、アメリカであったり、カナダであったり、また、養子ということがビジネスで成り立っちゃってる変なところもあるんですが。他の子どもを自分の子どもとして育てるっていうチョイスもあるんだなと思って、そういういろんな子どもの持ち方というのが、ちょっと今、頭の中に浮かんで……。

深川　いいですよ、はい。ありがとうございます。他に何かございますか、はい、どうぞ。

――今の、この人工授精の問題にしてもそうですし、先ほどから出ておりました臓器移植とか、いろんなことに対して、朝の講義で、野尻先生の話でも、少しあったと思うんですけど、非常に贅沢になりすぎて、すべてのものを望んでほしがる。で、実際、自分自身とか自分の身内が、病気で死ぬようなときに、やっぱり、臓器がほしいと思うかもわかりませんけども、その、贅沢に通常、自然以外のことでいろいろする必要までないんじゃないかというふうに思います。

深川　ありがとうございます。安平先生、なんかありますか。

安平　深川先生が今おっしゃってるのは、いわゆる、サロゲットマザーというやつですよね。要するに、まったく他人の女性に、試験管で受精した胚といいますかね、細胞分裂を始めた段階の胚を移植して、それで子どもを作ってもらう。それで、産んでもらって、その子どもを引き取るという、こういうのが、今、日本ではそんなことできませんので、アメリカへ行って、1千万とかいうようなことで、お金をかけてまで、まったく他人の女性に子どもを産んでもらうというふうなことがあるわけで、そういうことについて、倫理的にどう考えるのか、そういうことが許されるのかどうか、そういうご質問なんですね。そういう観点で、ご意見いただいたらいいかと思いますが。

深川　特にありませんか。

――私、先ほども言いましたけど、妻一筋なんですけども、（笑い）先程の移植の関係もそうなんですが、おなかの中におるときから、観覧車のプワンプワンという表現やったかな、あの赤い玉、おなかの中におるときから、姓名判断の本を読んだりして、

名前を決めたりして、何センチあるんか分からないですけど、おなかに話しかけるんですね、そういうようなプワンプワンとしたもんがありまして、それが、生まれてきて、それを提供したとしても、提供したから、もう死んでくれとなんて思わない。それはそれでかわいいもんですから、大切に育てていくと思います。あと、妻一筋っていうのは、他の女性から、私は産んでほしくないなと思ったから、それを伝えたかったです。

深川　ありがとうございました。他にありますか。それじゃあね、藤井先生がおっしゃってた、出産する前にね、検診をして、それが障害児だっていうことが、おなかの中で分かった。それを堕胎してしまうという問題を出しておられたんですが、どうお考えですか。いろんな考え方があるかと思いますが。はい、どうぞ。

――私、一時ベストセラーになった「五体不満足」という本を読んだんですけども、彼の障害はたぶん皆さんご存じやと思うんです。彼の親が彼を産んだときに言うた一言は、「なんてかわいい子なんでしょ」そこから、今のテーマは考えてもらえたらなと、僕は思います。以上です。

深川　ありがとうございます。はい、どうぞ。

――さっき、そこの時点から考えてほしいっておっしゃって、今、ふっと浮かんだんですけど。生きてから、その子が、その障害によって不幸になるんだったら、生まれてこないほうがいいのかなっていう時点で、一番初めに障害児だって思ったときに、親は考えると思うんですよ。

でも、そう考えたときに、障害を持つことが不幸なんじゃなくて、その、障害を持ってるって思うことを自分で卑下するのが不幸なんじゃないかな、周りもそうですけど。今、発表の中で、A班の人ですね。障害を持ってる人が、この障害を持ってるから、他の人に伝えてあげれることができる、そういうふうに本人自身が思えるように、周りがサポートするのも大切だし、本人も、生きることっていうのを、もちろん、障害を持ってるって思ったときに、たぶん、すごく考えると思うんですけど、その時点で、プラスのほうに、自分が生きてきてよかったんだと思えるように、周りがサポートして、それで、本人も一生懸命プラスで考えて、そういうふうに考えたら、おなかにいる時点に幸か不幸かというんじゃなくて、産みおとした後に、その人が、幸、不幸、どっちに分かれるか、幸のほうに生きれるように、そういうふうにしていくほうが大切なんじゃないかなと思います。

深川　あの、生まれてから考えるということですか。

――生まれてから考えるっていうんじゃなくって、産む前に、産むっていう決断をして、産むからには、責任を持って、幸せな方向に教育していくのも大切だし、本人がそう思えるように、ちゃんとサポートしてあげようという考えるのが大切……。

深川　分かりました。ありがとうございます。この問題ね、実は、藤井先生がおっしゃったとき、私は、ふっと思い出したのは、このＲＹＬＡでね、今井先生がサリドマイド児の話をなさった。どんな話かと言いますとね、サリドマイドを飲み過ぎたために、

アザラシっ子て、手のない子どもが生まれることがあるんです。そのサリドマイド児の悲劇は、一番最初はスエーデンで起こったんです。16歳の女の子がね、サリドマイドを飲み過ぎたために、手のないアザラシっ子を産んだ。この手のない子どもは、きっと不幸になるにちがいないと言って、その赤ちゃんを殺してしまうんです。もちろん、これは、赤ちゃんとして生まれたのを殺したんでありますから、殺人罪でありましてね、裁判所に起訴されることになった。

で、しかし、その、世の中の人たちはですね、彼女の心情を大変哀れに思いましてね、たくさんの嘆願書を裁判所に寄越しました。で、結局、その裁判官もね、この16歳の少女を、罪を宣告して監獄につなぐよりも、社会に戻し、家庭に戻して、再生の道を歩かせるほうがいいだろうというので、執行猶予の判決を告げたんであります。これによって、法律的にはいちおう決着が着いております。私が裁判官であっても、同じように執行猶予の判決を下すだろうと思います。

しかしね、倫理的にはなんの解決もできていない。なぜかと言いますと、赤ちゃんの命が奪われたという、神様から授かった赤ちゃんの命が奪われたという事実は、厳然として残っているんです。この問題をどう考えるかっていうことであります。

で、今井先生は、ご自分の教え子にですね、女子生徒にね、こういう場合に君たちだったらどうするか、その子どもを殺すのか、生かすのか、どうするのかっていう設問をなさった。ある女子学生はね、その子どもが苦しまずに死ねるんであったら殺しますって言った。ある女子学生はね、その子どもを殺しても罪にならないのであれば殺しますって言った。最後の一人の女子学生はね、私はどんなことがあっても神様から授かった、その子どもを育てますと言い切ったんであります。

問題は、その、どの答えがいいか悪いかっていう問題ではなくって、この手のない子どもが不幸になると考えたこと自体が問題なんであります。今日、野尻先生の話にもありましたけど、物質的に非常に栄えて、便利で、自由で、豊かで、何でもある社会にあって、しかし、人間の心の問題がおきざりにされていく。こういう効率一辺倒、何でも役に立つものは大事にしていくという世界に育ってきますとですね、手のない子どもは、社会の中で一人前に働いていくことができない。いずれ、それ見捨てられていく、不幸になるという論理でありますね。

そうではなくって、この福祉社会とかなんとかいうんであれば、手のない子どももですね、一緒に支え合って生きていける、そういう社会を作らなきゃならない。我々が21世紀に新しい社会に生きようとすれば、新しい社会の論理を見つけなきゃならない。そういう意味でね、この、手のない子どもが不幸になると考えたこと自体に問題がある。

もし、手のない子どもは不幸になる、それは、役に立たないから見捨てられて不幸になる。それでいきますとですね、高齢者、お年寄りは、社会に効率ある労働をすることができなくなって、そして、やがては仕事ができなくなって、それじゃ役に立たな

いから捨てられる。姥捨山へ捨ててしまうということになってくる。そういう社会では、福祉社会というのはないだろうということを、今井先生は問いかけられたわけであります。

だから、そのへんのところもありますから、この、出産前に検診をして障害があった。で、生まれてくるときに、手のない子どもになると分かっておったときにどうするのかという問題と同じことになりますから、そのへんの価値判断の一つの資料として、お考えをいただければと思います。で、あと10分になりました。安平先生、何か質問があったら。

安平　安楽死、尊厳死の問題ですね。それから、いわゆる極限状況で生きておられる方について、どう考えるのかということについて、できれば意見をいただきたいなと思ってます。

深川　どなたかございますか、安楽死の問題は、まだ出てなかった。尊厳死も含めて。どなたかありますか。はい、どうぞ。

――安楽死で考えないといけないのは、オランダのほうの法律では合法化されてないんですけど、いわゆる社会的に、もう合法化として認められてるという現状が、1ヵ国あると。ちゃんと手順を踏んでいれば罪に問われることはないと思うんですけども、やっぱり、末期の何らかの病気などで、苦しむことが、もう分かっていて、延命治療受けたくないと、日本で言えば、そういう人はホスピスに行かれる方とか、家で余生を送りやすらかに死にたいという方がいると思うんですけども。

やっぱり、もう、生きるということ自体が苦痛になる方ていうのは絶対に、可能性としてあると思うんですね。もう、死ぬことも分かってるし、動けないしとかていう場合とか。いろいろ、そういう極限的な状況を考えたときに、確かA班の話で、最初、死ぬ権利の話があったと思うんですけど、やっぱり、安楽死という形というのが認められていいんではないかと、その、やっぱり、状況にもよるやろし、いろいろあると思うんですけど、生きる権利があれば、死ぬ権利もあるんじゃないかな個人的には思っています。

深川　ありがとうございました。ほんとに、どういうんですか、心臓だけは動いてるけど、意識はまったくないし、身体も動かすこともできない、まったく植物人間になって生きている人にとってね、本人は、断わるにもその反応もできない、ただ、痛みは分かるんですね、その状況で生き延びさしていることが、はたしていいのかどうかというのは、大変難しい問題だろうと思いますけれどもね。そういう趣旨でしょ。安楽死というのは大変難しい、いろんな場面が想像されますから。

――私も個人的には安楽死は、認められてもいいもんではないかと思います。で、安楽死にも二つタイプがあるというふうに、聞いてまして、一つは、オランダとかで認められてるような、ほんとに呼吸を止めてしまうような薬剤を積極的に体内に注入することによって命を止めるという方法、あとは、日本でも、その、スパゲッティ状態になるような、こういう延命治療を避けることと、あと、その痛みを感じないために、いろんなモルヒネだったりというものを、

できるだけセーブしないで打って、痛みを感じることなく生かしてあげるという、そういう二つの安楽死のタイプがあるというふうに、ちょっと以前知ったんですけど。

やっぱり、死の受容と関係するんですが、個人的には、こないだオランダで死なれた日本人女性のドキュメントを、ちょっとテレビで見たんですが、やっぱり、見てて、なんか苦しくなってしまって、ううん、そうかな、なんて思いながら。

やはり、自分は、延命治療をしてほしくないのと、痛みを解放してほしいし、自分の身の周りにそういう人がいたら、そうしてほしいんだけども、じゃあ、そのお嬢さんとかが、お母さんはそう望んでたから、明日死ぬということを受け入れて、よかったねって言って、逝かしてあげれるっていう、そこまでの死の受容、の過程があるということで、藤井先生、昨日おっしゃってたんですけど、ケプラー・ロスさんの話で。そういう、なんか、いろんな、自分の身におきたらどうなるんだろうなというのを、すごく考えてしまいました。

深川　死に直面してね、これ以上の延命治療はするなって言い終えて、亡くなったお医者さんの方も知ってます。そういう方もずいぶんおられると思います。お医者さんですからね、心臓かなんかで急に倒れられて、即座に自分の息子さんに、それもお医者です、延命治療するなっていう形で、すぐ亡くなられたっていう方のことも聞いてますから、そういうこともあるんだろうと思います。他、何かありますか。じゃあ、ぼつぼつこのへんでお開きにしましょうか。

最後にね、一つ、このフォーラムの仕方を、私、今日、最初に言えばよかったんですが、今まで一回も言ったことないんでありますが、発言の仕方なんです。私どもロータリーが会議するときはですね、発言時間が１人３分、原則として決められるんです。そして、今からしゃべりますと、国際会議ですからね、私が、例えば、I'll speak in Japanese. と言ったら、みんなマイクをかけます。そして、私が日本語でしゃべると、同時通訳で各国語に翻訳されていく、そういう形で、今からしゃべりますと言ったら、それから前のタイムレコーダーがありましてですね、青いランプが点くんです。それから２分30秒経つと黄色いランプに変わります。そして、あと30秒で赤いランプに変わったら、話の途中でも、もうその人にはしゃべる権利がないんです。ということは、３分間で最も要領よく自分の意見を相手に伝える訓練をしておかなきゃ、その国際会議では役に立たないんであります。

これが、３分がやがて２分になり、朝８時から夕方の６時まで、ぶっ続けで会議をするんですよ、ロータリーの会議ではね。そういうのが１週間続くんです。で、そういう場に行きますと、日本人がだらだらしゃべってたら、外国の人はね、もうこりゃダメだって、マイク切っちゃってですね、次の原稿を読んだりしてる、相手にしない。そして、もう３分間で切られてしまいますからね。

そのへんのところで、一つの要領はね、日本でも判決文であります、最初に結論が出てきます、被告人を懲役何年の処す、結論がポンと主文が出てきます、それから、理由として、１、２、３、４で出ていくで

しょ。ですから、皆さん方も、こういう議論をなさるときはですね、まず最初に結論を言ってください。自分は、この問題について賛成である、反対である、あるいは、こう思う、こう思わない、その結論を、まず出して、あとは、1、2、3、4と順番にですね、重要なもんからしゃべっていく。

そしたら、もう、重要なのは一番最初に、重要な理由はしゃべってますからね、途中で切られても、それで目的は達します。ところが、結論を一番後に持ってきて、理由からしゃべっていったら、聞いてる人はですね、あれは、いったい、賛成の意見なのか反対のなのか、さっぱりわからないままに、どんどんどんどんやります。そして、時間切れになったら、結論を言わずに終わってしまいますでしょ。

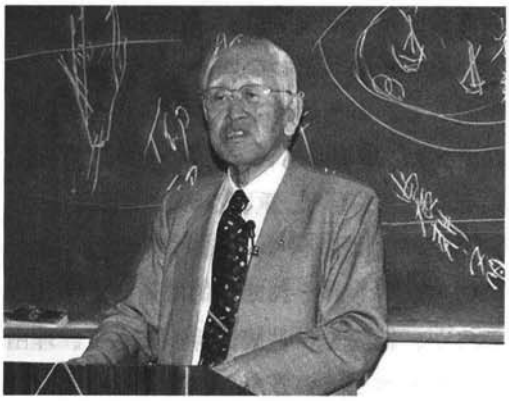
だから、これ一つの皆さん方の話し方の知恵ですから、まず、結論を言って、できるだけ簡潔に自分の言いたいことを相手に伝えるという訓練をしておいていただければと思います。

安平　give and take の話がありましたけども、あれは、要するに、give and take というのは、与えるもらうという、いわゆる見返りを求めるという、そういうことで、対価関係というか、見返りを求めるという意味で、give and take という言葉が使われてるというふうに思いますので、結局、それは、give and give とは違う意味で、野尻先生が使われてたというふうにご理解いただいたほうがいいと思います。

それから、命の値打ちの問題については、考え方によって、それぞれの考え方が違ってくると思いますし、赤ちゃんであっても年寄りであっても、また、大統領であってもＳＰであっても、その方を愛してる方の喪失感というか、愛する人を亡くした喪失感というのは、みんな一緒だろうと。そういう意味から言うと、命は一緒じゃないですかというふうな、重みは一緒だろうということになります。しかしながら、別の観点からみて、社会的に、その人がどんだけのことをやったんだというふうなこととか、もっと極端に言えば、ユダヤ人は抹殺しようというふうなことも、ホロコーストであったわけですから、いろんんあ考え方があって、そういう意味で言うと、命の値打ちが違うでと、こうなるんかわかりませんけども、我々は、やはり、愛する方の、愛する人を亡くした、その喪失感というのは、誰だって、かけがえのない人が亡くなったら一緒だろうという意味で考えたいなというふうに思います。以上です。

深川　ありがとうございました。

「いのちの共有」



元ＲＩ理事
頌栄保育学園理事長・院長
今井　鎮雄氏

〈今井　鎮雄氏〉
神戸ＹＭＣＡ顧問。神戸ＹＭＣＡ総主事を21年務め、現在顧問。
1920年東京生まれ。クリスチャンホームに育ち、幼児より福祉の心を育てられる。
同志社大学法学部経済学科卒業
関西学院大学大学院にて研究
国際ロータリー2000～2001年度 100周年祝賀計画アドキック委員。
会員増強グループコーディネーター（第３ゾーン）

題を「人間の尊厳」というのを大きなテーマにして、それを順番に考えようということになりました。そして一番最初は命というようなことについての、藤井美和さんの話を聞きました。あの人が関西学院大学に学士入学してきた時に私の授業を受けて、そして決心をして、アメリカへ行って勉強してきた。あの身体で、アメリカで５年間頑張って博士号を取って帰ってきた。非常に自分の経験が深いので、皆さんたちと、若い人と触れ合ってもらうということで、来てもらったんです。

私たちが、今日ここで話をするときに、なぜ人間の尊厳ということが問題になったかということですね。一つは、いまの時代ほんとに人の命が軽く扱われるようになってきた。そのことが、あなたがたの毎日の生活やものの考え方の中で、まったく違ったものになっていないか。人間性の豊かさなどどいうものがなく、ものだけの社会なら、いったいどうなるんだろうかということが、私たちの問題ではなくて、若い人の中で、なんとなく、問題になってきてるんでないか。

このことを私たち、もう少し考えておかないと、将来21世紀なら21世紀という皆さんの時代に、自分としてはこうして生きるんだ、こうして社会とかかわるんだということについての自信が持てないんじゃないか。そうでなければ、あなたがたがリーダーとして、要するに他の人たちを新しい時代に導く者の一人として、何を、いったい考えたらいいかという時に、少しみんなで考える機会を持ったらどうか、ということからスタートしました。

そうしたら、その題について、どう考えるかというと、一つは、生と死の問題を考えてみよう。ここに、小さなパンフレットが二つあるんです。

震災で亡くなった子に

阪神大震災の時に、6400人ほどの人が亡くなり、その中で小さな子どもたちもたくさん死にました。その次の年から、その小さな子どもたちのために、追悼の記念会をしようということになりました。私たちが気持ちの上で、ひとりの子どもが亡くなったということについて、かわいそうだったなあ、そして、あの子の霊を慰めてあげようといって追悼会をすることは結構なことだけれども、それはただ単なる感情といいますか、感情的な意味での私たちの痛みであって、本当にその人の死をどのようにして考えるか、そのことによって私たちは次の子どもたちの問題が考えられるんだろうか。一度、このことを、考えようじゃないか。

ところが、私に自信がなかったので立派な先生方に集まってもらいました。一人は、京都大学の名誉教授で文化人類学の専攻をしてた米山さん、この米山さんが、長い間フィールドワークでアフリカにおられました。そこでは子どもが死んだり、おじいちゃんも死にますし、いろんな人が死にます。そのときに、人間の原型として、人の死ということについて、どんな対応を人間としてするのかと聞かせてもらうために。

いのちの電話の対応

それから荒川さんという関西学院で、児童福祉をやっていて、しかも危機介入、危機介入というのは自殺です。自殺をするときに「命の電話」聞いたことある？　このときの危機介入、「私はもう死にたい」という人たちが電話かけてくるんです。あの電話。その介入の仕方というものを専門に勉強してる荒川さんという先生。もう一人は神戸教会の牧師さん。キリスト教では死というものを、どのように扱ってますか。もう一人はお坊さん。須磨寺の管長さんですけれども、仏教では死というものを、どう扱うのか、どういうふうに考えてるのかというふうなことを、話をしてもらいました。それから、もう一人は鈴木さんという神戸大学の教授で、これは教育学の先生。長い教育の歴史の中で、子どもをどのように扱ったか。例えば、初めは、子どもは自分たちの道具みたいにして扱ってきたのが、だんだんだんだん子どもの人権が生まれてきたというような話をしてもらおうと思って。もう一人は、安部さんって幼稚園の先生。子どもに対して死というものを、どんなふうに教えるのか、そういうようなことを、絵本をいろいろ使いながら教える。

この６人の先生と私が司会をしながらみんなで話をして、「子どもの死を考える」という題で、小さなパンフレットにしました。これを地震の復興委員会、2680地区の震災復興委員会で、これを作りました。

仏さまから遣わされた子

昨日のお話を聞きながら、死のことを考

えたときに、こんなことがありました。小池管長が言われたのですが、仏教では、七つまでの子どもは、我々のところに仏様から送られて来たもの。信仰的にいうと、子どもたちは仏様から送られてくるんだ。だけども、七つまでに死んだら、その死んだ子どもは、実はこの社会の中でこれから何かをしていく、役に立つ、いろんな仕事をするということを、まだしないうちに帰ってしまった。言い替えたら、人間の社会に来る前に、七つまでの子は、また仏様のところに帰っちゃったんだから、人間社会には、その子の入る場所がない。お墓も作らない。そういうような、だから、小さな子どものお墓は、昔はなかったんです。というような話をされました。

何を意味するか、価値があるかないかということが、子どもの存在があるかどうかということと関わってくる。子どもとおじいさんがいて、一人しか生かすことができない場合には、どっちを選択するかというような場合がありましたね。それは何でそういう選択をしたか。私たちの考えてるものが、この世界の中で、役に立ったか役に立たないということで判断をするということならば、これは大変難しいだろうと。今、私たちが、人間の問題を考えつつあるときに、そういう人間の社会の中で、どういう仕事をしたかしないかということで決めるよりも、人間そのものに意味があるのかどうかということが、ここでは大事だということが、昨日考えられたことのポイントになっておりますね。

テレビに感情移入している

このことが、これからの大事なことであります。そうしないと、人間そのものが大事だということを考えることにしないと、その意味が十分になってこない。このように考えたとき、命の重さが大変軽んじられている。例えば、ロボットの話が昨日でました。それに一生懸命感情移入して、その人があたかも自分のことの感情を受け取るというふうにしている、それは何かといったら、自分自身が自分自身として生きること、自分が孤独であるということの証拠でしょう。人間はね、そういうものを感情移入したり、いろんなことをしてる。この頃は、それがテレビに移って、テレビに感情移入して、テレビはまさに自分の心をいつも慰めてくれるんだというふうなことになる。

そうすると、ものと人間との関係と、人と人との関係とが、どのような意味で本質的に違うのかということについて考えることがだんだん出来なくなってくる。それが、今の命の尊厳の問題と深く関わってるんだろうと思います。

虐待にどういう意味がある

私たちは、こうして考えてきた時に、いったい命って何なんだろうか、去年の12月、人間の尊厳を考えるというので、養護施設やら老人ホームで働いている職員のための研修会をしたんです。老人ホームの中で高齢者虐待、それから小さな子どもたちの施設で児童虐待というのが、だんだん多く行われるようなった。そのことについ

て、もう一度、人間は何なんだって、そういう虐待というのはどういう意味があるんだと。みんな初めはその人たちのことを一生懸命考えて、お世話をしてあげよう。1日目2日目はいいけど、だんだん疲れてきた。「私も疲れてるんだ。いい加減にせえや」そういうふうにして、だんだんだんだんいつのまにか結果として、虐待のようなことが行われるようになる。

お母さんはやっぱり自分の子ども、一番大事なものだと考えてる。かわいいですよね、自分たちの子どもっていうのは。なぜ、その子どもをいじめるようになるのか。自分のコントロールが出来なくなるのか、というようなことがいろいろあるときに、それはトレーニングだけなんだろうか、何だろうか、どこか何か問題がないかということを考えてみる必要があるんだろう。一度、人間の尊厳を考えてほしいっていうことで話をしたことがあります。

言い替えたら、こういうことで、私は震災後からずっと悩みながら、そして、青年たちや若い人たちと一緒に、この人生の中のある節目の問題を、そのときに、なぜ昔と今とがそれだけ違うんだろうか、このことを実は考えるようになりました。

人類のはじまり

先日、2680地区の地区大会がありました時に、河合雅雄さんっていうおサルの権威ですね。今は兵庫県の人と自然の博物館というのの館長さんをしてて、教育委員もしておられますが、河合先生が地区大会で話をしてくれた。おサルから人間が分かれてきたのは、だいたい、500万年ぐらいから600万年ぐらい前。300万年ぐらいまでは、ちゃんと足跡が、足跡っていうのは人間として二つの足で立ったというんですから、300万年ぐらいは化石があるんです。物証があるんですけど、それから類推して、だいたい500万年前から600万年ぐらいまでには、アフリカで人間は、人類として発祥したということがだいたい決まっている。

そのアフリカで、人類として発祥したグループが、だんだん食べ物を求めて動き出して、アフリカに残ったのをニグロイドという。それがずうっと上がって来て、今のだいたいトルコの辺りから、あるグループは東に行きます。これがモンゴロイド、君らの祖先になるわけですね。それから上のほうに上がって行く、コーカソイド、これがだいだい今の白人の原型になるものです。みんな人間は、人類は一つなんですね。

6000年前の遺跡から

今のところだいたい6千年前ぐらいにからずいぶんたくさんの遺跡があちこちに出てる。チグリス・ユーフラテスのどことか、ナイル川のどこであるとか、あるいは黄河流域だとかいうところに。私は黄河流域の、その6千年前の遺跡を訪ねました。それは半坡遺跡。お父さんとお母さんがおって、子どもがおってというようなそんな家族はまだ出来ません。要するに女の人が固まってて、そこに男の人が通ってきて、そして子どもが産まれてくるんですね。お父さん、お母さん、家族というよりも、人間の男と女がおって。そうすると、お母ちゃんは、子どもが産まれますから、子どもと生活するから母子家族であります。母系中

心の家庭がだんだん生まれてくる。

広場があってね、その広場の周りに環濠、古い遺跡を見ると、みんな環濠というのがあります。大昔ですから、獣やなんか来て、赤ん坊を喰いにきたりなんかしたら困るので、通れないようにしている。そこに穴を掘ってお母ちゃんと子どもが暮らしてる。ここの甕の中に赤ちゃんの骨とお母さんたちの骨が入ってるんですけども、男の骨はないんです。男は別の方に捨てられとる。これが6千年前ぐらいの最初の遺跡なんです。

「半坡遺跡」、これは黄河文明です。黄河というのは黄土地帯ですね。砂みたいな粘土の土ですから、そこに水が流れてくる。平らなところに水が流れてくるうちに、だんだんここだけが掘られてきて、ここから、ピューッと木が生えるような、外から見るとずうっと平らなんですが、ちょっと町が見えると、そこの下が、大きな川になってる。軟らかいですから、そこで生活しやすかったし、水もあったから、人間としては生活しやすかった。これが半坡遺跡、黄河文明です。これが私たちの一番近くの文明で、6千年ほど前ぐらいから、そういうことが始まりました。そのときは農耕ですから、自分が土地を耕します。

今、遺跡がこう出来たというのは、定着したということですよね。モンゴロイドとか、あるいはニグロイドとかいうのは、まだ、食べ物を探して歩いている時代、狩猟の時代ですね。それがこうして定着する。定着するということはどこかというと、そこでもって同じ物を蒔いて、そこから生えてきた物を食べるという生活ですから、農耕の文明が始まるんです。これが今言ったように6千年続いてきたんです。

そして、この農耕文明というものが続いたのはほんのわずかです。200年、300年、400年ぐらい前から私たちの中心になる仕事が変わりました。500年前、300年前、このぐらいから私たちの時代は、今度は自分が生産したものを売ったり買ったりする。要するに売り買いをして、より豊かにものを取ってくる時代が始まるのは、人類の歴史から言ったら、ほんのわずかです。

そしてここにきて、私たちは初めて、それを効率的にやることを覚えました。これが資本主義という経済構造を中心とする近代です。しかも、その近代の中から今新しく、もっと大きなエネルギーを見つけました。それが核ということですね。原子核ですね。私たちはそのような大きな力を認めてきました。

コンピューターの時代へ

この辺は、昨日の野尻先生のお話で思い出してください。で、このエネルギーを見つけ、あるいはコンピューターを見つけた。このことのために私たちは大変違った世界に入った。皆さんの子どもの頃はすでに、いろんな意味でもって電子の機器が出来てるはず、私の子どもの頃はそんなことない。おばあちゃんが、孫を背負って何と言うか、「見てごらん、お月さん、ノンノンさん、見てごらん。あそこがね、うさぎさん、お餅をついてるでしょ」みんな話、知ってるよね。言われたことある。この頃の子どもなら、「おばあちゃん、ウソやで。あんなところ、月の世界にはだれもおらへんで。

砂だけあるんやで」と言って、おばあちゃんが、「ああ、ほうなあ」（笑い）いうように時代が変わったわけです。僕は終戦のときに上海の航空隊で終戦になりました。その航空隊にいる時、見張りの指揮官をしていましたが、もう飛行機がなくなっちゃった。見張りの指揮官て言うのは、B29が来ました爆弾が落ちてますというようなことを、見張り台の上で言わんならん。当たったら死ぬんだけど、我慢して立っとるわけですよね、恐いよ。

ところが、その頃私たちの飛行機には電波探知機なんてものはないんです。レーダーなんてものはないからどうしたかっていったら、上海の飛行場を出たら、すぐに上に上がるんです。3千メートル上がったら、はるか彼方に五島列島が見えるんです。そして、それに向かって来て、大村の飛行場にパッと着陸出来る。ところが、曇ってたらどうするか。大きな地図を広げてね、そして地図の上で、上海から大村に行くには何度で行くんだろうか、100度ぐらいのとこやな、100度のとこにピューッと線を引っ張ります。そして、この飛行機は1時間に200kmとすると、200kmのところにピュッと、この角がここだ、あと20分、ここでもって、また20分、コンパスでもってキュッ、そして、今行ってる方向と、そのコンパスの速度でもって走ってる距離と合わせると、大村に着く。こうやって地図を見ながら飛んでるんです。

磁石とそれからコンパスと、それで、もう着くはずや、なんていったら、ああ見えた見えた。あそこに飛行機が見えた。ああそうか、あれが大村か。なんて下りて、ここは大村でありますかって言ったら、バカここは米子じゃ、っていってました。（笑い）ずれるんですよね、風で。ついこの前、僕が君ぐらいの年には、まだそうだった。

言い替えたら、コンピューターと、それからそのエネルギー、宇宙船を飛ばすことが出来るほどのエネルギーを持ったというときの時代、情報化時代というのは近々、戦争が終わってたった50年。500年前から私たちのエネルギーは何かと言ったら、歩くことしか出来ません。そのうちに、ラクダに乗って歩く。そうしたら、今度は1時間8kmぐらいで移動するようになりました。中には駕篭だとかね。もうちょっと速い馬だったら30kmぐらい。西部劇でもって、いよいよ機関車が出来て汽車がパアーッて走っているときに、インディアンが攻撃するわけ、馬に乗ってパアーッと攻撃する。馬のほうが速いから汽車に追い着くわけね。

飛行機が出来たのは、1907年か、初めてライト兄弟がバアーンと飛んだ。そのぐらいです。そして今、スピードはどれだけ上がったか。新幹線だけではない、宇宙船が上げられてる時代です。500万年前とは言わない、1万年前から私たち人間がずうっと生活してきたものから、少なくとも、私たちのエネルギーが開発されるとき、スピード曲線だけのことを考えただけで、私たちはここで、こう上がってきたんじゃなくて、直角に上がったということが分かるでしょ。時間的によ。

全く新しい生活の空間

30年とか50年かかってるけれども、時間的には直角に上がっている。時間的に直角

に上がったってことは、まったく異質のものっていうこと。あなたがたが、これから生活する時間というものは、前に私たちが経験したことと全く違った生活の空間の中で、これから生きなきゃならないということが大きな問題になってくるわけです。それの答えが出来てるかどうかということが、今の私たちの問題です。世界が今大変苦労している、このエネルギーが、昔ならば自然の中でいつも解決されてきたような問題を不可能にしました。これが公害汚染の問題というようなことでいわれる問題ですね。

こういうふうに時代が大きく変わったということには人間の命のことについても、同じようなことが実はいえるんです。私たちがなぜ命の問題をとりあげたかというと、前のときの命の問題は何か、今のときの命の問題は何かということは、まったく違う。河合雅雄先生は私たちの社会というものは自然と一緒に生きた社会、自然社会と、もう一つは文化社会と名付けたわけです。

そして、自然社会の中の生活というものは、これから100年経っても200年経っても予測することが出来る。おサルさんは、今から100年後もだいたい今と同じような生活をしてるだろう。だけど人間は、同じ動物でありながら、100年後にどんなになってるかということは分からない。なぜかと言うと、人間の作った文化社会というものが、まったく違った社会を私たちに今から与えようとしている。これは河合さんがこの前に言ってくれたことですね。

確かに、私たちの知恵がいろんなものを作りました。しかし、その知恵だけでどんどんいって、自然のことを考えなかったら、まったくどんなになるか分からない。おそらくダメだろうということに、皆さんが気付き始めた。これで、命の尊厳を考えなきゃならなくなってきたわけです。

科学が進むだけではいけない

昨日の先生のお話では、純粋経済学とか純粋医学とかいう、純粋という名前でやったときには、科学を追及するということなら、科学は新しい知識の上にもっと知識を付け、その上にまた知識を付け、技術を付けていくわけですから、それはどんどん進むに違いない。文化社会もその意味においてはどんどん進むけれども、それが人間に対してどんな影響を及ぼすかということは、まったく別の問題だ。

その別の問題を科学として、私たちが自然の中にいたときには、そのことが人間を豊かにすることであったから、それでよかったけれども、今はそうじゃなくなったから、この純粋経済学と称する、こうすればこうなってお金がこれだけ儲かるという形の経済学、こうすれば、こうして人間の双子が出来る、クローンが出来るっていう、そういうような医学、こういうものだけを、どんどんどんどん、私たち人間と別のところで発展さしてくる。それだけで、私たちの社会が豊かになるという考え方は、今、やめないといけない。

でも、片一方では文化、科学技術がどんどん進んでいくだろう。もう片一方ではそれはいけないな、いけないなといっている。

そのときに、その中心になるのは何か、人間そのものじゃないか。じゃあ、人間とは何かということを、当然考えなきゃなら

ないじゃないかというのが、私たちの問題だ。

私たちの周辺では、そういうエネルギーが大変大きくなってしまった。今にクローン人間も出来るだろうし、クローン人間とか、クローン牛とかいうものは、昨日の話にもあるように、私たちの食べてる肉のほとんどはクローンだというふうになってくるかもしれない。そうすると、これは、今はわからない。けれども、何十年か後になったときに、これは遺伝子の組み替えをしたものが、いったい、私たちの健康のためにいいのかといったときには、とんでもない、私たち、考えることが出来なかったような問題も出てくるかもしれない。分からないけれども、可能性としては、いくらでもそういうことが出てくる。

そうかと思うと、一つの皮膚から、いくらでも同じ人間ができるということになる。生まれてくれば魂を持ってるわけですから、人間でありますから、そういう人たちが増えてくることも考えなきゃならない。私たちはそうして考えた中で、もう一つ最近の、昨日は遺伝子、それからバイオテクノロジーの問題が出てきましたね。それから新しいコンピューターのようなインフォメーション・テクノロジーも、進んできました。

もう一つは、ナノテクノロジー。ナノメーターっての、聞いたことある。アメリカはもうこれの研究に着手をしました。1ミリの100万分の1がナノメーター。もちろん目で見えませんから、電子顕微鏡で見ながら、それを作って、そこで製品を作っていくんです。

そうすると、1ミリの100万分の1の長さのことを単位としながら作った機械は、人間のどこにも入り込むことが出来るというふうなことで、この技術を利用するときに、戦争のときにも役に立つ。そういうものを野放しにしたら、目に見えませんから、人間が作ったそのような分子が、あちこちで悪さをする。

まあ毒ガスみたいな仕事。そのときに、自然が作ったものじゃないから消滅しないんです。そのまま残っちゃうんです。そうなったら大変だ、だからやめよう、とならないんですね技術は。科学はそうならない。どうなるか分からんけど、とにかく今は開発しよう。こういう人間としては大変無責任な開発が進められる。これが今の現代の中の大きな問題でありますね。

あなた方の時代です

現代は、科学技術が異常な発展をしたということがいわれる。情況社会として、きのう言われたように、情況社会として私たちじゃなくて、あなたがたがこの一番大きな情況社会の変化の時代に、人間としてつないでいくんです。つないでいけないかもしれない。もう、あなたがたの時代は終わってもいいんだということになるかもしれない。壊れちゃうんだから。でも、やっぱり、次をつないでいこうとするならば、あなたがたのこれからの姿勢というものが、世界をどのようにしていくかということと深く関わるんですね。このことについて、皆さんたちは、どのように思ってるかということを考えていただきたいんです。

デモクラシーとは何か

今度は少し、このような歴史的振り返りじゃなくて、現実の問題に考えてみましょう。現実の問題を考えるときに、私たちが受けた教育、大学、学校の生活とか、いろんなことから考えてみます。昨日の話で野尻先生は私たちの憲法がアメリカの人たちによって作られたんだと、これはまぎれもない事実ですというお話がありました。

その憲法の精神っていうのは何かっていったら、人権ということでした。確かにアメリカが作ったんだけれども、アメリカは一つの理想を考えた。それは私たち一人ひとりがみんな幸福な文化的な生活を送るっていうことを大事にした生活をしなさい。日本はカール・ラビッツの話じゃないけども、かつては大英帝国、植民地を世界中に広げて、そして貿易をして、その商品を持って帰って、ものが豊かになることが、私たちが豊かになることだというふうに考えながら生活を始めた。

それに引き続いて、みんなが自分の商売の相手を外地に求め、あるいは、そこから多くの材料を仕入れてくるような植民地政策を、どこもかしこもとっていました。そして、そのことが、いつのまにか、植民地の人たちを収奪してるということに、ようやく気が付いて、これはやっちゃいけないことじゃないかなということを考えだした。日本は大英帝国に学んで、私たちの食料を得るために、アジアがみんながお互いがリンケージしながら商売をしていったらいい。

そのときに、何ていったって日本が強いですから大きいですから、よその人に「どうぞ、資源を出してください。私たちはそれを買いますよ」そして、私たちは、それを作って売って豊かになりますよ。こういう組織の中で、大日本帝国という考え方が出てまいりましたし、大日本帝国を中心として、このへんの資源を開発するような社会が出来るということを夢見た。だけども地域社会の中では、それは困る。困っても、このやりかたをするんだということで、侵略ということが行われた。こういう図式があって、日本の不幸はそこにあったんだというのがカール・ラビッツの言葉の中にあるわけですね。

しかし、そういうことが、いちおう終わるようになってきました。日本はその変化の中で、ある意味においては、自分たちが、そのことをゆっくり考えるひまを与えられずに、いきなり、新しい時代、人間を中心に考える時代になるということが、憲法として発布されましたね。

それは、アメリカでは、よい市民を作るっていうことです。Good citizenship っていうことが、アメリカのそのときの理想でありました。よい市民ですね、みんなと一緒に協力していける市民というのを作るというのが、一つの人間形成の一つの大きな役割だというふうに考えていました。日本でもよい市民、デモクラシーとは何か。デモクラシーという言葉は非常に難しかった。

よい市民をつくろうといい

私は、1950年に、昭和25年にアメリカへ行きました。そのアメリカに行く時には、

飛行機なんかに乗せてもらえないで、私は、Army transportationといって、軍隊の輸送船に乗せられて、アメリカまで12日かかってアリューシャン列島、12日間かかってサンフランシスコに着いたことを覚えてます。私のその旅費を出してくれたのは、ガリオワっていう、あとフルブライトっていう名前の奨学金が出来ましたけど、そのフルブライトの前身の、奨学金をもらって行きました。

生まれて初めてアメリカへ行ったもんですから、英語は出来るかな、どうも話す英語は出来ないかもしれない。けども、まあ、読むのは出来るから何とか意味通じるといったら、これが通じないんだな。実験してみようと思ってね。まあ、一番簡単なのはドラッグストアに行って、コーヒーでも飲むのを注文して見よう。恐る恐るドッラグストアに行きまして、「アイスクリーム、プリーズ」って言ったんですよ。向こうは、"What you say?"「アイスクリーム」"Pardon me?"「アイスクリーム」「アイスクリーム」「アイスクリーム」通じないんですよ、発音が悪いから。

ようやく、"Oh! Icecream."「僕、そう言ったじゃないか」そしたら今度は分かった。その次に、そのウエイトレスが、"What kind of icecream do you want?"、どんな種類のアイスクリームがほしいんですか。ええ、どんな種類って、アイスクリームってそんなたくさんあるの。ストロベリーとかね、バニラアイスクリームとか、チョコレートアイスクリームとかいっぱい。こっちはびっくりしちゃってね。アイスクリームでも通じないんだからね、私の一つ知ってるアイスクリームはバニラアイスクリームですよ。「バニラアイスクリーム」「何だって？」「バナラ」「バナーラ」「バニーラ」そして分からんから、しょうがない、サッと、"White one."「Oh, vanilla."「いうたやん」（笑い）まあ、この悲劇。

そのころのアメリカは、よい人間を作るということを中心に考えようとしていました。1950年ぐらいは。私もいろいろな体験をしました。戦争で足をとばされた青年から「お前は日本人か、この足どうしてくれる」と言われたこともありますし、いろんなことがありました。

ところが私が帰ってくるときに、朝鮮事変が始まったんです。そして、朝鮮事変が始まったときに、アメリカからたくさんの兵隊が、Army transportation軍隊の輸送船で帰るもんですから、私が乗ることは出来ない。とうとうサンフランシスコで、ほとんど1ヵ月ぐらい待ったんです。そして最後に、ミスター今井、すまんけども、Commercial lineで帰ってくれ。Commercial lineというのは客船ですよ。そのときは、President Clevelandという客船、それに乗って帰って来た。これがまた立派な船でしたけども、台風と一緒になって、あっち行ったりこっち行ったり、こっちに避けると台風がこっちに来る、こっちに避けるとこっち、台風の道連れをハワイの沖でずうっとしながら、ふうふう言いながら帰って来ました。昔の話ですが。

その頃には、こんなふうにして、私たち自身は、よい市民を作るってことを中心にしながら、私たちをアメリカの政府はなんとかしてよい市民になってほしい、デモク

ラシーということを覚えてほしい。デモクラシー、一人ひとりの人間の人格を大事にしながら、お互い同士が共に生きる世界を作ってほしいというのことを、私たちは、習って帰って来たら、日本では大変でした。

集団就職とコラム

いろんな事件がありました。例えば、集団就職かなんかする。神戸の田舎のほうの山陰の人たちのとこで、これは神戸新聞に出てたコラムです。子どもが学校から帰って来る、中学生、もう卒業なんです。「お父ちゃん、神戸へ行ってなあ、神戸製鋼っていう大きな鉄鋼所があるんだって。そこで勤めるか。こっちにね、三星調帯っていうゴム会社があるんやて、そこへ勤めるか。先生がそう言って、相談して来いって言われるけど、どっちにしよう」そしたら、お父ちゃんは、昔なら、「おまえはここに行かんとイカン」と言ったところが、デモクラシーの世界、民主主義の社会だから、俺が決めてはイカン。しょうがない、お父ちゃん何て言うか。「お前の好きなようにしたらエエがな」

そのコラムには、「お前の好きなようにしたらエエがな」と言われたら困る。子どもがどっちに行ったらいいかなというときに、その子どもと一緒に相談して、いったい鉄鋼会社ってどんな仕事をするんや、ゴム会社ではどんな仕事をするんや。そのゴム会社でこんな仕事をするならば、それはお前に似合ってるな。鉄鋼会社でこんな仕事をするなら、それは、これからの社会のために大事で役立つ仕事だな。いろいろ話をして、最後に、「それだったら、お前どっちにする」「うん、お父ちゃん、そんなら、ぼく、神戸製鋼へ行くわ」「それじゃあ、行け」これがデモクラシーだろうと。「お前が好きなようにしたらエエがな」では、デモクラシーにはならない。こういうコラムがありました。このコラムがいってるように、私たちは、デモクラシーという言葉自身も、大変難しい時代を過ごしてまいりました。

教育爆発の時代をフォロー

ところがね、これが成熟しない前に大変なことになりました。よい市民を作るということで、大きく私たちの教育が変わったのが1945年です。すぐに、昨日も、変わりましたという話をしました。この大きく変わったというところは、どこで変わったんだろうか。

1958年にロシアからスプートニクが打ち上げられました。アメリカはびっくりしました。スプートニクを打ち上げるというためには、科学技術がうんと進まなければスプートニクは打ち上げられない。共産社会と自由主義社会に分かれて、同じように力をもってる二つの大きな国が競争してる時に、相手は、そのような科学技術の進歩でもって、スプートニクを打ち上げた。これは大変だと驚いたのはアメリカです。

アメリカはあわてて、もう一度、よき市民を作る教育から、科学技術に追い着くような技術社会を作るような教育、technical education に形を変えてきました。そして、ここから大学にみんな行こう、諸君大学に行こう、大学に行ったら一生涯の間に100万円儲かるぞっていうキャンペーンをして、

みんなを大学に送るようになりました。アメリカのG. I. Billっていって、兵隊に行ったら、何年間かたてば、その人はアメリカの大学に奨学金を貰って行くことが出来る。農家の人たちで、さっき言われた字が書けないような兵隊さんたちがたくさんおったのが、一生懸命働いて大学に行くことが出来るように、だんだんなってきた。これを教育爆発といいます。

この教育爆発の時代をフォローしたのが日本です。ここで出来た大学、だあーっと出来ましたねこれを駅弁大学といいます。どこの駅でも駅弁を売ってるような町には、みんな大学を作るってだあーっと大学が、いやほどできた。ほとんどが、国立大学でそれをまかなうことが出来ませんから、私立大学がたくさん出来る、1958年以後、この辺から大学の数がいやほど増えて、今、大学乱立でありますね。

ところが、これでもって、私たちの科学技術が進んだというのは良かった。ところが日本という国は、変な国で、今度は目的を変えちゃいました。大学に入ることが出世だと考えましたから、だれでも大学に。マーチン・トローという人がおもしろいことを言いました。同じ年代の子どもたちの中の15パーセント以下しか、大学にいなかった時代は、elite univercityていう。それが15パーセントを超えて30パーセントに近づく、そうしたら、それは、mass univercity、だれでも大学に行くことが出来るような時代になった。そして、50パーセントを超えると、これは、universal univercity、だれもがみんな大学に行かなければならない時代になった。

日本はもうだれでも大学に行かなきゃならないような時代になりました。なぜ、大学に行かなきゃならない時代になったかというと、そうなければ、私たちはコンピューターを使うことも出来ないし、新しい、私たちの社会生活に追い着くことが出来ない。昔なら、中学校を出ただけで読み書きソロバンが出来たら、それでもって他のことはね、みんな会社に出て学ぶことが出来た。

今はそうでなくなった。したがって、みんな大学に行かなきゃならない時代になった。大変学歴が高くなったということがいえます。いえますというのも、学力が大変な役割を果たしたというのは、その通りでした。例えば、皆さんがヨーロッパへ行ってごらんなさい。例えばロマンチック街道へ行くとね、小さなかわいらしい町があってね、そこへ行くと看板があってね、大きなヤカンがぶらさがってる。荒物屋さんだって。こっちは帽子があってね、帽子屋さん。こっちはハサミがあって、洋服屋さんとか意味になっている。そうすると日本の人たちが通りががりながら、「やっぱりヨーロッパは進んでるわね。こんなきれいな看板。これ帽子屋さんの看板だって、いいねえ。写真撮ろう」「デザインがすばらしいじゃないの」なぜ、あんな看板が出来たか。みんなが字が読めないから。日本は字があるから「かもじや」なんて書いたりね「しちや」なんて書いたり「とうふ」なんて書いてね、ちゃんと字でもって看板が出来たけども、向こうは、それが出来ない。日本の江戸時代の人たちの知識、読み書きソロバンが出来るのは、ヨーロッパなんかより

ずうっと高かったというのは、昨日言われた通りであります。だけども、それを日本人は逆に、「ヨーロッパはしゃれてるね、あんな看板が出来てなんて、さすが立派」なんて、もう少し自覚してくれと言いたくなることもあります。

基礎学力が高くなった

昨日は歴史のことを聞かれて、みんな首ふって、「この頃の学生さん、歴史、勉強せんのかしら」って。ところがね、それももっともなことがあるんです。名古屋の西村さんていう大学の教授が、あまりに日本の学生が数学が弱い、経済学というのは数学が出来ないとダメなんです、ほんとはね。それで、あんまり弱いので、試験をしてみた。物理の人やら数学科の人ですよ。文化系の経済学に入った学生たちを調べてみた。大学で、その試験をしたら、北京大学の学生は、だいたい98パーセントＯＫだった。質問、日本で一番立派な大学、知的レベルが高い大学といわれる東大で何パーセントぐらい取れたと思うか。ハイ。残念でした、44パーセント。京大、京大出た人いませんね、この中には。京大は22パーセント。(笑い)太田先生は確か慶応ですよ。私学の雄です。私学で最もトップのレベルです。そりゃもう、いまだにそれは認めます。でも、この計算だけはすいません、12パーセント(笑い)早稲田、４パーセント。北京大学に比べて、そんなに日本の人たちの質が悪いのか。そうは思いません。京大とか東大とか、あるいは慶応とか早稲田とか、そういう大学の質がそんなに悪いとは思わない。しかしこんな成績になっちゃった。

西村先生は、それで驚いた。どうしてそうなったんか。受験勉強というときに、ああ、経済か。一番基礎的なことだけでエエな。数学試験ありましたか。あった。ないとこもたくさんあります。だから、大学入試用の学力はあるけども、基礎的な学力というのがなくなっちゃった。皆さんが教育を受けてる現状の中では、そういうふうに一般的な、社会的なレベルから比べたら、まったく変な環境の中で私たちは育ってるということです。

自分の意見を発表できない

一番大事なことは、自分の意見を発表することが出来なくなっちゃった。外国に行ったら、ちゃんと自分の意見を言わんと、あいつアホかと言われる。じいっと立ってうんうんそうだって言ってたって、あれは分かってないんだと、私もそうよって言わなきゃダメだね。そういうような意味で、少しずつ違ってくるわけですけれども、日本の場合はあまねく虫喰い学力がついて、ほんとの学力がなくなっちゃった。人の前で自分の意見をまとめて言うことが出来ない。あるいは、英語をこれだけ知ってながら、アメリカ人よりも英語の単語をよけい知ってながら、英語を話すことが出来ない。アメリカ人よりも文法をよく知ってながら、実は、話したら、ブロークンイングリッシュしか出来ない。そういうふうな意味のことが全部出来なくなってしまった。

私たちの教育が、良い市民というものから、もっと知的な、いろんな読み書きソロバンの勉強にと変わってきたときに、私た

ちは、そのステップを十分に踏むことが出来なくなって、今、私たちは来てしまっているということを、これも一つ覚えておかなくてはいけないことであります。この数字はショックでした、私にも。

これは、同じようなことが言えます。それは、外国に行ったときに、日本の人たちが、いかに発言が少ないか。アメリカの中には分かっている人もいます。日本人は、知的にすばらしい哲学的な知識も、あるいは思想も持ってるのに発言をしない。お前のことを聞かしてくれと、ときどき言われるでしょうね。ですから、そういうことを考えたときに、私たちが、今おるとこの問題も、実はいろいろあるんではないか。でもこうして、良き市民というから読み書きソロバンにというふうに変わってきました。

読み書きソロバンが役にたつ

そのときの、もう一つ大きな問題は、アメリカの哲学者でありますけども、この人が教育哲学のことを書かれてるんですね、教育て何か。皆さんは、教育て考えたらどういうことを考えるでしょうね。

教育に段階が三つあるって言うんです。一つは、technical　education です。それが今いった読み書きソロバンということです。この読み書きソロバンの中に、ＩＴ技術が入るんですよ。こういう読み書きソロバンの技術を持つということについて、なぜ、これを使うということがはっきり分からないと、読み書きソロバンは役に立たない。ここが問題です。そうすると、この教育の前には土台がいるんです。私たちが教育を受けるときに土台がいるんです。その土台は humanistic　education と彼は云っています。

私たちが社会の中で他の人と生きていく、その他の人に限りなき大事な人間を、より豊かなことにするために私たちは技術を学ばなければならない。知識や技術を学ぶのは、自分の出世のためだけではない。他の人と一緒に生きるということを大事に考えるときに初めて、読み書きソロバンが役に立つんだと、こういう意識をちゃんと持ってなきゃいけない。

日本でもそうです。論語でも、友あり遠方より来たる、また楽しからずや、みんなと一緒に学びてこれを習う、いうようなことについて、また楽しからずや、それはなぜか。みんなが学んだことをみんなと一緒に分けあって、一緒に生きるということを考えていこうやないか。そのことのために、私は、私たちとその仲間のために何が出来るんだろうかということを考えること、その教育を受けるということ。私は将来何になりたいかということ。

私は孫といっても、あなたがたと一緒かな、あなたがたより大きいかも。この孫たちに「お前たち、何になりたい」「別に」。「何になりたいか、分からん」「何になりたいかがなくて、なぜ学校へ行ってるんか」「みんなが行くから」「みんなが行くところに行かんかったら、遅れるから」ていって、学校へ行って、それで４年間おって、今頃になってようやく思い出して、「ああ、私は勉強し直さんとイカン」なんて言ってるけど、もう間に合わんね。

さて、こうして私たちはしっかり教育ということを考えるときに、読み書きソロバ

ン教育じゃない。読み書きソロバンをして何になるかというときに、その前のhumanistic education、私たちの社会、人間、人類のために、その仲間のために、私たちは何が貢献できるか、そのためには、こういう読み書きソロバンを勉強しようということにならなきゃいけない。

社会の一員としての役割

それじゃあ、人類一人ひとりのためにということが考えられる。じゃあ、なぜ、人類のためにしなきゃならないのか、なぜ、おサルのためにしないで人類のためにするのかということを考えてほしい。そうすると、その前に、「私とは何か」という勉強がないとイカン。inducting educationと彼は言っています。言い替えたら、まず人間とは何かということがはっきりし、そしてその人間とは何かというはっきりしたときに、その限りなく尊い、ここは人間の尊厳ということと関わるんですけども、限りなく尊い一人ひとりの人間が、共に生活する社会というものを作るために、私たちはその社会の一員として、何かの役割を果たしていかなければならない。その役割を果たすためには、私はどんな技術と知識を持てば、その役割を果たせるだろうかということを考える、そういう形で教育の体系がないと、ただ読み書きソロバンだけを教え、ただ大学に入れて、ただ何だけしたというだけでは役に立ちませんよということであります。

私たちはこの点について、今、非常な大きな曲がり角に来ています。スプートニクが打ち上げられ、やれ遺伝子工学であるとか、ナノテクノロジーであるとか。それは何のためかということについての焦点がぼやけてしまうんだ。これが一つの大きな問題だということでありました。

中国の一人っ子政策

さて、今の情況を考えたらね、いろんな情況がありますね。この社会というものはどういうことなんだろうか。例えば、昨日の話からすると、私も中国へほとんど毎年、青年を連れて行ってるんです。向こうの青年たちとディスカッションをしてるんです。向こうの青年たちは目標がわりと狭いから、わりと目にはっきりしてますから、俺はこれをするんだ、あれをするんだとはっきり言えて、日本の青年はいつもオタオタして、エエーッ、アー、大変だ、まいったまいったってと言って帰って来るのですが、それでも毎年連れて行くんです。その中国のことを考えますと、今、中国大変ですよ。13億ですね、人口が。インドが7億です。ところが、インドは宗教的な理由もあるし、いろんなことで、どんどんどんどん子どもが増えてますから、今もう10億近くなってるんじゃないですか。

中国は一人っ子政策やなんかで産児制限を奨励して、伸びが少なくなったけれども、それにはいろんな問題があります。あそこは大変な政府ですからね。明日から子ども産んではいかん。男も女も子どもは一人。子どもは一人と言われても、今まで長い間農民生活をしてますから、どうしても、女の子より男の子のほうが力があるから、農耕に適してるわけですね。ですから、男の子がほしい。

女の子が出来たら、もう一人男の子が産みたいと、こういうことになって、隠し子が産まれてくるんです。政府のほうは一人しか産んだらいかんと言うのに、もう一人産んだら、税金をうんと増やすとか、いろんなことを免除をしなくなるとか、そういう罰則があるもんですから、隠し子生まれた子どもを報告しない。戸籍に載らない子どもが増えて、その戸籍に載らない子どもが、もう5、6年に1千万を超えたといわれています。あわてて中国の政府は、「二人ぐらいはエエわ」と小さな声でささやくようになりました。ことに少数民族のほうは、二人ぐらいよろしいということを言ってます。こういうふうにして制限をかけてますね。

もう一つは、中国の奥から、上海とか広東とか、そういう大きな都会に、みんな流れて来るんです。非常に経済格差が大きくて、暮らしが10倍ぐらい違いますから、みんな流れて来るんです。

例えば、私この前行った広東市の駅に行ったら、ダアーッと何万の人たちが、こんな大きな布団を担いで皆坐ってる。「これ、何してるんや」「田舎から出て来て、このへんで新しく出来る企業団地のとこに立って、そしてそこで就職をするために大勢の人たちが並んでるんです」こういう労働力がどんどんどん溢れて、そして新しい工業地帯の工業が、どんどんどんどん今盛んになってますね。

これには切符がいるんです。都会用の切符と農村用の切符、都会で働いていいという切符を貰った人は食料を買えますが、農村で働いてる人は、農村では食料切符はいらんはずだと食料切符をくれない。そしたら、出て来た人は食料切符がないから食料が買えないわけですね。ヤミで買うわけです。だからヤミで値段が高くて、大変いろんな問題が起こっています。それにしても制限をしながらでも、13億から増えてくる。

ところが、先ほど言ったように、どんどんどんどん工場を作らないと、工業国にならないと、中国のレベルは上がりません、生産も上がりません、貿易も上がりません、先進工業国になりませんから、工場がたくさん建ちました。一番工場が建ちやすいのは、やっぱり北のほうの、比較的知的レベルが高いところにあります。言い替えたら黄河流域です。

黄河流域の公害

黄河流域に工場がたくさん建ちましたから、二つの問題が出た。一つは、その工場から出てくるところの二酸化炭素、煙、この煙が汚染を呼び起こします。風が吹いただけで、あの砂が舞い上がって、黄砂になって日本に来るんですから、あの煙が日本に来たら、みんな流化炭素になって、いっぺんで木は枯れます、三日ほどで。おそらく、中国が工業化がもっと進んで、今までのように煙を出したら、1ヵ月ぐらいしたら、日本の森林は全部枯れてしまうかもしれない。そんな危機の状態の中で日本は動いてるということですね。

もう一つは、その工業用水を汲み上げるために、なんと、黄河の水がなくなっちゃいました。この3年ぐらい黄河流域に、もう水が流れてこないんです。上のほうは流

れてるんですよ、とうとうと。途中で地下を通ってポンプでもって汲み上げてきますから、だんだん水量が減って、しまいには表に出てくる水がなくなって、そして渤海湾に入る頃には、黄河の水がもうほとんど消えています。黄河の水が消えてる。あの文明を育てた、黄河文明を育てた、あるいは、東洋文明を育てた黄河というものが、今や死にかかっているというのが現実であります。

もう一つ、工場が水を取りますから、農業の水がなくなります。今や中国は食糧輸入国です。13億の人たちの食糧をどうするのか。大変な量の食糧を輸入しなければならない。したがって、中国は自分のところでもっと生産するために、各省に15パーセントずつ増やせ、こう言ってるんですけども、それが出来ないところがある、もう耕してしまって出来ない。そこで広東省だったかな、アルゼンチンに土地を買いたい。そしたらね、アルゼンチンが、国家には売ること出来ません。しょうがないからそこから採れた食糧を全部広東省に輸入してくださいと約束をしたそうです。

こういうものが、たくさんあります。カーギルっていう、食糧の会社があります。アメリカの食糧を日本でも配給するために、カーギルという会社がありまして、これが農産物をアメリカから持って来るんです。中国に持ってったら、いくらでも売れるもんですから、はじめ九州に作ったカーギルの配給所は、今中国に移りました。そのほうがたくさん買ってくれるからです。トウモロコシとかいろんなものを買ってくれるからですね。こうして、今、中国は輸入しています。

笑い話ってもこれも本当の話です。World watch institute というアメリカの有名な環境問題を考えている会社でありますが、そこの、Dr. Brown という有名な所長さんがいます。この前、毛沢東が中国の人に大演説をしました。中国はだんだんだんだん民度が高まって、暮らしがよくなってきた。しかし、農村の人たちの中には、まだ栄養が十分でない人がいる。私は今考えていることは、中国の一人ひとりの国民が、せめて1日に1個卵が食べられるほどの栄養がいきわたるようにしたいという演説をしたことがあります。それを聞いて、Dr. Brown が、中国で1人に1個ずつ卵を食べさせるといったら、どうなるか。13億の人が1日に卵を1個ずつ食べようとしたら13億個の卵が毎日いるわけですよね。13億羽のメンドリがいなきゃいかん。こうして、13億羽プラスアルファのニワトリを飼うとしたら、そのための飼料はオーストラリアで出来る、1年間で出来るトウモロコシ全部を使っても間に合わないんですよ。オーストラリアがトウモロコシをみんな持っていかれたら、牛が食べるものがなくなる。

もしも、13億の人が1日に1本、青島ビールを飲んだらどうなるか。スカンジナビアの麦、大麦が全部この13億の人たちが飲むビールのためにいるんです。これを輸入したらどうなるのか。

どうして生活していくか

私たちは、今、そういうような時代の中で考えたときに、命っていうか、一人ひとりが、どうして一緒に生活するかというこ

とが、非常に今大きくなってきます。私たち自身が、今、そういう食糧の問題を考えただけで、それを賄うために「大丈夫ですよ。科学技術が進みますよ」「遺伝子工学が進みますよ。１匹の牛から13頭の牛を、みんなそれぞれに分類して、卵を入れてやれば、ひとりが１匹産む牛を、いっぺんに13匹、クローンの牛を13匹とれてやるから、13倍になるんですからね。食糧のことは心配いりませんよ」科学者たちは、そう言うでしょ。しかし、そういうふうないい方でやったときに、その中における本質的な違いというものは、どこに出てくるのかということが、いろいろ問題になりますね。これが一つの問題です。

こうして考えたときに、人間は、人間の尊厳をどういうふうにして考えるのかということは、新しい課題になっています。私たちは、皆さんに、人間の存在は、尊厳はどう考えるんですかということを問うたのは、今のことを考えるだけではないんです。私たちは、これからのそういう社会の中で、私たちのこれから人間というものをどう考えたらいいのかということを考えなきゃならないということです。

簡単な例を言いましょう、ようやく資本主義社会が生まれてきた18世紀には一生懸命、みんなが働きに出るようになりました。それまでは農耕社会ですから、子どもたちは親と一緒に生活をしていました。落ち穂でも拾って、手伝いをして、おとうちゃんのようになりたいって言って、立派なお百姓になってくれる。こういう生活でしたね。ところが、だから、子どもということについて、あんまり考えてなかった。子どもはおとなの中にちょこちょことおる小さな仲間だみたいに思っていた。

フィリップ・アリエスという人が、1980年にですね、子どもの誕生という本を書きました。その、子どもの誕生という本は、何を書いてあるかと言うとね、そういうふうな生活をしている人たちが、いよいよ、都市化、工業化、近代化、資本主義化、いろんな、工業が中心になって、工場で働くようになりますと、工場にみんな農村から出て来た人が職工さんとして働くようになる。都市に集約してきます。都市化が行われる。そして、その都市化が行われてきたときに、そこで、お父さんは工場に行くんです。お母さんも工場に行くんです。子どもはどうしたらいいんだろうか。仕方がありませんから、子どもは学校に行くようになります。学校が出来るんです。

学校というのは、その前からなかったことはないけれども、いわゆる大衆のための学校として開いたのは、この18世紀になってから。そして初めて子どもを、次の世代の人間として教育をしなければならないということを見出してきた。そして学校が生まれ、子どもたちを一生懸命教育するということを、母親の役割としてくるようになったのは、18世紀が終わって、19世紀になってからである。子どもが本当の意味で子どもの人権を認められ始めたのは、実は20世紀になってからなんだということ。

その証拠がもう一つあります。これはエリザベス・バダンテールという女の人がいます。パリ大学の哲学科の教授です。この人が、「愛を加えて」という本を書いた。18世紀のパリの町で１年間に２万1000人ぐら

いの子どもが生まれたんですって。そのうちで、お母さんのお乳で育てられた子どもが、どのぐらいいると思いますか。パリの町は王様の王宮とか、そんなものがいっぱいで、要するに貴族の社会の人が多く住んでた。統計によると、お母さんに育てられた子どもは、わずか千人なんです。それから、乳母に育てられたのが千人。あとの1万9千人は田舎に里子として貰われていくんです。だから産んだお母さんの顔をいっぺんも見ることなく、お母さんもその子どもの顔をいっぺんも見ることなく、その子どもたちはみんな田舎に預けられて、田舎の労働力になるんです。これが、18世紀なんです。

で、バダンテールという人は、このことを取り上げて、なぜ18世紀に子どもが生まれたときに、ほとんどの親が自分の子どもを育てないで、みんな、知らない見ず知らずの人に預けてどこにやったかを知らない、それでおしまいなのだ。

そうした中で、19世紀から、20世紀になってきたときに、今のような工場が出来たときに、もう、子どもの代わりに私が死んでもいいと思うようになってきた。あるときには、生まれていなくなっても、そりゃ寂しいでしょうけども、それほど抵抗を感じなかったお母さんたちが、たった100年の後に、命に代えても、その子を育てますというふうに変わったのは何だろうか。

それは母性本能からでしょうか。そうじゃありません。本能はそういうことじゃありません。じゃあなぜお母さんが、それを大事にされるようになったんですか。それはお母さんと、子どもとの間の、人間と人間との接触の中で、そういう愛情が生まれてくるんです。人間が他の人を愛するというのは、ただ単に、自然の目的ではなくて、そういうことを考えることによって生まれてくるんです。だから、愛によって、お母さんと子どもの間の、あの母性愛は、接触によって生まれてくるんですよということを言ったのが、このエリザベート・バダンテールであります。

昨日の話の中で、そのことを思い出していただきたいと思います。私たち自身が人間関係ということを大事にする。人間はどうして、その存在を認めるか。エリック・エリクソンという心理学者がこんなことを言いました。人間は、他の人から愛されてる、他の人から認められてる、他の人から受け入れられてるというときに、その人は、自分が人間としての喜びを感じるんだ。それと同時に、私も他の人を受け入れる、他の人を愛する。他の人の愛に報いて、私もその人を愛する心を持ってるのが人間だと言いました。基本的に、そういう関係をどのように作るかということにおいて、私たちは人間の新しい生活の中の問題を考える。人間を一人ひとりの問題を考える一つの大きなサゼスチョンとして考えていっていただきたいと思うんですね。

足でかいたバラの絵

私は長い間、障害者の人たちと一緒に生活をしたり、障害者の人たちの施設を作ったり、いろいろしています。インフォメーションセンターに、こんな大きなバラの絵が掛かっているのを、気付いた方おられますか。あの絵はね、身体の不自由な人が足

で描いた絵なんです。その人は脳性麻痺がひどくて、こうやって、アテトーデといってね、自分の意思と反して筋肉が動く。だから、ライスカレーのときのスプーン持ってても、たまに僕らが「オオーイ」て言ってね、それで、「オイ、ゆうちゃん、どうや」て言ったら、「ウウウー」となって、バアーンと飛んでくる。筆なんか持ってたって、興奮したらこうなるから、描けないんですね。

その子が、キャンプファイヤーを焚きました、みんなと一緒に、みんな小学生なんです、小学校5年、6年生の子どもたちです。「君、何になりたい」「君、何したい」聞いて歩いた。というのは、障害を持つ子どもたちは、みんなお母さんまかせで、ボタンをかけることでも全部お母さんがかけてくれるというふうな生活をしてきました。自分で何をしたいかという考えることより、お母ちゃんが何をさしてくれるかということしか考えられないという生活が長かったから、ここでもって、「自律しような」て、言葉では言いませんけど、そういうことを目的にやってましたから「君、何したい。さあ、キャンプ来たなあ。仲間が出来たなあ。君、粘土作ることも出来るようになったやないか」そしたらね「絵描きになりたい」。さあ、その時困ったんです。だけど私は、「そうか、君、絵描きになりたいんか。やるんだなあ、頑張れよ」こう言った。

そしたら、その子はね、それから20年経ちました。このキャンプが新しく出来たときに、みんな来ないかと言って案内をしたときに、その子がね、「先生、僕、絵描きになりました。太平洋障害者美術協会で入選をしました。私が、絵を描きたいと言ったときに、絵を描かしてあげる、絵を描きなさいと言ってくれた人は一人もいませんでした。先生だけが、絵を描きなさいと言ってくれた」絵を描きなさいと言ったわけじゃないけど、そうか頑張れよと言ったんですけど、でも、彼は、「やれ」と言われたと。そして一生懸命やった。

その結果、手はどうしても押さえてうまくいかないので、足で描くことを覚えた。彼は高らかに、「これが、その作品です」そして、「僕は今、10人の子どもたちのために、絵を足で描きながら、子どもたちの絵の指導をしています。それで、私が今これが出来るようになったのは、キャンプのお陰です。キャンプでみんなが、私を認め、受け入れ、励まし、そして、いつまでも見守ってくれてるということが分かりました。そして私は一生を決めたんです」一人の人を一人の人間として扱ったということが、その人が、生きるということの道になった。そしてそれを寄付してくれた。

日本の障害者福祉は30年遅れ

こうして仲間と一緒に、長い間生活をしていました。ところが、この障害者というのは、今まではどうですか、日本の社会の中では。差別をされてというか、区別をされてきていました。私たちは、学校で、障害を持った子どもたちのためには、あなたがたは勉強はしにくいだろうと、この机ではダメだろう、こんな階段の多い教室では勉強しにくいだろう、そう言って、養護学校というのを作って、子どもたちのため

に、ほら、あんたたち、歩きやすいだろう、ほら、あんたたち、勉強ゆっくりしてあげるからね、こう言って、勉強を養護学校でさしてくれた。一見親切のようでありました。こうした中で私たちの社会があって、これが、ごく当たり前の社会だと私たちは思っておりました。

1981年に、ご存じのように、国際障害者年というのがありまして、そして障害を持った人たちの権利、人権、あるいは、障害を持った人の尊厳、その人、人間を一人の人間として尊厳をするということは、どういうことかということが、みんなの中で考えられました。私たちが、ここでも、町でも、いろんなプログラムを催したときに、私は各国の障害を持った人たちのお世話をしてくれる先生たちに集まってもらって、神戸で国際シンポジウムをしたことがあります。そして、その国際シンポジウムをしたときに、その前に食事をしながら、ちょっと打ち合わせをしました。そうしたら、私の横にいた、アメリカのドクターワード、この人は言葉が少し不自由だったんですけども、この人がスピーカーとして来てくれたんですが、いろんなことを話したときにね、ごはんを食べながら、私に、ニヤニヤ笑いながら「今井さんねえ、日本の障害児教育は、障害者福祉は、30年遅れとるよ」と言うんです。

私は、彼が何を言おうかというのは、それまでの話で分かりましたから「そうですか」、すました顔して知らん顔していました。そして、今度は、厚生省の次官に「日本の福祉行政、30年遅れてるそうやで」と言ったら、「そんなことありませんよ。アメリカよりもっと立派ですよ。日本ではね、ベッドに寝ててね、ボタン一つでボッて起き上がったりね、ボタン一つでテレビがつくし、ボタン一つでナースコールが出来たり、いろんなことが出来る機械があってね、みんなはね、ほんと楽々暮らしてますよ。施設へ行ってください、日本の施設は、おそらく世界で一番施設が立派ですよ」その通りなんです。「そうやなあ」と言って、それも笑いながら聞きました。

いざ本番のときにね、パネラーがザアーと並びました。私は司会だから真ん中。それで、次の自由討議になったときに、私は、すました顔をして、「ドクターワード、あなたは、私にさっき日本の福祉が30年遅れてる、ことに障害者福祉が30年遅れてると言われたけれど、その意味は何でしょう」ドクターワードはびっくりした顔をして、私のほうを見て「いらんこと言うな」というような顔をしてましたけども、仕方なしに彼は言ったんです。日本は、障害者がおっても、日本はこういう社会がある、これが社会です。この社会から、身体の不自由な人、知恵遅れの人、あなたね、あなたはもっと勉強のしやすいとこに行かしてあげるね。こうして、この中から、養護学校という学校に入れてくれるわけです。あなた普通の職場に行っては大変でしょ、福祉工場に入れてあげるね。そこでは車椅子のまま仕事が出来ますよ。あなたは動けなくて大変でしょ、そしたら、あなたは福祉施設、養護施設に入れてあげますね。こうして、みんな入れてくれる。こうして、ここにおる人は何か。身体的に健常者という人だけで社会を作っている。そして、他の人たち

は、みんな外に出て行って、ここでもって一生懸命、健常者ばっかり集まってるから効率がよくて、そのたくさん効率がよくて儲かったお金の中から、ちょっとずつ、はい、手数料あげますよ。はい、施設を充実してあげますよ。工場の機械を新しくし、もっと、働きやすようにしてあげますよ。こういって分けてしまう。

いったい健常者ばっかりがおって、生活をしていて、そして、他の人たちは、その社会から違ったとこに外されてる、この社会が、ノーマライゼイションと言われる社会ですか。私たちがいう社会は、弱い人も、元気な人も、病気の人も、動けない人も、子どもも、それから、マイノリティーの人たちも、みんな一緒に生活をしているのが普通の社会でしょ。その普通の社会に一緒に生きるということが、私たちにとっては大事なことではないんですか。

この人たちをはずして、特別なとこにしまっておいて、博物館みたいなところに入れておいて、あなたがたは大事にしてあげてるということが、本当の意味で、その人を大事にしていることなんでしょうか。子どもは社会のために、何にも役に立たないかもしれない。でも、その役に立たない子どもがいるのが私たちの社会なんです。年寄りがいるかもしれません。もう何にも役に立たないかもしれません。しゃべるだけは、まだしゃべれますなという人もいるかもしれない。でも、そういう人たちもおるのが私たちの社会じゃないか。元気で人だけが集まってるんじゃない。身体の不自由、車椅子の人、みんなが一緒に、一緒に生きる、私たちの命を共有しながら生きていくんだというのが、私たちの社会でしょ。

私たちは価値で判断をするんですか。子どもがかわいいということで、子どもの死を悼むことは分かります。情緒的な意味で分かります。でも、また、ある人が、いろんな社会的に立派な仕事をしてくれる人だから、大事な人だから、ここで生かします。これも分からんことはない。しかし、今のように、身体の不自由な人、小さな子どもたち、年寄り、みんなが生きたときに、これが私たちの社会だと考えたときに、その社会に一緒に共有出来る命とは、その社会で一緒に人間として生きてゆくというつながりとはどういう社会なんだろう。実に、21世紀というものは、そういうふうになってきたんです。

命の尊さとは何か

だから、私たちは、今、環境の問題も一緒に含めて、私たちは、もう一度生きれる社会を考える。そのときの命の尊厳とは何か、命の尊さとは何か。子どもが、未来性があるから、言い替えたら、未来この社会に役に立つから、その子どもの命が大事なんですか。お年寄りは、もうこの社会には役に立たないから、子どもの命より大事じゃないんですか。身体の不自由な人は、仕事が半分しか出来ないから、その命は半分なんですか。それだったら、クローン人間の命はどうなんですか。私たちは、今、そういうことが問われているのです。

それじゃあね、私たちの社会にはいろんな人がいます。背の高い人には、天井を掃除してもらったらよろしい、低い人は床を掃除してもらったらよろしい、お互い同士

が、やりながら、助け合いながら、一つのものを作るときに、私たちはみんなが、そのような命を、共に集めた世界の中で共有してるということを、どのように考えるのか。そのことのためには、時代を私たちは認識しておかなきゃならない。なぜか、今までと違った社会が出来たときに、これを排除することが、今、流行ってるんです。

非人間化といわれる時代は、技術社会が進めば進むほど、効率を大事にするがゆえに、人間が人間でないような、効果を挙げることが出来る道具として使われると、今いわれている。今に人間がみんな道具になる。

もう一つ、例えば、みんなが効率ばっかり言いながら考えているけれども、私たちはそうでない社会を、どんなふうにして作ってくるのか、21世紀は、実は、それが課題になってくるんです。

21世紀というのは、どんどん進んでしまう社会では困るんです。機械だけで、純粋経済学だとか純粋物理学だけで技術社会が進んだら、人間の社会ではなくなる。人間の社会が、今こういうところで、効率を排除してくる非人間化の時代が来てる。そのときに、いったい、人間って何や、私たちの社会に役に立つ人が大事な人なのか。生きてるということだけで大事なのか。このことが真剣に問われる。

福祉でもって、お金がなくなりましたから、そして今、介護保険というものが出来て、みんなが保険をかけて、その保険のお金でもって、介護の福祉のマニュアルが出来ました。これぐらい悪い人には、これぐらいのケアをします。このぐらいの人にはこの程度にします。これは、介護保険には適用出来ません、ケアはしませんマニュアルが出来ました。そうしたら日本の福祉は、マニュアルを一生懸命守ることが福祉のように思い始めました。これだけの世話をすれば、私の施設は済むんですというふうになってきます。福祉のマニュアルが出来れば出来るほど、福祉が滅びるんです。なぜか。人間を人間として扱わなくなるから。

もう一度、人間に焦点を

私たちの、今大事なことは、そのことが問われている。だからこそ、皆さんにお願いしたいことは、私たちが、この時代だから、もう一度人間に焦点を合わせながらやろうじゃないか。昨日、話がありましたね。もしも、それだったら、私たちは、工場でもって効率のいい社会だけ、儲けることが出来るほうがいいということならば、ロータリーは生まれてきません。

職業奉仕というのは、そうじゃない。職業を通して、社会の人たちのために、幸せを運ぼうとする、そういう団体ですといったときに、ロータリーが成り立ったんです。ロータリーの人たちが、「いやあ、職業、大事ですな、とにかく儲けなさい、他の人は蹴散らしときなさい」といったら、ロータリーは生まれてこなかったでしょう。ロータリーはヒューマンビジネスといわれる。Mankind is our business.と来年度のテーマに掲げられる理由は、そういう社会を作ることのため、みんなが集まろう。

この中におるロータリアン、会社の社長さんやら工場の所長さんやら、弁護士さん

やら、学校の先生やら、いろんな人が、自分たちの職業を通して、みんなと一緒にそれを分け合って、自分たちが儲けるだけじゃなくて分け合って、この社会を、人間が住んでる社会にしていこうというのが、21世紀の社会。21世紀は、そのためには、効率の社会という考え方を切り替えなきゃならない。価値の転換が必要なんです。人間は何かという価値を、もう一度見出すかどうかが、21世紀を生きることのために一番大事な問題になってくる。

新しい時代の戦士に

そのことを皆さんにお願いしたい。21世紀になったときに、そのことに気が付かないと、私たちの経済も医療も、あるいは科学も、みんな変なことになってしまう。人間の生活のために、経済もあるんですよ。このことを言い出したのは、アマルティア・センていう人が、1998年に、「貧困と飢饉」という本を書いて、ノーベル平和学賞を貰いました。経済学で儲かるということじゃなくて、そういうことも含めた全体の豊かさ考えるっていう経済を打ち立てなきゃならないといったのが1998年－昨年のことです。

新しい時代が変わりつつあります。これの戦士になっていただくのが、あなたがたです。私たちのお願いはそこにあることを申し上げて、私の話を終わります。

あいさつ

国際ロータリー第2670地区
ガバナー　太田　英章

皆さん、お疲れでございました。今井先生のお話よかったですね。2時間という時間があっという間にたってしまいました。藤井先生のお話、野尻先生のお話ももっともっと聞きたいと思いましたが時間というものは待ってくれず、どんどん過ぎていきます。

この3日間の思い出というものは本当に貴重なものであると思います。新しいものを発見し、いろんなことを皆さんの心の中に持って、お家へ帰っていただきたい。そして出来れば来年もまたここへ来ていただいたいという気持ちでございます。

みなさんどうもご苦労さまでございました。

国際ロータリー第2680地区
パストガバナー　森　滋郎

私は毎年このＲＹＬＡに参加して、全然顔も知らない、生活環境の変わった君達が4日間でみんな変わっているんですね。特に昨日の発表などでも、えっというほど皆さん方はよくしゃべっている。また顔が変わったよと写真の専門家がおっしゃいます。素晴らしいものですね。

また今回のＲＹＬＡは生きるとか、問題が無茶ですわ。なぜそんな問題をつけたかと聞いたら、子供達のキレルとかいうことから、ああいう問題をつけたそうです。

生きるとか、生命とか死ぬとかということは一生かかって勉強したって、出来ない。春になって麗らかになり、雲雀がないている。「麗らかやな、ええな」と皆さん思うでしょう。虫がヒューと飛んでくる。バクッと鳥に食べられる。蝶々がヒラヒラと飛んでくる。あっという間に食べられる。それが現実なんですよ。麗らかじゃないんですよ。

ヒラ、ヒラ飛んでいるのは必死に飛んでいるのですよ。それを人間が呑気に気持ちように飛んでると錯覚している。ところが生物の動きというのは毎秒毎秒死との戦いをしながらヒラヒラして蜜を求める。ヒラヒラして雄を求める。結局はその目的はいい子孫を残すことです。

昨日もフォーラムでいろんな問題が出ました。人間が生まれて来た以上は我々の上には何億という鎖がついて、その一番下に私達はぶら下がっているのです。人間の目的はこの

鎖の下に立派な鎖をつけることです。それを忘れてはいけない。

だから皆さん方はとにかく、鳥が鳴いている、ペンギンが沢山泳いでいる。アシカが走っている。みんな子孫のいいのを残すために一生懸命走っているのです。ペンギンでも卵を抱えて、卵からひなが出たらまた餌を取りに海に入る。沢山のペンギンの中で自分の子供を間違わない。あれなんですよ。

いい子供を残すことは我々の目的なんです。いい子孫を残るためにはよい相手を見つける。よい相手を見つけるには自分が立派になって、いいとこを見せる。体をボディビルで立派にして、異性を引き付ける人もいるでしょう。あるいは知能、技術、あるいは金儲けというように何でもよいのですが、良い相手を見つけて皆さん方も早く結婚して、いい子供を作ってください。それがあなた方の使命だと思います。ところが結婚しないとか、子供を生まないというのは人は自分の下の鎖がプツンとそこで切れてしまう。ご先祖様に申し訳ないですよ。少なくとも２人で３人の子供を作らないと人口は増えない。皆さん方は日本のこれからの宝物です。

良い人間になるためには、先程の大海原に一枚の板があって、何人かの人がいた場合誰が残るかというと、私の理論から言えば当然子供を残す。お父さんもお母さんも死んでもいい、子供を残す。昆虫の世界ではカマキリは交尾の後、雄は雌に食われるでしょう。いい子供を残すには死んでもよい。そうすると答えがみな出来るでしょう。

迷う必要はないのです。深川さんが非常に難しい問題を出されたけれども、結局我々は子供を残すことが大事です。いい子供になるためには、いい子孫を残すためには、まず魅力のある人間になることだと思います。

皆さん方がＲＹＬＡでいろんな話をされるということも、魅力が出て来るのです。どんな人間がいいのだろうか。キリストはマタイ伝の17章で、黄金律「自分がして欲しいことを他人に施しなさい」これがキリスト教の基本なんです。孔子は「己の欲せざること人に施すな」嫌なことは人にするな。これも同じですね。老子は「仁」二人が一人。これが人間にとって一番根本の人間なのです。つまり英語で“In to ther shoes”彼の靴を履いて、彼の身になって。

２～３日前、新聞に人間の間という話が出ていました。人だけだったらダメなんです。間に入るということは１歩彼に寄るわけです。むこうも１歩寄る、人と人の間に入って玄関が出来る。人だけだったら電信柱です。皆さん方も人だけじゃ秀れた人でも電信柱です。相手の中に１歩入る。そうすることによって素晴らしい人間関係を作るようにしてください。

いずれにしても、皆さん方はこの４日間の間に変身されました。国の宝です。皆さん方は宝ですよ。自信を持ってください。

A 班

越智　稔

今回ＲＹＬＡに参加して思った事は、人と人が理解し合うのに時間は関係ないという事でした。

私は３日目のバズセッションの後、自分の意見に対して、また自分自身に対して自信を持つ事が出来なくなり、かなり落ち込みました。しかしそんな私に班のみんなは温かく接し、はげましてくれました。実を言えば、地元にいる何年もつき合ってきた友人に、自分の悩みを打ちあけることも、何か怖くて、相談する事ができずにいたのです。

しかし、同じ班のみんはわずか３日という短い時間にもかかわらず、私を理解し、いろいろな話をしてもらう事で、何とか自分を再び取り戻す事がでいたのです。この今まで体験する事ができなかった新しい体験が、とてもうれしく、また参加してよかったと心から思う事ができました。

同時に今までの自分はどこか人と接する事を怖がり、周囲に心配をかけたくないと思って黙っていた事で、余計に迷惑をかけ、心配をかけていたのではないかという事に気が付いたのです。

今回、私達の班がバズセッションで導き出した事は「人が生きていく上で重要な事は、コミュニケーションである」という事でした。私は一度コミュニケーションをとる事を拒否した事で、逆にコミュニケーションの重要さに気付く事ができました。その事を教えてくれた班の仲間に対して、またカウンセラーの方々には、言葉で言い表わせないぐらいの感謝の気持ちでいっぱいです。

今回私が体験した事は、誰でもおちいる事があるかもしれないし、そうでないかもしれません。しかし、もし私以外の誰かが自信をなくし、コミュニケーションをとる事を拒否するような事態におちいった場合、今度は私からコミュニケーションをとり、少しでも私が仲間から与えてもらった気持ちを、分ける事ができるよう、日々の生活を送りたいと思います。

最後に、３泊４日私をはげまし、支えてくれた班の仲間、そしてカウンセラーの方々に「本当にありがとうございました」と、こんな事しか言う事のできない、自分を情けなく思いますが、最大の感謝をこめて、「本当にありがとうございました」

片岡　麻衣子

今回ＲＹＬＡセミナーに参加させていただいて、多くの貴重な経験をすることができました。四国から集まった初対面の人たちと共同生活をすることによって、家族のような連帯感が生まれました。話をすることによって、自分の知らなかった地域のことを知ったり、悩みを打ちあけ、励まし、励まされることによって自分をみつめ直すいい機会になりました。

この４日間、日頃考えもしたことのないさまざまなことを考えさせられました。“生きること、

死ぬこと”“人間に求められるもの”“環境問題”“生命倫理”などなど。その中で特に深く考えたことは“生きること、死ぬこと”についてでした。

人には生きる権利があれば死ぬ権利もあると思います。しかし安楽死や脳死の問題は別として、現在自殺志願者が多いことは悲しいことです。私の父の田舎は高齢化が著しく、仕事をすることができなくなった老人が生きがいをなくし、「死にたい……。」と話しているのを聞いたことがありました。

父と母の生を受け生まれてきたからには生きる義務があるし、楽しみをみつけて生きて欲しいと思うのですが、私はその老人に何をしてあげたらいいのか分かりませんでした。

しかし、今日の今井先生の講義を聞き、自殺志願者の気持ちを聞いてあげることが大切だということが分かりました。

バズセッションの時間に“生きること、死ぬこと、そして共に生きること”というテーマで私たちの班が話し合い共感したこと……。

人は一人では生きられない。周りの人たちとのコミュニケーションが不安の解消になり、必要なものなのだ、ということにつながると思いました。私は今回のＲＹＬＡセミナーで得たことを生かして、周りの人々に少しでも何かを与えられる人間になりたいと思いました。

金澤　怜子

私は最初このセミナーのことを聞いた時、一体何をするセミナーなんだろうと不安に思っていました。見ず知らずの人たちと出会って講義を受けてディベートをする、ぼんやりとしたイメージを抱いていました。

実際に参加してみて、持っていたイメージとは全く違っていました。セミナーを通して得るものは大変大きかったです。それぞれ世代や職業、性別を超えた人たちとの出会い、話し合いや討論し合う中で、その人それぞれの局面から見たものの価値観を知ることができ、また新たに自分の考えを深めることができました。

今回のテーマである「人間の尊厳」は今までそんなに深く考えたことのない「命」について話し合いました。私は人生経験の浅さや、考えをまとめることが上手くできないために、班の中で積極的に発言できなかったように思います。考えれば考えるほどに自分の考えが混乱してしまって、何を言いたいのか自分でも分からなくなることもしばしばでした。しかし、どんどん発表していかないと、このような状態から脱出できないということを学びました。

また、このセミナーを通して、Ａ班のみんなと酒を交えながら、いろいろな話ができました。その人の人生観や職業観、そしてこれからの目標、私にはそんなみんながとても輝いて見えました。大変刺激を受けることができました。私もこのセミナーで学んだことをバネに、これから社会へどんどん飛躍していきたいです。そしてまた再びパワーアップした私になってこのＲＹＬＡセミナーに戻って来ようと思います。

最後に、この４日間お世話になりましたカウンセラーの濱さん、薫さん、Ａ班のみなさん、ありがとうございました。

黒木　舞

私にとって３回目の余島で、初めてのＲＹＬＡセミナー参加でした。４日間、本当にたくさんの人たちと出会い、自然に触れ合い、また「生、死、共に生きる」について、同じ班のメンバーと何度も話し合い、このテーマの重さを改めて実感しました。

私は、仕事がら人の死に関わることが多く、特に“死”については以前から私の中でのテーマでもありました。

藤井美和先生のお話を聞いた時には、死に直面された方に対しての新たなケアー内容、死の重さ、ＱＯＬのあり方を再度考え直すことになりました。今までは自分の中だけで考えていた事を班で話すことによって、いろいろな考え方があることを感じ、これから死のテーマについて、私の中で答えはたぶん一生出ないかもしれない深いテーマです

が、生、死について逃げないで心のどこかでつねに考えていくことを心がけたいと思います。

フォーラムでのこのテーマで、一人では絶対に出せることの出来ない意見を聞けたこと、応用のきかない私にとってはとても貴重な経験となりました。

班では、キャビンタイム、バズセッションなどで、自分を作らず、そのまま素直な意見を話し合い、また、レクリェーション時間などの時に、一緒に余島の自然を感じ遊ぶことによって、本当に大切な仲間が出来たこと、また、目一杯迷惑をかけたのにもかかわらず、つねに笑顔で私たちの味方でいてくれたカウンセラーの濱さん、武田さんに出会えたこと、本当に感謝したいと思います。

佐藤　恭子

今回のＲＹＬＡセミナーを受講するにあたって、余島って一体どんなところなんだろう、ＲＹＬＡセミナーとはどういうものなんだろう、と不安と期待の入り混じった複雑な気持ちでやってきました。ロータリークラブのプログラムなんだから、きっと楽しいにちがいないと確信していましたが、見ず知らずの人といきなり３泊４日を一緒に過ごすなんて、と少し抵抗感もありました。

しかし、実際に大自然に囲まれたとっても素敵なこの島で過ごしてみて、日常生活の中では得られない貴重な経験ができ、たいへん有意義な４日間を過ごせて大変嬉しく思っています。

第23回のテーマ「人間の尊厳（命の尊厳）」について、３人の先生方のすばらしい講義を聞き、また、キャビンタイムやバズセッション、フォーラムを通して「生きること、死ぬこと、そして共に生きる世界」について討論し、普段であれば意識することのなかった私たち人間の命そのものや命の価値について深く考えさせられ、また、自分の生き方そのものについて、これからどう生きていくべきかという指針が少し見えてきたような気がします。

また、Ａ班での討論では、今の私たちにとって大切なものはcommunicationであり、何故それが大切であるかを私たち人間の存在意義といった根本的、哲学的な視点から話し合い、共感しあうことができたことは大変大きな収穫になりました。

余島で過ごした時間、余島で感じた大自然のすばらしさ、余島で得た友、余島で得たロータリーの精神は私にとってかけがえのない財産になりました。

そして、余島に来る契機となったロータリークラブやロータリアンの方との出会い、そして余島で出会いお世話になったロータリアンの方々に感謝する気持ちでいっぱいです。どうもありがとうございました。

竹本　周史

ライラセミナーのバスに乗り、渡船で初めて余島の土を踏んで、私は物凄く不安でした。知人もいなく、姫路で奉仕活動をしていた時の知人も存在しませんでした。凄く不安でした。

しかし“ヒト”は言葉や表情で表現できる動物のひとつであるから、まず、手を伸ばさず定位置で会話できる範囲で攻めましたがあえなく撃沈しました。同時に私の心も撃沈して、私自身が海底に潜り込み、少し時間を置こうと構えると、構えている自分に対してイラ立ちを覚えました。

私が高校の時はライラの時より状況がひどく、何の共通点もないすさんだ心を持つ少年（青年）の集まりでした。この当時に比べると“ライラなんて”という事さえ思いました。だからまず、１人確保すべく班のメンバーの“ゴン”を仲間にし、あとは２人で輪を広げるため昼食の時、他のメンバーに話しかけましたが“寒かった”です。そして２～３時間ＯＦＦタイムができたので、“ゴン”と２人で班のメンバーを呼びにキャビンのドアをたたき、部屋をのぞくと“寒～い空気”しか流れてませんでした。

とりあえず、探しの旅が始まりました。結果ＲＰＧというゲームみたいにはうまくいかず、班とは巡り会えず、Ｄ班の女性陣と会話してました。初日目にして何とか会話したのが他班のメンバー!!　収穫とは言えるものの実りあるとは言い難

かったです。

開講式が始まり、そして終わり。1回目のキャビンでの集まりが催され、自己紹介とニックネームが決定し、“他己紹介”が始まり、その前の話で少し“マジメ”に話したという記憶はないのだが、そういうふうに聞こえてしまったらしく“――紹介”（印象のみ）の時にマニアックだとか、キマジメだとか言われました。

それに対してはあまり気にとめず楽しめればということで、その場の延長で親睦会が始まり、そして終わり。帰り同じキャビンの仲間がそろった時（4人）、なんて気の合う連中なんだと思い、それから4日間の飯、風呂、酒盛りなどほとんど“ゴン”をはじめ“ケン”“ヨッシー”と“マイ”“ヤマ”で過ごしました。

最後の日をむかえる間、俺達は家族（“ファミリー”）のように感じ、なんでも許せるという非常にあたたかく、相手をネタに笑う奴もいなく、久しぶりに純粋な心になれたと感じました。

そして藤井美和先生の“生”“死”についての講義では“魂の質”“魂の豊かさ”など非常に感銘を受けました。

話を聞いていて、私はふと祖母の事について思い立ち、祖母の生きていたころの思い出を自分の頭に問いかけ探しあてて、藤井先生の講義を聞きながら、それを思っていました。

藤井先生の講義での私なりの解釈は“亡くなった人の心”は死してなお生きつづけると、そして私や他の人の心に宿り、影響力を与えつづけると、そして私を豊かにし、私と接する人も“心”を豊かにし後年まで若しくは永遠に印象語りとして残るのだと思いました。（例えば、神話、伝承などのさまざまな類い）

そして、この思いを班若しくは余島ファミリーと話し、私はキャビンでも影響を受けました。

この風潮が永遠に続くことを祈るとともにライラが永遠につづくように祈ります。

4日間さまざまな知識を得る場、出会いの場そしてライラに参加できて大変嬉しく思います。

私は必ず戻ってきます。来年若しくは10年後、20年後に（多分）それでは、また会う日まで“さようなら”

能勢　智哉

今回僕は会社の上司の命令でセミナーに参加するという感じで、初めはなにも分からない状態で少しとまどいと不安を感じながら今回のセミナーに参加しました。

しかし、この4日間のセミナーを終えて振り返ってみると、たくさんの友人やすばらしい先生方の講義や自然にふれ、体感し、たくさんのことを学び、とても充実した4日間を過ごせました。

今回のセミナーで僕達が共に感じたものは、コミュニケーションの大切さということでした。初めはぎこちなく居心地の悪い他人どうしだったのが、ささやかなコミュニケーションを交わすことで、他人から友人へと変化していくことがとてもうれしく、また誇らしくも感じ、今回のセミナーに参加した意味が1つでもあったこと、そして自分の考え方に少しですがゆとりができたことに大変うれしく思います。

今回のセミナーで先生方から受けた講義を自分なりに感じ、そして理解したことをたくさんの人に話し、またコミュニケーションをとって人とのつながりの大切さを、これからの生活に少しずつ役立てて行きたいと思います。

松下　抄英子

私が今回のＲＹＬＡセミナーに参加することになったきっかけが、職場の院長先生の指示によるものであり、ＲＹＬＡとは何をするのか、ロータリークラブとは何かということの理解をすることからの出発でした。

実際の話、ボランティア等の経験もなく、正直言って参加者の中で孤立してしまうのでは、3泊4日の日程の中のフォーラムやセッションといった時間に参加することができるのかと不安で一杯でした。

私は今まで考えていてもあまり大勢の前で発言したり、討論をしたりといったことがありません

でした。また、やろうとも思っていなかったという気持ちも正直ありました。

今回セミナーでの連日のキャビンタイム、セッション等で班のメンバーや他の参加者の活発な発言、率直な意見、大勢の人の前での堂々とした態度に身近に接し、うらやましいと思うとともに、今までの自分の立場を見直したいと強く思いました。

自分も周囲の人間が納得できるような発言をしたい、疑問に思ったことは自分の気持ちに留めずに表現しなければいけないと実感しました。そして、大勢の前で立派に発言していたメンバーに最初は自分達も話をすることが苦手で緊張したり、苦痛に思ったりしていたが、上手にできなければ何度も練習したり、場数を踏むことで出来るようになったという話を聞き、最初から何でもできる人はいない、自信のないこと、出来ないことは最初から無理だと決めつけたり、あきらめたりせずにチャレンジしてみる、努力してみることが大事だと実感し、今後の生活の中で目をそむけずに努力してみたいと思いました。

今回、講演を聴くといった勉強の他に、見知らぬ人との出会い、交流から学ぶことがたくさんありました。私たちの班は発表の結論にもあったように人間が生きることに大事なものはコミュニケーションであると思います。3泊4日の中で十分コミュニケーションをとり、互いに互いを理解したいと思う気持ちを持つことができたことが良かったと思います。

最後にセミナーを通して学んだ多くのことを忘れることのないようにするとともに、今回のセミナーに参加する機会を与えて頂いた院長先生および病院、高知東ロータリークラブの会長様に感謝致します。

馬渕　富聡

最初来た時はもっと野外技術を教えてくれる所と思っていましたが、ここの場は違って講義・討論をして自分の力を向上するために作られてたと思います。

私的でには少しぐらい野外技術のことを教えてくださる時間がつくっていただければもっと良いＲＹＬＡセミナー生活を送れたんじゃないかと思っています。

この場はとても上の方といろいろな話をできる場であって、自分から頑張って話して行けばそれなりにいろいろなことを返していただけて、社会の現状や社会の仕組みなども知れるとてもよい場と感じましたし、私もたくさんの上の人からいろいろな話をいただき、とてもためになる話をたくさんしていただきました。

講義は普段たわいもないことが題だったと思います。だから自分が知ったような気になっていたところが、とてもそれは違っていて、自分が恐いって言うのが分かり、とても自分自身が見直せる場でもあったし、藤井さんの話なんかは自分の実体験のことについて話していてくださっていたので、とてもリアリティーだったし、そのこをイメージすることができ、スムーズに理解することができ、とても心に残っていることがあり、それを大切にしていきたいと思いました。

ここ余島ではとてもごはんがおいしく、何杯もおかわりしてしまい、いっぱいガツガツ食べることができました。

キャンプファイヤーは少し残念でした。なぜならもっとたのしくみんなでワイワイやりたかったからです。今回は多分、題が「命」のことだったから、ワイワイせずに静かに聞かせる形をとったと思うのですが、やりかたによってはもっと楽しく伝え方もできたんじゃないかとも思いました。

この第23回ＲＹＬＡセミナーは全体を通してよかったと思いますし、自分自身いろいろな経験をさしていただいたと思っています。ここで経験してきたことをつたえたいと思っていますし、私の考えが向上してまたいろいろな人に影響をあたえる人間になれればな～とも思いました。

考えがまだまだ浅いですが、ここらへんで終わらしてもらいます。

三浦　崇寛

この度はＲＹＬＡセミナーに参加させていただ

いて私は大変うれしく思いました。最初は訳もわからなくてきて何をするんだろうという不安でいっぱいでした。

しかし、人と話す事、人と接する事によって、お互いの共通点や共感できる部分がたくさんありました。人に影響を与えたり、人から影響を受けたっていう部分も少なくともあったと思いました。

例えば、ある１人の子が病気やけがをした時、やっぱり支えになっていくのは人間だからです。みんながひろりのために何か助けてあげたら、そのひとりは違う場面でも誰かのために支えになったり、助けになると思います。そういった誰かのためにっていうのは、やっぱり人と人がいて共存するからできることだと思います。

なぜなら人と人のつながりに絶対必要なのは会話、すなわちコミュニケーションが不可欠だと感じました。よって、このセミナーに参加して自分にとってプラスになりこういった事少なからず誰かのために影響を与えたいと思います。

安永　義知

今回「第23回ＲＹＬＡセミナー」に参加してみて、本当に良かったと思いました。まったく知らない人間がこの余島に集まり、３泊４日という短い期間ではありますが、短い分、皆集中して時間を大切に過ごせたと思います。

正直に言うと、このセミナーに私自身、行くという事が決まってから出発当日までは、あまり乗り気ではなかったし、とりあえず親父に「行ってこい」と言われたから行かないといけない、という気持ちが強くありました。

不安や希望が頭の中をめぐりながら、３月23日余島に上陸しました。主旨などもいまいち分からないまま、四国４県そして兵庫県からさまざまな人間が集まって来ました。

私はＡ班に入り、最初の自己紹介の時もなんとなくぼんやり過ごしてしまい、なんかあまり「たのしくない」という感じでした。しかし私のような心境の人は、けっこう多く少しぎこちないながらも班の人と会話を始めると、なんだか少しずつおちついてきました。

たまたま同い年の人もいたし、なんとかなるかと思えていきました。人間はひとりだとやはりさみしくなるもので、じわじわと団結というかなんというか、徐々に皆仲良くなっていきました。

３月23日は麻からこのセミナー初の講義があり、「生と死」について深く考え、深く勉強しました。せっかくこういう機会を与えてもらい、そういう状態にあったのだから、私は班の皆と共に、かなり熱心に夜のキャビンタイムでは話し合いました。私の性格上、皆で何かを話しあうというのは苦手といえば苦手でした。しかし、しっかりと自分の意見を言った時の達成感というか自分の中で少しずつ、つまらないこだわりみたいなのがなくなっていきました。

いろんな人の意見を聞きながら、私はこう思うが「この人はこういう考え方なんや」と自分の中でさまざまな事を考えました。その日の昼はレクリエイションだったので、班のみんなと、なんもかんも忘れて、とにかくはしゃぎました。風呂の中でも自分の事を話したり質問したり、私の中ではすべてが新鮮ですべてが楽しかったです。今、思えばですが、レクリエイションの時間やバズセッションなり、何かに夢中で皆で考え無心で遊ぶ。

「生と死」についてが今回のテーマでしたが、私はいつになっても答えなんて出ません。多分これからも分からないと思います。ただ皆と遊んでいる時、ふいに思ったのですが、別に何か目的があるわけでもなく、何かを得るために行動してなくても、ただ素直に楽しいと思えた事や、無邪気に皆とたわむれた中で、これは生きているから出来ることであって、死んだら味わえない事であり、生きていれば、いい事悪い事たくさんあるのだから、別に生きる理由なんていらないし、私が思うに生きているだけで意味はあるし、変な理屈やプライドなんていらないと思いました。

今回のセミナーで学んだ事はたくさんあります。「生と死」について考えた事は本当に良かったと思うが、一番よかった事というのはやはり人との出会いでした。余島に来ていなければ出会ってい

ないし、遊んでいない、いろいろな人の意見を聞けて、さまざまな感じ方もある。本当にこのセミナー来て良かったと思います。なんとなく来た私ですが、今は心から来て良かったと思えます。これから生かしていきたいです。

八田　賢

今回、僕がこの「第23回ＲＹＬＡセミナー」に参加した理由は、ただ父親に「こういう集まりがあるぞ」と言われて何も考えずに全く知らない人間や、全くしらない土地に飛び込むという経験もつんでみようかなぁ、ぐらいの軽い気持ちだけでした。

でもいざ来てみると周りにも「父親が行けと言ったから来た」とか、「会社の上司に言われて何も知らされずに来た」といったような人達もいたので、すぐ友達になれました。

この４日間の中で一番長くいっしょにいたのはやっぱり同室の３人の友達だったのだけれど、初日の夜にはもう、昔からの友達だったかのように腹を割って話をしたり、意見を言い合ったり、自分でも不思議なくらい素直に接することができた。

それからの３日は、より仲が親密になり最後の夜にはもう、別れをおしむほどになっていました。

なぜこんなにも仲良くなれたかというのは、僕自身も明確な理由は分からないのだけれど、もしこの出会いがどこかのホテルだったりしたら、どうなのだろうと考えてみると、仲良くなれたかもしれないけど、別れをおしむほどではないだろうと思います。

やはりこのセミナーを通していっしょに学び、風呂に入っている間も意見を言い合ったり、余島の豊かな自然の下で、カヌーやバスケットボールなどの共同作業をした結果だと思っています。

このセミナーを通して学んだ事は、いろいろな先生方の講義はもちろんバズセッションなどで思った考え、友達といっしょに話していた時に思った事を部屋にもち帰り、それらをふまえて夜自由に思った事を言い合う、それをまた次の日にもち込み、たえず話し合う――つまりコミュニケーションの大切さです。

僕はこの４日間の友達との生活の中で、机の上でコミュニケーションについて学び、突き詰め、そして教室の外の生活で学んだ事、思いやりや、深く考える事が実践出来たと思います。

またこれから僕らは自分の普段の生活にもどり個々の日々を過ごして行く事になりますが、この余島で学んだ事を生かしなによりも、この４日間一つのテーマについて友達と考えぬいた事を忘れずに、ただ前向きに明るく過ごして行けたらなぁと思っています。

それからこの余島で培った友情を絶やさずに、さらに深めるため連絡をとり合い末長く付き合って行きたいと思います。またいつかＲＹＬＡセミナーに関れる事を楽しみにしています。

矢野　謙典

「ＲＹＬＡセミナーってええよ、いっぺん参加してみたら？」ライラリアンの人達がすすめるから、そんなにいいものなら参加してみようかと申し込みをしました。余島に来るまでは、小さなパンフレットしかもっておらず、どんな事をするのか、詳しく知りませんでした。

本セミナーでは、知人がほとんどおらず、まわりの受講生はみな初対面でした。セミナーが開講したばかりの時はみんな初対面のためか、なかなか気持ちが通じなかったり、意見が出なかったりして、これからうまくやていけるのかと、少し不安でした。そんな不安の中１日目を終えました。

しかし２日目、藤井先生の講演を受講した後、スポーツやキャンプファイヤーを通して、だんだんお互いのコミュニケーションが取れるようになり、３日目にはみんなが自由に何でも話せるようにまとまっていました。

今回のテーマは「人間の尊厳」という少し範囲の広く、難しいテーマっていう事もあり、バズセッション、フォーラムではどの班もまとまっていなかったような気がしました。また、フリーディスカッションでは、全員が前を向いた状態で、さらに各発表者共に、何を言いたいのかを頭の中で

まとめずに、ただじょう長に話していたので、メリハリのないものになってしまったのは少し残念に感じました。

全体としては、とても充実したスケジュールで、この自然豊かな場所でお互い真剣に討論、会話をする事で、お互いがお互いを理解し、そん重しながら、高レベルな経験をする事ができ、本当に参加してよかったと感じています。

本セミナーで出会い、楽しみ、そして明け方まで寝ずに語り合った仲間との思い出は、これからもずっと自分の生活の中で生かされていく事と思います。

最後になりましたが、本セミナーに参加するにあたり、お世話になりました余島のスタッフのみなさま、セミナー中ずっと僕達について、ご指導、ご助言いただきましたカウンセラーのみなさま、そして、2670、2680地区のロータリークラブのみなさま、本当にありがとうございました。

今後本地区のライラセミナーを終了した事を誇りに思い、更なる努力をしていきたいと思います。徳島に帰った後、また本セミナーに参加していない人達に、僕もこう言うと思います。

「ＲＹＬＡセミナーって、ええよ、いっぺん参加してみたら？」

山内　由紀

ＲＹＬＡとはどういう意味？と、全く聞いた事がないＲＹＬＡについての知識がない状態でこのセミナーに参加しました。

分かっている事は何もない島で、３泊４日の間に「人間の尊厳」について話し合わないといけないという事でした。今まで考えた事もない、とても難しいテーマで話し合うというのを想像しただけで嫌な気持ち不安な気持ちが募るばかりのスタートでした。

１日目、班分けをされた中で孤独を感じ、いつもとは全く違う自分で、他人に本当の自分を出せないまま過ぎて行きました。２日目からは講義があり、素晴らしい話を聞き、自分の体験から葛藤している「人の死」について真剣に考え始めました。

結論のない事を考えているうちにもスケジュールは次に進み、レクリエーションの時間。班の人達と大自然の中とても気持ちの良い太陽の光を浴びながら、おもいっきり体を動かしました。そうするうちに、いつの間にか仲良く話し、笑い合える仲間ができていました。

その中の一人に同じ介護の職に就き、同じような体験や考えをしている人がいました。２人で共感出来る話が沢山あり、いつしか、どんな事でも話せるようになっていました。その人は介護について自分の考えをしっかり持ち、私なんかとは比べようのない豊かな知識、そして夢がありました。一緒にいる時間が増す度に、自分の無知さを感じると同時に、その人に影響され介護についてもっと知りたい、考えたいと思うようになりました。

Ａ班全員で意見を交わすバズセッションでは「生きること、死ぬこと、そして共に生きる世界」について時間を共にしました。そこでは沢山の考え方があって、結局結論は出なかったけど、共感できる所が沢山あり、とても充実した気持ちでした。

ＲＹＬＡセミナーで多くの人と生活を共にし、同じテーマで話し合い、朝までさわぎ合う事で、結論が出なくとも考える事の大切さ、充実感を味わえました。そして何より素晴らしい人達に出会え、仲間が出来た事が４日間で得た最高の出来事でした。

Ａ班カウンセラー　濱　浩一

おとなしかった君たち、静かだった君たち、１人１人はいろいろとしっかりした考え方を持っているのに、あまり表現できなかったのでは……。

もっともっともっと最終日のように語り合いたかった。またの機会に！　充分に聞いてあげられなくってゴメンネ！

でも君たち同志は、お互いに充分に語り合ってくれたことと思います。

楽しい３泊４日を共に過ごせたことに感謝！

のせっち、やのっち、ゴン、牛チャン、ヨッシー、ハッタケン、クロアチア、ヤマ、レイコ、マイコ、サエコ、サトキョン、マイ、ヂョニー、みんなありがとう！

A班カウンセラー　武田　薫

カウンセラー初心者マークで参加した第23回ＲＹＬＡセミナーが、無事終了しました。

「人間の尊厳（命の尊厳）」というテーマをを与えて頂き、受講者と共にさまざまな思いをめぐらし、考える機会を提供していただいたことを感謝します。

そして、受講生、特に寝食を共にしたＡ班の皆さんからは、若いエネルギー、感動、センスを吸収させてもらい、本当に感謝しています。

真剣に自分たちの意見を真っすぐなまなざし、熱い心で交換している姿を見ていると、「次の日本を背負ってくれるすばらしいリーダーが育っているな」とワクワクしますし、自分の置き忘れてきてしまった何かを、思い出させても、もらいました。高度な講義をした頂きました藤井先生、野尻先生、今井先生、１年をかけて、計画を練って頂いた運営委員の皆さん、細かな気配りをして頂きました余島の皆さん、たくさんのことを教えてもらった同じ班の濱さんを初めとするカウンセラーの皆さん、本当にありがとうございました。

残念なことに、ロータリアンの中にはＲＹＬＡのことを全く知らない方もいらっしゃると聞きました。こんな有意義な実り多いセミナーをもっともっとたくさんの方に賛同して頂き、たくさんのＲＹＬＡセミナー卒業生を増やして頂きたいと切に思います。

Ｂ　班

木村　哲也

グループ内で、私だけが既婚で子持ちであり、今回のテーマ「人間の尊厳」の中でキャビンタイムやフォーラム等において経験を元に話が出来た事を感謝しています。

子供や妻と４日間も離れるというのも、今回が初めてでしたが、毎日の生活から解放され、仕事の事については気にかかる面も少しはありましたが、自由を実感し、毎日の講義で新たな考え方を持つ事も出来ました。

毎日の生活の中では「生」や「死」というものについて深く考えるような事はありませんが、このような機会を持って、今後新聞やニュースの生地にふれた時、キャビンタイム等で皆が話していた事を思い出す事になると思います。

この４日間で、一番印象に残ったのが、３月24日のバズセッション、フォーラムで、グループ全員が協力し合い、完成させたプレゼン資料で、全員の意見が一つに完成された発表が出来た事です。

最後に、素晴らしいメンバーと出会えた事について感謝しています。

ありがとうございました。

桑名　章

今回行われた３泊４日のセミナーは、自分にとってたいへん充実しました。島の自然に囲まれ、ゆったりとした気分で参加者のみなさんと語り、そして学ばせていただきました。

今回のテーマであった「人間の尊厳」また、バズセッションのテーマ「生きること、死ぬこと、そして共に生きる世界」を話し合った時、いろんな意見が出され、それを一つにまとめあげた時の達成感は、何ともいえない感情が自分にひびきわたりました。

毎日の講義についても、先生方の体験談、アンケート調査、ビデオ、等をふんだんに使い、社会経験の乏しい自分にも、難しいテーマを分かり易く教えていただきました。

今回の「生と死」についてのテーマは、完全に理解することは困難ですけど、死を考える場合、

自分の人生を考えなければならない。そして自分の人生をどのように生きぬいていくのか？　という部分を、見つめ直すきっかけになりました。

今後の人生において、うれしい事悲しい事つらい事など、さまざまな思いをしていくと思いますが、「自分は今、何をしないといけないのか」ということを考え、行動し、悔いのない人生、生きてて良かったと胸を張って言える人生を送りたいです。

今回のセミナーにたずさわった関係者のみなさん、そして一緒に参加した受講生のみなさん、本当にありがとうございました。

篠原　瑞生

年齢不詳の島“余島”

「この人らはほんま何歳やろ？」島に着いてしばらくしてからまず思ったことです。ロータリアンの方々のはちきれんばかりの元気な姿を見てると、下手したら私らより若いんちゃうか？　と思うこともありました。また、キャビンタイムで皆と話してて、その振るまいようから、絶対30はいってるやろ、と思ったら、まだ全然20代半ばだったり、その逆もあったりと、そんな連続でした。まさにマカフシギ。

それはさておき、今回のライラ参加は、半ば親に強制的に吊れて来させられた、いわば無人島に強制連行されていたような感があったのですが、実際、自販機はあるし、電気も通り、そしておよそ「無人島生活」らしくない食事と、かなり快適に過ごさせていただきました。キャンプというよりは合宿という感じでしたね。

このセミナーは、ライラセミナーということで、生、死、命、と、やや重たいテーマでした。これらのテーマについては、確かに日々、たまに考えることもありますが、個人的にはもう煮つまっていた感があり、あまり突きつめて話したくない分野でした。

ですが、夜な夜な自分とは全く（と言うとやや大げさですが）異なる世代の方々と、その年齢差から出てくる妙な違和感を取っぱらって自分の考えは出し合う、その経験はとても有意義なものでした。

また、特に今回自分的に得られたものは、ライラの本趣旨である「リーダーの育成」につながるものがいくつか見えた気がしたという事です。リーダーとはこうあるべきだ、とかは教えられたり学んだりする以上に、実際の体験が大きくものを言うと思います。そういった意味で、このセミナー、大変得るものは大きかったです。

あと、講義等を受け、一番心に残ったのは、「人と人との関わり」です。私は、それを欲していながらも軽視する所があり、その葛藤に悩んだこともあったのですが、今回のセミナーでそれがいかに大切なものであるか、ということを実感しました。人と人との間のふれ合い、コミュニケーション、その他さまざまな言葉がありましたが、人と人が接する事、これをこれからの人生、もっと大切に、意識していきたいと思います。今回はこのような体験をさせていただき、ありがとうござい

ました。

杉山　嘉隆

今回のＲＹＬＡセミナーは、自分にとって糧となりました。さまざまな体験を得ることができました。

僕はＢ班に入りいろいろな仕事の方とディスカッションすることにより「こんな考えもあるんやー」と考えることができたり、自分中心の考え方だったのが、周りを見ることで視野が広がるということが分かりました。

その中で、今回「人間の尊厳」（命の尊さ）についていろんな話を聞くことができました。藤井先生をはじめ、野尻先生、今井先生らが、僕たちのために、すばらしい講義を聞かせて下さって、とてもうれしく思います。今回の命の尊さは、とても考えさせられました。人間、簡単に命をそまつには絶対できません。

その人の死が、どれほどの人が悲しむのか、また、その人が生きていることで、どれほどの人に影響を与えているのか。一見、一人ぼっちと思う人でさえ、さまざまな人の愛にささえられ、また、何らかの影響を必ず与えているということを忘れてはいけないと思います。

また、今回親睦の熟成ということで、キャビンタイム時に、いろんな人の話を聞くことができ、とてもよかったです。初めは緊張していましたが、しだいにうちとけ、Ｂ班は家族みたいになれたと思います。こんなに仲良くなれるのかとてもうれしく思うし、ずっと僕の心の中に思い出として大切にしていきたいと思います。

最後に、このようなすばらしいライラセミナーという機会を作って下さってありがとうございました。ぜひまた講習を受けに来たいと思います。４日間ありがとうございました。

谷野　友香

私はこのセミナーに参加して、とてもたくさんのことを学べました。それは、今回のセミナーのテーマである、人間の尊厳についてはもちろんのこと、ディスカッションの方法や、互いの意見を十分に聞き、違いを理解することで、より考えを深めていくことができるということなどです。

セミナーに参加する前は、なんとなくおもしろそうという軽い気持ちだけでした。普段あまり聞かせて頂くことのできない先生方のお話をうかがえて、しかもキャンプ気分で味わえるならいいなという程度です。

でも、１日目でこのセミナーに参加できたことを、とてもうれしく思いました。班のメンバーと、夜のキャビンタイムで遅くまで討論をしあいました。１日目から、このセミナーのテーマの人間の尊厳について、特に、生と死に焦点が集まりました。私の考えと異なる人ももちろんいらっしゃいますが、１人１人が真剣に反応してくれ、自分の意見を出してくれました。

２日目で、このセミナーに参加させて頂いたことに感謝しました。この日は、実体験をもとに、藤井先生が生と死についての講義をしてくださいました。夜のキャビンタイムでは、前夜にひきつづき、より話を掘り下げて考えました。

この時、私が長い間自分の中で疑問を抱いていた事柄について意見を出し合ってもらうことができました。そして、班の人達といろいろな話をするうちに、班の人１人１人のキャラクターが分かってきてとても楽しかったです。ただテーマのみの話し合いじゃなく、疑問があれば質問し、それを１人１人が真剣に考え意見をし合える場がもてました。この時、なんとなく参加したセミナーではあるけれど、私が参加したことの意味を見つけられた気がしました。

また、セミナーを知らないがために参加できない方々もおられるのに、このような機会を頂いたことに、周りのロータリアンの方々、親に感謝しました。３日目ではバズセッションで、「生と死、ともに生きる世界」をテーマに班ごとの発表をする準備のため、班で集まりました。その時、発表用の紙にどうやって分かりやすく書くかアイデアを出し、みんなで仕上げました。その時、何かとても小学生並みくらいにはしゃぐくらい、とても

うれしく、１人でしたんじゃない、みんなでやり遂げたんだという充実感を得ました。

フォーラムの時、聞く人が理解しやすいようにと、発表の代表者を決めましたが、班の１人が「質問があったらみんなで立ち向かうからな」と言いました。それがなんともいえず、これが、うちの班だ！　という思いで、これまでのキャビンタイムの話し合いで得た多くのものに自信を得ることができた気がします。

班で話し合ったさまざまな事柄はもちろん、それによって班のメンバーの１人１人とのつながりがもてたことがこのセミナーに参加して良かったと思う一番の事柄です。

これからも何らかの形で、このようなセミナーに参加できたらと思います。そして、ここで知り合えた素敵なメンバー（もちろんカウンセラーをしていただいたお二人）とずっと連絡をとりあえたらと思います。

中谷　恵子

「余島の自然の中で」

波の音、木のにおい、さわやかな空気。この自然の中で、たくさんの人と出会い、４日間共に過ごし討論ができたことは、私にとって大変貴重な体験です。

このセミナーを通じて、「思いやる心」は本当に大切だということをあらためて実感することができ、これから、自分の周りにある人・植物・動物などに対して「思いやる心」を常に持ち続けていこうと思います。まずは、自分の身近な存在である家族や友達から、その人に喜ばれるには、何をすればよいのかを考え、それを実行していきたいです。

また、今回の講義の中で、特に印象に残っていることは、藤井美和先生の「死んでからでは何もできない」ということです。今まで、死について考えたことがなかったため、本当にこれでいいのかな、と自分の中で考えさせられました。死は突然やってくる。これからの人生、チャレンジ精神を持って、自分が死を迎える時、本当によかったなと思えるように頑張っていきたいです。それと同時に、自分の周りの人もそう思えるようにしたいです。

本当にこのセミナーに参加することができ、感謝しています。こういう機会を下さった方々、本用にありがとうございました。

西川　晃

変な奴らの御陰で！

端的に「参った」この一言です。（正確には、やられたですが……）

いろんな人に出会い、この出会うことにより、気付きが与えられ、気付きどころか、楽しみをもらい喜びをもらえ、寝不足をもらい……。心地良い春の日ざしのもと、心地よい疲れを頂きました。

その疲れは最近の忙しさの中で、忙しい時間に追われた毎日の中で、自分では充実していると感じている毎日の中で、でも何か満たされない毎日の中で……忘れていた何かを気付かせて、思いださせてくれ、しかも、手に持ちきれない、どんどん湧き出てくる素晴らしいものを！おみやげにまで持たせてくれた、そんな事を感じた４日間の今現在の私は幸せ者やと思うてます。（関西弁風に！）

私は最初に変な奴らと題しましたが、変という言葉は悪い意味ではありません。今の日本社会では、私達の住んでいる環境では、「右向け右」がかなり大きな声でうたわれてます。これは、まんまと日本の永田町の連中に会った事もないのに、はめられてしまってます。それは……普通にならなという言葉は……あとは想像にまかせます。

今回、人それぞれ（十人十色）という言葉をＲＹＬＡでさんざん耳にタコが出来そうな程言われたので、あえて、想像にまかせます。ただ、誤解がないように、読者に（この私の文章を読んでいる方に）言いたいのは、変な奴という言葉は、私の中では最高の誉め言葉であり、私なりの友、親友をさす言葉と考えてますので、あしからず。

とりあえず、今日、ここでのセミナーが終わったら、帰路につき、家に神戸に帰って行くのですが、この喜びを私の１番の変な奴つまり彼女に伝

え、そして、私の周囲の変な奴共を引き連れて、余島にまた遊びに来たいです。

その際、わがまま言わせてもらうなら、ネットワークを広げるという事も兼ねて、ＲＹＬＡの変な奴ら（つまりＢ班の皆様）と再会出来たら、その再会の時はＢ班の皆が思う心ゆるせる友（嫁、子供でもＯＫ！）と共に、ＲＹＬＡを母体とするＢ班観覧車軍団と、また楽しい一時を過ごせたら……楽しいかなと思います。

口に出して有難うと言いたいけど、泣きそうなので、この感想文を通してかってに利用させて頂いて、お礼を言いたい、言わせて頂きます。

「本当に、ありがとう、楽しかったっス！」

野々村　直己

このＲＹＬＡセミナーを通じて、今回自分なりに得たものがたくさんありました。今まで、あんまり考えたこともなかった生きること、死ぬこと、そして共に生きる世界という課題が与えられ、自分なりにいっしょうけんめい考え、その具体的な結論は出なかったものの、考えるという行動によって、その課題の重要さを認識させられたような気がします。

自分はあまり今まで意見というものを持たなく、人の意見を聞いては、その意見に流されていたのですが、自分の意見をしっかり持ち、なおかつ他人の意見を吸収できたのではないかと思います。

人には人それぞれの異なった意見があり、それをディスカッションすることで他人同士であった者達も打ちとけることができます。今回このＲＹＬＡで学んだ事はこれからの自分のプラスになって、自分自身に自信がついたのではないかと思います。

初日の講義での藤井美和先生の話のなかで、自分が一番気になった事は、“病気が治っても、足が不自由となり、車イスの生活が続くことははたして幸せなのか？”という話で、その日はその事が頭からはなれなくなり、ずっと考えていました。

病気が治ったと思ったら、その後にずっと続く不自由な車イスでの生活は、もし自分がそうなら、たえられないと思いますが、それでも、自分の存在の価値を周りの人から与えてもらうことによって、病気によって失った物もあるが死と直面して得るものがあるという事に本当にその通りだと共感しました。

自分にとっての生と死は、これからの人生をかけて考えていき、年をとるにつれてなんとなく理解できてはくると思うのですが、やはり一生をかけても悟ることができない事なのかもしれません。でも共に生きる世界というのは、今この現在の事であると思うので、人に意見を聞いてもらったり、人の意見を聞いたり、自分のパワーをわけ合うことで、新しい世代への受け橋をしているサイクルの一つだと自分も思って、今後のこの自分の人生を歩みたいとこのＲＹＬＡに来て思いました。

三谷　洋介

渡し船で余島の地に立ったとき、不思議と（帰ってきたなぁ）という思いが込み上げた。ＲＣの少年少女キャンプのために余島を訪れて15、６年。全く変わってないなぁという安心感、今回のＲＹＬＡセミナーがとても楽しいものになるだろうと確信した。

閉講後、この文章を書いているのだが、その確信に狂いはなかったと思う。このセミナー中、良いメンバーに恵まれて、本当にたくさん語りあえた。人生のこと、恋愛のこと、自分のやってきた活動の事……。これらの話の積み重ねから今回のテーマに対する具体的なメッセージが出てきたように思う。まだまだ話が尽きず、もっともっと話をしたかったなぁというのが正直なところ。自分自身を日々の生活の中でパワーアップさせて今後ともメンバーと活発な交流ができればと心の底から思った。

ＲＹＬＡセミナーに参加させて下さった観音寺ＲＣの皆様に感謝の言葉を述べさせていただくとともに、ＲＹＬＡセミナーのＢグループの各メンバーに出会え、活発な意見交流ができたことに対し、強く感謝したいと思います。本当に余島に来て良かった!!

山口　奈美子

最高の出会い＆思い出

第22回、第23回と２年ＲＹＬＡに参加させて頂きました。去年参加していたのでＲＹＬＡの流れなど少しは理解していたので安心でしたが、不安もありました。

今回、４日間で「生と死」について、グループのメンバーと深く話し合い、いろいろな意見を聞くことができ、本当に良かったです。ＲＹＬＡ全体を通しての感想は、楽しかったしいい話もきけてよかったです。

ここからは、いろいろと分けて感想など書いていきたいと思います。

藤井美和先生の講義

特に印象に残ったことは、一生寝たきりの車椅子の生活とお医者さんに言われたけど、とても前向きな姿勢だったこと。そして何より、周りの人が素敵だったということです。本当に藤井先生はいい出会いをされたなと感じました。輪達しも、今、出会ってる人、これから出会う人に、少しでも何かをあげれるような人になりたいと思ったし、一つ一つの出会いを大切にしていこうと思いました。

野尻武敏先生の講義

「人間には何が必要か」という内容だったけど、私は、何より「人との交流」「生きがい」だと思います。人は一人では生きていけないし、お互いに助け合っていけるということが本当に大切だと思います。そして、生きている以上、人生は楽しく充実してる方がいいし、そのためには、何でもいいから生きがいを見つけることも大事だと思います。先生は「倫理道徳の基礎」ということをおっしゃてましたが、人間が人間らしく生きていくには、小さい時、特に小学校までに学ぶ、あいさつなどをきちんとできる人が多くなれば、犯罪なども少なくなるのではないかなと思います。

今井鎮雄先生の講義

今井先生の講義は本当に勉強になったんですが、特に最後の方におっしゃられた、ノーマライゼーションや人間を中心に考えるべきだということは、興味があったのですごく理解できたし、同感することができました。私自身、学校で社会福祉を勉強していて、中でも障害者福祉に興味があるので、21世紀、少しでも、障害者やそういった人達が区別されることなく、排除もされない社会になってほしいと思うし、そのために自分にできることを見つけていきたいです。

バズセッション＆フォーラム

初日から「生と死」についてグループで話したりしてたので、考え易かったし、話し易かったです。フォーラムでは、各班の意見も知ることができたし、こういう考え方があるのかと気付くこともありました。フォーラムの中で、もっと多くの人が意見を出していってほしかったです。発言する人がかたよっていたのが残念でした。

進行の仕方は、問題提起をしてくれるのはよかったんですが、参加者同士意見を出し合う形ではなく、何か、受講生←→司会という形だったのが、ちょっと残念でした。最後の方で、司会の人が特定の人の意見を求めるような言い方をしたり、初めに「結論はないから、どんどん意見を出していってほしい」と言っていたのに、どっか結論を出すような言い方をしていたのが気になりました。

グループのメンバーへ

Ｂグループとしてみんなに会えてよかった。最初は、みんなの意見のしっかりしてるところとかすごいと思ったし、次々に意見を出していくみんなに、ちょっとついていけない部分もあったけど、最後の方では、いろいろ楽しく話せてたのしかった！　特に、途中でいきなり始まった「なぞなぞ」が面白かった。なぞなぞの答えがわりと早くわかったのが、頭がやわらかいのか、考えがこどもっぽいのかはよくわからんけど、今度は、他のクイズでもみんなで楽しもう。（私も何コか知ってるから……）

カウンセラーの鎌ぴょん、角田さん、そして同じＢグループでやったみんな、４日間本当にありがとう!!　最高の思い出になりました！　個性の強いみんなのことを忘れずにいたいと思います。っていうか、絶対忘れんから、みんなも、みんなの前で泣いてしまった私を忘れないでいて下さい。

最高の出会い&思い出をくれた余島・ＲＹＬＡありがとう。

４日間で２回も涙を流すとは思わなかった。しかも、全員の目の前で。けど、きっと、みんなには印象付けれたと勝手に思っています。ただのかんちがいかもしれんけど……（笑）

山崎　佳代

まず最初に、今回のセミナーで講演して下さった先生方、運営委員会の皆様、ＹＭＣＡスタッフの方々、本当に有難うございました。

実は、このセミナーに参加させて頂いたきっかけは、私の職場の院長先生に参加を勧められ「出張」という形でやって来ました。出発前に院長先生から「たくさんのいろいろな友人を作ってきなさい」と言われ、その時の私は「なぜ出張なのに大勢の友人を作るように言われたのかなあ」と疑問に思っていました。しかしその疑問はここに来て解決しました。

毎日ほとんどの時間をグループの人たちと共に行動し、今回のテーマについて語り合い議論していく中で、生きること死ぬことそして共に生きることを自分達自身が体験させられていたのではないかと思っています。

私自身は社会人になって10年近くなりますが、久し振りにこういう形で友人達と講義を受け、生活を共にした事で非常に新鮮な気持ちになり、受け身の生活に慣れてしまっていた自分に反省させられました。

ライラリアンと呼ばれるのは、少し年齢が高いかも知れませんが、今の新鮮な気持ちのまま高知に帰り、21世紀の担い手としての責任を果たして行くつもりです。

最後に、鎌ぴょん、いつも笑顔がステキだった角田さん、Ｂグループの個性豊かな皆んな、どうも有難う。また会いましょう!!

吉田　馨

今回のセミナーに参加したきっかけは、高校でインターアクトクラブの顧問をしているということ、私のクラスの生徒が、ロータリー交換留学生として８月からブラジルへ行かせていただくといった二つのご縁があったからです。

セミナーのテーマが、「人間の尊厳」という漠然としたもので、どういう方向から考えていけばよいのかと、参加するまで戸惑っていましたが、２日目の藤井先生の講義をお聞きし、とても前向きに取り組む意欲が湧きました。

先生のお話の中で最もショックを受けたのが、「病気になって死に直面した時、自分の思っている自分と、本当の自分とは違うということに気づいた」という内容でした。仕事も友人関係も趣味も充実し、もし今何かが起こっても悔いなく死ねると思い込んでいたのが、実はそうではなく、これまで自分を生み育て支え続けてくれた親に対して何の感謝の気持ちも表せなかったことに初めて気付き、「神様お願いだから生きさせて」と願う自分の本当の姿があった――現在の自分を想像した時、きっと先生と同じことを感じるだろうと思い、恐怖で頭が真っ白になってしまいました。

また「命の長さよりいかに豊かに生きるか」という点を考えるにあたって、個人の死生観、価値観をしっかりと認識しておかなければならないことを知り、これまでよりさらに広い視野、多くの知識を見につける必要性があることを痛感しました。

砂浜に寄せる波の音、新芽の独特な香り。50年の足跡が刻まれたこの余島で、これからの人生の指針となるヒントを見つけられたのではないかと思います。

最後になりましたが、このような場を与えて下さったロータリーの皆様、そして、共にすばらしい時間を作って下さったカウンセラーの方々、Ｂグループのみんなに心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

和田　悠里

「ゆっくりまわる観覧車」

ちょうど今、第23回ＲＹＬＡセミナーが幕を閉

じました。セミナーにて得たもの、その１つは「人といることの面白さ」という気がします。13人１つの班で、私達は同じ講義を聞きました。釣りやスポーツの時間を過ごしました。夜遅くまで話し合いをしました。そして同じ屋根の下で３泊４日暮らしました。１人でも講義は聞けるし、釣りもできるし、物を考えることは出来るけども、何人かの人と笑い笑われたらもっと楽しい、それが今の率直な感想です。

３日目夜にクライマックスをむかえたディスカッション。「生と死」という難しいテーマがセミナーと通しての議題でした。つかみどころのないテーマを具体的にするために、同じＢ班のメンバーは、互いに見ず知らずの人に初めて会った日の晩から自分が身をもって体験したつらい死別の話を出してくれました。

考えてもみて下さい。一体どこの誰が、どこの馬の骨ともわからない人々を前に会って数時間でタブー視される人の死の話を始めるでしょうか。その本人が思い返すだけでも涙にむせぶり返る内容だったらなおさらです。話し合いの機会を無駄にしないよう、本当だったら自分の中にしまっておきたい出来事を話してくれたメンバーの方全員に、この場を借りて改めて感謝を示したいと思います。

人生はゆっくり回る観覧車。このアイデアを補強して発表まで出来るようにしてくれたこと、まんが家も驚きの見事な絵にしてくれたこと、それを「いいよー、それいいよー、うまいなー、天才的やなー、（繰り返し×３）」と横から言ってくれたこと、みんな、みんな、ほんのさっきの事のようです。

どうやら私の観覧車にはメンバーの「ぽわんぽわん（対訳：気持ち）」が溢れているみたいです。

ＲＹＬＡセミナーという場を提供して下さったロータリーの皆様方にも御礼申し上げたいと思います。この４日間、「人の間に生きる」ということを感じ、考えた点で大変有益だったと、ここに御報告させて頂きます。

Ｂ班カウンセラー　鎌谷　正弘

命の尊厳、人間の尊厳のテーマは大変むずかしいテーマであるが、誰にでも関係があり、今後の世界の中で改めて考え直すべきテーマを決めて頂き本当に良かったと思います。

改めて考える事により、自分の考えがぼんやりとしたものからより鮮明になり、人に話す事により、もっとはっきりとしたものに変化していくので、このような機会づくりは若者達にとって、大変重要な事だと思います。

また人との関りのなかで短時間に人の思い、行動が変化して行くのが素晴らしく感じられました。特にライラセミナーに参加しようと考える若者達はもともと意識が高く、素敵な人達ばかりではあると思いますが、その若者達の後ろに見える家庭のあたたかさを見て、私も心があたたまるのを覚えました。

受講者同士のつながりが、今後も広がって行く事、また彼等が地域で職場で素晴らしい指導力を発揮し、このセミナーで養った「思いやり」を多くの人々に渡し、全世界に多大なる貢献をする事を期待します。

Ｂ班カウンセラー　角田　麗子

カウンセラーとは名ばかりで、１受講生のように参加したライラセミナー。高松という地に住みながら初めて余島の自然に感動しつつこの３泊４日を振り返ってみたいと思います。

まず今年のテーマの“人間の尊厳”。年齢的にも若い受講生よりも身近な問題として、命について考える機会は多々あります。

藤井先生の講義を終えて、死生学なる学問の存在が少し疑問を感じていました。が、午後のレクリエーションの時間に、先輩のロータリー会員夫人と島内一周を案内していただきながら、あれこれと話しました。

私達世代やそれ以前の人たちにとって大家族や地域と密集していた者にとって、死、生、ということは日常生活において自然と体験してしまいま

す。しかし、現在のように核家族となっては、ほとんど生、死に関わり、考え、感じる機会がありません。受講生の中には（私も含めて）死生学なる学問があり、講義を聴くことによって、真剣に生死について討論する瞬間を持ったことは、重過ぎるゆえに、いい機会だったのではないでしょうか。

次に野尻先生のお話も非常に中身の濃い内容であり、時間延長による文句もでましたが、満足のいく話だったと思います。

「お金がなくっても、大して失うものはない。やるきをうしなうと大半のものを失う。誇りをなくすとすべてを失う」いい言葉だと感動しました。

その他書き出すとカウンセラーとして書きたいことが多少あるのですが、それはまた意見で伝えたいと思います。今井先生のお話やその他行事もカウンセラーという立場でありながら受講生の気分で行動していました。

“B班”というグループ名のもとに集まり、はじめて会った若者達の考えを聞いたり、行動したりして、若者に持っていた少しの偏見を恥ずかしく思い反省しました。素晴らしい13名と、良きパートナーであったカウンセラーの鎌谷さんに助けられ、教えられて過ごしたことによって、私も社会に関わり、周りに何かを与え何かを考えられながら、大切な命を誇りを持って生きて行こうと深く思いました……。

まったく知らなかったライラでしたが、実りある日々の3泊4日。ロータリアンのおじ様方、ありがとうございました。

C　班

赤松　幹子

セミナーの参加動機は本当にささいなものでした。前回ライラに参加した友人から行ってみないかと誘われ、その友人の「おもしろかったで」という一言を聞いて、「行く、行く」と二つ返事。ただ、最後の学生生活を楽しみたいという思いだけで参加しました。

4日間のセミナーを終えて今感じることは、当初の目的だった「4日間楽しもう」という思いをはるかに越えて、いろいろなものを得られた、という充実感です。

まず、たくさんの友人を得ることができました。自分よりも年上の人、年下の人、学生の人、仕事を持っている人。ライラに参加しなかったら、たぶん絶対に出会わなかっただろうと思う人たちと友人になることができました。これらの友人たちとは今後ともぜひ連絡を取り合いたいと思っています。

次に、3人の講師の方々のお話を通して、多くのことを学び、感じました。特に藤井美和先生のお話が印象に残っています。看護職を志す者として、藤井先生が闘病時に感じたことは、患者さんの気持ちを理解していく上で、私に一つの示唆を

与えてくれました。また、目標とする看護婦像にも影響を与えられました。

また、バズセッションなどにおいて「生きること、死ぬこと」について仲間と討論することを通して、これまで漠然としか考えていなかったテーマについても他の人と話し、他の人の話を聞くことで、だんだんと自分の中でまとまった意見となってきました。このような重いテーマについて、普段友人同士で話し合う機会はほとんどなく、その意味でも本当に貴重な体験ができたと思います。

4日間、本当に楽しかったし、本当にさまざまなことを学べました。このような機会を与えてくれた友人と、ROTARY CLUBの皆様に感謝いたします。

安藤　実英

今回、私は友人の誘いでこのセミナーに参加しました。ただ単に“セミナー”としか言われてなくて、どんなものだろうと、何もわからないままこの余島につきました。

来てみると、こんなにも重い内容で、しかも、一緒に来た友人とは離ればなれになり、不安と少しの期待で一杯になりました。ＲＹＬＡセミナー、私は本当に何もわからなくて、しかも“生と死”。はたして私には皆にそんな意見を言えるんだろうか、などばかり頭の中にありました。

しかし、班の皆とはすぐに仲良くなり、新しい物の考え方や同じ考え、それぞれに意見のぶつかりあいなどが、私にとても響いてきました。

講義はとてもおもしろいもので、“ああ、こういう考え方もあるんだ。”とか、“私もそう思う！”など、実に充実できるものでした。その後のキャビンタイム、その他、班の人たちとの移動中など、その講義についての意見の飛び合いが、とても楽しく、そのたびにＲＹＬＡセミナーに来て良かった！　皆と一緒にいれて嬉しいと思いました。

“死”について話し合いをしている時、私は皆の話を聞いていると自然と涙が出てきて、なかなか自分の思ったことは言えませんでした。お酒を飲んで少人数で集い、その中でやっと話すことができました。

一杯泣いて、一杯話すことで“死”とはどれだけ充実した生活を送るか、そして後悔のない生き方をできるのか、という考えを持ちました。死は、私にとってとても怖いものでしたが、それがなくなったと思います。死ぬまでどたばた忙しく生きてやる、という目標ができて、これからいろいろなことにチャレンジしていきたいです。Ｃ班は皆で行動する仲良い班で、ここにいれたことがとても楽しかったです。

3日目は、私は具合を悪くしてしまい、寝たきりで、とても残念な思いをしましたが、皆優しくしてくれて、人の温かさを本当に感じとれ、本当にこのセミナーに参加できて良かったと、あらためて思いました。

地震まで起こって、予定外にスリルを味わうことになり、またこれも思い出となりました。

最後に、このセミナーに参加できたこと、いろんな方々と会えたことに感謝したいと思います。

伊丹　幸治

ＲＹＬＡでの4日間は自分にとってとても貴重なものでした。同年代や年上の人との密度の濃い時間は、普段の生活では決して体験出来るものではないと思います。普段の（学生といえども）時間に追われる生活の中でも、親しい友人ともなかなか話さないような事も話し合いました。

今回のＲＹＬＡのテーマが“命の尊厳”という重いテーマでしたが、身近な体験から話が進み、自分も親類の死などを見つめ直すよい機会となりました。

講義からも刺激をうけ、これからも、こういったテーマで考えをつづけていくきっかけにしていきたいと思います。

余島の自然もすばらしいものでした。班でのレクでオリエンテーリングで回りましたが、海も浜も空も美しかったです。班のメンバーともレクレーションでとても親しくなりました。これからもずっと友人でいたいかけがえのない人達になりま

した。

朝はやく起きて行った釣りも、キャビンタイムでのお酒やおしゃべりも、まじめな話も、とてもよい思い出です。

また再び来さしていただけるなら是非来たいと思います。委員をはじめカウンセラーのみなさん、メンバーのみんな4日間ありがとうございました。

加茂　正樹

余島での生活は本当にあっという間でした。毎日毎日を目的をしっかり持って学んだり遊んだりキャビンタイムで語りあったり、どれをとっても、その一時（ひととき）は輝いています。

私は最初このライラに参加した理由に出会いがありました、というのも私は以前ふるさと青年協力隊のＯＢ団体に豊か会というのがあるのですが、その豊か会と交流する機会がありました。その交流会で、ものすごくバイタリティあふれ、パワフルでテンションが高く明るく朗らかな員物に出会いました。その出会いは私にとってものすごく衝撃的で、今現在も心に残っています。

そういった出会いがきっとあるはずだと信じて参加しました。テーマはやや重い命の尊厳というテーマで、なじみがうすいものでしたが、私のモットーとして「生きていることはそれ自体とてもすばらしい事だ」という思いがあったのと、私の持病としてＷＰＷ症候群という心臓の病があり、一度は発作のようなもの（ＷＰＷ――の発作はたいていは軽いのですが）があり、死に直面し、考えることがあったので、何かしら共感し学ぶことがきっとあるはずだと思いました。

今、4日間余島で過ごして、私はひとつ成長した気がします。まず出会いは他の班のことは知りませんが、Ｃ班が一番だと思います。フォーラムでは自分達の気持ちの根源的な部分を発表できたと思いますし、レクリエーション、バズセッションその他あらゆる局面で、他の班より団結し共に行動したと思います。また、班の人達からは私が寒いギャグを言うと強烈なつっこみを頂くという温かさに恵まれ、人としてとても心をひきつけられる人達でした。

この余島でも4日間は本当に貴重で大切な経験でした。また来年も行きたいとすごく思いました。

北村　多恵

今回のライラセミナーには、職場の出張として参加させて頂きました。参加のきっかけは自発的なものではありませんでしたが、全スケジュールを終えて本当に来て良かったと思っています。

この4日間で高レベルな講義を受講し、多くの人達と出会い、討論を重ね、いろんな体験をして、たくさんのことを得たような気がします。中でも、特に影響を受けたことは、多くの人達の意見に耳を傾け、自分自身の考えを改めて確認できたことだと思います。

セミナー参加前は、「人間の尊厳」という難しく重いテーマについて、自分の考えを整理し、初対面の人達と討論ができるのか不安でした。しかし、その不安はすぐに消えました。真剣に1つのテーマに向かうことで、自然と自分の考えをことばにすること、相手の意見を聞くことができました。

今まではただ漠然としか考えていなかった人生のサイクルのこと、両親の死、自分の死など、身近とは思えなかったテーマに対する考えが次々と出てきました。また、自分の存在価値や周囲との共存など、日常ではあまり思い返すことのない内容についても触れられ、充実した時間を過ごすことができました。

討論の中ではっきりとした結論や答えが見つからなくても、人それぞれにいろいろな考え方や思いがあることを知れただけでも、自分の視野が少し広がったような気がします。

日常では、仕事をしていくことが精一杯で、時間的精神的なゆとりが少ないのが現状です。1つのテーマについて、じっくりと考える時間を与えられたこと、たくさんの人に出会えたこと、視野を広げられるきっかけをもらえたことに感謝したいと思います。

今回のセミナーは終わってしまうけれど、人生

の経験を重ねながら、「人間の尊厳」について今後もずっと考えていきたいです。

志方　豊和

第23回ＲＹＬＡセミナーに参加させていただいた感想は、感激の一言につきました。

就職して６年間、仕事にも少しは慣れ、自分の将来の事、結婚の事、そして現在の仕事、それぞれに悩んでおりました。仕事を始めて最初の２年程は仕事を覚えるのに必死で、ようやく慣れたと思った時に出向、そして出向から戻って来た後は現在の店の店長職と目まぐるしい６年間でした。

ただ、この６年間、自分の時間というのが、だんだん少なくなり、責任のある仕事もまかされ、本来充実してよさそうなものが、私の心の中でどんどんと「このままでいいのか」という疑問ができ、「毎日がんばって、何か良い事があるのか」とか、無気力になっていったと思います。だれの話を聞いても注意されているとしか聞こえず、あきらめたような気持ちで日々過ごしていたと思います。

今回、この４日間のセミナーに参加して感じた事が、同年代というか私が一番年長だったのですが、私がすごく狭い視野でのみ物を考え悩みあきらめていたのかなあと思った事です。

同部屋のメンバーは学生が多く、彼らの話やカウンセラーの話を聞いて、もっと肩の力を抜いてやってみようと思いました。

あと自分の大事な事、大切な人、それを大切にするために仕事をするんだ。仕事をするために寝ている訳でも、食事している訳でもなく、どんなにいそがしくても、これからは見失わないように生きていこうと思います。私には私しか出来ない事があるかもしれません。

また、支離滅裂ですが、この４日間本当にごはんがおいしくて毎食ごはん３杯～４杯食べました。こんなにごはんがおいしかったのは本当にひさしぶりでした。少し気持ちも晴れました。悩みも少しへりました。本当にリラックスできました。ライラスタッフのみなさん、ガバナー、ロータリアン、松ちゃん、お母さん、Ｃ班のみんな、受講生のみんな、本当にありがとう。大げさだけれども、こういった楽しさを忘れていたように思います。

受講のお話も、普段考えた事もなかったテーマで、答えもまだ出てません。ただ頭と心には、これから考えていくテーマとして入っています。これからは、もう少し心のゆとりをもっていろんな事を考えたり、行動したりしたいと思います。（会社には怒られそうですが）また、ぜひ参加したいです。

新名　拓哉

今回のＲＹＬＡセミナーのキャンプを通して、いろいろなことを学んだ。とりあえず一番勉強になったことは、いろいろな年代の人と友達になり、いろいろな話をしたことだ。

話というのは今回のセミナーのテーマであった「命」のことであり、恋愛のことであり、人間関係のことであり、趣味のことであった。初めは、あまり話すことができなかったが、同じグループにかなり明るくて、よくしゃべる人がいて、すぐにとけこむことができた。

２日目のオリエンテーションで、オリエンテーリング、テニス、キックベースボール、つりと、いろいろなことをグループ全員でとり組むことができて、さらにきずなが深まったと思った。また、普段自然とたわむれることができないので、その点でもよかった。

毎日の朝の講義では、けっこうむずかしかったけど、「命」の大切さは大変よくわかった。自分は医療系の大学に行っていて、将来リハビリテーションをおこなうようになるので、そのことと関連づけて考えられた。

この先の人生で、この経験を生かしていきたいし、なにかつまづいた時は、このセミナーで出会った人に相談もしてみようと思う。

田中　博子

以前このＲＹＬＡセミナーに参加した先輩から、

ずっと話を聞いていたので、私もすごくすごく行きたいと思っていました。だから、ＲＹＬＡへの参加が決まった時は、とてもうれしくて仕方なくて、まわりの友達に言いふらしたものです（笑）。しかしそんな期待いっぱいで余島へは来たものの、その分とてつもなく不安で、もしみんなと仲よくなれなかったら、話についていけなかったら、と心配もしていました。

しかし今、この４日間をすごしてみて、やはり来てよかった、私にとって絶対プラスになったと思えます。Ｃ班の一員として、みんなと一緒に行動したり、いっぱい話をしたりできたことが、すごくよかったです。まあ、具体的に一つ一つ何がよかったか、何が楽しかったか、ここではとてもじゃないけど言いつくせないので困ってしまうところですが。でも、Ｃ班のみんなと出会えたことが何よりうれしいです。

今回のテーマ「人間の尊厳」は、正直私にはむずかしいテーマだと思っていたのですが、普段話をする機会のないようないろんな人たちと話せたこと、その中で自分のことを少し見つめ直せたこと、貴重な体験だったと思います。

むずかしい話もあって、ついていけなかったところもあったけれど、それを私なりに考えることはできたと思います。今になって、もっともっといろんな方の話をもっともっとたくさん聞きたかったと思う反面、次回（つまり２回目）の参加が楽しみでもあります。

帰ったら、さっそく仲間や後輩たちに、ＲＹＬＡでの話をいっぱいするつもりです。だって話したいことは山のようにあるのだから。しかし、そうすると今度私が参加できなくなっちゃうなあというのが、実は今の私の小さな悩みです。

ありがとうございました。

田辺　美穂

私がＲＹＬＡセミナーに参加したきっかけは、前回ＲＹＬＡに参加していた方が、「ＲＹＬＡすごく良かったよ!!」と話をしてくれて、私もそういう体験がしたいと、実は去年から参加を希望していました。なので、今回参加することができたことはとても幸運に思っています。

私が今回ＲＹＬＡに参加することになって、自分の中で２つの目標を立てました。１つめは、今年のＲＹＬＡのテーマは「人間の尊厳」で、私は将来福祉職に就きたいと考えていたので、同世代の方々の考えや意識を聞いて、そして積極的に意見交換をして自分の考えを深めたいということです。２つめは、たくさんの友達をつくることです。

まず１つめの目標については、バズセッションやキャビンタイムなどで、１人１人の生や死についての価値観をくわしく聞けたと思います。体験や経験に基づいて話を進めていくことが多かったので、より分かりあえやすかったし、理解しやすかったです。

この話し合いのなかで、自分の考えてることもはっきりしてきたし、人の意見を聞いて納得した部分も多かったです。生と死、人間の尊厳については、自分の中でまだ整理がつかない部分やまとまらないことが多いですが、考え続けていくことが大切だと学びました。

２つめは、私の班は班のみんなで行動することが多くて、気がついたらいつもみんながいたという印象が強いです。たった数日でこんなに仲良くなれるなんて思っていなかったので、お別れっていうのはすごく寂しいです。これからもまた会っていきたいと私は思っているのですが……。友達っていいなってあらためて思いました。

今回ＲＹＬＡに参加して、本当に良かったと思います。貴重な経験ができ、私のこれからの人生にたくさんの影響を与えてくれたように思います。できれば３泊４日じゃなくもっと長くいたかったと今でも思います。最後に、ＲＹＬＡに参加させてくださった神戸ロータリークラブさんと、カウンセラーとしてすごく優しく接してくれた、まっちゃんとおかあさん、それから一緒に過ごした班のメンバー、ＲＹＬＡに参加した仲間のみんなにありがとうと言いたいです。本当に楽しかった！また来たいです。

中尾　昌平

『余島での４日間』

私は、たまたま友人宅で話をしている時に、余島という所でＲＹＬＡセミナーっていうのがあるから参加してみないかと言われ、初めは何をするか全く分からず悩みましたが、テーマが命の尊厳ということで福祉職を目指す私にとっては魅力のある事柄だったし、参加費、交通費もロータリークラブの方が負担して頂けるということでＲＹＬＡセミナー参加を決めました。

大学側に推薦して頂いてパンフレットや先輩の方々の話を聞いても全く理解できず、当日は兵庫県の端の赤穂市から電車、船、バスなどの交通機関を使い余島に到着しました。私は昨年の夏、子供達のキャンプリーダーとして来ていたので余島のことは多少知っているので懐かしく思いました。やはり余島は自然が多く、天気も良かったせいもあり、何とも言えないすがすがしい気持ちになりました。

班分けの時には全く初対面の人達ばっかりなので緊張して、なかなか自分を出すのが難しかったです。初日のキャビンタイムでは、自己紹介ということで１人ひとりの名前や年齢、現在の職業などを聞き、さまざまな特徴や意見を持っている人達に驚きました。夜にはお酒も飲むことができ、お酒の力も借りて班の人達と親密になることができ、かなりリラックスできる環境となったのです。

翌日の藤井先生の講義を聞き、命の尊さ、命の重さを学ぶことができ、大変勉強させて頂きました。レクリエーションタイムでは生まれて初めてのテニスを体験でき嬉しく、そして楽しかったです。

この頃の班の雰囲気はかなりまとまりが見えてきました。夜のキャンプファイヤーでは、今までの明るい雰囲気が一変して、おごそかな雰囲気の中で火を囲み歌をうたい、朝の講義を聞いての感想、自分の想いを紙につづって火に入れ、貴重な体験できました。

その夜も、やはりお酒を飲み、命や自分達の事を語り合ったのです。翌日は６時に起き、班のメンバーと共に朝釣りにでかけました。この背景には昨日の釣果がボウズだったことにあります。おかげで、２匹釣る事ができ幸せでした。

班でテーマについて話し合った時は、班の人達の意見の内容がとても濃く、深いものだったし、経験談などで勉強になったことばかりです。それと同時に自分の経験不足、知識不足を痛感させられた有意義な時間であったと思います。

この３日間を通し、多くの事を学びました。具体的に述べていくと、自分の経験、知識、技術不足が第一で、他にも自己主張する力が足りない事、運動不足など反省するばかりです。

しかし、新しいもう１人の自分を発見することができたのが、これからの人生で大きくプラスになったと思います。このもう１人の自分というのは、多くの意味がありますが、発言している自分、黙っている自分、釣りをしている自分などさまざまです。これからの人生の中で体験を生かすという言葉だけではなく、実際に行動します。そして、もっともっと自分を高め、周りに良い影響を与え、共に成長していこうと思いました。この４日間、受講生を支えて頂いたスタッフのみなさん、ありがとうございました。

鳴瀧　有人

セミナーに参加して、本当によかったと思っています。初めに、Ｃ班の皆んなと出会った時、ぎこちないあいさつで自己紹介をして、会話もとぎれとぎれだったり、長い沈黙があったりしていたのが、１日、２日と日を重ねることにより、心の距離が短くなっていくのが目に見えてわかった。

すごく仲のいい友達もでき、それだけでもすばらしい事だと思うのに、すばらしい先生方の講義も聞けて、ある時は感動し、ある時は共感できるところもあり、勉強になりました。

生と死というテーマ、僕は死を身近でまだ見たことがなかった。見たことがなかったから、今まで考えてもいなかった。考えてもいなかったと言うか、考える方から逃げていた。けど今回のセミナーのテーマで皆んなで話しあった時に、けっこ

う皆の周りに死がおとずれた時があった事にビックリした。

死というのはいつ、どこで急におとずれるかわからない。それでも死が急におとずれてもいいように毎日毎日幸せに生きて、くいの残らないようにしたいです。

本当に楽しかったです。

前川　美香

「嬉しい出会い　楽しい経験」

私は現在介護という仕事にたずさわっており、このセミナーには職場から行ってくるようにという事で、やってきました。

前年に来られた方達から少し話など聞いていて、お酒をたくさん飲めるからとか、無人島やでとか、何もする事が無かったら釣りをしておいでなどしか聞いておらず、仕事場の上司達や地元のロータリアンの方からも“まあ楽しんで来て下さい”という言葉をかけてもらったのですが、一体どういう事なんだろうと見当がつきませんでした。全く知らない人に出会っても、積極的に話をしたり、共に過ごせるか不安の方が大きかったですが、行ってみたら何とかなるかなという感じでやって来ました。

班に分けられ、いよいよ班行動開始!!となり自分はどう動こうかな、どう接して行こうか、など思いながらいましたが、他の皆さんもそんな事を考えているのだろうという事がなんとなく察する事ができて、最初はみんなおとなしい感じだったけれど、班行動をすすめていくうちに、自分の中での居場所がすぐに見つかったような気がしていました。それはわりと居心地の良いものでした。班の人みんなが少しずつだけど、知らない人だけど接していこうというのが伝わってきたからです。

私のいた班の人達はわりと班全員で行動するという事が多く、3泊4日という短い期間だったけれども、自分の中で、他の班より「めちゃみんな仲良いやん!!」という感じになり、とても嬉しかったです。

班員全員といっぱい話とか出来たし、遊べたし、話し合いが出来た事がとても嬉しかった。自分の行動範囲を広げ、前向きな気持ちがあったからこそ、新しい出会いもあり、その出会いから嬉しいという思いを得る事が出来たので、幸せだなと思いました。

今回のセミナーのテーマが人間の尊厳についてだったので、とても奥が深くて、考えても考えてもという感じでしたが、自分のみぢかなことから医学的、宗教的、倫理的（難しかったけど）に考える生と死についてもお話が聞けてとても良い経験でした。

良い経験を与えてくれた方、そして嬉しい出会いと思える人達に会えた事に感謝したいと思います。

山中　順子

今、4日間の研修を終えて、何か変わったかもしれないと実感しています。

参加する前には「生きる」というテーマで話し合いをするというのに、私は意見を持って、発言できるのだろうかと不安でいっぱいでした。しかし、実際に始まってみて、同じチームの皆んなと同じ講義を聴いたり、話を聞いているうちに、話したい気持ちがわいてくるのが分かりました。

多くはないですが、今までの自分になかったことだったので、驚きました。また同じ班のカウンセラーのおかあさん、松ちゃんを初め、みんなといることで、自然に話ができる雰囲気ができたんだと思い、とても感謝しています。

余島は海がきれいで、自然の中だったので、今回の私のこれからの課題である「どうやって生きていくのか」をじっくり考えられたと思います。

普段の生活の中で、避けていたり、あえて考えなかったテーマを初日の藤井先生のお話を聞いて呼び起こされた、という感じでした。今までの経験の中で本当は考えたかったことだったのではないかと思い知らされた感じでした。

また、今回同じ班のメンバーに会えたことが、とてもうれしいです。友達を作ることも苦手だったり、心を開いて話せないことが悩みだったりし

たので、受け入れてもらえた喜びと、一緒に遊んだりできたことが、私の財産になると思います。

みんなに会えたこと、話ができたことが今、とてもうれしく、これから生活していく上で支えにしていきたいと思っています。

参加させて頂いた高知西ロータリークラブの方々に感謝しています。ありがとうございました。

C班カウンセラー　松崎　和博

（命の尊厳）という大変大きなテーマを講義、バズセッション、フォーラム等の中で、自分になりに考えた。結論は出ないままだが、人間はだれしも一人で生きているのでなく、多くの人に生かされている。また自然の中でも生かされている。だから、相手の立場になり、考えて行動して行く必要があると思った。

また、21世紀は本当に大変な時代になったと思う。だからこそ、心と心のまじわりが大切になると思う。

久しぶりに、人間としての本質を考える事が出来て大変良かった。

C班カウンセラー　岡野　和枝

出会い、自由、時間、自然、を大切にしつつ、お互いを認めあい、高めあえた4日間だったと思います。

「人間の尊厳」というとっても大きな、でも本当に大切な原点をいろいろな立場から経験や想いを語りあうチャンスが与えられた事は、大きな感謝です。

カウンセラーとしての参加ではありましたが、この4日間は一人の人間として自分をみつめなおすことのできた貴重な時間であったと思います。

昨年とても大切な妹を失うという、まだ乗り越えられていない気持ちをかかえながらの今回のＲＹＬＡセミナーは、私にとって大きな意味をもっていました。

「生ききった先にある充ちたりた感謝をもっての死」という妹の死が、あるところで受け入れきれずにいた自分という存在に気づき、本当の意味で彼女の生きさまを受け入れていこうという前向きな気持ちで、自分自身のこれからの生き方を考えていきたいと思っています。

すばらしい出会いが永くつながっていく事を祈りつつ。

D　班

木元　千賀

昨年のＲＹＬＡに参加された方の話を聞いて、今回絶対参加しようと決めていましたが、実際に今回参加させて頂いて本当に良かったと思います。

参加することは早々に決めてはいたものの、当日までテーマも知らず、どんな話をするのだろうと思っていましたが、“命の尊厳”という普段の生活の中ではあまり考えることの少ないことを、大勢で考えることで、いろんな視点や考え方があるのだなとじみじみと感じました。

日頃あまり人とまじめに話し合う機会がないので、余島での3泊4日は、D班の仲間たちと、はじめて会った人たちばかりにもかかわらず、本気で語りあうことができました。

今回のテーマ“命の尊厳”で、講師の先生方のお話を聞いたり、班で話し合ったりして、私はいつも何気なく現在を暮らしているだけで、未来のこととか周りの人々のこととか、何も考えていなかったなと思いました。

みんなと話し合う中で、何となく心に残ってはいたけれど、あまり深く考えなかった、テレビのニュースやドキュメントの中の人々が、より身近に大きな存在として現われて、その人のことや、これからの世の中のことを改めて考えたりしました。

何かのために毎日精一杯努力して「生きる」ということを今までしてこなかった私ですが、これ

からは周りの人々から認められるように生きたいと思います。ＲＹＬＡに参加してさまざまな方面で活躍されている方々のお話を聞いて、私も進みたい方向が見えてきました。それに向かってがんばります。

最後になりましたが、私たちに素晴らしい機会を与えて下さったロータリークラブの皆様、スタッフの皆様、そしてＤ班のお父さん、お母さんに、本当に感謝しています。ありがとうございました。

久保　元

「目が覚めた」

３泊４日のＲＹＬＡセミナーを終えて、私が一番に感じたことは「目が覚めた」ということです。というのも、私は科学に生きる人間なのですが、最近の急速な科学技術の進歩には疑問を感じていました。そのような時に、たまたまこのセミナーに参加でき、さまざまな人の「生」の意見を聞くうちに、ふと、人間と科学は運転手と車の関係に似ているのではないかと思ったのです。

車である科学は時代とともにモデルチェンジされ、より完璧な物になっていきます。この進化論を否定することはできません。

しかし、近代社会では、まるでＦ１カーのように発展した科学が、ものすごい加速度で進歩し、さまざまな壁にぶつかろうとしています。車は急には止まれませんし、そうかといって急ハンドルを切ったところでスピンしてしまうでしょう。

そこで、なぜ（車）がこれほどまでに加速するのかを考えましたところ、私は「ひょっとしたら運転手が居眠りして、アクセルを踏みっぱなしにしているのではないか？」と思ったのです。壁にぶつかりそうなら、まずブレーキを踏み、ハンドルを切り、そして、もう一度アクセルを踏めば良いのです。

そういった意味で、今回のセミナーは私にとって「目が覚める」ほどの貴重で充実した体験でありました。

最後になりましたが、このセミナーを推薦してくださった佐野栄作氏をはじめ、ロータリアンの方々、スタッフの方々に心から感謝しております。

小林　謙介

僕にとってこの３泊４日は充実したものでした。命の尊厳というテーマでやってきたのですが、今まで死についてあまり考える事はありませんでした。自分が死ぬ事はもちろんのこと、両親が死ぬことなどを考えていると、やはり寂しくなり、今のうちにできることなどをたくさん考えてしまいました。親が死ぬ時には、生きていて良かったと思えるような最期にしたいし、親の願いも存分に聞いてやりたいです。

他にもこの島に来て、たくさんの人たちに出会うことができました。学生以外にも社会人の方々とたくさん話す機会ができ、とても良かったです。テーマに対するいろんなとらえ方があるのはとても新鮮でしたし、いろいろな貴重な体験談が聞けてとても良かったです。今後も、こんなセミ

ナーに参加する意欲がとても湧きました。

このセミナーに参加できて本当に良かったです。講義も楽しかったけど、班の方々と出会えた事が一番楽しかったです。

杉山　奈弥

今回ＲＹＬＡセミナーに参加して、余島に来る前に何をするのか分からず、「命とかについて話すらしい」ということだけを聞いて、「そんなんしらけたらどうするん」という感じだったのですが、いざ話をしてみると、どんどん討論は進んでいくので、すごいなぁと思いました。

周りに触発され、『考える』ということをしてみて、生とか死とかあまりにも近いようで遠い漠然とした事柄にそう簡単に結論が出るわけでもなく、考えようとすることが大切なのかなぁと思いました。

来る前はちょっと嫌やなと思ってたのですが、来て良かったと思います。３日間が短い、早いぁと思ってしまうそんな中身の濃いものでした。ここに来てなかったら会えなかったような人達にも会え、充実したセミナーだったと思います。

今は学生なので社会人の方の話とかを聞いたりとか、ずっと命とか死、生についてばかり話しただけでなく、日常生活の話（恋愛話とか……）をしていても必ずどこかで生きるとか死ぬとか命の尊さとか関係があり、深いテーマだけど、やはり一生ついてまわる事のような気がしました。

最後になりましたが、このような機会を作っていただいたロータリアンの方々に感謝したいと思います。本当に参加させていただき、自分自身の成長にもつながったと思います。ありがとうございました。

樽野　陽亮

私は、このセミナーに参加して、お互いに自分の意見を話し、相手の意見を聴くということの重要性を感じました。

私の日常生活のなかで、世代を超えて、職業などを超えて、腹を割って互いの意見を交換し合う機会はほとんどありませんでした。日頃、各自が抱えている問題意識を語り合うことで、自分の無知を知り、他人の考えの大切さを感じました。

父や祖父の世代の人との交流は、とても新鮮で、多くの得るものがありました。彼らの世代、そして思想や哲学を知ることで、これからの自分のあるべき姿勢を考えさせられました。

『命の尊厳』というテーマは、これから生涯考えさせられるものだと思います。私は将来医師として自分や親族の死だけではなく、全く見ず知らずの他人の死にも直面し、多くのことを感じ、考えていくことになると思います。そのようなとき、社会の一員として、その人の死をいかに受容していくのか、考え続けていき、また、他の人と語り合い、共に高め合えればと思います。

今回、私達のためにこのような機会を設けてくださった多くの方々に、心から感謝するとともに、これからの自分の在り方を考え続けていきたいと思います。ありがとうございました。

都築　晶子

今日、この地球で命を受け、生きている存在である自分と向きあう４日間でした。

「生きる」こと「死ぬこと」について多くを学び、また語るなかで、私は自然と「どのように生きているか、また生きたいか」について強く考えるようになりました。この大きすぎるテーマに対し、さまざまな想いを抱きましたが、２つ強く感じることがあります。一つは「つながっている私達の命」ということです。今日の私達の存在は先祖からの命をひきついだので、また次の世代につなげていくもの、すなわち chain としての命のきづなの強さ、しなやかさ、そして重みをずっと感じました。もう一つは「毎日の生活の中で、人とのつながりと通し、私達は人間としての価値を見出し、尊びあっている」ということです。

今回のセミナーを通し、私達に、この世の中をどのようにしてゆきたいか、について考える機会が与えられました。さまざまな問題、課題がある

現代ではありますが、夢、希望、愛、平和を信じ、また望み、時代を共に生きる仲間、時代を異にしてもつながっている、またつながりゆく仲間とスクラムを組んで、この世において「生きる」ことを考えてゆきたく思います。

最後になりますが、ロータリアンの皆様が、私達を想って下さる優しさと愛に感謝しております。この喜びを皆で共有し、そして周囲の人にも伝えてゆけるようになりたいと強く思います。本当に有難うございました。

セミナーを通じてめぐりあった沢山の素敵な出会いに感謝して。

堤　千恵

初めてこのようなセミナーに参加したので、どんなことをするんだろうととても心配だったけど、4日間を終わってみるとすごく充実していて参加してよかったと思いました。

特にたくさんの仲間に出会えたことは、普段仕事をしていてきまった人たちとしか会えない生活をしている私にとっては、とても実りある出来事でした。

3名の先生方のお話を聞いて勉強になったし、普通に暮らしていると、考えることのないことを、時間をかけてゆっくり話し合えたことで、これからの生き方をみつめ直すきっかけになりました。

ここで一緒に過ごしたD班の皆は、実際に医療や福祉の仕事や勉強をしている人たちをはじめ、生と死、人間の尊厳という難しい問題について、すごく真面目に語ったり、しっかりした意見を持っていて、私も見習わなければならないと思いました。

これからの私たちの社会は、クローン人間やロボットなど、新しいものがたくさん入ってくるし、限りない自然を大切にしていかないといけないけど、私はきっとその未来は明るいと思います。

D班のみんな、またどこかで会って楽しく語ろうね！

長谷部　裕美子

私が今回のＲＹＬＡセミナーに参加させていただくきっかけは、ローターアクトクラブの先輩に昨年のＲＹＬＡセミナーに参加することによって、多くの得るものがあったというお話を聞いていたことでした。実際、昨年も推薦をいただいたのですが、新しい未知の世界へ１人で飛び込むことに抵抗を覚え、昨年は見おくることになりました。しかし、今回、また推薦をしていただけることになり、「何か変わりたい、たくさんの人と出会いたい」という思いもあり、積極的に参加させていただくことになりました。

今回のテーマは『人間の尊厳』ということで、セミナーの前からある程度自分なりに考えてみたりもしました。私自身、周りの友人、家族、先輩に支えられて生きていること、また、支える部分もあるということを実感し、『生かされている』ということに対して、「私は幸せだ」と感じる日々もありました。しかし、ヒトの欲求はとどまることを知らず、生きていることに対して感謝するというようなことはほとんどありません。本当ならば、学ばなくても本能的に「生きる」ということに対する感謝、充実感を認識していなくてならないのに……。社会の変化にともない家族構成、地域社会、学校教育などから得られるものに偏りがでてきているのではないでしょうか。

私が「生きている」「生かされている」ことを実感する瞬間は、痛みを感じた時です。また、自分が生きることに悩んだ時、私を求め、私を認めてくれるヒトの存在を感じた時です。人それぞれ価値観が違うから、助け合って生きていくことや、ヒトがこの地球で小さな存在だということを、改めて考えない人もいると思います。

というより、そういう認識がまったくない人もいるでしょう。でも、どんな人でも、喜びや悲しみを感じることはあると思います。その意識を大切にして、そこからどのように考えていけるか、考えていくかが、大事なポイントだと思います。

私はＲＹＬＡセミナーで、すばらしいお話をうかがうことができ、自分の死に対する恐怖、生に

対する執着心に驚かされました。私自身が死に直面したことはありませんが、親類や友人など、幾度も失ってきました。その時感じることは、悲しみ、ヒトが死ぬことに対する驚きでした。

その人と、もう二度と話ができない事、触れることができない事を、自分の中で受け止めきれず、これから、その人のいない生活を送らなければならないことを、とても不安に思いました。大切だと感じる命だからこそ、その命が終わる時、ものすごい喪失感がいっぱいになりました。私が、自分の命はもちろん「命」というものを大切だと思うのは、かけがえのないものであり、その人だけのものではないと考えるからです。

特に、今回のＲＹＬＡセミナーに参加させていただいて感じたのは、「生きること」「生かされていること」「死ぬこと」はすべてつながっている自然の中で、誰かのために生き、何かのために生かされるからヒトは死んでいくのではないでしょうか。

原見　泰弘

楽しい４日間のキャンプでした。何が楽しいのかというと、仲間とともに語り合い、共通のテーマを考えることです。その中で、お互いの交流を深めることができた。たった４日間のキャンプでしたが、この４日間をスタートにより、出会った仲間と親交を深めていきたいと思います。

確かに時間がたつにつれ、今感じているものは、忘れていくかもしれません。しかし、私たちは忘れないような努力はできると思います。みんなで努力しましょう!!

さて、ライラセミナーに参加し、「人間の尊厳・死」について考えてきました。非常に重いテーマでなかなかすっきりした答えがみつからないものだと思います。日常ではこういうテーマについては考える機会がないものです。ですから、とっつきにくいものではありましたが、考える機会を与えてくれたことに感謝します。

しかし、今回私はキャビンタイムでは、もっぱら死などというテーマより、自分自身の課題について考えていました。というのは自分自身は「福祉」のパイオニアになりたいと思っています。しかし自信もありませんし、不安だらけです。そんな中でいろいろな考えのもつ人と話すことで自信をつけ不安そとりのぞくためには、当然のことながら「もっとがんばらなければならない」と思いました。ですから次、みんなに会う時には、貪欲に勉強し、努力し、みんなにもっと具体的に熱く「自分の思う福祉」を話したいと思います。

「みんな、４日間ありがとう!!」

本庄　尚哉

前日からの風邪のため体調が最悪で気分的に乗りきれないまま、この余島にやってきました。参加者には学生が多く、社会人の私にとって、年齢の差を痛切に感じ、初日に不安ばかりつきまとっていました。

さらに衝撃をうけたのはキャビンタイムで、あまりに活発な意見交換で正直まったくついていけませんでした。みんなの思いにただただ圧倒され、聞いているだけで精一杯でした。

日がたつにつれ、体調も復活したこともあり、少しずつ雰囲気にも慣れていったのですが、「いのちの尊厳」という、まず日常では考えたことのないテーマにとまどい続け、考えはするものの頭がついていかず、自分の無力さを痛感しました。

ただ、この４日間、全く見ず知らずの人と寝食を共にし、テーマに関わらずいろんなことを語り合ったことで、いろんな立場からの思いを聞くことができ、また、いろんなことを気づかされ、貴重な体験となりました。

最後に生き方について。

死ぬことを考えて、それから生きることを考えるのは嫌いです。死ぬことを考える気にはなれません。未来のことはわからないし、過去は戻れない。だから今を生きたい。その時その時を精一杯生きていれば、将来、過去をふり返ったとき、たとえ後悔を感じたとしても、その時はしっかり生きていたんだから、満足するはずです。

だから、自分に納得できるよう精一杯、楽しく

今を生きたいと、自分なりの考えが固まったような気がします。

非日常的なこの場所で、非日常的なテーマで、非日常的な生活をしたことで自分自身少し何かが変わったような気がしました。

三谷　康之

私はつい1か月くらい前までは、ロータリークラブの存在も知らず、当然ＲＹＬＡの存在も知らなかった。ある日社長にＲＹＬＡに参加しないかと聞かれ、あまり内容も分からないまま参加の返事をした。

そんな状態で、ＲＹＬＡに臨んだ訳だが、余島にわたってきて、初めて104の部屋に入ったとき、先に着いていたＤ班の方は、何もしゃべらず布団で寝ており、とても固い空気が流れていたように思う。自分もそんな空気を感じ“4日間どうなるんかな、あまりバカなこともできんな”とか考えていた。さらにみんな若い。

いろいろなことを考えながら食事を取り、キャビンタイムへと。このキャビンタイムで、Ｄ班はかなり親睦が深まったように思う。始めの空気とは明らかに違う空気が流れだしていたような。ここで4日間の大まかな見通しを私はつかんだ。

私は社会人という立場上、と言うよりも、仕事の内容上、講義を聞く、何かのテーマ（人類共通の）について、議論する、またそれをまとめ発表するなんてことはほとんどない。さらに学生の方と接する機会なんて、まずない。これらの要素は、私の中で眠っていた部分、なかった部分を少なからず刺激し、補ってくれた。

生きること死ぬこと、命……他、これまでの人生であまり考えなかったことについても、現時点での自分の考え方は、このセミナーを通じ、まとまった。また余島の自然に触れることで、それまでたまっていたストレスを発散できた。いいことばかりあったような書き方をしたが、多少はいやなことも。そんなことも含め、このセミナーで多くの人に出会い、接することができたことが私の中で一番大きかったように思う。また、みなさんにお会いできると期待してます。

アディオス

藪中　麻里

Ｄグループの人達と出会え、4日間共に生活し、話し合えたこと、余島の自然にふれ、勉強になった講義が聞けたこと、すべてに感謝の気持ちでいっぱいです。

昨年参加した時、消化不良状態で、何か納得のいかないモヤモヤとしたものが心の中に残っていました。でも今は、たくさんのものが得られたと思うし、参加してよかったと思います。

今まで考えずにすごすことができた“死”、遠まわしにしていた“死”というものについて、少し身近に感じ、自分の中での死と生というものをもっと考えないといけないということに気付きました。

死に対して私は恐怖や不安はあります。でも今回死というものを考えるというのは、自分の生き方をどうするか、また、命というものをどうとらえるのかという事につながっていると強く思いました。

私は人と接することが好きで看護の道に進みました。そして、この仕事が生と死に多く関わるとは感じていました。これから医療の進歩と共により多くの生と死が出て来ると思いますが、その時、命とは何なのか、この人にとっての生とは、死とは何か、この人はどう思っているのかを共に話し合う。この事を常に持ち続けたいと思いました。

私は今回とても感動した事があります。それはキャンプファイヤーで自分が自然の一部であること、そして、人の温かさを身体で感じ、多くの人によって生かされているんだということを心に強く響きました。

もう、これを味わうことが出来ないのかなと思うと、とても残念に思いますが、ＲＹＬＡから得たものを大切にし、これからいつも心の中に持ち続けたいと思います。本当にありがとうございました。

上西　太誠

このセミナーに参加させていただいての率直な感想は、自分の考えが社会人として日々の生活を仕事中心に送っている中で柔軟性を失っていたなということだ。

「人間の尊厳」（命の価値）という重いテーマについてある程度の意見を持っていたつもりが、班内の活発な討論の中で、それ自身に自信が持てなくなるのを実感した。

セミナーを終えた今でも確信を持てる結論は見つからないが、多様な意見を聞き、語り合いながら哲学的に考えをめぐらせることができたことは自分にとって非常に有意義だったと思う。

初日の藤井先生の講義を聞いて初めて死までの人生をイメージした時、これからをどう生き、生かされるか真剣に考え、日々漫然と生活していた自分を反省すると共に、自分が接する周囲の人達の人生に自分がどう役立てるのかを心掛けながら生きていきたいと思った。

２日目の野尻先生の講義では見えない心の世界がいかに重要かを教えていただいた。愛、思いやり、といった身近に感じられるはずのものが私達は生きるこの時代に実は欠落していて、自分も参加しているローターアクトも活動の中の１つのポリシーとして実践に活かしていきたいと思った。

３日目の今井先生の講義では、21世紀、私達は効率主義でない価値の転換の必要性を教えていただいた。１人１人が社会の構成員としてすべての人達を尊重しあえる将来をつくることができるよう努力していきたいと思う。

いずれにしてもこれからの１日１日ふれあうすべての人々を尊重し、自分自身が生かされていることに感謝しながらその瞬間瞬間で“人間の尊厳”について考えたいと思う。

最後に、お世話になったカウンセラーのお父さんお母さん、そしてＣ班の皆さん、短い期間でしたが本当にありがとうございました。

Ｄ班カウンセラー　高岡　政次

今年５回目の余島での４日間でした。毎年、ライラに参加させていただくのを楽しみにしています。余島は自分にとって、最高の勉強できる場所です。若い人達にいろいろと教えられます。そして自分自身が謙虚な気持ちになれる場所です。

一緒に過ごしていただいた女性カウンセラーの由良さん、受講生の皆さん、４日間ほんとうにありがとう。

Ｄ班カウンセラー　由良　澄子

大変楽しく、青春時代に戻ったような感がありました。カウンセラー等とおこがましいと思っていたのが、13人の大きな子供ができたようでうれしかったです。

とかく今の若い子達は何を考えているのか分からない。側を通るのも恐いとか考えていましたが、課題に一生懸命取り組んで話し合っている姿には感銘を受けました。

普通では正面きってまじめに考えないテーマで、こういう社会だからこそ取り組める問題で漠然とした大きすぎるテーマだっかもしれませんが、結果的にはよかったと思います。

その中で若者も真剣に考えて討論していました。できれば講師の先生ともディスカッションの時間を取ってほしかったです。最後のフォーラムの形式も少しかえて、各班がすむ度に質疑応答する方が分かり易かったと思います。

この会を催されるにあたり準備された各委員の方達の汗と努力に敬意を表して、私自身にもとてもいい経験だった事に感謝をいたします。また、次の機会にも参加できたら幸せです。

本当にありがとうございました。そしてお疲れさまでした。

〈第23回ＲＹＬＡセミナー運営委員会〉

ガバナー	太田英章	(高松南ＲＣ)
	中嶋邦明	(西宮甲子園ＲＣ)
顧問	三宅俊三	(第2670地区　高松ＲＣ)
	今井鎮雄	(第2680地区　神戸西ＲＣ)
	深川純一	(第2680地区　伊丹ＲＣ)
アドバイザー	三宅洋三	(第2670地区　高松ＲＣ)
	松下克巳	(第2680地区　三田ＲＣ)
運営委員会委員	安平和彦	(第2680地区　姫路ＲＣ)
	三木明	(第2680地区　姫路ＲＣ)
	井奥寛泰	(第2680地区　姫路南ＲＣ)
	山口徹	(第2680地区　神戸ＲＣ)
ディーン	秦紳一郎	(第2680地区　洲本ＲＣ)
副ディーン	岡田新	(第2670地区　高松中央ＲＣ)

■ＲＩ第2670地区

新世代活動委員長

岡田新 (高松中央ＲＣ)

ライラ委員長

白石正明 (高松グリーンＲＣ)

ライラ委員

高岡政次 (松山南ＲＣ)
篠原成行 (北条ＲＣ)
中島萬里 (徳島西ＲＣ)
山本佳生 (小豆島ＲＣ)
松崎和博 (高松グリーンＲＣ)

■ＲＩ第2680地区

新世代活動委員長

秦紳一郎 (洲本ＲＣ)

ライラ委員長

赤穂哲 (姫路南ＲＣ)

ライラ委員

三木且視 (龍野ＲＣ)
加藤拓 (伊丹ＲＣ)
空地顕一 (姫路ＲＣ)
小池弘三 (神戸ハーバーＲＣ)
永松潔和 (神戸ＲＣ)

カウンセラー

松崎和博 (高松グリーンＲＣ)
濱浩一 (神戸ＲＣ)
高岡政次 (松山南ＲＣ)
鎌谷正弘 (姫路ＲＣ)
角田麗子 (高松グリーンＲＣ会員夫人)
岡野和枝 (神戸中央ＲＣ会員夫人)
武田薫 (道後ＲＣ会員夫人)
由良澄子 (神戸垂水ＲＣ会員夫人)

主催
ＲＩ第2670地区
ＲＩ第2680地区
ＲＹＬＡ運営委員会

ＲＹＬＡ運営事務局

第2670地区　ガバナー事務局
〒760-0011 高松市浜ノ町59－10
シーサイドボウル高松３階
TEL　087-811-0020
FAX　087-811-0030
第2680地区　ガバナー事務局
〒663-8166 西宮市甲子園高潮町３－30
甲子園都ホテル1520号室
TEL　0798-40-2680
FAX　0798-40-2681